

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第32号（通巻65号）

平成30年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

— 2019 —

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 32 号 (通巻 65 号)

平成 30 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

—— 2019 ——



「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成31年3月18日」

巻頭言

平成 30 年度の精神保健研究の業績年報をお届け致します。どうかお目通しの上、皆様からの忌憚のないご指導をお願い申し上げます。

精神保健研究所の使命は時代のニーズに合わせて柔軟に変遷を遂げていますが、大きく分けると、実際に暮らす人々に寄り添って暮らしを支える研究と、精神疾患の本態を解明する脳神経科学の研究とに分けられます。このふたつのタイプの研究がバランス良く組み合わせられることによって、効果的な精神保健医療が可能になると考えられています。いずれの研究も、厳密な方法論に基づいて、その成果を学術論文の形で提出するとともに、その成果を社会に普及、実装するための啓発活動が求められております。精神保健研究所の学術業績は近年、順調に発展しており、今年度は 137 編の原著論文、106 編の総説を出版致しました。また若手を中心に 9 件の学会賞を受賞しております。普及と実装につきましては活発な研修活動を行っており、平成 30 年度は 15 本の研修を主催し、765 名の精神保健医療関係者が受講されました。それ以外にも研究者が全国各地に赴いて活発な講演、研修を行っております。

精神保健研究所の活動は、ほぼ精神医療の全ての分野を網羅し、多岐にわたっておりますが、あえてその一部に言及致します。

自殺総合対策推進センターでは、新たな自殺総合対策大綱に示された科学的根拠に基づいた自殺総合対策を強力に推進することを目的に研究、社会活動を進めております。知的・発達障害研究部では乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進め、ADHD 診断補助となりうる実行機能検査ソフトウェアの開発を進めて、特許を取得し一般販売につなげました。精神医療政策研究部では第 7 次医療計画の策定した指標に基づき、NDB、630 調査をもとに全都道府県 2 次医療圏ごとの診療実績を公表しました。また各病院が提供している医療が「見える」ためのシステム (PECO) の運用を継続しています。薬物依存研究部では保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら、保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する、「Voice Bridges Project : 「声」の架け橋プロジェクト」を開始しました。行動医学研究部では、摂食障害基幹センターとして全国の摂食障害治療の医療水準の向上に取り組んでおります。

これ以外にも多くの意欲的な研究、活動が行われております。社会の役に立つ十分な成果を挙げるためにも、どうか皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

2019 年 3 月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 所長 金 吉晴

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	11
4. 職員配置	12
5. 精神保健研究所構成員	13
II. 研究活動状況	16
1. 精神保健研究所所長室	16
2. 精神医療政策研究部	26
3. 薬物依存研究部	36
4. 行動医学研究部	66
5. 児童・予防医学研究部	80
6. 精神薬理研究部	93
7. 精神疾患病態研究部	101
8. 睡眠・覚醒障害研究部	114
9. 知的・発達障害研究部	126
10. 地域・司法精神医療研究部	138
11. 自殺総合対策推進センター	156
12. ストレス・災害時こころの情報支援センター	167
III. 研修実績	173
IV. 平成 30 年度委託および受託研究課題	198

I. 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の附属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官（3名）が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患，神経疾患，筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり，精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは，自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は，精神保健計画研究部へ名称変更され，統計解析研究室，システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は，ストレス研究室，心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され，精神発達研究室，児童期精神保健研究室，思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は，成人精神保健研究部へ名称変更され，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，犯罪被害者等支援研究室，災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は，精神薬理研究部へ名称変更され，精神薬理研究室，気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は，社会精神保健研究部へ名称変更され，社会福祉研究室，社会文化研究室，家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は，精神生理研究部へ名称変更され，精神生理機能研究室，臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は，知的障害研究部へ名称変更され，診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は，社会復帰研究部へ名称変更され，精神保健相談研究室，援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は，制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の3室編成。

以上，自殺予防総合対策センター及び11部，計33室となった。

また，研究所の事務部門は，主幹が研究所事務室長となり，研究所事務係とともに，研究所の所属となった。

平成23年4月，事務部門の組織変更が行われ，研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により，情報支援研究室の1室が認められた。

以上，自殺予防総合対策センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計34室となった。

平成24年1月，千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから，創立60周年を迎え，記念祝賀会を開催し，創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日，独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。

V. 国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

以上、自殺総合対策推進センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計35室となった。

平成29年10月1日、社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し、その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室）、併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設。

平成30年4月1日、精神保健研究所の組織改編を行った。

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合、臨床援助技術研究室、精神保健サービス評価研究室、司法精神保健研究室、制度運用研究室の3室編成。

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、災害等支援研究室、ストレス研究室、心身症研究室の6室編成。

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名、情報支援研究室、犯罪被害者等支援研究室の2室編成。

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名、保健福祉連携研究室、政策評価研究室、精神医療体制研究室、NDB集計企画担当室の4室編成。

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名、児童・青年期保健研究室、精神疾患早期支援・予防研究室の2室編成。

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名、分子精神薬理研究室、向精神薬研究開発室の2室編成。

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名、発達機能研究室、知的障害研究室の2室編成。

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名。

以上、自殺総合対策推進センター、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計33室となった。

沿革

事項 年次	所長	組織等経過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 （国立国府台 病院長兼任）	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉縣市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 （公衆衛生局長 が所長事務取扱）	
38年7月	若松 栄一 （公衆衛生局長 が所長事務取扱）	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設
49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設

50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島菌 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更

13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設 (制度運用研究室, 専門医療・社会復帰研究室, 精神鑑定研究室)
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市 (国府台) から小平市 (武蔵地区) に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設 (自殺実態分析室, 適応障害研究室, 自殺予防対策支援研究室), 成人精神保健部の増設 (犯罪被害者等支援研究室, 災害時等支援研究室)
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更 (精神保健計画研究部, 児童・思春期精神保健研究部, 成人精神保健研究部, 精神薬理研究部, 社会精神保健研究部, 精神生理研究部, 知的障害研究部, 社会復帰研究部) し, 知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設, 11部33室 (室長定数29) となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設 (情報支援研究室)
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	
27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる

27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室）， 精神保健計画部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また部名及び室名変更等再編し結果， 2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金 吉晴	

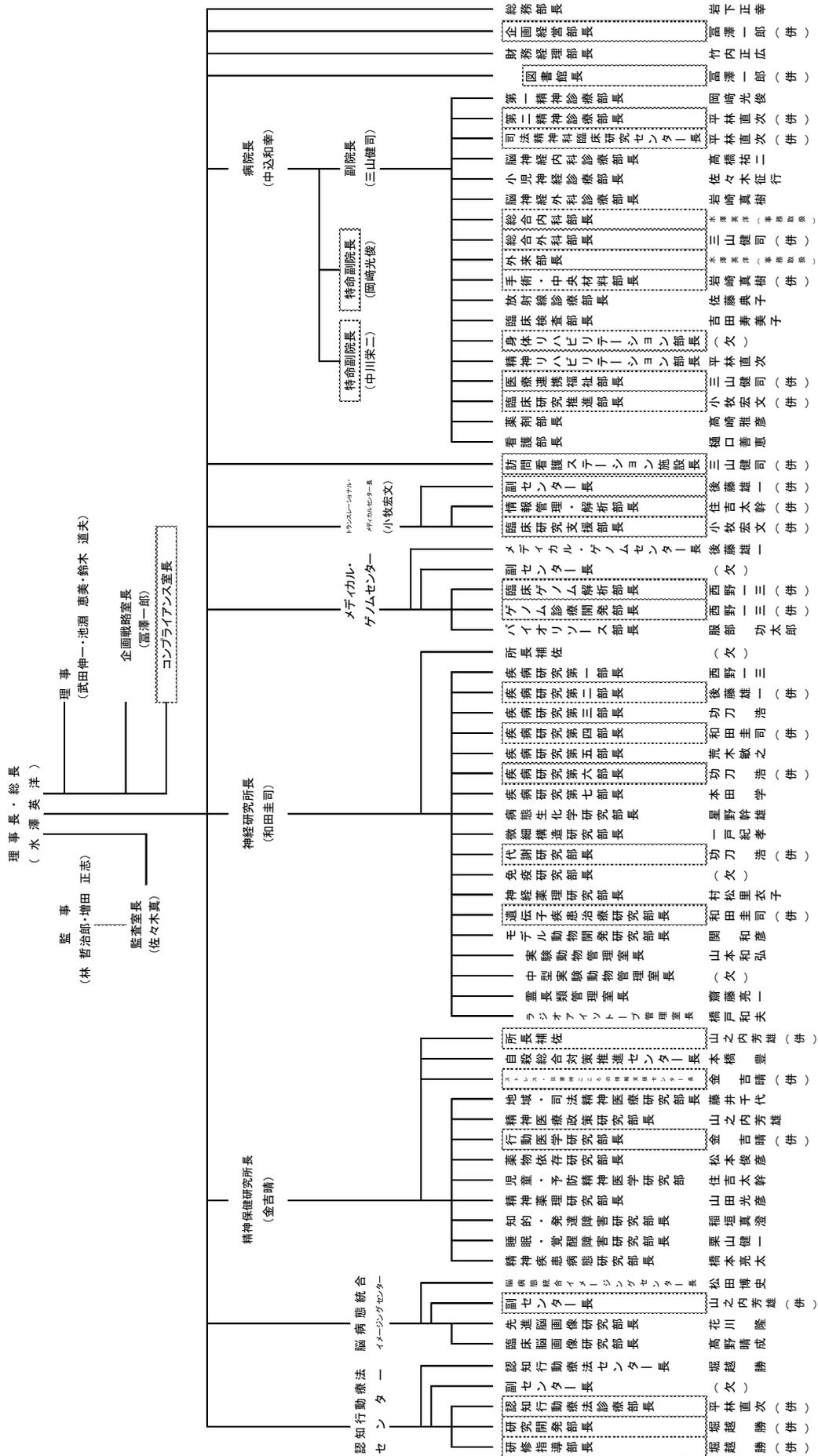
2. 内部組織改正の経緯

国立精神衛生研究所											国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月	61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月	平成27年4月	平成28年4月	平成29年10月	平成30年4月	
総務課	→ 総務課 精神衛生研修室 (6月)								総務課	庶務課	運営部庶務第二課	運営部庶務第二課			運営部政策医療 企画課		運営局	運営局		研究所事務室		研究所事務室		研究所事務室	研究所事務室	
																	自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	
																					災害時における情報支援センター 情報支援研究室	災害時における情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時における情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	
										精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	
										薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 薬物依存研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	
心理学部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)						精神衛生部 心理研究室	精神衛生部 心理研究室								心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室	
					老人精神衛生部 老化研究室	老人精神衛生部 老化研究室	老人精神衛生部 老人保健研究室	老人精神衛生部 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		
										老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室			老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室	
児童精神衛生部		→ 児童精神衛生部 精神発達研究室							児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室			児童・思春期精神保健部 精神発達研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	
社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		
生理学形態学部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神身体病理部 生理研究室 (4月)						精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理学部 精神機能研究室	精神生理学部 精神機能研究室	精神生理学部 精神機能研究室					精神生理学部 精神機能研究室			精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	
衛生学部	精神薄弱部							精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		
				社会復帰部				社会復帰部	社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神衛生相談室 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神衛生相談室 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神衛生相談室 精神保健相談研究室					社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		
																	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	
																									精神疾患病態研究部 基礎整備研究室 病態解析研究室	

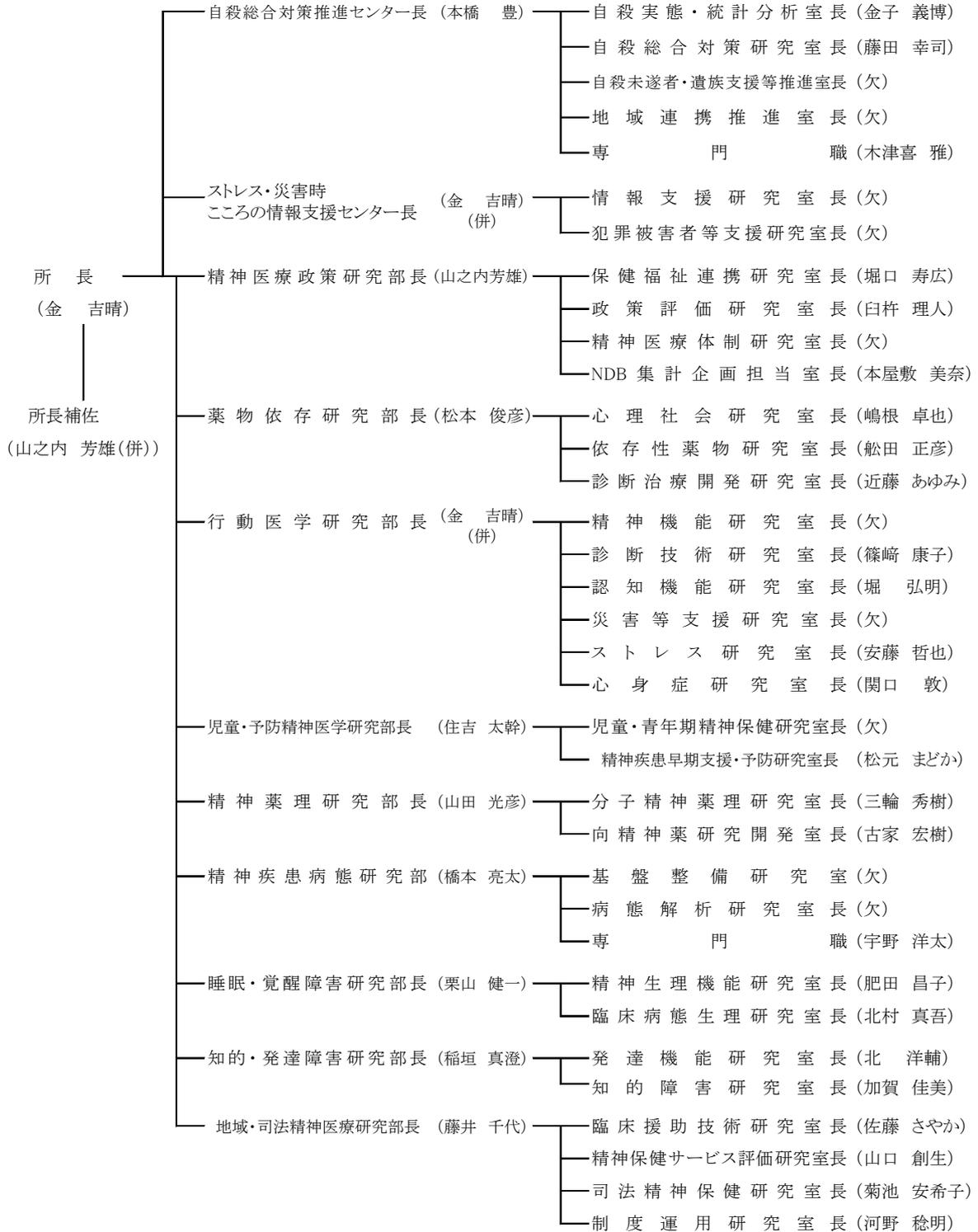
3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図

(平成31年3月31日現在)

は兼任ポスト



4. 職員配置(平成31年3月31日現在)



5. 精神保健研究部構成員 (平成30年度)

所長	秘書室									
中込 和幸 金 吉晴 (31.1.1~)	佐々木 望子 (～30.12.31) 奥村 和香子 (31.1.1~)									
部長	専任 ○専門職	非常勤研究員	流動研究員	研究員	流動研究員	非常勤研究員	研究員	流動研究員	非常勤研究員	研究員
自殺総合対策推進センター	金子 善博 藤田 幸司 ○木津憲 (30.10.1~)	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	越智 真奈美 (～30.10.31) 森口 和	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	越智 真奈美 (～30.10.31) 森口 和	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	松永 博子 田中 元基 中村 円 (30.4.16~)	越智 真奈美 (～30.10.31) 森口 和
ストレス・冤獄時 こころの情報支援センター	(併任) 金 吉晴									
精神医療政策研究部	堀口 寿広 本屋敷 美奈 馬場 俊明 (～30.10.31) 白杆 理人									
薬物依存研究部	松本 俊彦									
行動医学研究部	金 吉晴 (～30.12.31) 金 吉晴(併任) (31.1.1~)	堀 弘明 藤崎 康子 安藤 哲也 関口 教								

部名	部長	室長 ○専門職	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究補助員 □科学研究心理療法士	科学研究員 ○科学研究補助員 ○科学研究助手	科学研究員 ○科学研究補助員	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来審判手	研究生 ○実習生
児童・予防精神医学研究部	住吉 太幹 部長 松元 圭之介 (30.12.1~)	室長 香俊 (~31.1.31) 松元 圭之介 (30.12.1~)				Andrew Mark Stickley 藤藤 彩 末吉 一敏 (30.7.1~) ○山野 真由子 (30.5.1~) □末吉 一敏 (~30.6.30) □長谷川 由美 (30.7.15~)	岩瀬 綾 (30.7.1~) ○本郷 浩子 (30.5.1~)	佐藤 綾 (~30.5.31)		立森 久照 (30.8.1~) 菅原 典夫 (30.8.1~)	藤松 裕三 (~30.11.30) 比尾 圭源 中村 亨 佳奈子 上野 佳奈子 櫻崎 博一 青木 保典 石井 良平 神尾 剛子 任言 ティカ (30.5.15~) (30.5.15~) (30.9.15~) 柳木 道雄 川崎 雅弘 (30.11.15~) ○山崎 裕光 (30.11.15~) ○山崎 裕光 (31.2.1~) ○山崎 裕光 (31.2.1~) 柳澤 聡 (31.1.1~)			岩野 和雄 海老島 健 岡 琢哉 近藤 英之 (30.5.1~30.7.31) 上田 奈津哉 成田 瑞 (30.5.1~) 長谷川 由美 (30.5.1~31.7.14)
精神医学研究部	山田 光彦 部長 古家 宏樹 三輪 秀樹		岡石 洋 小林 桃子 (30.10.1~)			山田 英佐 ○松谷 真由美 ○村松 浩美	伊庭 幸人 (30.30.20) 藤本 真由美 (~30.6.30) 尾崎 紀子 尾崎 俊明 小森 裕生 中村 元昭 新田 海英 吉川 武男 新井 誠 富田 博秋 中谷 明弘 藤本 均 藤田 一郎 下川 哲也 大井 高 浦永 雅彦 藤本 清貴 藤野 隆生 藤野 隆之 藤野 隆之 佐々木 友 佐々木 友 中島 昭一郎 高橋 泰 菅田 貴俊 正田 秀彦 山森 秀彦 安田 由麻 沼田 周助 (以上30.7.9~)	川島 義高	野田 隆政	福垣 正俊 岡 淳一郎 亀井 淳三 神庭 重信 白川 修一郎 高原 円 中嶋 智史 古川 壽亮 米本 直裕 吉澤 一巳 西川 徹 (30.10.1~)	川島 義高		正敏 香 藤藤 麗華 大槻 友子 後藤 玲央 早田 暁伸 高橋 弘 西岡 玄太郎 渡邊 恭江 中武 優子 窪島 修平 小林 桃子 (30.8.13~30.9.30) ○古井 孝徳	
精神疾患病態研究部	所長 事務次長 (30.6.30) 藤本 克巳 (30.7.1~)	立森 久照 (30.8.1~) ○野野 千代 (31.1.1~)	推野 智子 (30.8.1~)			加藤 直広 ○松谷 真由美 ○山崎 真美子 (30.7.1~)	梅田 佳子 (30.7.1~) 岩瀬 千穂 (30.11.1~) 松嶋 千代 (30.12.1~)	久保田 智香 (30.8.1~)		伊庭 幸人 (30.30.20) 藤本 真由美 (~30.6.30) 尾崎 紀子 尾崎 俊明 小森 裕生 中村 元昭 新田 海英 吉川 武男 新井 誠 富田 博秋 中谷 明弘 藤本 均 藤田 一郎 下川 哲也 大井 高 浦永 雅彦 藤本 清貴 藤野 隆生 藤野 隆之 藤野 隆之 佐々木 友 佐々木 友 中島 昭一郎 高橋 泰 菅田 貴俊 正田 秀彦 山森 秀彦 安田 由麻 沼田 周助 (以上30.7.9~)			伊庭 幸人 (30.30.20) 藤本 真由美 (~30.6.30) 尾崎 紀子 尾崎 俊明 小森 裕生 中村 元昭 新田 海英 吉川 武男 新井 誠 富田 博秋 中谷 明弘 藤本 均 藤田 一郎 下川 哲也 大井 高 浦永 雅彦 藤本 清貴 藤野 隆生 藤野 隆之 藤野 隆之 佐々木 友 佐々木 友 中島 昭一郎 高橋 泰 菅田 貴俊 正田 秀彦 山森 秀彦 安田 由麻 沼田 周助 (以上30.7.9~)	

I 精神保健研究所の概要

部名	部長	専長 ○専門職	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究補助員 □科学研究心理療法士	科学研究員助手 ○科学研究補助員	シブシブ研究員 ○シブシブ研究員	シブシブ研究員助手 ○シブシブ研究員	協力研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
睡眠・覚醒研究部	三島 和夫 (～90.8.31) 所長事務取扱 (93.9.1～93.12.31) 栗川 健一 (93.1.1～)	肥田 昌子 北村 真吾 (93.9.1～93.12.31)	藤原 直子 吉村 道孝			勝沼 りり (～91.1.31) ○武田 希子 (90.6.30) ○藤原 真生 (90.5.1～)	○高野 希美 ○大嶋 美穂 ○加藤 美恵 (～90.4.30)	阿部 又一郎 机 達彦	山田 恒 渡邊 衛一郎 松本 直通 (以上90.9.25～) 大石 智 (90.10.22～) 橋本 保彦 船地 正隆 (以上90.12.25～)	都留 あゆみ 勝沼 りり (91.2.1～)	内山 真 東 佳孝 八川 大 上 健一 藤 和 藤 重 橋本 多 上田 正明 山寺 直 山田 正明 守口 善也 阿部 高志 船水 道郎 櫻本 みのり 有竹 清夏 亀井 雄一 (90.5.1～) 渡辺 和人 (90.7.1～) 三島 和夫 (90.9.1～)	岩垂 喜貴 村上 祐樹 大嶋 健太郎 藤原 悠理 中野 英佳 田嶋 英子 三井寺 浩幸 三井寺 義 藤島 義 石津谷 麻美 元村 祐貴 大丸 淑樹 鶴岡 基生			
知的・発達研究部	稲垣 真澄	加賀 佳美 北 洋輔	田中 美沙 上田 理香 江頭 優佳			○白川 由佳	井上 さゆり (90.10.1～) 秋月 由紀子 (90.10.1～)	中川 栄二	井上 祐紀 加賀 敦子 車司 敦 小池 敏美 後藤 隆雄 野田 博臣 田中 敏士 中村 弘 林 隆 三砂 ちづる 宮島 祐 山崎 広子	小林 明佳 崎原 ことえ 中村 雅子 米田 明 田中 さい子 平 順平 三井寺 義 三井寺 義 新垣 我葉子 船本 浩太 北村 安寿子 奥村 幹真 大森 幹真 浅川 さくら (90.4.10～)					
地域・司法精神医療研究部	藤井 千代	佐藤 ささか 山口 創生 柴池 安希子 河野 聡明	大隅 尚広 松長 麻美 小畑 純子 橋本 理恵子 (～90.11.30)			坂澤 祐亮 小川 亮 (90.9.1～) ○榎垣 早苗 ○小川 亮 (～90.8.31) ○田中 純子 ○吉田 美紗子 ○相田 早織 ○河野 茉莉子 ○白井 由寛	細谷 華子 土屋 治美	坂田 晴弘 平林 直次 佐竹 直子	瀬戸屋 雄太郎 船井 直江 原 敬造 伊藤 順一郎 橋 薫子 吉田 光衛 杉山 直也 美濃 由紀子						
地域・司法精神医療研究部 (93.7.1～)一子事業 (90.10.1～)			(原香藤部員) 菅 智代 (香藤部員) 中西 清晃 (医療社会事業部員) 西内 裕里紗 真行寺 伸江 (作業療法士) 大迫 直樹												

Ⅱ. 研究活動状況

1. 精神保健研究所所長室

I. 概要

1) 人事

平成30年度は4月1日～12月末日まで、前年度に引き続き中込和幸が所長を務めた。平成31年1月1日、中込和幸が病院長に就任、金吉晴が所長に着任した（行動医学研究部長、ストレス・災害時こころの情報支援センター長を併任）。

本年度の常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4月1日、精神医療政策研究部政策評価研究室長に白杵理人、同研究部精神医療体制研究室長に馬場俊明、同研究部NDB集計企画担当室長に本屋敷美奈、精神薬理研究部分子精神薬理研究室長に三輪秀樹、向精神薬研究開発室長に古家宏樹、行動医学研究部研究員に伊藤真利子が採用された。7月1日、精神疾患病態研究部長に橋本亮太、10月1日、自殺総合対策推進センター専門職（室長級）に木津喜雅、行動医学研究部災害等支援研究室研究員に大沼麻美、12月1日、児童・予防精神医学研究部精神疾患早期支援・予防研究室長に松元まどか、平成31年1月1日、睡眠・覚醒障害研究部長に栗山健一、精神疾患病態研究部専門職に宇野洋太が採用となった。

30年度退職者は、精神疾患病態研究部室長立森久照（6月30日付TMCに配置換）、睡眠・覚醒障害研究部長三島和夫（8月31日付）、自殺総合対策推進センター室長越智真奈美（10月31日付）、精神医療政策研究部室長馬場俊明（10月31日付）、児童・予防精神医学研究部室長高橋秀俊（1月31日付）、精神医療政策研究部室長本屋敷美奈（3月31日付）であった。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。平成30年度には英文原著110編、和文原著27編、英文総説4編、和文総説102編、英文著書1編、和文著書56編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で56件、国内学会で271件の発表を果たした。主要学会等では、若手研究者が筆頭著者として優秀賞や奨励賞等を受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。恒例の第30回精神保健研究所研究報告会（平成31年3月18日）では、優秀発表賞（青申賞）に嶋根卓也（薬物依存研究部）、若手奨励賞に國石洋（精神薬理研究部）、江頭優佳（知的・発達障害研究部）が選ばれた。

精神保健研究所は、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、心身医学、自殺対策、司法精神医学、発達障害、精神医療均てん化等）を行っている。30年度には15課程を実施し合計765名が受講した。詳細は後述した。

3) 精神保健研究所への主なゲスト

平成30年9月25日

吉田医政局長他1名、NCNPを視察訪問。薬物依存研究部および自殺総合対策推進センターを視察。

平成30年10月18日

橋本障害保健福祉部長他4名、NCNPを訪問。薬物依存研究部を視察。

II. 研究活動

(中込和幸)

1) 精神疾患の NVS (negative valence system) に対する治療法の開発 (精神・神経疾患研究開発費)

米国 NIMH で進められている Research Domain Criteria (RDoC) の研究フレームをもとに、5つの機能ドメインのうち、Negative Valence Systems (NVS: 不快の感情価: 恐怖, 不安, 喪失感など) に焦点を絞り、統合失調症, 気分障害, 不安障害患者を対象に臨床評価 (臨床症状, 動機づけ, 社会機能, QOL), 脳画像 (NIRS, MRI), 生体サンプル (血液, 髄液) 情報を採取し, NVS の臨床評価系を確立し, 関連するバイオマーカーを探索する. 候補バイオマーカーを抽出後, 動物モデルを用いて得られた創薬候補化合物の臨床応用可能性を探索 (主任研究者: 中込和幸, 分担研究者: 功刀 浩, 山田光彦, 住吉太幹, 野田隆政)

2) Negative Valence Systems の臨床指標と認知機能, 社会機能, QOL との関連性について (精神・神経疾患研究開発費)

精神疾患の NVS (negative valence system) に対する治療法の開発の分担研究課題であり, 当分担研究課題では, NVS と認知機能, 社会機能, QOL との関連を検証することを目的とする. NVS の評価に用いる尺度について, 気分症状, 不安症状, 衝動性, 動機付けに関して, 疾患横断的に使用可能なものを選択し, 神経認知, 社会認知, QOL, 社会機能の評価尺度, 血液, 髄液, 脳画像等の生物学的指標と合わせてデータの採集を行った. 2019 年 3 月末時点で 148 名のデータを収集したが, 2018 年 12 月末までに収集された 133 名のデータを用いて中間解析を行った.

3) 大うつ病性障害患者を対象とした新規抗うつ薬の長期投与試験 (多施設共同研究)

抗うつ薬 1 剤で十分な治療反応がみられなかった大うつ病患者を対象に, エスシタロプラムあるいはデュロキセチンのいずれかに割り付け, 8 週間の治療継続性を主要評価項目とし, さらに 1 年間の追跡調査を行う, 多施設共同非盲検無作為化可変用量長期投与試験である. 平成 30 年度はデータ収集のエントリー完了. 現在, 統計解析に向けてデータクリーニング中である. (主任研究者: 中込和幸)

4) 気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対する Lurasidone 併用療法 (ELICE-BD) の有効性評価のための 6 週間のランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験 (国際共同研究)

カナダのブリティッシュコロンビア大学が代表機関を務め, カナダ, 米国, スペイン, 英国, 日本の 5 か国が参加する国際共同臨床試験である. 気分状態が安定し, 一定の認知機能障害を有する双極性障害患者 150 例を対象に, ルラシドンあるいはプラセボのいずれかに割り付けて, 6 週間投与後に認知機能障害に対する有効性評価を行う. 日本国内では当施設以外に 4 施設が参加し, 当施設が日本国内施設の取りまとめ役を行っている. 平成 30 年度は, エントリーを開始し, 当施設では 4 名が基準を満たして組み入れられた. (分担研究者)

5) 超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究 (多施設共同研究)

サイコーシスの超ハイリスク基準群に対して, アクチグラフを用いた睡眠状態, サイトカイン, BDNF, オキシトシンの血清中濃度を発症および転帰の予測因子としての可能性を検証する, 多施設共同, 観察, 症例対照および単群縦断研究である. 超ハイリスク基準者 60 例, 超ハイリスク基準者と性別・年齢をマッチさせた健常対照者 30 例を対象とする. 各施設ともに倫理審査委員会の承認を受け, 研究開始準備は整った. 平成 30 年度は試験を開始し, 当施設は超ハイリスク基準者 4 名, 健常対照者 3 名が組み入れられた. 全体では超ハイリスク基準者 12 名, 健常対照者 13 名が組み入れられた. (研究代表者)

6) **不眠とうつ病等の重症化との関連についてのケース・コントロール研究** (独) 労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所 (共同研究)

うつ病患者を対象とし、質問紙を用いて不眠とうつ症状との関係を検証する横断的な観察研究である。また、労働者健康安全機構の労働安全衛生総合研究所との共同研究であり、当センターは外来患者のリクルートと質問紙の配布と回収、問診を行い、データ解析は労働安全衛生総合研究所で行う予定である。倫理委員会の承認を得て、平成29年8月より開始し、NCNPでは98例のエントリー、データ収集を終え、匿名化の上で労働者安全機構に送付した。統計解析は労働者安全機構で行われる予定である。(共同研究者)

7) **前治療抗精神病薬からブレクスピプラゾールへの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究**(臨床研究)

前治療抗精神病薬からブレクスピプラゾールへの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害を対象とし、ブレクスピプラゾール服薬継続率を主要評価項目として、副次評価項目として安全性、有効性について検討する。当施設以外に5施設が参加している。平成30年度はエントリーを開始し、当施設では2名の組み入れを行った。(研究代表者)

8) **精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究**(日本医療研究開発機構研究費)

本研究では、その神経回路が比較的明らかな機能ドメイン(症状)に対応する臨床情報を収集し、固有IDを介して生体情報との連結をはかり、縦断的な経過を追う。縦断的経過を追跡することで、治療反応性や社会的転帰に影響を及ぼす臨床・生体情報データを特定するとともに、機能ドメインに基づく均質な集団を抽出する解析方法を見出し、その病態の解明に基づく個別化医療や精神医療の標準化の促進に取り組むことを目指す。本事業(3年間)では、レジストリの基盤構築を目的とし、データの収集方法、管理・解析方法、倫理的配慮、評価の質の担保、実施可能性を考慮したフォローアップの方法、利活用ルールを設定し、学会、企業、当事者と協働し、試験的運用の実施を目指す。平成30年度は、レジストリ登録項目を設定し、データ収集システム要件の定義を行った。バイオリソースのカタログ化も順調に進んでいる。(研究開発代表者)

(金 吉晴)

1) **PTSDに対する持続エクスポージャー療法に関する指導者育成システムの研究**

現在各国のガイドラインでPTSDに対する治療法として最もエビデンスがあるとされている、持続エクスポージャー療法(Prolonged Exposure Therapy)の治療者の効果的育成についてのシステム研究を行った。(金 吉晴)

2) **複雑型PTSDに関する認知行動療法の検討**

複雑性PTSDに対する認知行動療法である、STAIR/NSTの日本での実施可能性、安全性、有効性を検討するために、オープン前後比較試験を実施中である。またスーパーバイズ体制の構築と治療者育成を行っている。今年度は、複雑性PTSDの自記式評価尺度である国際トラウマ質問票(ITQ: International Trauma Questionnaire)の日本語版を公表した。(金 吉晴、伊藤まどか)

3) **PTSDの病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討**

トラウマ体験者(PTSD発症群、非発症群)と健常者を対象とし、遺伝子解析(遺伝子多型、遺伝子発現、DNAメチル化)、内分泌・免疫系や自律神経系指標を含むバイオマーカー測定、脳MRI計測、認知機能測定、多角的な心理・臨床的評価を行う。PTSD発症群に対しては持続エクスポージャー療法等の治療を行い、治療反応性との関連も検討する。これらの検討により、PTSDの病因・病態解明、生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す。

PTSD 患者では広汎な認知機能障害が認められること (Narita-Ohtaki et al., 2018 J Affect Disord), PTSD 患者では炎症系が亢進しており, それが認知機能障害を惹起している可能性があること (Imai et al., 2018 J Psychiatr Res), PTSD ではネガティブな情報への記憶バイアスが存在し, それは記憶機能の低さと関連すること (Itoh et al., 2019 J Affect Disord) を明らかにしたことなどが本年度の主要な成果である。(堀 弘明, 関口 敦, 伊藤真利子, 林 明明, 伊藤まどか, 金 吉晴)

4) PTSD に対するメマンチンの有効性に関するオープン臨床試験

PTSD 患者を対象として, アルツハイマー型認知症の治療に用いられている NMDA 受容体拮抗薬メマンチンを投与し, PTSD 治療におけるメマンチンの有効性を検討する。PTSD 症状と認知機能を主要アウトカム指標とする。本研究では, 予備的検討としてオープン臨床試験を行い, 効果サイズや安全性を検討することにより, その後予定している RCT のプロトコールを作成することを目的とする。(堀 弘明, 金 吉晴)

5) 災害時精神保健医療ガイドライン作成

国内外のガイドラインを精査し, その内容を解体, 再統合し, 専門家の意見をとりいれつつ包括的ガイドラインを作成している。災害情報データベースの作成を行っている。(金 吉晴, 島津恵子, 篠崎康子)

6) 地域精神保健相談の実態調査

地域精神保健相談支援ツール作成のため, 昨年度実施した責任者の立場にある経験豊かな保健師 3 名への日頃の精神保健業務に関するヒヤリング結果をもとにオンラインアンケートを作成し, 全国自治体保健所に勤める保健医療福祉専門職を対象に, 精神保健相談支援ツールへの希望ならびに日頃の精神保健業務内容について全国アンケート調査を実施し, 結果を解析した。また, 精神保健相談支援ツールのプロトタイプを作成し, 地域住民の精神保健相談対応に従事している保健師, 臨床心理士等の医療専門職を対象に地域精神保健相談研修を企画, 実施した。受講者よりモニターとして精神保健相談支援ツールのプロトタイプへのフィードバックを受け, 支援ツールの改善と効果的な普及をめざす。(金 吉晴, 島津恵子, 笥 亮子)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

(中込和幸)

NCNP 市民公開講座 脳からこころを解き明かす「うつ病とはどんな病気？」講演. 2019.9.29.

(金 吉晴)

東京読売新聞 「震災 8 年 心の相談なお 2 万件 ケア 6 年「救われた」20 代男性」2019.3.9.
朝日新聞「(東日本大震災 8 年) 中高年男性、独居の壁 復興住宅で 60 歳孤独死「名前すら知らず」」2019.3.12.

(2) 専門教育面における貢献

(中込和幸)

山梨大学客員教授
昭和大学客員教授
杏林大学客員教授
鳥取大学非常勤講師

(金 吉晴)

連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科

- 客員教授 : 山梨大学医学部, 東北大学大学院医学系研究科, 武蔵野大学,
 ニューヨーク大学医学部精神科, 東京女子医科大学
- 大学講師 : 京都大学医学部
- 研修会講師 : 全国の行政職員向け研修会等で, 災害精神保健に関する最新知見を提供した
- 講演会講師 : 各地の医師会, 大学等の依頼を受け, ト라우マ対応, PTSD 治療, 犯罪被害者
 対応, 被災者・遺族対応, 災害精神保健に関する一連の講演を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

(金 吉晴)

- 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 1 回災害時PFAと心理対応研修. 2018.5.23-24.
 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 2 回災害時PFAと心理対応研修. 2018.11.28-29.

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

(中込和幸)

- 厚生労働省 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 事前評価委員及び中間・事後評価委員
 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部企画課 社会保障審議会臨時委員(障害者部会)
 独立行政法人医薬品医療機器総合機構 専門委員
 独立行政法人医薬品医療機器総合機構 レギュラトリーサイエンス研究評価委員会委員

(金 吉晴)

- ふくしま心のケアセンター顧問
 みやぎ心のケアセンター顧問
 被災 3 県心のケア総合支援調査研究等事業 実施委員会 委員

(5) センター内における臨床的活動

(中込和幸)

- 外来診療(統合失調症専門外来を含む)
 病棟回診(リスク管理目的)

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Pu S, Noda T, Setoyama S, Nakagome K: Empirical evidence for discrete neurocognitive subgroups in patients with non-psychotic major depressive disorder: clinical implications. *Psychol med* 48(16): 2717-2729, 2018.
- 2) Nishida K, Toyomaki A, Koshikawa Y, Niimura H, Morimoto T, Tani M, Inada K, Ninomiya T, Hori H, Manabe J, Katsuki A, Kubo T, Shirahama M, Kohno K, Kinoshita T, Kusumi I, Iwanami A, Ueno T, Kishimoto T, Terao T, Nakagome K, Sumiyoshi T: Social cognition and metacognition contribute to accuracy for self-evaluation of real-world functioning in patients with schizophrenia. *Schizophr Res* 202: 426-428, 2018.
- 3) Yamada Y, Takano H, Yamada M, Satake N, Hirabayashi N, Okazaki M, Nakagome K: Pisa syndrome associated with mirtazapine: a case report. *BMC Pharmacol Toxicol* 19(1): 2018.
- 4) Hansen Marie C, Jones Brett D, Eack Shaun M, Glenthøj Louise B, Ikezawa S, Iwane T,

- Kidd Sean A, Lepage M, Lindenmayer J-P, Ljuri I, Maida K, Matsuda Y, Nakagome K, Nordentoft M, Ozog V, Penney D, Saperstein Alice M, Sunaga A, Vinogradov S, Virdee G, Wojtalik Jessica A, Medalia A: Validation of the MUSIC Model of Motivation Inventory for use with cognitive training for schizophrenia spectrum disorders: A multinational study. *Schizophr Res*, 2018.
- 5) Nakazawa K, Noda T, Ichikura K, Okamoto T, Takahashi Y, Yamamura T, Nakagome K: Resilience and depression/anxiety symptoms in multiple sclerosis and neuromyelitis optica spectrum disorder. *Mult Scler Relat Disord* 25: 309-315, 2018.
 - 6) Pu S, Nakagome K, Satake T, Ohtachi H, Itakura M, Yamanashi T, Miura A, Yokoyama K, Matsumura H, Iwata M, Nagata I, Kaneko K: Comparison of prefrontal hemodynamic responses and cognitive deficits between adult patients with autism spectrum disorder and schizophrenia. *Schizophr Res*, 2018.
 - 7) Hori H, Nakamura S, Yoshida F, Teraishi T, Sasayama D, Ota M, Hattori K, Kim Y, Higuchi T, Kunugi H: Integrated profiling of phenotype and blood transcriptome for stress vulnerability and depression. *J Psychiatr Res* 104: 202-210, 2018.
 - 8) Imai R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Ogawa S, Ishida M, Sekiguchi A, Matsui M, Kunugi H, Akechi T, Kamo T, Kim Y: Inflammatory markers and their possible effects on cognitive function in women with posttraumatic stress disorder. *J Psychiatr Res* 102: 192-200, 2018.
 - 9) Narita-Ohtaki R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Sekiguchi A, Matsui M, Kunugi H, Kamo T, Kim Y: Cognitive function in Japanese women with posttraumatic stress disorder: Association with exercise habits. *J Affect Disord* 236: 306-312, 2018.
 - 10) Itoh M, Hori H, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kim Y: Memory bias and its association with memory function in women with posttraumatic stress disorder. *J Affect Disord* 245: 461-467, 2019.
 - 11) Hakamata Y, Mizukami S, Komi S, Sato E, Moriguchi Y, Motomura Y, Maruo K, Izawa S, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Attentional bias modification alters intrinsic functional network of attentional control: A randomized controlled trial. *J Affect Disord* 238: 472-481, 2018.
- (2) 総説
- 1) Takeda K, Sumiyoshi T, Matsumoto M, Murayama K, Ikezawa S, Matsumoto K, Nakagome K: Neural Correlates for Intrinsic Motivational Deficits of Schizophrenia; Implications for Therapeutics of Cognitive Impairment. *Front Psychiatry* 9: p178, 2018.
 - 2) 竹田和良, 中込和幸: 特集 精神科臨床から何を学び, 何を継承し, 精神医学を改革・改良できたか (1) 認知機能障害の概念 社会機能向上に向けた鍵として. *精神医学* 60(11): 1253-60, 2018.
 - 3) 金吉晴: 特集 複雑性 PTSD の理論と治療 特集にあたって. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 25, 2018.
 - 4) 金吉晴, 中山未知, 丹羽まどか, 大滝涼子: 複雑性 PTSD の診断と治療. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 27-35, 2018.
 - 5) 金吉晴: 統合失調症の背後にあるトラウマに気づく. *臨床精神医学* 47(7): 769-774, 2018.
 - 6) 丹羽まどか, 加茂登志子, 金吉晴: 性的虐待による複雑性 PTSD 患者に対する STAIR/NST. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 45-53, 2018.

- 7) 金 吉晴：災害への備え・災害対策. 日本精神科病院協会雑誌 37(11)：4-9, 2018.
- 8) 金 吉晴：災害と精神医療. 精神医学 60(12)：1375-1383, 2018.
- 9) 金 吉晴, 篠崎康子, 大沼麻実, 島津恵子, 大滝涼子：災害時の社会心理支援. 精神保健研究 (65)：51-55, 2019.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴：こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総括・分担研究報告書, 平成 30 年度総括研究報告書. pp1-4, 2019.
- 2) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子：精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者：金 吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp5-134, 2019.
- 3) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子：地域精神保健相談研修. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者：金 吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp155-286, 2019.
- 4) 金 吉晴：こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総合研究報告書, 平成 28 年度～30 年度総合研究報告書. pp1-2, 2019.
- 5) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子：精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者：金 吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp3-178, 2019.
- 6) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子：地域精神保健相談研修. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者：金 吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp203-334, 2019.
- 7) 金 吉晴：災害時のこころの支援に関する実務保健師の役割と求める能力、知識・技術・態度の検討—SOLAR プログラム (Skills for Life Adjustment and Resilience Program 生活への適応と回復スキルのためのプログラム)に関する研究—. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者：宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp21-29, 2019.
- 8) 宮崎美砂子, 奥田博子, 春山早苗, 石川麻衣, 金谷泰宏, 金 吉晴, 植村直子：実務保健師に求められる災害時の役割とコンピテンシー、その遂行に求められる知識・技術・態度—デルファイ法による災害対応経験のある自治体実務保健師等への意見調査. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者：宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp67-103, 2019.
- 9) 堀 弘明, 伊藤 真利子, 林 明明, 丹羽まどか, 井野敬子, 今井理紗, 小川 成, 加茂登志子, 金 吉晴：PTSD 女性患者における認知機能. メンタルヘルス岡本記念財団 2017 年度 (第 29

号) 研究助成報告集. pp101-106, 2018.

- 10) 堀 弘明, 中村誠二, 吉田冬子, 寺石俊也, 篠山大明, 太田深秀, 服部功太郎, 金 吉晴, 樋口輝彦, 功刀 浩: ストレス脆弱性についての表現型と末梢血トランスクリプトームの統合解析. 臨床薬理の進歩: pp140-151, 2018.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 伊藤真利子, 堀 弘明, 金 吉晴: 健常成人女性における幼少期トラウマと認知バイアスの関連. 精神科臨床 Legato 5(1): 29-32, 2019.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法とトラウマからの回復. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
- 2) 金 吉晴: PTSD からの回復. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
- 3) 金 吉晴: 医療の現場で子どもと親子のトラウマやストレスに対処する—トラウマの医学と治療の現在を踏まえて. 第 31 回日本総合病院精神医学会総会, 東京, 2018.11.30-12.1.
- 4) 金 吉晴: トラウマ記憶と解離. 精神病理コロック名古屋, 愛知, 2019.1.26.
- 5) 井野敬子, 金 吉晴, 田中英三郎, 須賀楓介: トラウマ記憶を語ることで患者は何を得るのか—PE の作用機序の観点から—. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.
- 6) 金 吉晴: 回復された児童期のトラウマ記憶と PTSD からの回復. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.
- 7) 金 吉晴: 複雑性 PTSD の認知行動療法. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.

(2) 一般演題

- 1) Ohnuma A, Kim Y: A Comparative Study on the Effects of One-Day Workshops and Lectures on Psychological First Aid. World Congress of Asian Psychiatry, Sydney, 2018.2.21-24.
- 2) 金 吉晴, 中山未知, 丹羽まどか: 複雑性 PTSD の診断評価について. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 3) 金 吉晴: PTSD の初期心理教育の重要性と効果. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21-23.
- 4) 大沼麻実, 金 吉晴, 神尾陽子, 立森久照: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 5) 林 明明, 金 吉晴: ストレスイベント体験有無の回答へ及ぼす調査方法による影響. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 6) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: 虚記憶へ及ぼす処理水準およびストレスの効果. 日本心理学会第 82 回大会, 宮城, 2018.9.25-27.

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 金 吉晴：PTSD の病態と治療．北里大学医学部精神科学，神奈川，2018.4.12.
- 2) 金 吉晴：PTSD の病態と治療．東京大学医学部付属病院精神神経科，東京，2018.5.28.
- 3) 金 吉晴，堀 弘明：PTSD の病態と治療．精神保健研究所，東京，2018.6.4.
- 4) 金 吉晴：子どもをめぐるトラウマとうつ．第 46 回多摩精神科医療懇話会，東京，2019.3.7.
- 5) 金 吉晴：PTSD からの回復とその経路．京都精神科治療懇話会，京都，2019.3.9.

D. 学会活動**(1) 学会主催**

- 1) 中込和幸：第 28 回日本臨床精神神経薬理学会/第 48 回日本神経精神薬理学会 合同年会 大会長，東京，2018.11.14-16.
- 2) 中込和幸：第 22 回日本精神保健・予防学会 大会長，東京，2018.12.1-2.

(2) 学会役員

- 1) 日本自殺予防学会 理事（中込和幸）
- 2) 日本薬物脳波学会 理事（中込和幸）
- 3) 日本精神神経学会 精神医学研究推進委員会委員，倫理委員会委員（中込和幸）
- 4) 日本神経精神薬理学会 理事長，執行委員会委員長，統合失調症薬物治療ガイドラインタスクフォース委員長（中込和幸）
- 5) 日本臨床精神神経薬理学会 評議員，トランスレーショナルリサーチ（サポート）委員長（中込和幸）
- 6) 日本生物学的精神医学会 評議員，倫理委員会副委員長（中込和幸）
- 7) 東京精神医学会 理事（中込和幸）
- 8) 日本統合失調症学会 評議員（中込和幸）
- 9) 日本不安症学会 評議員（中込和幸）
- 10) 日本精神保健・予防学会 理事（中込和幸）
- 11) International Society for Traumatic Stress Studies 理事（金 吉晴）
- 12) Global Committee, International Traumatic Stress Studies 委員（金 吉晴）
- 13) 日本トラウマティック・ストレス学会 理事（金 吉晴）
- 14) 自殺予防学会 理事（金 吉晴）
- 15) 日本不安症学会 理事（金 吉晴）

(3) 座長

- 1) 尾崎紀夫，中込和幸：産官学連携による精神医学研究の方向性．第 114 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2018.6.23.
- 2) 中込和幸，鈴木道雄：精神病／統合失調症への早期介入：現在の到達点と臨床ガイダンス．第 114 回日本精神神経学会学術総会，神戸，2018.6.21.
- 3) 中込和幸：Recognition, Treatment, Morbidity and Mortality in Bipolar Disorder. (特別講演 Joseph R. Calabrese) 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会，東京，2018.11.14
- 4) 中込和幸，池田和隆：精神医学の今後の研究の方向性．第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会，東京，2018.11.16.
- 5) 金 吉晴，加藤知子：シンポジウム A-1 複雑性 PTSD の概念と治療．第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会，大分，2018.6.9-10.
- 6) 金 吉晴：大会企画シンポジウム 2 ト라우マ被害と認知行動療法．第 18 回日本認知療法・認

知行動療法学会，岡山，2018.11.23-25.

- 7) 金 吉晴：ワークショップ2 不安症治療の最適化を目指して～その異様性をいかに捉え、いかに治療に反映させるのか～. 第11回日本不安症学会学術大会，愛知，2019.3.1-2.
- 8) 金 吉晴：シンポジウム2 PTSDの治療. 第11回日本不安症学会学術大会，愛知，2019.3.1-2.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board member
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board member
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) Kim Y: Educational lecture and group discussion. Tokyo, 2018.5.30.

(2) 研修会講師

- 1) Kim Y: Japanese Experience of Disaster Mental Health Care. Educational lecture and group discussion. Tokyo, 2018.5.30.
- 2) Lily Brown, 小西聖子, 金 吉晴：アドバンスト PE ワークショップ，東京，2018.7.6-7.
- 3) 金 吉晴：性犯罪被害者への精神的ケア（PTSD への対応）. 性犯罪・性暴力被害者支援に関する研修会，東京，2018.11.17.
- 4) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 東海林渉：サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第1回災害時 PFA と心理対応研修. 東京，2018.5.23.
- 5) 金 吉晴, 大沼麻実, 山崎千鶴子, 鈴江 毅, 佐野弘枝, 鈴木吏良：サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第2回災害時 PFA と心理対応研修，東京，2018.11.28.

F. その他

- 1) Asian Consortium of National Mental Health Institutes 3rd Annual Meeting (第3回 ACONAMI 国際シンポジウム) 開催 (於 国立精神・神経医療研究センター ユニバーサルホール) 平成31年3月19～20日

精神保健研究所，ソウル国立精神衛生センター，シンガポールメンタルヘルス機構共催。韓国より6名，シンガポールより10名が来日した。NCNP からは加賀佳美（知的・発達障害研究部室長），引土絵未（薬物依存研究部研究員），藤井千代（地域・司法精神医療研究部長），山之内芳雄（精神医療政策研究部長），本橋 豊（自殺総合対策推進センター長），伊藤弘人（客員研究員）が研究発表を行った。2日間で160名以上が参加した。

2. 精神医療政策研究部

I. 研究部の概要

精神医療政策研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和 61 年に設置された。当研究部の英語標記である **Mental Health Policy** が示すように、わが国の精神保健医療の政策について研究し、その評価を行うことを主たるミッションとしている。

医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が、平成 30 年度に同時に改訂され、自治体・医療関係機関等がその着実な策定と確かなモニタリングに関する方策を提示したが、今年度も引きつづき研究活動の軸におき、厚生労働省で行われた「これからの精神保健医療福祉に関する検討会」の、新たな地域精神保健医療体制のあり方の構築に関する議論と連携し、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能な方法を提示する方策を構築し、レセプト・特定健診等データベース（NDB）の活用等を通じて、時代に即したデータ提供に取り組んでいる。

モニタリング研究の礎をもとに、さらにその中身を作るべく、良質な精神科医療の提供を目指すための医療の質指標の開発に関する研究、向精神薬の適切な使用実態に関するデータベース研究などの精神疾患の予防に着目した研究活動を行っている。これら活動は、部内のみならず、他研究部、センター病院、全国精神科医療機関、全国精神科関連医療団体、厚生労働省、行政機関等と幅広く協調することで、政策系の研究部としてのミッションを達成していくものと考えている。

部長：山之内芳雄，室長：堀口寿広，本屋敷美奈，馬場俊明（～10/31），白杵理人，研究員：羽澄 恵 客員研究員：西 大輔，赤澤正人，安西信雄，末安民生，鈴木晃仁，高橋邦彦，竹島 正，野口正行，目黒克己，三宅美智，鈴木友理子，流動研究員：橋本 塁（～10/30），松本悠貴（～12/31），月江ゆかり，科研費研究員：白田謙太郎，薄田涼子（～8/31），深澤舞子，岡崎絵美，外来研究員：後藤基行（～11/30），古野考志，中村江里（～11/30），研究生：原田玄機（～11/30），橋本 塁（11/1～），山田理絵（～11/30），久保田明子（～11/30），山邊聖士（～11/30），西脇啓太（～11/30），松本悠貴（31/1/1～），科研費研究補助員：穴澤恵美子，吉田勺美（～7/13），鴨志田由美子，赤川裕美（6/4～8/31），科研費研究助手：清水悦子，原田かおる

II. 研究活動

1) 政策の議論と連携した精神保健医療福祉のモニタリング研究

厚生労働行政推進調査事業「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」において、精神医療関係団体・厚生労働省と連携をとり、自治体・医療関係機関等が、医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が平成 30 年度に同時に改訂されたことに対応できるよう、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能なモニタリング方法を提示する方策を構築した。

昨年度に引き続き第 7 次医療計画の策定した指標に基づき、NDB、630 調査をもとに全都道府県 2 次医療圏ごとの診療実績を公表した。これは、多様な精神疾患に対応した、地域包括ケアシステム構築に向けて、15 疾患等領域における圏域毎の医療機関数をストラクチャ、患者数をプロセス、病期別の入院需要と、地域移行を受け入れる地域基盤必要量をアウトカム指標としている。

これら指標値を毎年精神保健福祉資料として、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部のホームページ (<https://www.ncnp.go.jp/nimh/seisaku/>) で公表した。

630 調査に関しては、NDB を補完すべく新しい調査票と様式を作成し、平成 30 年調査を実施した。（山之内，白田，白杵，古野，馬場）

2) 医療の質指標の開発に向けた精神科医療の見える化プロジェクト (PECO)

精神科入院医療環境の変化に伴い、わが国でも医療の質を考える際に外形的なものからプロセスやアウトカムを求められるようになってきた。そこで各病院が、提供している医療が「見える」ためのシステムを作成し、PECO-Psychiatric Electronic Clinical Observation - システムとして運用を継続している。

PECO では参加病院への集計結果のフィードバックのほか、国際比較も行っており、今年度よりシンガポールに加えて韓国も参加することになった。国際比較においては、各国の医療システムや運用、考え方の違いがあり、指標を統一するための議論の重要性が分かってきた。現在は平均在院日数と3カ月後の再入院率の2つの指標の比較にとどまっているが、今後も引き続き議論を継続し、比較できる指標を増やしていきたいと考えている。

今後はさらにPECOが臨床で有用なシステムとして活用されるよう、情報を過不足なく取得できるようなシステムづくりを推進していく。その一つとして、レセプトではわからない医療の中身に重点をおいた精神疾患のレジストリ構築と連携していく。

現段階では「退院時サマリ」に着目し、患者のプロブレムリストや自殺企図の有無などを中心に電子カルテより診療データを取得していく。

これらのデータをPECOへ連携することにより、実際の診療上で使用したデータを反映した新たな指標を作成することができるようになる。またPECOと同時に精神疾患レジストリでも共通の項目を電子カルテより連携していることにより、両者を比較あるいは統合した形でのデータ解析などが可能となる。(山之内、三宅、月江、古野)

3) 抗精神病薬多剤大量処方の安全で効果的な是正

我が国における抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正の方法について、平成22-24年度厚生労働科学研究費補助金「抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正に関する臨床研究」(研究代表者 岩田伸生 藤田保健衛生大学教授)班は、1つずつ、ごく少しずつ、休んでも戻しても可とした減量方法(SCAP法)で、2剤以上CP(クロルプロマジン換算)500~1,500mg/dの入院・外来の統合失調症患者(55施設、163名)の臨床試験を実施し、SCAP法は忍容性に優れ安全性と効果は、減量してもしなくても変わらない結果を見いだした。この知見に関して、当事者・家族、医師等への広報活動を行った。(山之内)

4) 障害児福祉サービスの第三者評価の確立に向けた研究

平成30年度厚生労働科学研究費補助金「障害児支援のサービスの質を向上させるための第三者評価方法の開発に関する研究」(研究代表者 内山登紀夫 大正大学教授)班にて、第三者評価を行うものの資格要件および養成方法について検討を行った。(堀口)

5) 医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」をもつ家族のレスパイト(休息)を確保しワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)を実現する目的で、東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して、身近な地域の医療機関が中心となり子どもの状態をよく知る職員が付き添い一般の保育所を利用する「インクルーシブ保育」の実施に協力した。(堀口)

6) 成人吃音者の受療行動を研究

日本医療研究開発機構研究費「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」(研究代表者 森 浩一 国立障害者リハビリテーションセンター学院長)に参加し国立障害者リハビリテーションセンター病院におけるカルテ調査から成人吃音者の医療の利用状況と就労状況の関係を調査した。(堀口)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 記者勉強会. 第 10 回記者勉強会, 東京, 2018.12.6. (山之内)
- ・ あなたの「眠れない」の解決法をさぐる. 公益財団法人総合健康推進財団主催. 東京: 2018.5.19 (羽澄)
- ・ 睡眠障害を持つ子供や保護者への対応. 平成 30 年度仙台市保健会養護教諭部会研修会. 宮城: 2018.8.7 (羽澄)
- ・ 子供の睡眠・睡眠の大切さ. 公益財団法人神経研究所附属睡眠健康推進機構主催. 長野: 2018.11.06 (羽澄)
- ・ 子どもの成長と睡眠の重要性. 公益財団法人神経研究所附属睡眠健康推進機構主催. 長野: 2018.11.12 (羽澄)
- ・ 睡眠と心の関係. 長野県千曲市市民講座. 長野: 2018.12.18 (羽澄)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 新精神保健福祉資料の見方と使い方. 平成 30 年度 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築担当係長等会議, 東京, 2018.5.28. (山之内)
- ・ 新しい 630 調査と訪問看護への活用. 第 5 回 精神科訪問看護ステーション情報交換会, 東京, 2018.6.30. (山之内)
- ・ 地域定着を促すためのデータ活用と医療資源シフトの必要性. PPST 研究会全国ブロック幹事会・2018 年全国セミナー, 東京, 2018.9.21. (山之内)
- ・ 精神科医療の未来 ～データからの示唆と医療計画の活用～. 第 23 回翠会ヘルスケアグループ地域精神保健学会, 東京, 2018.11.16. (山之内)
- ・ 精神保健福祉総論. 平成 30 年度島根県精神保健福祉相談員資格取得講習会, 島根, 2018.11.30 (山之内)
- ・ 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築においてデータをどう使うか. 精神障がいにも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた新精神保健福祉資料活用研修会, 島根, 2018.11.30.
- ・ 精神病床のこれからと地域包括ケアへの投資. 東京精神科病院協会事務長会, 東京, 2019.1.17. (山之内)
- ・ 実践を裏付けるデータを活用した地域精神保健福祉の協議に向けて. 全国精神保健福祉業務研修会, 和歌山, 2019.1.26. (山之内)
- ・ 新しい精神保健指定医の研修・審査についての検討. 静岡県精神保健指定医会議, 静岡, 2019.2.9 (山之内)
- ・ 地域包括ケアシステムと今後の精神科医療. Janssen Psychiatry Seminar in Fukuoka, 福岡, 2019.2.23. (山之内)
- ・ 健康診断・産業医面談で行える睡眠チェック. 第 91 回日本産業衛生学会, 熊本, 2018.5.16-2018.5.20. (松本)
- ・ 3DSS チェックで自分の睡眠を知ろう-リズムとぐっすり、たっぷり-. 睡眠健康推進機構・秋の「すいみんの日」市民公開講座 2018, 久留米, 2018.9.8. (松本)
- ・ 日本精神科病院協会通信教育第 4 回 SENIR コース (平成 30 年度) 前期スクーリング. クリティカルパス. 東京, 2018.7.10. (堀口)
- ・ 武蔵野大学「コミュニティ心理学」の講義, 非常勤講師. (臼田)
- ・ 武蔵野大学「認知心理学」の講義, 非常勤講師. (臼田)
- ・ 立教大学「心の健康」非常勤講師. (羽澄)
- ・ 晴和病院 臨床心理学的研究および実践指導. (羽澄)
- ・ 斉藤病院 看護研究指導. (月江)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 「既存統計資料の活用」第 55 回精神保健指導過程研修, 2018.7.2 および 9.7. (山之内)
- ・ 「精神保健福祉のデータ活用 (630 調査, NDB など)」第 55 回精神保健指導過程研修, 2018.7.2 および 9.7. (山之内)
- ・ 「メンタル領域のデータを使った地域診断」第 55 回精神保健指導過程研修, 2018.7.2 および 9.7. (山之内)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・ 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築支援事業 広域アドバイザー (山之内)
- ・ 公益社団法人 日本精神神経学会 広報委員会 2018 年度委員 (山之内)
- ・ 公益社団法人 日本精神科病院協会 精神科版二次医療圏データベース部会 (山之内)
- ・ 厚生科学審議会 専門委員 健康日本 21 (第二次) 推進専門委員会 (山之内)
- ・ 厚生労働省 精神科医療体制確保研修 (精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修) 事業評価委員会 (山之内)
- ・ 研究統括・データベース・データツールの作成, 需給予測. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」. (山之内)
- ・ 評価ツール開発, モデル地域連携. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」. (山之内)
- ・ 抗精神病薬の多剤是正方策 向精神薬の全国的処方動向集計の考察. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)). 「向精神薬の処方実態と薬物適正ガイドラインの研究」. (山之内)
- ・ ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」. (山之内)
- ・ 国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討. 国立がん研究センター研究開発費「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」. (山之内)
- ・ クリニカルパスの開発・検証, データ分析. 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (C))) 「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」. (山之内)
- ・ 厚生労働科学研究費補助金 (障害者施策総合研究事業 (精神障害分野)) 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムのモニタリングに関する政策研究」. (臼杵)
- ・ 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (身体・知的等障害分野)) 「障害児支援のサービスの質を向上させるための第三者評価方法の開発に関する研究」 (堀口)
- ・ 日本医療研究開発機構研究費 (長寿・障害総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業)) 「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」 (堀口)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業 (学術研究補助金 (研究活動スタート支援)) 「ナルコレプシー患者における精神健康の不良に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明」 (羽澄)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (C))) 「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」 (深澤)
- ・ 精神薬療分野研究助成金「周産期うつ病におけるオメガ 3 系脂肪酸とアディポネクチンの関連」. (西)
- ・ 日本医療研究開発機構研究費 (長寿・障害総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業)) 「当事者を含めた他職種によるリカバリーカレッジの運用のためのガイドラインの開発」内「マインドフルネス及びレジリエンス向上とリカバリー」 (西)
- ・ 厚生労働科学研究費補助金「労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究」内「労

働生産性の心理社会的指標の検討」(西)

- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」内「メンタルヘルス部門・啓発担当」(竹島)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」(三宅)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(若手研究B)「産後うつ病スクリーニング後のインターネット認知行動療法:無作為化比較試験」.(馬場)
- ・ 厚生労働科学研究費補助金(健やか次世代育成総合研究事業)「産婦死亡に関する情報の管理体制の構築及び予防介入の展開に向けた研究」内「産後の自殺予防に関する連携体制の構築に関する研究」.(馬場)
- ・ 成育疾患克服等総合研究事業「胎児期から高齢期まで生涯の健康を考慮した母子保健領域疾患の疾病負荷と効果的介入方法についての俯瞰研究」内「母子保健領域の疾病費用負担および予防介入の費用効果分析研究の系統的レビュー」.(馬場)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(若手研究B)「日本の精神病床入院システムの実証研究と政策科学研究—歴史的アーカイブズ構築と共に」(後藤)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(特別研究員奨励費(PD))「日本における精神病床入院メカニズムの実証研究—3類型化の視点から—」(後藤)
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業(基盤A)「20世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討」(後藤)

(5) センター内における臨床的活動

NCNP 病院の行動制限最小化委員会(毎月第三月曜)において、PECO で得られたデータ集計をもとに、NCNP 病院での医療の質向上に向けた取り組みを行っている。(山之内, 月江)

(6) その他

- ・ 一般社団法人社会的包摂サポートセンター 平成 30 年度寄り添い型相談支援事業(よりそいホットライン) 効果測定委員(堀口)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Fukasawa M, Miyake M, Suzuki Y, Fukuda Y, Yamanouchi Y: Relationship between the use of seclusion and mechanical restraint and the nurse-bed ratio in psychiatric wards in Japan. *International Journal of Law and Psychiatry* 60: 57-63, 2018.
- 2) Nishi D, Susukida R, Usuda K, Mojtabai R, Yamanouchi Y: Trends in the prevalence of psychological distress and the use of mental health services from 2007 to 2016 in Japan. *Journal of Affective Disorders* 239(15): 208-213, 2018.
- 3) Nishi D, Susukida R, Usuda K, Yamanouchi Y: Psychological distress among people in Fukushima prefecture before and after the Great East Japan Earthquake using a nation-wide survey. *Psychiatry Clin Neurosci* 72(12): 878-878, 2018.
- 4) 羽澄 恵, 本多 真: ナルコレプシー患者における日中の眠気に伴う対人関係の体験構造. *臨床心理学* 18(14): 475-485, 2018.
- 5) 三宅美智, 西池絵衣子, 大谷須美子, 鎗内希美子, 大西 恵, 浅川佳則: 精神病床における拘束に関する 15 年間の変化. *日本精神科看護学術集会誌* 60(2): 130-133, 2018.

- 6) Hatta K, Katayama S, Morikawa F, Imai A, Fujita K, Fujita A, Ishizuka T, Abe T, Sudo Y, Hashimoto K, Usui C, Nakamura H, Yamanouchi Y, Hirata T, for the JAST study group: A prospective naturalistic multicenter study on choice of parenteral medication in psychiatric emergency settings in Japan. *Neuropsychopharmacology Reports* 38(3): 117-123, 2018.
- 7) Okazaki E, Nishi D, Susukida R, Inoue A, Shimazu A, Tsutsumi A: Association between working hours, work engagement, and work productivity in employees: A cross-sectional study of the Japanese Study of Health, Occupation, and Psychosocial Factors Relates Equity. *J Occup Health* 61(2): 182-188, 2019.
- 8) 大沢知隼, 橋本 塁, 嶋田洋徳: 注意バイアス修正訓練を取り入れた集団ソーシャルスキルトレーニングが児童生徒のソーシャルスキルの維持と般化に及ぼす影響—報酬への感受性の高低による効果の違いの比較. *教育心理学研究* 66(4): 300-312, 2018.
- 9) Yoshikawa E, Nishi D, Kashimura M, Matsuoka JY: Role of resilience for the association between trait hostility and depressive symptoms in Japanese company workers. *Current Psychology*: 1-8, 2019.
- 10) Nishi D, Su KP, Usuda K, Chang JP, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ: Differences between Japan and Taiwan in the treatment of pregnant women with depressive symptoms by omega-3 fatty acids: An open-label pilot study. *Nutr Neurosci* 22(1): 63-71, 2019.

(2) 総説

- 1) 三宅美智: 精神病床における隔離・身体的拘束の現在とこれから. *精神科* 33(3): 241-245, 2018.
- 2) 西 大輔, 山之内芳雄: こころの健康. *健康づくり*(484): 12-15, 2018.
- 3) 山之内芳雄, 西 大輔, 吉田衡機: NDB (レセプト情報・特定健診等情報データベース) 等を用いた地域, 疾患ごとの精神科医療の実態. *精神科* 33(3): 209-218, 2018.
- 4) 山之内芳雄: 新しい 630 調査と精神保健福祉資料. *心と社会*(173): 67-72, 2018.
- 5) 山之内芳雄: 新精神保健福祉資料を活かす - 地域の現状を把握し、その将来を見通すために -. *精神科病院マネジメント* 41: 4-8, 2018.
- 6) 山之内芳雄: 行動制限と指定医と法制度. *日本精神科病院協会雑誌* 37(12): 17-20, 2018.
- 7) 山之内芳雄: 地域包括ケアに向けた精神疾患の医療計画～地域の精神医療が見えてきた～ (精神入院需要推計の考え方も交えて). *精神科病院マネジメント* 41号対談, 東京(41): 4-8, 2018.
- 8) 山之内芳雄: 医療者と患者・家族が協働してくすりを減らす工夫. *こころの科学*(203): 79-82, 2019.
- 9) 山之内芳雄: 多剤処方患者を引き継いだとき—投薬整理のコツ—. *臨床精神医学* 47 増刊号: 47-51, 2018.
- 10) 橋本 塁, 野田隆政: 糖尿病領域との協働. *精神医学* 60(6): 639-646, 2018.
- 11) 橋本 塁: PHQ-9—プライマリケアにおけるうつ病スクリーニングに有用な評価ツール. *小児内科* 50: 1445-1448, 2018.
- 12) 堀口寿広: 診療のなかでの実施上の注意 特集:小児科医ができる発達検査・心理検査. *小児内科* 50(9): 1337-1342, 2018.
- 13) 藤原美佳, 平野美輪, 檜垣裕子, 戒能徳樹, 竹之内直人, 西 大輔, 山之内芳雄, 大野 裕: 産後対策事業 (こんにちは赤ちゃん訪問) への技術支援を通して ～地域における簡易型認知行動療法の技法活用に向けての取り組み～. *公衆衛生情報* 48(1): 22-23, 2018.

(3) 著書

- 1) 後藤基行: 精神疾患と治療の歴史. こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック, 中央法規, 東京, 9-21, 2018.

- 2) 後藤基行：日本の精神科入院の歴史構造—社会防衛・治療・社会福祉，東京大学出版会，東京，2019.
- 3) 後藤基行：日本における精神科入院と生活保護—過剰病床数と長期在院問題の淵源. 猪飼周平 編：羅針盤としての政策史—歴史研究からヘルスケア・福祉政策の展望を拓く，勁草書房，東京，2019.
- 4) 羽澄 恵：大石幸二 編：公認心理師 国家試験 要点解説と必修用語，文光堂，2019.
- 5) 羽澄 恵：アドヒアランス. 下山晴彦，伊藤絵美，黒田美穂，鈴木伸一，松田 修 編：公認心理師技法ガイド—臨床の場で役立つ実践のすべて—，文光堂，東京，843-848，2019.
- 6) 山之内芳雄：治療薬と他の身体的治療. こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック，中央法規，東京，337-354，2018.
- 7) 西 大輔，山之内芳雄：睡眠・ストレスマネジメント. 門脇 孝，津下一代 編：第三期 特定検診・特定保健指導ガイド，南山堂，東京，217-221，2018.
- 8) 西 大輔：不安スペクトラム. こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック，中央法規，東京，81-103，2018.
- 9) 西 大輔：気分障害（気分の上がり下がり）. こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック，中央法規，東京，104-125，2018.
- 10) 馬場俊明：気分障害の疫学（有病率，関連因子，および受診率）. 井上 猛 編：うつ病と双極性障害，最新医学社，大阪，23-28，2018.

(4) 研究報告書

- 1) 山之内芳雄：研究統括・データベース・データツールの作成、需給予測. 厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 2) 山之内芳雄：評価ツール開発、モデル地域連携. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 3) 山之内芳雄：抗精神病薬の多剤是正方策 向精神薬の全国的処方動向集計の考察. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 4) 山之内芳雄：ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 5) 山之内芳雄：国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討. 国立がん研究センター研究開発費「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 6) 山之内芳雄：クリニカルパスの開発・検証、データ分析. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 7) 堀口寿広：厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害児支援のサービスの質を向上させるための第三者評価方法の開発に関する研究」平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 8) 堀口寿広：日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業（障害者対策総合研究開発事業））「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 9) 臼杵理人：厚生労働科学研究費補助金（障害者施策総合研究事業（精神障害分野））「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムのモニタリングに関する政策研究」. 平成30年度 総括・分担研究報告書. 2019.

- 10) 馬場俊明：日本学術振興会 科学研究費助成事業（若手研究 B）「産後うつ病スクリーニング後のインターネット認知行動療法：無作為化比較試験」. 平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019
- 11) 馬場俊明：厚生労働科学研究費補助金（健やか次世代育成総合研究事業）「産婦死亡に関する情報の管理体制の構築及び予防介入の展開に向けた研究」内「産後の自殺予防に関する連携体制の構築に関する研究」. 平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019
- 12) 馬場俊明：成育疾患克服等総合研究事業 「胎児期から高齢期まで生涯の健康を考慮した母子保健領域疾患の疾病負荷と効果的介入方法についての俯瞰研究」内「母子保健領域の疾病費用負担および予防介入の費用効果分析研究の系統的レビュー」. 平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019
- 13) 羽澄 恵：日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究補助金（研究活動スタート支援））「ナルコレプシー患者における精神健康の不良に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 14) 西 大輔：精神薬療分野研究助成金「周産期うつ病におけるオメガ 3 系脂肪酸とアディポネクチンの関連」. 平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 15) 西 大輔：日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業（障害者対策総合研究開発事業））「当事者を含めた他職種によるリカバリーカレッジの運用のためのガイドラインの開発」内「マインドフルネス及びレジリエンス向上とリカバリー」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019
- 16) 西 大輔：厚生労働科学研究費補助金 「労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究」内「労働生産性の心理社会的指標の検討」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 17) 竹島 正：日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」内「メンタルヘルス部門・啓発担当」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 18) 三宅美智：科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 19) 深澤舞子：科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 20) 後藤基行：日本学術振興会 科学研究費助成事業（若手研究 B）「日本の精神病床入院システムの実証研究と政策科学研究—歴史的アーカイブズ構築と共に」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 21) 後藤基行：日本学術振興会 科学研究費助成事業（特別研究員奨励費（PD））「日本における精神病床入院メカニズムの実証研究—3 類型化の視点から—」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.
- 22) 後藤基行：日本学術振興会 科学研究費助成事業（基盤 A）「20 世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. 2019.

(5) 翻訳

- 1) 橋本 壘：ピーター・J・ビーリング，ランディ・E・マケイブ，マーチン・M・アントニー：認知行動療法グループ—可能性と課題，金子書房，2-25，2018.
- 2) 橋本 壘：ピーター・J・ビーリング，ランディ・E・マケイブ，マーチン・M・アントニー：CBT グループにおける行動的技法，金子書房，87-108，2018.

(6) その他

- 1) 堀口寿広：我々は完全な同感者になれるか 【書評】佐々木時雄著『よだかの星』—宮沢賢治を読む—。日本病跡学雑誌 95：103-105，2018.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等
 - 1) 山之内芳雄：精神医療の質の国際比較やデータ考察における留意点. 第 114 回日本精神神経学会学術

総会, 兵庫, 2018.06.21.

- 2) 山之内芳雄: データで見るシステム構築 医療計画, 障害福祉計画, 介護保険事業計画から考える. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 3) 山之内芳雄, 福生泰久: 精神保健指定医 審査・研修等の見直しについて. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.23.
- 4) 山之内芳雄: 精神医療懇話会に向けたデータの活用. 大阪府行政医師業務研修, 大阪, 2018.7.17.

(2) 一般演題

- 1) Nishi D, Susukida R, Usuda K, Yamanouchi Y: The age- and sex-specific trends in the prevalence of psychological distress and the use of mental health services in Japan. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health, New York, USA, 2018.5.2-4.
- 2) Hazumi M, Ito W, Honda M: Development and validation of "the Scale of Severity of Sleepiness-specific Distress: SSSD". The 9th congress of Asian Sleep Research Society, Sapporo, Japan, 2018.7.12-13.
- 3) Matsumoto Y: Scores of hypersomnia, bulimia, insomnia, and loss of appetite on the 3-Dimensional Sleep Scale. The 9th congress of Asian Sleep Research Society, Sapporo, Japan, 2018.7.11 – 2018.7.13.
- 4) 山之内芳雄: 「NDB からみた精神保健予防」. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.2.
- 5) 山之内芳雄: うつ病の疫学に関する研究・調査の理解とその活用～NDB の理解と活用～. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.3.1.
- 6) 臼田謙太郎, 西 大輔, 岡崎絵美: 妊娠中期におけるエジンバラ産後うつ病質問票 (EPDS) の最適なカットオフ値についての検討. 第 15 回日本周産期メンタルヘルス学会, 兵庫, 2018.10.27-28.
- 7) 堀口寿広: 特別支援学校における虐待防止対策の調査. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.31-6.2.
- 8) 堀口寿広: 障害児福祉サービスの第三者評価者の資質に関する意見の調査. 第 65 回日本小児保健協会学術集会, 鳥取, 2018.6.14-16.
- 9) 西 大輔, 馬場俊明: 日本における疫学研究・調査の特徴. シンポジウム「うつ病の疫学に関する研究・調査の理解とその活用」. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.3.1.

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 山之内芳雄: 新精神保健福祉資料の見方と使い方. 平成 30 年度 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築担当係長等会議, 東京, 2018.5.28.
- 2) 山之内芳雄: 新しい 630 調査と訪問看護への活用. 第 5 回 精神科訪問看護ステーション情報交換会, 東京, 2018.6.30.
- 3) 山之内芳雄: 地域定着を促すためのデータ活用と医療資源シフトの必要性. PPST 研究会全国ブロック幹事会・2018 年全国セミナー, 東京, 2018.9.21.
- 4) 山之内芳雄: 精神科医療の未来 ～データからの示唆と医療計画の活用～. 第 23 回翠会ヘルスケアグループ地域精神保健学会, 東京, 2018.11.16.
- 5) 山之内芳雄: 精神保健福祉総論. 平成 30 年度鳥根県精神保健福祉相談員資格取得講習会, 鳥根, 2018.11.30.
- 6) 山之内芳雄: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築においてデータをどう使うか. 精神

障がいにも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた新精神保健福祉資料活用研修会，島根，2018.11.30.

- 7) 山之内芳雄：第10回記者勉強会．日本精神神経学会，東京，2018.12.6.
- 8) 山之内芳雄：精神病床のこれからと地域包括ケアへの投資．東京精神科病院協会事務長会，東京，2019.1.17.
- 9) 山之内芳雄：「実践を裏付けるデータを活用した地域精神保健福祉の協議に向けて」．全国精神保健福祉業務研修会，和歌山，2019.1.26.
- 10) 山之内芳雄：新しい精神保健指定医の研修・審査についての検討．静岡県精神保健指定医会議，静岡，2019.2.9.
- 11) 山之内芳雄：地域包括ケアシステムと今後の精神科医療．Janssen Psychiatry Seminar in Fukuoka，福岡，2019.2.23.
- 12) 山之内芳雄：地域包括ケアシステムと今後の精神科医療．Janssen Psychiatry Seminar in Sapporo，北海道，2019.2.23.
- 13) 羽澄 恵：あなたの「眠れない」の解決法をさぐる．公益財団法人総合健康推進財団主催，東京，2018.5.19.
- 14) 羽澄 恵：睡眠障害を持つ子供や保護者への対応．平成30年度仙台市保健会養護教諭部会研修会，宮城，2018.8.7.
- 15) 羽澄 恵：子供の睡眠・睡眠の大切さ．公益財団法人神経研究所附属睡眠健康推進機構主催，長野，2018.11.6.
- 16) 羽澄 恵：子どもの成長と睡眠の重要性．公益財団法人神経研究所附属睡眠健康推進機構主催，長野，2018.11.12.
- 17) 羽澄 恵：「睡眠と心の関係」．長野県千曲市市民講座，長野，2018.12.18.
- 18) 松本悠貴：健康診断・産業医面談で行える睡眠チェック．第91回日本産業衛生学会，熊本，2018.5.16-2018.5.20.
- 19) 松本悠貴：3DSSチェックで自分の睡眠を知ろう-リズムとぐっすり、たっぷり-．睡眠健康推進機構・秋の「すいみんの日」市民公開講座2018，福岡，2018.9.8.

D. 学会活動

- (1) 学会主催
- (2) 学会役員
- (3) 座長
- (4) 学会誌編集委員等

E. 研修

- 1) 羽澄 恵：不眠の問題に対する認知行動療法のマニュアル③（筋弛緩、認知的介入）．国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター主催 平成30年度 睡眠の問題に対する認知行動療法の研修（ベーシック），東京，2018.11.9-10.
- 2) 堀口寿広：第2回多職種のための投稿論文書き方セミナー 司会．第65回日本小児保健協会学術集会，鳥取，2018.6.14-16.

F. その他

3. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成 10 年 5 月）により，機能強化が要請され，平成 21 年度より研究室の改組及び 1 研究室の新設がなされ，下記のように 3 研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は，次のとおりである。

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：舩田正彦，診断治療開発研究室長：近藤あゆみ，流動研究員：猪浦智史（4 月より），客員研究員：淺沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野），尾崎 茂（東京都保健医療公社豊島病院），宮永 耕（東海大学健康科学部），和田 清（埼玉県立精神医療センター），成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学医学医療系），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部），境 泉洋（徳島大学大学院），河野 亨（福岡市精神保健福祉センター），山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター），福永龍繁（東京都監察医務院），池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部），平田豊明（千葉県精神科医療センター），高野 歩（横浜市立大学医学部看護学科，4 月より），本田洋子（福岡市精神保健福祉センター，4 月より），大嶋栄子（NPO 法人リカバリー，4 月より），池田和隆（東京医学総合研究所，4 月より），三好美浩（岐阜大学医学部看護学科，8 月より），高岸百合子（駿河台大学心理学部，1 月より）科研費研究員：米澤雅子，富山健一，熊倉陽介，菊池美名子，古田島浩子，加藤 隆，瓜生美智子，外来研究員：引土絵未（学術振興会特別研究員），併任研究員：今村扶美，川地 拓，山田美紗子（以上，病院臨床心理室），船田大輔，宇佐美貴士，村上真紀（以上，病院第二精神科），研究生：青尾直也，今井航平，加藤重城，橋本美保，山口留妻，花岡晋平（4 月より），福森崇之（4 月より），大澤美佳（4 月より），高木のり子（5 月より）

II. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

H30 度調査では，対象施設 1566 施設のうち，1264 施設（80.7%）の協力を得て，246 施設（15.7%）の施設から総計 2767 例の薬物関連精神疾患症例が報告された。このうち患者自身から同意が得られ，重要な情報に欠損のない 2609 症例を分析対象とした。

その結果，「主たる薬物」として最も多かったのは，覚せい剤 1462 例（56.0%）であった。次いで，睡眠薬・抗不安薬 446 例（17.1%），揮発性溶剤 157 例（6.0%），市販薬 155 例（5.9%），多剤 133 例（5.1%），大麻 108 例（4.1%），危険ドラッグ 73 例（2.8%）が続いた。また，全対象症例中，1 年以内に主たる薬物の使用が認められた症例（「1 年以内使用あり」症例）は 1149 例（44.0%）であった。「1

年以内使用あり」症例における主たる薬物として最も多かったのは覚せい剤 452 例 (39.3%) であり、次いで、睡眠薬・抗不安薬 343 例 (29.9%)、市販薬 105 例 (9.1%)、多剤 68 例 (5.9%)、大麻 64 例 (5.6%)、揮発性溶剤 49 例 (4.3%)、その他 26 例 (2.3%)、危険ドラッグ 14 例 (1.2%) が続いた。

H30 年度調査では、危険ドラッグ関連精神疾患症例の減少が前回調査に引き続いて顕著であり、危険ドラッグ乱用問題が終息に向かっていることがうかがわれた。一方、最近の乱用が認められる薬物関連精神疾患症例のなかでは、市販薬と大麻の関連精神疾患症例の割合が増加傾向を呈しており、今後も慎重な注視が必要であると考えられた。

2) 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

平成 29 年 3 月より、保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら、保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する、「Voice Bridges Project : 「声」の架け橋プロジェクト」を開始した。その結果、平成 30 年 12 月末までに、11 の精神保健福祉センターから計 209 名の保護観察対象者が調査に参加し、最長 1 年半後までの追跡調査が行われた。初回調査時における対象者の平均年齢は 45.3 歳で、男性が 76.1%、就労している者が 47.4%であった。保護観察の種類の内訳は、仮釈放の者が 67.5%と最多であった。主たる使用薬物が覚せい剤であった者が 95.2%、逮捕時における DAST-20 の平均値は 11.2 と中程度であった。治療プログラムを受けている者が 76.6%いたが、その多くは保護観察所で実施されるプログラムであった。1 年後調査では、保護観察終了している者が 78.3%で、就労している者が 73.9%まで増加した一方で、生活保護などの社会保障制度の使用が増加した。治療プログラムを受けている者が約 4 割に減少し、中でも保護観察所で実施されるプログラムを受けている者が 13.0%まで減少した。一方で、精神保健福祉センターで実施するプログラムに参加する者が 8.7%に増加した。対象者の困りごと・悩みごとの内容は、初回調査・1 年後調査ともに、経済的問題や仕事に関するものが多かった。薬物再使用率は時間経過とともに増加する傾向にあったが、1 年後・1 年半後調査の回答者が少なく、引き続き調査を継続しデータを蓄積する必要があると考えられた。

3) 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査 (2018 年)

危険ドラッグを含む薬物乱用の青少年への広がり、およびその動向を把握することを目的に、全国の中学生 (計 240 校) を対象とした全国調査を実施した。本調査は、1996 年より隔年で実施され、今回で第 12 回目の調査となった。対象校 240 校のうち、183 校 (実施率 76.3%) から合計 71,351 名の有効回答を得た (想定生徒数の 61.9%)。2016 年から 2018 年にかけて飲酒・喫煙の生涯経験率はいずれも減少したが、有機溶剤および危険ドラッグは増加し、大麻および覚せい剤は横這いで推移していた。薬物の入手可能性は減少していたが、薬物乱用 (特に大麻) を肯定する考えが増加しており、今後の動向に注意が必要である。(平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (以下、厚労科学研究) : 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也, 猪浦智史, 邱 冬梅, 和田 清)

4) 新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立

近年、大麻の使用形態に変化がみられる。従来の乾燥大麻や大麻樹脂に加えて、大麻ワックスや大麻リキッドといった有害成分を濃縮・抽出した製品や、大麻を食品に混入した大麻クッキーなどの新規形態の押収事例が報告されている。その一方で、国内における大麻乱用に関する疫学情報は生涯経験率等に限定されており、新規形態の使用実態等については不明な点が多い。そこで、本研究では、音楽系の野外イベント参加者を対象に、大麻の新規形態を含む使用実態について調べることを目的とした。大麻の使用実態からは、乾燥大麻のみならず、大麻樹脂、大麻クッキーなどの加工品、大麻リキッド (電子タバコ)、大麻ワックスなど多岐にわたる新規形態の使用状況が明らかとなった。また、大麻の使用回数を「数えきれない」とする回答からは、薬物依存が疑われる反復使用者の存在が確認された。(厚労科学研究 : 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也, 船田正彦)

5) 全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態調査

覚せい剤事犯者の薬物依存症やその他の依存症の状況や、治療支援ニーズについて探索する。法務総合研究所が事業として行った覚せい剤事犯者調査のうち、個人情報を含まないデータを NCNP が研究成果有体物 (MTA: Material Transfer Agreement) として譲り受け、二次解析を行う。平成 30 年度は、

研究成果をまとめた冊子「覚せい剤事犯者の理解とサポート 2018」を作成した。冊子は、関係機関（保健、医療、福祉、刑事司法、家族会など）に配布し、薬物依存の背景を持つ覚せい剤事犯者の治療・処遇・サポートの向上に資する。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也，近藤あゆみ，伴恵理子，松本俊彦）

6) わが国の青少年における薬物乱用・依存に関する実態調査およびデータ・アーカイブに関する研究

わが国の青少年における薬物乱用状況を把握するモニタリング調査として、国立精神・神経医療研究センターが 1996 年より継続実施している「飲酒・喫煙・薬物乱用に関する全国意識・実態調査」が知られる。しかし、高校生を対象とした調査は過去に散発的に実施されたのみであり、2009 年以降、全国規模の調査は実施されていない。そこで、本事業では、全国の高校生を対象として薬物乱用・依存に関する意識・実態調査を行う。また、国立精神・神経医療研究センターが過去に実施してきた全国規模の調査データをアーカイブ化することで、薬物乱用防止・薬物依存対策に必要なデータがすぐに取り出せる体制を整えることを目的とした。全国の高校生 49,428 名（回収率 40.7%）より、薬物乱用に関する実態を把握することができた。国立精神・神経医療研究センターが過去に実施した調査データのうち、「薬物使用に関する全国住民調査」、「飲酒・喫煙・薬物乱用に関する全国意識・実態調査」のデータをアーカイブ化した。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也，猪浦智史，和田 清）

B. 臨床研究

1) 薬物使用障害患者における併存障害と依存症罹患脆弱性に関する研究

「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（以下、病院調査）」のデータを再分析し、併存精神障害を持つ薬物関連障害患者の臨床的特徴、主乱用薬物ごとの併存率の相違、薬物使用開始と精神障害発症との経時的関係、乱用薬物選択と併存精神障害との関係を検討した。その結果、結論：精神障害を併存する薬物関連障害患者は、従来の薬物関連障害患者とは異なる生活背景を持つ者が多く、非精神病性精神障害の併存する症例の大半は、薬物使用開始以前に精神障害に罹患していた。このことは、精神障害の存在が薬物使用障害に対する罹患脆弱性となっている可能性を示唆する。そうした患者では、睡眠薬・抗不安薬や市販薬などの、法規制されていない、入手が比較的容易な薬物を選択する傾向が見られた。

2) 覚せい剤依存症患者におけるイフェンプロジルの効果検討と fMRI を基点としたバイオマーカーの開発：二重盲検無作為化比較試験

本研究は、覚せい剤依存症患者にイフェンプロジルを投与し、二重盲検無作為化比較試験を用いて、その効果を見出せる主要なエンドポイントを探索的に解析するとともに、fMRI を用いた依存症のバイオマーカー開発を目的とするものである。具体的には、プラセボ群に対し通常用量群と高用量群の 3 群設定としたのは、保険適応外量である高用量（120 mg/日）の安全性の検討及び用量依存的に、依存症に対する効果があるかを同時並列的に検討することができると考えたからである。さらに、fMRI によるバイオマーカーは、具体的には fMRI 安静時における脳活動の時間変動から人工知能技術により依存症に特徴的な脳領域間の機能的結合（脳領域間の同期状態）を抽出・精査し、機能的結合の値より、投薬前の重症期から投薬後寛解期の「依存症度」を測定し、依存症の指標（バイオマーカー）を作成する。

平成 30 年度末までには、研究対象者のリクルートは完了した。

3) 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究

薬物依存症の地域支援の重要性が指摘される中で、当事者が主体となった民間支援団体ダルクに関する有効性については依然として不明な点が多い。そこで、本研究では全国 46 団体 695 名の利用者を対象としたコホートを立ち上げ、利用者の予後を追跡した。平成 30 年度の研究成果は次の通りである。ベースライン調査から 2 年が経過し、半数近くの利用者が施設を退所していたが、対象者の 75% と連絡がとれる状態であり、脱落者の少ないコホートが維持できていた。追跡期間中の断薬率（薬物の再使用が一度もない割合）は、6 ヶ月後 88.3%、1 年後 76.5%、1 年 6 ヶ月後 69.6%、2 年後 62.9% であり、先行研究と比べ、高水準の断薬率であることが明らかとなった。断薬を維持する保護因子として、利用者

同士の関係性が良好であること、回復のモデルとなる仲間がいること、自助グループに定期参加していることなどの要因が特定された。時間の経過とともに、未就労率および生活保護受給率はいずれも減少する一方、就労率は増加していた（特に、一般就労やダルク職員としての就労）。研究成果を小冊子にまとめて、刑務所や保護観察所などの司法機関、依存症支援に携わる保健医療機関等に配布するとともに、ホームページで公開した（厚労科学研究：障害者政策総合研究事業。嶋根卓也，近藤あゆみ，米澤雅子，松本俊彦）

4) HIV 陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究

本研究では、ART 療法 (antiretroviral therapy, 以下、ART と表記) の服薬アドヒアランスという観点から HIV 陽性者における薬物使用が患者に与えるインパクトを評価することで、薬物使用障害を併存する HIV 陽性者の罹患脆弱性を探り、その支援方法について検討することを目的とした。危険ドラッグおよび覚せい剤の使用は、ART の服薬アドヒアランスを低下させていた。そのリスクの大きさは約 3~8 倍であった。亜硝酸エステル使用および AUDIT スコアは、服薬アドヒアランスを低下させる要因となっていなかった。最終的には、DAST-20 スコアだけが ART の服薬アドヒアランスを低下させる要因となっていた。（平成 30 年度精神・神経疾患研究開発費。嶋根卓也）

5) 連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究

多機関薬物依存症者本人とその家族の支援を行う関係諸機関の連携に関する好事例を収集することを目的に、センター、回復施設、保護観察所、医療機関など 39 の関係機関を対象に、連携良好と感じる機関との具体的な連携状況に関するインタビュー調査を行った。その結果、機関から機関へケースをつなぐものと、ケースを協働して支援するものの 2 種類の良好な連携について、具体的内容や事例に関する情報を収集することができた。また、ケースに関する協議・協働が活発に行われ、地域ネットワークの中で支えることができる良好な連携体制をつくるための具体的な方法やプロセスが示された。一部地域で形ができてきた連携体制構築を今後ますます推し進め、多くの地域に広げていくことが重要であることから、連携事例や連携体制構築方法をわかりやすくまとめた冊子を研究成果物として作成した。（平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者対策総合研究事業（精神障害分野）。近藤あゆみ）

6) 薬物使用障害患者の外来治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究

精神科病院の薬物依存症専門外来を受診した薬物使用障害患者の治療転帰に影響を与える要因を明らかにし、治療反応性別の臨床類型とその対応ガイドラインの開発を行うことを目的とする研究を実施した。平成 29 年 1 月から 10 月までに国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症外来を初診した全患者 67 名のうち、当院での治療継続、研究同意取得などの基準を満たした 38 名を対象とし、初診時および初診後 1 年時に得た自記式問診票の情報を診療録から転記し分析した。「併存障害あり群」は、「併存障害なし群」と比較して主たる薬物の使用期間が有意に短かったことから（対応のない t 検定、 $p=0.043$ ）、より短い薬物使用年数で重症化が進み、早い段階で受診に至る可能性が示された。また、1 年経過後の薬物問題の改善度にも違いがみられた。初診時と 1 年後の ASI-J 薬物使用領域コンポジットスコアを比較した結果、「併存障害なし群」には有意な改善が認められたものの（対応のある t 検定、 $p=0.042$ ）、「併存障害あり群」では有意差が認められなかった（対応のある t 検定、 $p=0.157$ ）。BDI-II 得点においても同様の結果が得られ、「併存障害なし群」には改善傾向が認められたものの（Wilcoxon 符号順位検定、 $p=0.131$ ）、「併存障害あり群」では変化がなかった（Wilcoxon 符号順位検定、 $p=0.929$ ）。

「併存障害あり群」は「併存障害なし群」と比較して依存症治療の効果が得難いといえる。「併存障害あり群」は依存症治療単独では併存障害に効果が乏しいため、依存症治療と並行して併存する障害の治療や症状のコントロール、生活の安定化をはかるサポートネットワークの構築など、適切な医療的支援につなげていく必要があるものと思われる。（平成 30 年度精神・神経疾患研究開発費。近藤あゆみ）

7) 精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究

平成 29 年 9 月から平成 30 年 7 月までに対象機関（精神保健福祉センター及び医療機関）を訪れた 74 名に対して、登録時および登録後 6 ヶ月時に自記式アンケート調査への回答を依頼した。両時点の情報が得られた 60 名について家族心理教育プログラム参加状況別に 2 時点の前後比較を行うことで家族

支援及び家族心理教育プログラムの効果評価を行った。家族の健康状態については、参加率（高）群にのみ「活力」に有意な改善が認められた（Paired t-test, $p=0.006$ ）。依存症者本人の将来や現状に関する希望についても、参加率（高）群にのみ有意な増大が認められた（Paired t-test, $p=0.004$ ）。また、対象者と依存症者本人との関係性や依存症者本人に対する感じ方に関する 6 項目について、登録時と登録後 6 ヶ月時において「頻繁にあり」と回答した者の割合がどのように変化するか検討した結果、参加率（低）群ではいずれの項目についても差が認められなかったが、参加率（高）群では「本人と口論になった」など 3 項目について有意差が認められ、「頻繁になし」から「頻繁にあり」に変化した者の割合に比べて、「頻繁にあり」から「頻繁になし」に変化した者の割合が有意に高かった。さいごに、依存症者本人の治療支援状況については群間に差は認められなかったものの、登録時少なくとも 6 ヶ月以上治療支援を受けていない状況にあった 19 名のうち 7 名（36.8%）が 6 ヶ月後にはなんらかの治療支援を受けていた。以上、精神保健福祉センターや医療機関における家族支援及び家族心理教育プログラムの効果について、家族の健康状態、家族と依存症者本人との関係性や依存症者本人に対する感じ方、依存症者本人の治療支援状況の 3 つの視点から評価した結果、薬物・アルコール問題の影響を受けて過酷な生活を強いられる家族を継続的に支援していくことが様々な観点から重要であることが示された。（平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）。近藤あゆみ）

C. 基礎研究

1) フェンタニル類縁化合物の中枢作用解析法に関する研究

新規精神活性物質であるフェンタニル類縁化合物 Cyclopropyl fentanyl (CF), Methoxyacetyl fentanyl (Meth F), ortho-Fluorofentanyl (OFF), parafluoro butyrfentanyl (PFB), paramethoxybutyrfentanyl (PMB) についてオピオイド受容体作用の解析並びに運動活性に対する影響を検討した。フェンタニル類縁化合物の投与により、用量依存的な運動促進作用が発現した。これらの効果は、オピオイド受容体拮抗薬であるナロキソン前処置によって有意に抑制された。5 種類のフェンタニル類縁化合物の運動促進作用は、オピオイド受容体を介して発現する作用であることが明らかになった。また、オピオイド μ 受容体発現細胞を利用して、5 種類のフェンタニル類縁化合物のオピオイド受容体作用強度を解析した。5 種類のフェンタニル類縁化合物の添加により、濃度依存的な蛍光発光が確認された。この作用は、オピオイド μ 受容体拮抗薬 (β -FNA) の前処置により完全に抑制された。5 種類のフェンタニル類縁化合物はオピオイド μ 受容体を介して薬理作用が発現すると考えられる。薬物による運動活性と μ 受容体作用の強度についてその相関性を解析したところ、フェンタニル類縁化合物による運動促進作用の発現強度と μ 受容体作用の強度には正の相関性が認められた。フェンタニル類縁化合物はオピオイド μ 受容体に作用することから、オピオイド μ 細胞を利用した蛍光強度解析データは、中枢作用の推測に利用できる可能性が示唆された。また、フェンタニルの基本化学構造を元に、包括指定対象範囲を定義できる可能性が示唆された。（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。船田正彦）

2) 危険ドラッグの有害作用評価に関する研究

合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物をターゲットとした検出用細胞の構築を試みた。樹立安定株である CHO 細胞および HEK-293 細胞を利用して、カンナビノイド CB1 受容体、オピオイド μ 受容体発現細胞を作製した。それぞれの機能タンパク質発現細胞へ、細胞内モニタリングセンサーとしてカルシウムセンサータンパク質を導入し、受容体-カルシウム反応細胞を樹立した。従来型の大型蛍光検出器（蛍光プレートリーダー）を使用し、合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物であるフェンタニル類縁化合物添加によるカルシウム動態を解析したところ、濃度依存的な蛍光増加が確認された。これらの受容体-カルシウム反応細胞は、合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物の検出に利用できることを確認した。本細胞は蛍光発光を利用した危険ドラッグ検出に利用可能である。（日本医療研究開発機構（AMED）：医薬品等規制調和・評価研究事業。船田正彦）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に関係する各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている（細目は研究業績参照）。

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(IV. 研究業績 C. 講演 参照)
- ・報道：(IV. 研究業績 F. その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会
 - 第 32 回薬物依存臨床医師研修会（主催）、第 20 回薬物依存臨床看護研修会（主催）、第 10 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会（主催）、平成 30 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業 全国拠点機関
- ・各種教育研修会等への講師派遣（IV. 研究業績 C. 講演 参照）
 - ・大学
 - 早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（船田正彦）、東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也）、津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也）、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師（嶋根卓也）
 - ・その他
 - Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer（松本俊彦）。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・政府委員会
 - 厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦）、厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦）、文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦）、厚生労働省精神・障害保健課「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦）、文部科学省初等中等教育局健康教育食育課「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員（嶋根卓也）、文部科学省初等中等教育局健康教育食育課「学校保健関連委託事業技術審査会」委員、厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副部会長（嶋根卓也）
- ・その他公的委員会
 - 東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦）、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦）、東京都危険ドラッグ専門調査委員会専門委員（船田正彦）、福岡県特定危険薬物指定専門委員（船田正彦）、埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会（嶋根卓也）、精神保健福祉士国家試験委員（近藤あゆみ）
- ・研究成果の行政貢献
 - ・エチゾラム等の向精神薬指定のための基礎資料となるデータを提供し、向精神薬乱用・依存防止のための施策に貢献した（厚労省医薬食品局）。
 - ・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して、薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」、ならびに、「地域支援ガイドライン」（案）の策定とそのモデル事業の推進に貢献した（法務省保護局）。

- ・少年院収容者に対する薬物離脱指導プログラム導入に対して、「矯正教育プログラム(薬物非行)」策定とその推進に貢献した (法務省矯正局)。

(5) センター内における臨床的活動

毎週木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに、デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している (松本俊彦, 近藤あゆみ, 嶋根卓也)。また, 毎週火曜日に医療観察法病棟 (8 病棟, 9 病棟) にて物質使用障害治療プログラムの運営をサポートしている (松本俊彦)。

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hamamura T, Suganuma S, Takano A, Matsumoto T, Shimoyama H: The efficacy of a web-based screening and brief intervention for reducing alcohol consumption among Japanese problem drinkers: Protocol for a single-blind randomized controlled trial. JMIR Res. Protoc 7(5): e10650. 2018. doi:10.2196/10650.
- 2) Tanibuchi Y, Matsumoto T, Funada D, Shimane T: The influence of tightening regulations on patients with new psychoactive substance-related disorders in Japan. Neuropsychopharmacol Rep 38: 189-196, 2018. doi: 10.1002/npr2.12035.
- 3) Kotajima H, Takano A, Ogai Y, Tsukamoto S, Murakami M, Funada D, Tanibuchi Y, Tachimori H, Maruo K, Sasaki T, Matsumoto T, Ikeda K: Study of effects of ifenprodil in patients with methamphetamine dependence: Protocol for an exploratory, randomized, double-blind, placebo-controlled trial. Neuropsychopharmacology Reports 39: 90-99, 2019. doi:10.1002/npr2.12050.
- 4) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤 隆, 山本 大, 山崎明義, 松本俊彦: 治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について. 日本アルコール薬物医学会雑誌 53(2): 83-94, 2018.
- 5) 花岡晋平, 平田豊明, 谷渕由布子, 宋 龍平, 合川勇三, 山崎信幸, 撰 尚之, 加賀谷有行, 津久江亮太郎, 門脇亜理紗, 今井航平, 佐々木浩二, 松本俊彦: わが国の精神科救急医療施設における危険ドラッグ関連障害患者の治療転帰に関する研究. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 53(5): 212-225, 2018.
- 6) 佐々木真人, 堀岡広稔, 村岡謙行, 長崎大武, 田村昌士, 西村直祐, 長田良和, 戸田 憲, 宮田祥一, 西森康夫, 嶋根卓也: 薬局薬剤師を対象としたゲートキーパー研修会が知識・自己効力感・臨床行動に与える影響. 日本薬剤師会雑誌 70(7): 849-857, 2018.

(2) 総説

- 1) 松本俊彦: 薬物依存症と対人関係. 精神科治療学 33(4): 435-440, 2018.
- 2) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医と薬剤師にできること. 日本精神薬学会誌 1(2): 12-15, 2018.
- 3) 松本俊彦: 最近の危険ドラッグ関連障害患者における臨床的特徴の変化: 全国の精神科医療施設における薬物関連障害の実態調査: 2012 年と 2014 年の比較. 精神神経学雑誌 120(5): 361-368, 2018.
- 4) 松本俊彦: ワークブックを使った認知行動療法的アプローチはどのようなものか教えてください. モダンフィジシャン 38(8): 844-846, 2018.
- 5) 松本俊彦: 物質使用障害とトラウマ. 臨床精神医学 47(7): 799-804, 2018.
- 6) 谷渕由布子, 大宮宗一郎, 松本陽一郎, 石田恵美, 松本俊彦: 薬物事犯の精神科的治療. 精神科治

- 療学 33(8) : 959-964, 2018.
- 7) 松本俊彦 : 睡眠薬は是か非か—Pros and Cons Cons の立場から—睡眠薬は精神科薬物療法における「悪貨」である. 精神医学 60(9) : 1019-1023, 2018.
 - 8) 松本俊彦 : 人はなぜ依存症になるのか—子どもの薬物乱用—. 児童青年精神医学とその近接領域 59(3) : 278-282, 2018.
 - 9) 松本俊彦 : 「やりたい」「やってしまった」「やめられない」—薬物依存症の心理—. こころの科学 202 特別企画 : 40-46, 2018.
 - 10) 松本俊彦 : 第 25 回日本産業精神保健学会 : 教育講演 X 自分を傷つけずにはいられない—自傷行為の理解と援助—. 産業精神保健 26(4) : 360-363, 2018.
 - 11) 高野 歩, 熊倉陽介, 松本俊彦 : シンポジウム 8 : 刑の一部執行猶予制度以降の薬物依存症地域支援の課題—保護観察対象者コホート調査と地域支援体制構築 Voice Bridge Project. 日本アルコール関連問題学会雑誌 20(1) : 39-41, 2018.
 - 12) 松本俊彦 : 特集 思春期にまつわる問題行動とその対応—自傷行為の理解と援助—. 産科と婦人科 85(12) : 1496-1501, 2018.
 - 13) 松本俊彦 : 特集 I 依存と嗜癖-その現状と課題- 人はなぜ依存症になるのか. 精神科 33(6) : 463-468, 2018.
 - 14) 松本俊彦 : なぜオピオイド鎮痛薬依存症に陥るのか—臨床の立場から—. ペインクリニック 39(12) : 1570-1578, 2018.
 - 15) 高野 歩, 郡 健太, 熊倉陽介, 佐瀬満雄, 松本俊彦 : ハームリダクションの理念と実践. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 53(5) : 151-170, 2018.
 - 16) 松本俊彦 : 自分を傷つけずにはいられない子どもたち. 大阪保険医雑誌 46(627) : 19-23, 2018.
 - 17) 松本俊彦 : 刑務所を出所した薬物依存症者の地域支援に必要な物—「Voice Bridges Projects」(「声の架け橋」プロジェクト). 刑政 130(2) : 46-56, 2019.
 - 18) 松本俊彦 : 第 31 回神奈川母性衛生学会特別講演 自分を傷つけずにはいられない—自傷行為の理解と援助—. 神奈川母性衛生学会誌 22(1) : 1-5, 2019.
 - 19) 松本俊彦 : 人はなぜ依存症になるのか—依存症と環境・社会—. 日本社会精神医学会雑誌 28(1) : 44-49, 2019.
 - 20) 松本俊彦 : アディクション問題の理解と援助—人はなぜ依存症になるのか—. 季刊 東京精神科病院協会誌 32 : 23-25, 2019.
 - 21) 松本俊彦 : 精神科医療における過量服薬の現状と課題. 臨床精神薬理 22(3) : 231-241, 2019.
 - 22) 松本俊彦 : 依存症のメカニズム : 人はなぜ薬物依存症になるのか?. 臨床麻酔 43 臨時増刊号 : 339-346, 2019.
 - 23) 松本俊彦, 近藤あゆみ, 引土絵未, 高野 歩, 熊倉陽介 : 薬物使用障害に対する心理社会的支援—薬物依存研究部の挑戦. 精神保健研究 65 : 17-26, 2019.
 - 24) 松本俊彦 : 危険な人物と共生するために必要とされるもの. 日本精神神経科診療所協会 Journal 44 別冊, 22-32, 2019.
 - 25) 嶋根卓也 : 【IV. 知っておきたい!生活サポート&性教育】40 薬物乱用. 小児科 50(5) 4月臨時増刊号「思春期を診る!」: 774-780, 2018.
 - 26) 嶋根卓也 : 薬物乱用防止における薬剤師の役割. ファルマシア 54(6) : 541-543, 2018.
 - 27) 嶋根卓也 : 「NO」と言えない子どもたち—酒・タバコ・クスリと援助希求. こころの科学 202 : 47-51, 2018.11.
 - 28) 嶋根卓也 : 薬物使用の最新動向 : 大麻からエナジードリンクまで. KNOW NEWS LETTER 99 : 2-5, 2018.
 - 29) 嶋根卓也 : 過量服薬に対する薬剤師の役割. 臨床精神薬理 22(3), 293-299, 2019.

(3) 著書

- 1) 松本俊彦：薬物依存症。ちくま書房，東京，pp1-352，2018.
- 2) 岩室紳也，松本俊彦，安藤晴敏：つながりから考える薬物依存症—安心して失敗を語れる絆・居場所づくり—. 大修館書店，東京，pp1-240，2018.
- 3) 松本俊彦：Ⅱ章 各論 14 違法薬物摂取が疑われる患者の診療で留意すべき法的問題。救急現場における精神科的問題の初期対応 PEEC ガイドブック 改訂第2版。ヘルス出版，東京，pp139-145，2018.
- 4) 松本俊彦：7 物質依存症。精神科薬物療法マニュアル。南山堂，東京，pp93-105，2018.
- 5) 松本俊彦：第1章 総論 V 法的事項と支援者や家族に対する対応 1 法的事項。新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン。新興医学出版社，東京，pp32-33，2018.
- 6) 松本俊彦：第3章 軸評価に基づいた問題別対応編 I 1 軸：アルコール・薬物使用障害の重症度 2 薬物使用障害 重症度評価項目（松本俊彦作成）高得点者への対応。新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン。新興医学出版社，東京，pp84-85，2018.
- 7) 松本俊彦：part3 薬物依存 心に残る症例「やめ方を教えろ」と訴えた覚せい剤依存患者。樋口進 編：現代社会の新しい依存症が分かる本。日本医事新報社，東京，pp78，2018.
- 8) 松本俊彦：part13 自傷癖。樋口進 編：現代社会の新しい依存症が分かる本。日本医事新報社，東京，pp234-243，2018.
- 9) 松本俊彦：自殺対策における医療、保健、福祉的支援の課題 親子心中を防ぐ可能性のある技術と胆力について。川崎二三彦 編著：虐待「親子心中」事例から考える子ども虐待死。福村出版，東京，pp69-81，2018.
- 10) 斎藤環，松本俊彦，井原裕 監修：こころの科学 メンタル系サバイバルシリーズ ケアとしての就労支援。日本評論社，東京，pp1-128，2018.
- 11) 松本俊彦：こころの科学 202 特別企画 「助けて」が言えない—援助と援助希求—. 日本評論社，東京，pp15，2018.
- 12) 松本俊彦：9 アルコール関連問題と自殺。樋口進，廣 尚典 編：「はたらく」を支える！職場×依存症・アディクション。南山堂，東京，pp84-87，2019.
- 13) 松本俊彦：10 自殺のリスクアセスメントとマネジメント。樋口進，廣 尚典 編：「はたらく」を支える！職場×依存症・アディクション。南山堂，東京，pp88-95，2019.
- 14) 松本俊彦：第8章 特定の状況に対する精神保健福祉 C 物質依存と精神保健福祉。系統看護学講座別巻 精神保健福祉。医学書院，東京，pp265-279，2019.
- 15) 松本俊彦：8 薬物依存症。今日の処方 改訂第6版。南江堂，東京，pp475-477，2019.
- 16) 嶋根卓也：薬物乱用防止の最前線：薬剤師に知ってほしいこと。Excellent Pharmacy5月1日号。メディファーム株式会社，東京，pp11-13，2018.
- 17) 嶋根卓也，松本俊彦：2.評価尺度の解説（2）薬物使用障害の評価尺度。新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン，第1章 総論Ⅱ診断総論。新興医学出版社，東京，pp11-13，2018.
- 18) 嶋根卓也，松本俊彦：2.薬物乱用・依存の疫学。新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン，第1章 総論Ⅳ疫学。新興医学出版社，東京，pp28-31，2018.

(4) 研究報告書

- 1) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）刑の一部執行猶予下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究（研究代表者松本俊彦）平成30年度総括・分担研究報告書。pp15-57，2019.
- 2) 松本俊彦：薬物使用障害患者における併存障害と依存症罹患脆弱性に関する研究。平成28年度～平成30年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「薬物使用障害の病因・

- 病態・治療反応性に関する多面的研究（主任研究者 松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp7-23, 2019.
- 3) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 船田大輔, 村上真紀, 谷渕由布子: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者 嶋根卓也）総括・分担研究報告書. pp75-141, 2019.
 - 4) 船田正彦: 危険ドラッグの検出技術開発に関する研究. 平成 30 年度精神・神経疾患研究開発費「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究（主任研究者：船田正彦）」平成 30 年度実績報告書. 2019.
 - 5) 船田正彦: 危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp1-15, 2019.
 - 6) 船田正彦: フェンタニル類縁化合物の中樞作用解析法に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 30 年度分担研究報告書. pp16-29, 2019.
 - 7) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp1-6, 2019.
 - 8) 嶋根卓也: 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2018 年). 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp19-73, 2019.
 - 9) 嶋根卓也: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp117-141, 2019.
 - 10) 嶋根卓也: 新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 30 年度研究報告書. pp64-79, 2019.
 - 11) 嶋根卓也: HIV 陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」平成 28～30 年度総括研究報告書・分担研究報告書. pp37-48, 2019.
 - 12) 近藤あゆみ: 精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp253-264, 2019.
 - 13) 近藤あゆみ: 多機関連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp95-115, 2019.
 - 14) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤 隆, 山本 大, 山崎明義: 民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究, 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラト

リーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究(研究代表者:嶋根卓也)」平成 30 年度総括・分担研究報告書. pp253-264, 2019.

- 15) 引土絵未: 関東 A 地域における支援 プログラムを基盤とした地域支援ネットワーク, 厚生労働省平成 30 年度依存症民間団体支援事業「アルコール健康障害・薬物依存症・いわゆるギャンブル等依存からの回復のための地域ネットワーク構築に向けたソーシャルワーク人材養成及び普及啓発事業」報告書. pp10-13, 54-58, 2019.

(5) 翻訳

- 1) 松本俊彦 分担翻訳: 10. パーソナリティの問題. シドニー・ブロック 著, 竹島 正 監訳: こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック. 中央法規, 東京, 2018.
- 2) 松本俊彦 分担翻訳: 12. アルコールと薬物の乱用. シドニー・ブロック 著, 竹島 正 監訳: こころの苦しみへの理解 トータルメンタルヘルスガイドブック. 中央法規, 東京, 2018.
- 3) 松本俊彦 監訳, 松本俊彦, 渋谷繭子 訳: バレント・W・ウォルシュ 著: 自傷行為治療ガイド 第 2 版. 金剛出版, 東京, 2018.
- 4) 松本俊彦 監修, 境泉 洋 監訳, 風間芳之, 風間三咲 訳: H・G ローゼン, R・J・メイヤーズ, J・E・スミス 著: CRA 薬物・アルコール依存へのコミュニティ強化アプローチ. 金剛出版, 東京, 2018.
- 5) 今村扶美, 松本俊彦 監訳, 浅田仁子 訳: お母さんのためのアルコール依存症回復ガイドブック. 金剛出版, 東京, 2018.
- 6) スチュアート・マクミラン 漫画, 松本俊彦, 小原圭司 監訳・解説文, 井口萌娜 訳: 本当の依存症の話をして ラットパークと薬物戦争. 星和書店, 東京, 2019.

(6) その他

- 1) 松本俊彦: 依存症、かえられるものかえられないもの 1 「再開」-なぜ私はアディクション臨床にハマったのか. みすず 60(4): 2-12, 2018.
- 2) 松本俊彦: 依存症、かえられるものかえられないもの 2 「浮き輪を投げる人」. みすず 60 (7): 12-23, 2018.
- 3) 松本俊彦: 社会精神医学トピックス 第 7 回コメディカルスタッフのための社会精神医学セミナー報告記. 日本社会精神医学会雑誌 27(3): 258, 2018.
- 4) 松本俊彦: 大人の発達障害ってそういうことだったのか その後. 週刊医学界新聞 3292: 5, 2018.
- 5) 松本俊彦: 「助けて」が言えないー援助と援助希求ー. こころの科学 202 特別企画: 15, 2018.
- 6) 松本俊彦: 依存症、かえられるものかえられないもの 3 生きのびるためのセガ・ラリー・チャンピオンシップ. みすず 60(10): 34-43, 2018.
- 7) 松本俊彦: Person 診療・研究の現場より. Locomotive Pain Frontier 7(2): 42-45, 2018.
- 8) 松本俊彦: 特別寄稿 京都ダルク施設移転への住民反対運動から考えたこと. 季刊 Be! 133: 46-50, 2018.
- 9) 松本俊彦: いつも眠かったー夜型体質の研修医. 週刊医学界新聞 3305: 3, 2019.
- 10) 嶋根卓也: 「ダメ、ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止ー薬剤師の役割ー. 県薬しまね第 109 号, 2019.
- 11) 近藤あゆみ: 依存症者をもつ家族に対する行動療法的アプローチ〜Community Reinforcement and Family Training (CRAFT)〜. こころの健康便り 124 号, 2019.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) 熊倉陽介, 高野 歩, 松本俊彦: 【シンポジウム 33】保護観察の対象となった薬物依存症をもつ人を

- 地域で支える Voice Bridges Project. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 2) 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 近藤恒夫, 松本俊彦:【シンポジウム 33】民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究(第二報). 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
 - 3) 松本俊彦:【教育講演】自分を傷つけずにはいられないー自傷行為の理解と援助ー. 第 25 回日本産業精神保健学会, 神奈川, 2018.7.1.
 - 4) 松本俊彦:【特別講演】刑の一部執行猶予制度以降の薬物依存症地域支援～Voice Bridges Project～. 平成 30 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 京都, 2018.9.9.
 - 5) 松本俊彦:【特別講演】ランチョン・レクチャー I 人はなぜ依存症になるのか. 日本精神病理学会 第 41 回大会「往還する精神病理学ー原点回帰と越境とー」, 兵庫, 2018.10.5.
 - 6) 松本俊彦:【教育講演】アディクション問題の理解と援助. 第 32 回東京精神科病院協会学会, 東京, 2018.10.23.
 - 7) 松本俊彦:【特別講演】薬物依存症からの回復のために必要なこと. 第 65 回日本矯正医学会総会総会, 東京, 2018.10.25.
 - 8) 松本俊彦:【ワークショップ】自傷行為の理解と援助. 日本認知・行動療法学会第 44 回大会, 東京, 2018.10.28.
 - 9) 松本俊彦:【特別講演】アディクション問題の理解と援助. 第 35 回愛媛県精神神経学会, 愛媛, 2018.12.1.
 - 10) 松本俊彦:【特別講演 1】人はなぜ依存症になるのか～患者と同僚、そして自らを薬物依存症から守るために～. 第 25 回日本静脈麻酔学会, 栃木, 2018.12.8.
 - 11) 松本俊彦:【教育講演】薬物依存. 第 48 回日本慢性疼痛学会, 岐阜, 2019.2.16.
 - 12) 船田正彦:【教育講演】薬物乱用・薬物依存症について-最近の薬物問題を中心に-. 日本薬学会 第 139 年会, 千葉, 2019.3.23.
 - 13) 船田正彦:【シンポジウム】大麻成分の依存性と細胞毒性. シンポジウム「最近の大麻問題を考える」, 日本薬学会 第 139 年会, 千葉, 2019.3.23.
 - 14) 富山健一, 船田正彦:【シンポジウム】米国における大麻規制の現状: 医療用途と嗜好品. シンポジウム「最近の大麻問題を考える」, 日本薬学会 第 139 年会, 千葉, 2019.3.23.
 - 15) 船田正彦, 嶋根卓也, 富山健一, 三島健一:【シンポジウム】日本における大麻使用の現状: 薬物使用に関する全国住民調査 2017 より. 一般シンポジウム S58 薬物乱用のトレンド: ポスト危険ドラッグとして大麻問題を考える. 日本薬学会第 139 年会, 千葉, 2019.3.23.
 - 16) 大西真由美, 尾崎敬子, 嶋根卓也: 国際保健と疫学～フィールドとアカデミアをつなぐために. 第 33 回日本国際保健医療学会学術大会シンポジウム, 東京, 2018.12.1.
 - 17) 近藤あゆみ, 今村扶美, 引土絵未, 米澤雅子, 松本俊彦:【シンポジウム】アセスメントに基づく SMARPP のファシリテーション, 日本認知・行動療法学会 第 44 回大会, 東京, 2018. 10.28.
 - 18) 栗原玲子, 松原 悠, 佐藤麻理子, 河西あかね, 村井やす子, 松下哲也, 吉原恭子, 高橋郁絵, 近藤あゆみ:【シンポジウム】薬物依存症の家族支援における個別面接用マニュアルの開発と地域支援者への拡大, 第 40 回アルコール関連問題学会, 京都, 2018.9.9.
 - 19) 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 森田展彰:【シンポジウム】薬物依存症者をもつ家族を対象とした 心理教育プログラム, 第 40 回アルコール関連問題学会, 京都, 2018.9.9. (シンポジウム)
 - 20) 近藤あゆみ, 白川教人:【シンポジウム】精神保健福祉センターにおける薬物依存症相談支援の現状と地域連携に関する課題, 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
 - 21) Hikituchi E: The therapeutic community encounter group approach in a private rehabilitation facility for addiction in Japan.3rd Asian Consortium of National Mental Health Insutitutes Mental Health International Symposium, NCPN, 2019.3.19.

(2) 一般演題

- 1) Funada M, Takebayashi-Ohsawa M, Tomiyama K: Synthetic cannabinoid AM2201 induces epileptic seizures by enhancing glutamatergic transmission in the hippocampus. College on problems of drug dependence (CPDD) 80th Annual scientific meeting, San Diego, CA, USA, 2018.6.11-16.
- 2) Funada M, Tomiyama K: Establishment of screening method for selective NMDA receptor antagonist using HEK-293 cell line expressing NR1/NR2B. College on problems of drug dependence (CPDD) 80th Annual scientific meeting, San Diego, CA, USA, 2018.6.11-16.
- 3) Shimane T, Wada K, Qiu D: Prevalence of binge drinking and association with substance use : A cross-sectional nationwide general population survey in Japan. 19th World Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA2018), Kyoto, Japan, 2018.9.12.
- 4) Shimane T, Tani M, Yamaki M, Kobayashi M, Kondo A, Takahashi M: Methamphetamine users in Japanese prisons: Comorbid hazardous alcohol consumption. 19th World Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA2018), Kyoto, Japan, 2018.9.12.
- 5) Yamaki M, Takeshita Y, Takahashi M, Kondo A, Shimane T: Prevalence and correlates of adverse childhood experience(aces)among methamphetamine users in Japanese prison. 19th World Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA2018), Kyoto, Japan, 2018.9.11.
- 6) Shimane T: Drug use and addiction in Japan: Increase and decrease with new psychoactive substances. The 20th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting (ISAM BUSAN 2018), Busan, Republic of Korea, 2018.11.4.
- 7) 谷渕由布子, 松本俊彦: 危険ドラッグ関連障害患者の急増と終息とその後. 第114回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 8) 宇佐美貴士, 神前洋帆, 徳永弥生, 本田洋子, 熊倉陽介, 高野 歩, 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症をもつ人の地域視点 (Voice Bridges Project) の福岡市での実践報告. 第114回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.22.
- 9) 花岡晋平, 廣瀬祐紀, 松本俊彦, 平田豊明: 精神科救急病棟における尿中薬物検査の実施状況 (第一報). 第114回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.22.
- 10) 神前洋帆, 武藤由也, 徳永弥生, 本田洋子, 宇佐美貴士, 熊倉陽介, 高野 歩, 松本俊彦: 福岡市における保護観察対象の薬物依存者の地域支援 (Voice Bridges Project). 平成30年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 11) 田中紀子, 松本俊彦, 森田展彰, 木村智和: 病的ギャンブラーとギャンブル愛好家とを峻別するのは何か. 平成30年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 12) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤 隆, 山本 大, 山崎明義, 松本俊彦, 嶋根卓也: 回復支援施設におけるTCエンカウンター・グループの適用に関する研究. 平成30年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 13) 廣瀬祐紀, 花岡晋平, 井上 翔, 深見悟郎, 平田豊明, 松本俊彦: 精神科救急病棟における尿中薬物検査の実施状況 (第二報). 第26回日本精神科救急学会学術総会, 沖縄, 2018.10.11.
- 14) 伊藤哲朗, 首村菜月, 松久貴哉, 川島英頌, 神山恵理奈, 曾田 翠, 筑本貴郎, 永井宏幸, 船田正彦, 北市清幸: 危険ドラッグ蔓延防止に向けた岐阜県における取り組み(3): 合成カンナビノイド代謝物の同定と異性体の構造識別. 第53回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 神奈川, 2018.9.8-10.
- 15) 竹林美佳, 船田正彦: 合成カンナビノイド AM2201 による痙攣発現の解明: グルタミン酸神経系

の役割. 第 48 回日本神経精神薬理学会, 東京, 2018.11.14-16.

- 16) 嶋根卓也, 邱冬梅, 和田清: 一般住民におけるカフェイン製剤使用状況と薬物使用との関連: 薬物使用に関する全国住民調査より. 平成 30 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 17) 嶋根卓也, 邱冬梅, 和田清: 一般住民におけるエナジードリンク使用状況と薬物使用との関連: 薬物使用に関する全国住民調査より. 平成 30 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 18) 嶋根卓也, 邱冬梅, 和田清: 一般住民における大麻使用の増加: 薬物使用に関する全国住民調査より. 平成 30 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 京都, 2018.9.10.
- 19) 嶋根卓也, 今村顕史, 池田和子, 山本政弘, 辻麻理子, 長与由紀子, 松本俊彦: 薬物使用経験のある HIV 陽性者における亜硝酸エステル使用が服薬アドヒアランスに与える影響. 第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会, 大阪, 2018.12.4.

(3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」研究成果報告会, 東京, 2019.3.8.
- 2) 松本俊彦: 全国の子精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2019.3.8.
- 3) 嶋根卓也: 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2018 年). 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存者・家族に対する回復支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根卓也) 研究成果報告会, 東京, 2019.3.8.
- 4) 嶋根卓也: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」研究成果報告会, 東京, 2019.3.8.
- 5) 近藤あゆみ, 白川教人: 多機関連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究, 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」, 東京, 2019.3.8.
- 6) 近藤あゆみ, 白川教人, 石田恵美, 大上裕之, 加賀谷有行, 酒井ルミ, 佐藤嘉孝, 松岡明子, 室屋亜希子, 森 由貴: 精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究, 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究」, 東京, 2019.3.8.
- 7) 引土絵未: 民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究, 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究 (研究代表者: 嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2019.3.9.
- 8) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 松本俊彦, 嶋根卓也: 薬物依存症者を対象とする民間回復支援施設ダルクにおける治療共同体エンカウンター・グループの効果について, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 30 年度研究報告会, 東京, 2019.3.18.

(4) その他

C. 講演

- 1) 松本俊彦: アディクションとしての自傷. 千葉総合病院精神科救急会主催 第 23 回千葉総合病院精神科研究会, 千葉, 2018.4.14.
- 2) 松本俊彦: どうなる?!ギャンブル依存症対策 日本にカジノはできるのか?. 公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 ギャンブル依存症問題を考える会公益法人認定記念フォーラム, 東京, 2018.4.18.
- 3) 松本俊彦: 医療・福祉職のための依存症、アディクション講座. 北里大学医学部精神科学主催 北里大学精神科学教室研究会, 神奈川, 2018.4.19.
- 4) 松本俊彦: 自殺リスクの評価と対応について. 特定非営利活動法人 相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会主催 講演会, 福島, 2018.5.9.
- 5) 松本俊彦: 人はなぜ薬物依存症になるのか〜薬物乱用防止教室の際に忘れないでほしいこと〜. 一般社団法人北海道薬剤師会主催 第 65 回北海道薬学大会北海道薬剤師会学薬部会, 北海道, 2018.5.13.
- 6) 松本俊彦: 刑事司法分野における社会復帰支援と医療の役割. 一般社団法人刑事司法福祉フォーラム・オアシス主催公開フォーラム, 東京, 2018.5.19.
- 7) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない〜自傷行為の理解と援助〜. 特定非営利活動法人東京多摩いのちの電話主催 公開講演会, 東京, 2018.5.20.
- 8) 松本俊彦: 市販薬乱用がなぜ問題なのか (総論). 一般社団法人日本社会精神医学会主催 第 7 回コメディカルスタッフのための社会精神医学セミナー, 東京, 2018.5.27.
- 9) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない子どもたち〜その行為の理解と援助〜. 神奈川県学校・警察連絡協議会 神奈川県警察本部生活安全課主催 神奈川県学校・警察連絡協議会総会, 神奈川, 2018.5.29.
- 10) 松本俊彦: 自傷行為の理解と支援. 神奈川県教育委員会教育局主催 平成 30 年度県立学校教育相談コーディネーター会議, 神奈川, 2018.5.30.
- 11) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 うつ病と併存疾患研究会, 愛知, 2018.5.30.
- 12) 松本俊彦: もしも「死にたい」と言われたら〜自傷・自殺リスクの理解と援助〜. とちぎ思春期研究会主催 平成 30 年度とちぎ思春期研究会総会記念講演会, 栃木, 2018.6.2.
- 13) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存のリスク その後の状況. MSD 株式会社主催 鹿行地区リスクマネジメントセミナー, 茨城, 2018.6.13.
- 14) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか〜回復のために必要な支援〜. 一般社団法人グレイス・ロード主催 グレイス・ロード 3 周年感謝フォーラム, 山梨, 2018.6.16.
- 15) 松本俊彦: 人はなぜ薬物依存症になるのか. 特定非営利活動法人京都 DARC 主催 京都 DARC 出張フォーラム in 宇治, 京都, 2018.6.30.
- 16) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医にできること. MSD 株式会社主催 第 7 回自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会, 京都, 2018.7.7.
- 17) 松本俊彦: 薬物の危険性〜仲間と共に取り組もう〜. 昭島市立昭和中学校主催 薬物乱用防止教室講演会, 東京, 2018.7.10.
- 18) 松本俊彦: 日本での医療・司法の対応関係と今日的取り組み〜SMARPP の導入〜. 国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部主催 薬物依存症について相互に学ぶ日台シンポジウム, 東京, 2018.7.17.
- 19) 松本俊彦: 薬物問題を抱える少年の理解と援助. 警察大学校主催 警察大学校専科第 2239 期 (少年補導幹部), 東京, 2018.7.24.
- 20) 松本俊彦: 依存症治療について. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回国立精神・医療研究センター精神医学サマーセミナー, 東京, 2018.7.28.

- 21) 松本俊彦：学校における薬物乱用防止教育について．愛知県教育委員会主催 薬物乱用防止教室推進のための講習会，愛知，2018.7.31.
- 22) 松本俊彦：「ダメ、絶対」だけではない依存症予防教室モデル授業 in 広島．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 平成 30 年度「依存症予防教室推進事業」（文部科学省委託事業）講演会，広島，2018.8.1.
- 23) 松本俊彦：第 1 部 基調講演、体験談発表、トークディスカッション「パーソナリティ障害と共に生きる～自分を傷つけずにはいられない」 第 2 部 支援者向けワークショップ「私たちはどう支援するのか」．NPO 法人のびの会主催 第 10 回パーソナリティ障害講演会，神奈川，2018.8.5.
- 24) 松本俊彦：薬物乱用防止教育で子どもたちに伝えたいこと．福井県教育庁主催 平成 30 年度福井県薬物乱用防止教室講習会，福井，2018.8.7.
- 25) 松本俊彦：「ダメ、絶対」だけではない依存症予防教室モデル授業 in 札幌．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 平成 30 年度「依存症予防教室推進事業」（文部科学省委託事業）講演会，北海道，2018.8.8.
- 26) 松本俊彦：薬物依存症からの回復に必要なこと．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 NCNP 市民公開講座・8 月「薬物依存症って何？」，東京，2018.8.18.
- 27) 松本俊彦：「ダメ、絶対」だけではない依存症予防教室モデル授業 in 仙台．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 平成 30 年度「依存症予防教室推進事業」（文部科学省委託事業）講演会，宮城，2018.8.21.
- 28) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもたちーその行為の理解と援助ー．神奈川県学校・警察連絡協議会 神奈川県警察本部生活安全課主催 神奈川県学校・警察連絡協議会総会，神奈川，2018.5.29.たちー自傷行為の対応と理解ー．北海道釧路総合振興局主催 平成 30 年度釧路保健所自殺防止対策講習会，北海道，2018.8.24.
- 29) 松本俊彦：思春期の問題行動（リストカット・依存症を中心に）．公益社団法人日本産婦人科学会主催 女性のヘルスケアアドバイザー養成プログラム，東京，2018.8.26.
- 30) 松本俊彦：NHK ハートフォーラム「さみしい」「死にたい」と向き合う～今、求められる支援とは～．社会福祉法人 NHK 厚生文化事業団主催 自殺防止のためのフォーラム，東京，2018.9.1.
- 31) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち．NPO 法人チャイルドラインおかやま主催 第 18 期受け手養成講座&公開講座，岡山，2018.9.2.
- 32) 松本俊彦：子どもの SOS にこたえるには？～身近なおとなとしてできること～．特定非営利活動法人 CAP かながわ主催 講演会，神奈川，2018.9.21.
- 33) 松本俊彦：薬物依存の現状と処方に注意を要する医薬品．麻生区薬剤師会主催 麻生区医歯薬連携懇話会講演会，神奈川，2018.9.21.
- 34) 松本俊彦：「やめられない、とまらない」にどうかかわるか～自傷と薬物依存症の理解と対応．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 第 7 回国立病院機構レジデントフォーラム in 佐賀，佐賀，2018.9.22.
- 35) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．横浜市北部精神医療懇話会 吉富薬品株式会社 田辺三菱製薬株式会社共催 横浜市北部精神科医療懇話会，神奈川，2018.9.27.
- 36) 松本俊彦：アディクションからの回復に必要なもの．京都府健康福祉部薬務課主催 AIDS 文化フォーラム in 京都，京都，2018.9.30.
- 37) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 平成 30 年度再乱用防止対策講習会，大阪，2018.10.2.
- 38) 松本俊彦：薬物依存症からの回復のために必要なこと．特定非営利活動法人八王子ダルク主催 第 1 回八王子ダルクフォーラム，東京，2018.10.6.
- 39) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催

平成 30 年度再乱用防止対策講習会，広島，2018.10.10.

- 40) 松本俊彦：回復への道のり～私達が幸せになるには何をすべきか～. ギヤマン郡山・郡山ステップグループ主催 合同セミナー，福島，2018.10.14.
- 41) 松本俊彦：睡眠薬・抗不安薬乱用を防ぐために薬剤師にできること. 秋田県病院薬剤師会 武田薬品工業株式会社共催 第 6 回病院薬剤師会中小療養連携委員会・精神科病院委員会合同公演会，秋田，2018.10.20.
- 42) 松本俊彦：依存症のメカニズム. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 薬物依存症を中心とした物質依存症患者の自立生活と居住定着の促進のためのモデル開発事業講演会，東京，2018.10.23.
- 43) 松本俊彦：薬物・アルコール依存症からの回復支援. 筑後地区アルコール・薬物等関連問題研究協議会主催 平成 30 年度筑後地区アルコール・薬物等関連問題研究協議会講演会，福岡，2018.10.30.
- 44) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもたち～自傷行為の対応と理解～. 久留米市保健所主催 平成 30 年度自殺対策事業（市民向け講演会），福岡，2018.10.30.
- 45) 松本俊彦：薬物依存症の理解と援助. 帯広少年院主催 帯広少年院施設見学会公演会，北海道，2018.11.3.
- 46) 松本俊彦：子どもの自殺について. 公益社団法人日本小児科医会主催 第 18 回思春期の臨床講習会，東京，2018.11.4.
- 47) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 平成 30 年度再乱用防止対策講習会，沖縄，2018.11.7.
- 48) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか. 上智大学グリーンケア研究所主催 2018 年度秋期グリーンケア公開講座「悲観」について学ぶ講演会，東京，2018.11.8.
- 49) 松本俊彦：もしも「死にたい」といわれたら～友達のために私たちにできること～. 奈良県精神保健福祉センター主催 平成 30 年度奈良県「若者の心の健康」事業講演会，奈良，2018.11.11.
- 50) 松本俊彦：わが国におけるハームリダクションの可能性—薬物依存症者の地域支援のために—. 筑波大学ヒューマン・ケア科学専攻主催 2018 年度第 2 回 FD 講演会，茨城，2018.11.14.
- 51) 松本俊彦：思春期と自殺. 一般社団法人日本家族計画協会主催 平成 30 年度思春期保健セミナー，東京，2018.11.16.
- 52) 松本俊彦：家族間境界. 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催 平成 30 年度薬物関連問題家族講座，東京，2018.11.16.
- 53) 松本俊彦：青年たちの自傷・依存行動. 公益財団法人明治安田こころの健康財団主催 子ども・専門講座 6 現代の青年期を考える，東京，2018.11.17.
- 54) 松本俊彦：「自分を傷つける」こと. 一般社団法人ウィメンズヘルスリテラシー協会主催 講演会，東京，2018.11.21.
- 55) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～. 第 33 回北海道母子保健セミナー，北海道，2018.11.24.
- 56) 松本俊彦：物質依存症患者の自立生活と居住定着においての必要な支援とは. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 薬物依存を中心とした物質依存症患者の自立生活と居住定着の促進のためのモデル開発事業講演会，東京，2018.11.25.
- 57) 松本俊彦：依存症からの回復に必要なこと. 福岡アディクション・フォーラム実行委員会主催 第 24 回福岡アディクション・フォーラム，福岡，2018.12.2.
- 58) 松本俊彦：地域における薬物依存症者の治療および支援の実情について. 自由民主党政務調査会再犯防止推進特別委員会主催 更生保護を考える議員の会合同会議，東京，2018.12.5.
- 59) 松本俊彦：処方箋・市販薬の理解と援助. BPD 家族会主催 コラボ講演会，東京，2018.12.9.
- 60) 松本俊彦：薬物依存症治療の最先端. 福岡県精神保健福祉センター主催 平成 30 年精神保健福祉冬期講座，福岡，2018.12.12.
- 61) 松本俊彦：本邦の薬物依存/乱用の実態と今後. 塩野義製薬株式会社主催 山口県病院薬剤師会がん

薬物療法専門薬剤師育成セミナー，山口，2019.1.6.

- 62) 松本俊彦:人はなぜ依存症になるのか. 横浜少年鑑別所主催 地域援助拡大研究会, 神奈川, 2019.1.9.
- 63) 松本俊彦:自分を傷つけずにはいられない-自傷行為の理解と援助-. 広島大学大学院教育学研究科主催 第25回広島大学心理臨床セミナー, 広島, 2019.1.13.
- 64) 松本俊彦:もしも「死にたい」と言われたら. 富士宮市主催 いのちの講演会, 静岡, 2019.1.20.
- 65) 松本俊彦:処方薬乱用・依存からみた今日の精神科治療の課題～ベンゾジアゼピンを中心に～. 広島県精神科病院協会コメディカル委員会薬剤師部会 広島県病院薬剤師会精神科病院業務検討委員会 吉富薬品株式会社 共催 広島県精神科病院協会薬剤師部会学術講演会, 広島, 2019.1.25.
- 66) 松本俊彦:比較社会漂流記～比べられたくない、でも比べないと不安. 特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター主催 自死・自殺の現状を広く周知することを目的としたシンポジウム, 京都, 2019.1.26.
- 67) 松本俊彦:自傷と自殺-どう向き合い、どう寄り添うか-. 山形県臨床心理士会主催 こころの健康セミナー, 山形, 2019.2.3.
- 68) 松本俊彦:向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD株式会社主催 Insomnia Symposium in GIFU～出口を見据えた不眠症治療を考える～研究会, 岐阜, 2019.2.5.
- 69) 松本俊彦:もしも「死にたい」と言われたら. 一般社団法人日本うつ病センター主催 若年勤労者の自殺対策支援のためのワークショップ, 東京, 2019.2.8.
- 70) 松本俊彦:本当の依存症の話をしよう～嘘と秘密と孤立の病. 関西アルコール関連問題学会主催 依存症啓発シンポジウム, 大阪, 2019.2.10.
- 71) 松本俊彦:依存するとはどういうことか. 特定非営利活動法人 SUN リビングハウスマム主催 アディクションセミナー, 東京, 2019.2.11.
- 72) 松本俊彦:向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD株式会社主催 第4回 Psychiatry Network Seminar, 東京, 2019.2.13.
- 73) 松本俊彦:依存症の理解を深めるための普及啓発. 厚生労働省主催 ～依存症への偏見、差別をなくす～依存症の理解を深めるための普及啓発事業, 愛知, 2019.2.17.
- 74) 松本俊彦:薬物依存症の回復に必要なもの うつ・自殺. 大塚製薬株式会社主催 第55回南大阪精神医療研究会, 大阪, 2019.2.19.
- 75) 松本俊彦:依存症の理解を深めるための普及啓発. 厚生労働省主催 ～依存症への偏見、差別をなくす～依存症の理解を深めるための普及啓発事業, 大阪, 2019.2.23.
- 76) 松本俊彦:人はなぜ依存症になるのか. 群馬県こころの健康センター主催 平成30年度依存症県民セミナー, 群馬, 2019.2.24.
- 77) 松本俊彦:人はなぜ依存症になるのか～孤独と依存症～. 日本新薬株式会社主催 レグレクト Webカンファレンス, 東京, 2019.2.25.
- 78) 松本俊彦:携帯電話・アルコール・薬物依存症について. 医療法人社団薫風会山田病院主催 平成30年度地域住民対象市民講演会, 東京, 2019.3.2.
- 79) 松本俊彦:薬物中毒・依存について. 公益社団法人日本女医会主催 十代の薬物乱用・依存などの問題に関する講演会, 東京, 2019.3.3.
- 80) 松本俊彦:依存症の理解を深めるための普及啓発. 厚生労働省主催 ～依存症への偏見、差別をなくす～依存症の理解を深めるための普及啓発事業, 東京, 2019.3.6.
- 81) 松本俊彦:依存症の理解を深めるための普及啓発. 厚生労働省 文部科学省主催 依存症の理解を深めるための普及啓発事業, 東京, 2019.3.10.
- 82) 松本俊彦:もしも「死にたい」と言われたら. 特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構主催 第57回こぼろ亭月例会講演会, 東京, 2019.3.16.
- 83) 松本俊彦:物質依存症患者の自立生活と居住定着における必要な支援とは. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 薬物依存を中心とした物質依存症患者の自立生活と居住定着のためのモデル開

発事業講演会，東京，2019.3.19.

- 84) 松本俊彦：もしも「死にたい」といわれたら．社会福祉法人 京都いのちの電話主催 京都いのちの電話公開講演，京都，2019.3.24.
- 85) 松本俊彦：自分を大事にしない若者への理解と支援．独立行政法人国立高等専門学校機構沼津工業高等専門学校主催 平成 30 年度 FD 講演会，静岡，2019.3.27.
- 86) 松本俊彦：依存症治療について．大塚製薬株式会社主催 精神科学術講演会，東京，2019.3.29.
- 87) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師－薬剤師によるメンタルヘルス支援－．小平市薬剤師会，東京，2018.4.26.
- 88) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか．横須賀市立不入斗中学校，神奈川，2018.6.29.
- 89) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか．横須賀市立衣笠中学校，神奈川，2018.6.29.
- 90) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか．横須賀市立大津中学校，神奈川，2018.6.29.
- 91) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師－薬物乱用防止から自殺予防まで－．慶應大学薬学部 KP 会主催第 12 回福島塾，東京，2018.7.1.
- 92) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか．仙台医療センターHIV/AIDS 包括医療センター主催 第 1 回 HIV/AIDS 医療セミナー，宮城，2018.7.5.
- 93) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか．埼玉県坂戸保健所管内薬物乱用防止指導員協議会主催 平成 30 年度第 2 回薬物乱用防止研修会，埼玉，2018.7.27.
- 94) 嶋根卓也：「ダメ、ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教育．第 56 回全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会，東京，2018.8.3.
- 95) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師－気づき・関わり・つなぎ－．栃木市こころの健康サポーター研修会，栃木，2018.9.2.
- 96) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の最新動向と予防．平成 30 年度愛媛県薬物依存研修会，愛媛，2018.9.24.
- 97) 嶋根卓也：なぜ当事者支援なのか．川崎ダルク 依存症連続講座，神奈川，2019.11.8.
- 98) 嶋根卓也：回復支援施設ダルクの役割．浜松ダルクフォーラム，静岡，2018.11.10.
- 99) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師－気づき・関わり・つなぎ－．高知県薬剤師会主催自殺予防対策ゲートキーパー養成研修会，高知，2019.1.20.
- 100) 嶋根卓也：学校薬剤師による「ダメ、ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止．埼玉県薬剤師会主催 平成 30 年度学校薬剤師等講習会，埼玉，2019.2.3.
- 101) 嶋根卓也：当事者による回復支援－ダルク追っかけ調査より－．新潟県薬物依存症者を抱える家族の会講演，新潟，2019.2.10.
- 102) 嶋根卓也：大麻の真実．平成 30 年度東京都薬物乱用防止推進東大和地区協議会事業，東京，2019.3.24
- 103) 近藤あゆみ：薬物依存症とは．千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，2018.4.18.
- 104) 近藤あゆみ：家族の再発．特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会，東京，2018.5.12.
- 105) 近藤あゆみ：上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる．千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，2018.5.23.
- 106) 近藤あゆみ：薬物依存症からの回復のために 家族ができること、できないこと．新潟家族会主催移動家族会，新潟，2018.6.9.
- 107) 近藤あゆみ：長期的な回復を支え、再発・再使用に備える．千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，2018.6.20.
- 108) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション．東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京，2018.7.6.
- 109) 近藤あゆみ：家族のセルフケア．千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，

2018.7.18.

- 110) 近藤あゆみ：薬物依存症と家族。横浜ひまわり家族会主催家族会，神奈川，2018.7.28.
- 111) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京，2018.8.6.
- 112) 近藤あゆみ：コミュニケーション・スキルの練習。千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，2018.8.15.
- 113) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催依存症家族教室，東京，2018.8.21.
- 114) 近藤あゆみ：薬物依存症からの回復 ～家族の旅路～。"平成 30 年度 NPO 法人横浜ひまわり家族会 第 2 回「薬物依存症者と家族フォーラム」，神奈川，2018.8.26.
- 115) 近藤あゆみ：上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる。新潟市こころの健康センター主催依存症家族教室，新潟，2018.9.18.
- 116) 近藤あゆみ：振り返りと今後の目標。千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室，千葉，2018.9.19.
- 117) 近藤あゆみ：コミュニケーション・スキル ～話すこと・聴くこと～。横浜ひまわり家族会主催家族会，神奈川，2018.9.22.
- 118) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京，2018.10.26.
- 119) 近藤あゆみ：家族が使える かんたん！動機づけ面接。特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族研修会，神奈川，2018.12.8.
- 120) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京，2018.12.17.
- 121) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催依存症家族教室，東京，2019.2.19.
- 122) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたコミュニケーション。東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京，2019.2.22.
- 123) 引土絵未：依存者本人の成長を助ける関わり，栃木ダルク主催家族教室，栃木，2018.7.14.
- 124) 引土絵未：感情のワーク 治療共同体 Amity から学ぶエモーショナル・リテラシー，薬物・アルコール等相談の家族教室，東京，2019.3.4.
- 125) 猪浦智史：ヒトはなぜドラッグを使うのか。平成 30 年度薬物乱用防止兵庫大会，兵庫，2018.11.17.
- 126) 猪浦智史：ヒトはなぜドラッグを使うのか。薬物乱用防止教室，埼玉，2018.11.22.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 松本俊彦：日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 2) 松本俊彦：日本社会精神医学会 評議員
- 3) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 4) 船田正彦：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 5) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 6) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 7) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 8) 近藤あゆみ：日本アルコール・アディクション医学会 理事

(3) 座長

- 1) 成瀬暢也, 松本俊彦:【座長】シンポジウム 33 刑の一部執行猶予制度施行後における薬物依存症地域支援の現状と課題. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 2) 松本俊彦:【座長】一般演題(口演)8 薬物依存. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 3) 船田正彦:【座長】シンポジウム「最近の大麻問題を考える」. 日本薬学会 第 139 年会, 千葉, 2019.3.23.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦: 日本青年期精神療学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 松本俊彦: 第 32 回薬物依存臨床医師研修
- 2) 松本俊彦: 第 20 回薬物依存臨床看護等研修
- 3) 松本俊彦: 第 10 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
- 4) 引土絵未: 国際セミナー「ヨーロッパの薬物対策とハームリダクション」国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部、治療共同体研究会、プロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会主催, 東京, 2019.1.23.
- 5) 引土絵未: 治療共同体エンカウンター・グループ研修, 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部・治療共同体研究会主催, 東京, 2018.11.5.
- 6) 引土絵未: 治療共同体エンカウンター・グループワークショップ in 京都, 治療共同体研究会主催, 京都, 2018.9.7.
- 7) 引土絵未: 治療共同体エンカウンター・グループワークショップ in 鳥取, 治療共同体研究会主催, 鳥取, 2019.1.27.

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦: SMARPP の理念と意義. 福島県立矢吹病院主催 物質使用障害治療プログラム研修, 福島, 2018.4.24.
- 2) 松本俊彦: 薬物再乱用防止プログラム. 法務総合研究所主催 第 15 回保護局関係職員処遇強化特別研修, 東京, 2018.5.22.
- 3) 松本俊彦: 薬物問題の現状と治療について. 仙台保護観察所主催 宮城県薬物依存症支援者ネットワーク研修会, 宮城, 2018.6.26.
- 4) 松本俊彦: アルコールと自殺・自傷. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 30 年度第 1 回アルコール依存症臨床医等研修, 神奈川, 2018.7.18.
- 5) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない! ~自傷行為の理解と援助~. 佐賀県高等学校保健会主催 平成 30 年度佐賀県高等学校保健会養護教諭 1 日研修会, 佐賀, 2018.7.27.
- 6) 松本俊彦: あなたのまわりの依存症ー「ダメ絶対」だけではない人証予防ー. 千葉市教育センター主催 専門研修「健康教育」, 千葉, 2018.7.30.
- 7) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 横須賀市教育委員会主催 支援教育研修講座, 神奈川, 2018.8.22.
- 8) 松本俊彦: SMARPP の理念と意義. 法務省保護局主催 薬物依存対策研修, 東京, 2018.8.27.
- 9) 松本俊彦: 日本の医療機関における薬物依存者患者の実態と治療. 独立行政法人国際協力機構主催 2018 年度(課題別研修) 犯罪者処遇(矯正保護), 東京, 2018.8.31.
- 10) 松本俊彦: 薬物関連精神障害患者の臨床. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 32 回薬物依存臨床医師研修際および第 20 回薬物依存臨床看護等研修会, 東京, 2018.9.5.

- 11) 松本俊彦：自殺の危険因子とリスクアセスメント．法務省保護局主催 平成 30 年度処遇困難事例対策研修，東京，2018.9.28.
- 12) 松本俊彦：アルコールと自殺・自傷．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 30 年度第 2 回アルコール依存症臨床医等研修，神奈川，2018.10.12.
- 13) 松本俊彦：安心して人に依存できない子どもの支援．京都府宇治児童相談所主催 平成 30 年度宇治児童相談所管内市町村児童福祉担当職員研修会，京都，2018.10.26.
- 14) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない．東京三弁護士会多摩支部子どもの権利に関する委員会主催 未成年後見に関する研修会，東京，2018.11.9.
- 15) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～．千葉スクールカウンセラー研修会主催 第二回全体研修会，千葉，2018.11.18.
- 16) 松本俊彦：認知行動療法を用いた薬物依存症者に対する集団療法の理念と意義．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 平成 30 年度アルコール・薬物関連問題研修，佐賀，2018.11.27.
- 17) 松本俊彦：SMARPP の理念と実際．長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター主催 平成 30 年度第 2 回依存症相談窓口担当者秘術研修会，長崎，2018.11.28.
- 18) 松本俊彦：薬物依存症外来の特色と治療内容．一般社団法人日本国際協力センター主催 中国司法省薬物厚生・リハビリ訪日研修，東京，2018.12.3.
- 19) 松本俊彦：薬物依存・自殺予防・自傷行為などの理解と対象者への対応について．新潟市民生印・児童委員協議会連合会主催 薬物乱用防止特別研修会，新潟，2018.12.4.
- 20) 松本俊彦：アルコール依存症の診断と治療．岩手県保健福祉部主催 平成 30 年度岩手県地域生活支援研修（アルコール依存症）昼の部，岩手，2018.12.7.
- 21) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺「死のトライアングル」を防ぐために～地域の医療機関、医療従事者に期待すること～．岩手県保健福祉部主催 平成 30 年度岩手県地域生活支援研修（アルコール依存症）夜の部，岩手，2018.12.7.
- 22) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応．法務省矯正施設主催 任用研修課程高等科第 50 回研修，東京，2018.12.11.
- 23) 松本俊彦：覚せい剤依存症と医療．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 50 回研修，東京，2018.12.14.
- 24) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～どうしたら回復するのか～．埼玉県立精神医療センター主催 埼玉県依存症治療拠点機関主催研修会，埼玉，2018.12.16.
- 25) 松本俊彦：薬物依存症の理解．広島県立総合精神保健福祉センター主催 平成 30 年度依存症対策支援者スキルアップ研修，広島，2018.12.17.
- 26) 松本俊彦：自傷相談に必要な基礎的な知識と適切なアセスメントについて、また関連する過剰服薬等の問題など．株式会社 保健同人会主催 メンタルヘルス相談員研修会，東京，2018.12.22.
- 27) 松本俊彦：もしも死にたいと言われたら．社会福祉法人川崎いのちの電話主催 第 34 期電話相談員養成研修，神奈川，2019.1.27.
- 28) 松本俊彦：専門的処遇プログラム（薬物再乱用防止）．法務総合研究所主催 第 54 回保護局関係職員高等科研修，東京，2019.1.30.
- 29) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない．公益社団法人富山県医師会主催 第 2 回富山県医師会児童虐待防止研修会，富山，2019.2.7.
- 30) 松本俊彦：自傷・自殺のリスク評価と対応．平成 30 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復支援職員研修・薬物依存症回復施設職員研修，東京，2019.2.26.
- 31) 松本俊彦：薬物依存治療のグループワーク．法務省矯正局主催 平成 30 年度専門研修課程調査鑑別科（特別課程）研修，東京，2019.3.5.
- 32) 松本俊彦：薬物依存症について．医療法人せのがわ病院主催 広島県依存症拠点機関事業 医療従事者向け研修会，広島，2019.3.15.

- 33) 松本俊彦：自傷行為の理解と自殺予防. 公益社団法人東京社会福祉士会主催 自殺予防ソーシャルネットワーク研修, 東京, 2019.3.21.
- 34) 船田正彦：行動薬理学からみた薬物依存（精神依存, 身体依存）平成 30 年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修. 東京, 2018.9.4.
- 35) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）. 平成 30 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域支援生活支援者養成研修（薬物）, 東京, 2018.7.23.
- 36) 嶋根卓也：①青少年と薬物乱用・依存. ②全国の民間リハビリ施設の活動状況とその課題. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 32 回薬物依存臨床医師研修際および第 20 回薬物依存臨床看護等研修会. 東京, 2018.9.4-7.
- 37) 嶋根卓也：①薬物中毒・乱用・依存の概念と最近の薬物関連障害患者の動向. ②薬物依存症と性的マイノリティおよび HIV 感染. 国立精神・神経医療研究センター主催 平成 30 年度 認知行動療法的手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2018.11.19-21.
- 38) 嶋根卓也：薬物依存症と性的マイノリティ・HIV・感染症. 平成 30 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復施設職員研修・薬物依存症回復施設職員研修, 東京, 2019.2.26.
- 39) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム. 鹿児島県精神保健福祉センター職員研修, 鹿児島, 2018.4.20.
- 40) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援. 岩手県精神保健福祉センター主催平成 30 年度アルコール・薬物関連問題支援者研修会, 岩手, 2018.5.25.
- 41) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援. 栃木県北健康福祉センター主催研修会, 栃木, 2018.6.12.
- 42) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する相談支援. 国立精神・神経医療研究センター主催 平成 30 年度 依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）, 東京, 2018.7.24.
- 43) 近藤あゆみ：SMARPP の実際. 法務省主催平成 30 年度薬物依存対策研修, 東京, 2018.8.27.
- 44) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する相談支援. 法務省主催平成 30 年度薬物依存対策研修, 東京, 2018.8.29.
- 45) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族に対する支援. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 32 回薬物依存臨床医師研修際および第 20 回薬物依存臨床看護等研修会, 東京, 2018.9.7.
- 46) 近藤あゆみ：薬物依存症者とその家族に対する相談支援と地域連携. 愛媛県主催平成 30 年度愛媛県薬物依存研修会, 愛媛, 2018.9.24.
- 47) 近藤あゆみ：依存症者とその家族に対する相談支援. 仙台市精神保健福祉総合センター主催依存症関連問題研修会, 宮城, 2018.9.25.
- 48) 近藤あゆみ：依存症者の家族に対する相談支援. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催平成 30 年度アルコール依存症指導者養成研修, 東京, 2018.10.3.
- 49) 近藤あゆみ：依存症者本人のニーズに寄り添う支援. 岩手県精神保健福祉センター主催平成 30 年度アルコール・薬物関連問題支援者研修会, 岩手, 2018.10.5.
- 50) 近藤あゆみ：精神保健福祉分野における相談対応の基礎. 広島県立総合精神保健福祉センター主催平成 30 年度精神保健福祉研修, 広島, 2018.10.15.
- 51) 近藤あゆみ：依存症の治療と回復支援. 浜松市精神保健福祉センター主催依存症講習会, 静岡, 2019.10.6.
- 52) 近藤あゆみ：TAMARPP 学習会. 東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催平成 30 年度 薬物・アルコール等相談 拡大版 職員学習会, 東京, 2018.10.17.
- 53) 近藤あゆみ：あなた大切な人が薬物依存症だったら ～回復のために家族にできること・できないこと～. 東京保護観察所立川支部主催引受人会, 東京, 2018.10.19.

- 54) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援。大分県こころとからだの相談支援センター主催 依存症家族支援専門研修，大分，2018.10.30.
- 55) 近藤あゆみ：クライアントの回復段階やニーズに寄り添う依存症の相談支援。宮城県依存症関連問題研修会，宮城，2018.11.06.
- 56) 近藤あゆみ：SMARPP の実際。国立精神・神経医療研究センター主催 第10回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2018.11.19.
- 57) 近藤あゆみ：依存症支援に役立つ知識とスキル。千葉市こころの健康センター主催平成30年度千葉市依存症支援者教育研修（Ⅰ），千葉，2018.12.12.
- 58) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援。群馬県こころの健康センター主催平成30年度依存症回復支援者研修会，群馬，2018.12.18.
- 59) 近藤あゆみ：回復の旅路。とちぎアディクションフォーラム実行委員会主催第15回とちぎアディクションフォーラム，栃木，2019.1.27.
- 60) 引土絵未：グループワーク。法務省保護局主催薬物依存対策研修，東京，2018.8.28.
- 61) 引土絵未：グループワーク。国立精神・神経センター精神保健研究所主催平成30年度依存症拠点病院事業 薬物依存症に対する認知行動療法研修「グループワーク」，東京，2018.11.20.
- 62) 引土絵未：アルコール健康障害・薬物依存症・いわゆるギャンブル等依存からの回復のための地域ネットワーク構築にむけたソーシャルワーク人材養成及び普及啓発事業 事例検討型シンポジウム「みるみる みえる 人の暮らしと依存症」～確かなりカバリー支援と地域特性を生かしたネットワークのために～「関東A地域における支援：プログラムを基盤とした地域ネットワーク」，公益社団法人日本精神保健福祉士協会主催厚生労働省「平成30年度依存症民間団体支援事業」（補助金事業），東京，2019.2.3.
- 63) 引土絵未：～あなたならどう支援する？～「薬物使用者とその家族に対するソーシャルワーク」2018年度東京社会福祉士会司法福祉委員主催薬物使用者へのソーシャルワーク入門研修，東京，2019.2.9.
- 64) 引土絵未：アルコール健康障害・薬物依存症・いわゆるギャンブル等依存からの回復のための地域ネットワーク構築にむけたソーシャルワーク人材養成及び普及啓発事業 事例検討型シンポジウム「みるみる みえる 人の暮らしと依存症」～確かなりカバリー支援と地域特性を生かしたネットワークのために～「関東A地域における支援：プログラムを基盤とした地域ネットワーク」，公益社団法人日本精神保健福祉士協会主催厚生労働省「平成30年度依存症民間団体支援事業」（補助金事業），大阪，2019.2.17.
- 65) 引土絵未：①対人援助の基礎，②演習。平成30年度薬物依存症回復施設職員研修，東京，2019.2.26.

F. その他

- 1) 松本俊彦：先生、また手首切っちゃった。J-CAST BOOK ウォッチ，2018.4.23.
- 2) 松本俊彦：ギャンブル依存症問題を考える会がフォーラム。遊技通信 Web，2018.4.24.
- 3) 松本俊彦：怪物の悲劇今に響く 「フランケンシュタイン」科学の功罪描く 胸に迫る深い孤独。朝日新聞，2018.4.30.
- 4) 松本俊彦：依存対策「本場」も悩み IR 実施法案国会審議へ。毎日新聞，2018.5.2.
- 5) 松本俊彦：精神科医の松本さん 八王子で公開講演会。読売新聞多摩版，2018.5.9.
- 6) 松本俊彦：薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」。岐阜新聞 Web，2018.5.19.
- 7) 松本俊彦：薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」。中日新聞（CHUNICHI Web），2018.5.19.
- 8) 松本俊彦：国内外ニュース薬物犯罪、社会復帰を議論。福島民報，2018.5.19.
- 9) 松本俊彦：薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」。北海道新聞，2018.5.19.
- 10) 松本俊彦：薬物犯罪、社会復帰を議論。ロイター，2018.5.19.

- 11) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. デイリースポーツニュース online, 2018.5.19.
- 12) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 上毛新聞ニュース, 2018.5.19.
- 13) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 千葉日報オンライン, 2018.5.19.
- 14) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」, 東京新聞 (TOKYO Web), 2018.5.19.
- 15) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. IWATE NIPPO (岩手日報), 2018.5.19.
- 16) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 山陽新聞 digital, 2018.5.19.
- 17) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 千葉日報オンライン, カナコロ, 2018.5.19.
- 18) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 北日本新聞ウェブ webun ウェブ, 2018.5.19.
- 19) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. @S[アットエス], 2018.5.19.
- 20) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 秋田魁新報電子版, 2018.5.19.
- 21) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 日本海新聞, 2018.5.19.
- 22) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 大阪日日新聞, 2018.5.19.
- 23) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 信濃毎日新聞[信毎 web], 2018.5.19.
- 24) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論. 大分合同新聞, 2018.5.19.
- 25) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 神戸新聞 NEXT, 2018.5.19.
- 26) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. dメニューニュース, 2018.5.19.
- 27) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 高知新聞, 2018.5.19.
- 28) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. goo ニュース, 2018.5.19.
- 29) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論. 徳島新聞 Web, 2018.5.19.
- 30) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論. 愛媛新聞 ONLINE, 2018.5.19.
- 31) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 河北新報オンラインニュース, 2018.5.19.
- 32) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 佐賀新聞 LiVE, 2018.5.19.
- 33) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 京都新聞, 2018.5.19.
- 34) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 四国新聞社, 2018.5.19.
- 35) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 沖縄タイムス+プラス, 2018.5.19.
- 36) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. デーリー東北, 2018.5.19.
- 37) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 下野新聞「SOON」, 2018.5.19.
- 38) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 西日本新聞, 2018.5.19.
- 39) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論. 共同通信 47NEWS, 2018.5.19.
- 40) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 — 「医療と地域の連携有用」. 北國新聞社, 2018.5.19.
- 41) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 — 「医療と地域の連携有用」. 富山新聞, 2018.5.19.
- 42) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 宮崎日日新聞社, 2018.5.19.
- 43) 松本俊彦:命の葛藤 出口なき若者. 読売新聞, 2018.5.19.
- 44) 松本俊彦:再犯防止で司法と医療の連携重要. NHKNEWS WEB, 2018.5.19.
- 45) 松本俊彦:薬物犯罪者らの社会復帰を議論. 愛媛新聞, 2018.5.20.
- 46) 松本俊彦:薬物犯罪、社会復帰を議論 「医療と地域の連携有用」. 琉球新報, 2018.5.20.
- 47) 松本俊彦:ギャンブル依存症「完治はない」カジノ法案審議入り. 朝日新聞, 2018.5.23.
- 48) 松本俊彦:依存症理解広めた報道対象に新設グッド・プレス賞. 信濃毎日新聞, 2018.5.23.

- 49) 松本俊彦：依存症からの回復を考える。京都新聞，2018.5.25.
- 50) 松本俊彦：当事者思い複雑 ギャンブル依存症対策法案 衆院通過。毎日新聞，2018.5.26.
- 51) 松本俊彦：薬物依存者の「見た目激変」は嘘八百!? 医師が「薬物タレントの外見変化」真相を明かす。サイゾーウーマン，2018.6.6.
- 52) 松本俊彦：渋谷・ハチ公前で依存症トークショー。Be!131，2018.6.10.
- 53) 松本俊彦：特集 ひろげよう！社会理解 依存症一ひとりではやめられない。ネットワーク，2018.5.20.
- 54) 松本俊彦，香山リカ：相模原障害者殺傷事件と植松被告をどう見るか。創，2018.7.7.
- 55) 松本俊彦：”ぼく”の日記帳ー夏休みのモヤモヤを言葉に一。NHK ハートネット TV 生きるためのTV，2018.7.18.
- 56) 松本俊彦：依存対策置き去り カジノ法 入場回数、貸付金、課題続々。読売新聞朝刊，2018.7.21.
- 57) 松本俊彦：「アルコール依存症」は女性の方が発症しやすい！その社会的背景と対策を医師に聞いた。サイゾーウーマン，2018.7.27.
- 58) 松本俊彦：薬物依存に関する公開講座。日経新聞夕刊，2018.7.28.
- 59) 松本俊彦：【特別企画】依存症の現実 日本は先進諸国の薬物政策に学ぶべき。潮，2018.8.1.
- 60) 松本俊彦：薬物依存、家族と回復へ 横浜で26日に孤立防止など語る。カナコロ，2018.8.7.
- 61) 松本俊彦：自傷行為など回復支援 横浜で講演会 全国から200人が参加。神奈川新聞，2018.8.14.
- 62) 田中紀子，今成知美，松本俊彦：依存症どう対応？人を頼れない「病」根底に。中國新聞，2018.8.15.
- 63) 近藤あゆみ，松本俊彦：薬物依存 支援考える。タウンニュース，2018.8.16.
- 64) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない人へ「決して良いことではないけれど、悪いことでもない」。BuzzFeedNews，2018.8.16.
- 65) 松本俊彦：自分を傷つけたくなくなったり、死にたくなくなったりしたらどう対処したらいいか。BuzzFeedNews，2018.8.20.
- 66) 松本俊彦：食事、睡眠、仕事や勉強、人付き合い 生き延びるために日常生活をどう乗り切るか。BuzzFeedNews，2018.8.20.
- 67) 近藤あゆみ，松本俊彦：薬物依存症者と家族フォーラム。毎日新聞，2018.8.22.
- 68) 松本俊彦：「ダメ。絶対。」の、その先へ～どうする 薬物依存からの回復支援～。NHK 総合ナビゲーション，2018.8.24.
- 69) 松本俊彦：君の話を聞かせてほしい 死にたくなるほどつらいのはなぜ？。BuzzFeedNews，2018.8.26.
- 70) 松本俊彦：「#8月31日の夜に。～2018年夏休み ぼくの日記帳～」。NHK ハートネット TV7/18 放送分の再放送，2018.8.26.
- 71) 松本俊彦：不登校を恐れるな 誰かとつながっていればいい。BuzzFeedNews，2018.8.27.
- 72) 松本俊彦：はみ出したって生きられる 子供たちを救うのは学校の外の世界の情報。BuzzFeedNews，2018.8.28.
- 73) 松本俊彦：「生きるためのTV ～#8月31日の夜に。。～ 第1部」NHK ハートネット TV2017年放送分のアンコール放送，2018.8.29.
- 74) 松本俊彦：「生きるためのTV ～#8月31日の夜に。#は続く」NHK ハートネット TV2017年放送分のアンコール放送，2018.8.30.
- 75) 松本俊彦：「いじめをノックアウト」「ぼくは、ぼくのために生きる」。NHK ハートネット LIVE，2018.8.31.
- 76) 松本俊彦：「生きるためのTV ～#8月31日の夜に。～ 第1部」NHK ハートネット TV2017年放送分の再放送，2018.9.5.
- 77) 松本俊彦：「生きるためのTV ～#8月31日の夜に。#は続く」NHK ハートネット TV2017年放送分の再放送，2018.9.6.

- 78) 松本俊彦：薬物依存症治療の第一人者松本俊彦医師に聞く。日刊ゲンダイ，2018.9.14.
- 79) 松本俊彦：まちがいだらけの薬物依存症 乱用防止教育が生み出す偏見。BuzzFeedNews，2018.9.12.
- 80) 松本俊彦：薬物依存に陥らせるのは、薬の作用というより「孤立」。BuzzFeedNews，2018.9.13.
- 81) 松本俊彦：「患者から覚せい剤成分検出で通報」よい医師か？-松本俊彦・国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長に聞く Vol.1.1. M3.com，2018.10.7.
- 82) 松本俊彦：処方する医師が依存症の患者を生み出す-松本俊彦・国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬部依存研究部部長に聞く Vol.2. M3.com，2018.10.14.
- 83) 松本俊彦：カフェイン量に注意。朝日新聞，2018.10.31.
- 84) 松本俊彦：講演会「若者のこころの健康」パネルディスカッション～「死にたい」に今できることを考える。朝日新聞，2018.11.2.
- 85) 松本俊彦：お寺が地域の「伴走者」に 利益で自殺対策支援や寺の修復。毎日新聞，2018.11.1.
- 86) 松本俊彦：依存症は最も精神科らしく面白い-松本俊彦・国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長に聞く Vol.3.M3.com，2018.11.3.
- 87) 松本俊彦：興奮作用引き起こすカフェイン、コーヒーで中毒起きる？。朝日新聞 DIGITAL，2018.10.31.
- 88) 松本俊彦：死にたくなるほど追いつめられた我が子を、あなたは救えますか？。現代ビジネス，2018.11.3.
- 89) 松本俊彦：死にたくなるほど追いつめられた我が子を、あなたは救えますか？。グノシー，2018.11.4.
- 90) 松本俊彦：家族がまず薬物依存の相談を。聖教新聞，2018.11.3.
- 91) 松本俊彦：「シャブ山シャブ子」を信じてはいけない。PRESIDENT Online，2018.11.12.
- 92) 松本俊彦：「薬物依存症女性、奇声あげ殺人」ドラマ波紋。朝日新聞，2018.11.14.
- 93) 松本俊彦：現実の姿とは違う 「薬物依存女性が殺人」ドラマ 「偏見招く」と医療関係者。東京新聞，2018.11.17.
- 94) 松本俊彦：「怖い」「犯罪者」印象増幅 「ダメ人間」と排除の風潮も 依存症と闘う意欲くじく。東京新聞，2018.11.17.
- 95) 松本俊彦：ドラマの誇張許容ラインは 薬物依存症者の家族ら、テレ朝に講義中。朝日新聞，2018.11.23.
- 96) 松本俊彦：テレビ朝日「相棒」薬物依存の演技 偏見助長に懸念。毎日新聞，2018.11.20.
- 97) 松本俊彦：人気ドラマ衝撃の演技で注目 薬物依存症本当の姿は。中日新聞朝刊，2018.11.21.
- 98) 松本俊彦：公開中止の映画「MMR ワクチン告発」の「一度限りの上映会」。m3.com，2018.11.23.
- 99) 松本俊彦：「シャブ山シャブ子騒動」思考停止のメディア。Japan In-depth，2018.11.24.
- 100) 松本俊彦：「薬物依存症」（筑摩書房） 必要なのは適切な治療と回復支援。ALL REVIEWS，2018.11.28.
- 101) 松本俊彦：孤立する人、減るのが重要。朝日新聞，2018.12.2.
- 102) 松本俊彦：ASKA 前妻は「絶対許さない」愛人とニク注射。週刊文春，2018.12.6.
- 103) 松本俊彦：「奇跡の国」と評される日本の麻薬規制で刑罰には限界も。朝日新聞 GLOBE，2018.12.2.
- 104) 松本俊彦：厳罰化でも薬物はなくなる 過度の規制強化は危険だ。朝日新聞 GLOBE，2018.12.4.
- 105) 松本俊彦：ASKA 覚醒剤相手のあの愛人と再婚へ！ライフスタイルが昔に戻ると再び…専門医が懸念。J-CAST ニュース，2018.12.6.
- 106) 松本俊彦：「平成生まれの”職場がづらい”」。NHK ハートネット TV，2018.12.6.
- 107) 松本俊彦：ハムリダクシオンとは何か、また海外の状況はどうなっているのか。TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」，2018.12.18.
- 108) 松本俊彦：自傷を繰り返す「メンヘラ」との正しい向き合い方とは？/堀江貴文「健康の結論」。毎日が発見ネット，2018.12.19.
- 109) 松本俊彦：コーヒーでも中毒に？カフェインとの正しい付き合い方。アリシー，2018.12.19.

- 110) 松本俊彦, 今成知美, 上岡陽江, 田中紀子, 加藤武士:「シャブ山シャブ子」騒動 テレ朝と協議。ジャパン・インデプス, 2018.12.29.
- 111) 松本俊彦:ギャンブル依存症 特徴は「LOST」 予算守れず/周囲に隠す…官民調査. 日本経済新聞, 2019.1.4.
- 112) 松本俊彦:たった4分でわかる!ギャンブル依存症スクリーニングテスト LOST 誕生. ジャパン・インデプス, 2019.1.10.
- 113) 松本俊彦:「純烈」友井さん、ギャンブル依存症の治療と診断を受けて下さい. アゴラ, 2019.1.12.
- 114) 松本俊彦:生きづらい若者の逃げ道「市販薬依存」の恐ろしさ. 毎日新聞, 2019.1.12.
- 115) 松本俊彦:「市販薬依存」が引き起こす肝障害やぼけ症状. 毎日新聞, 2019.1.16.
- 116) 松本俊彦:本気で考える、禁酒という選択。どんなメリットがある?眠れないなどの離脱症状を防ぐには?. ファンケルスタイル, 2019.1.23.
- 117) 松本俊彦:専門治療拠点センター開設1年 薬物依存治療、普及道半ば. 日本経済新聞, 2019.1.20.
- 118) 松本俊彦:読んでなるほど「薬物依存」を知る 誤解説いて回復支援. 河北新報, 2019.1.20.
- 119) 松本俊彦:依存症をめぐり注目される『ハームリダクション』日本での導入を考える. TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」, 2019.1.29.
- 120) 松本俊彦:薬物依存症は「ダメ、ゼッタイ。」では防げない、効果的な治療法とは?. WEDGE Infinity, 2019.2.15.
- 121) 松本俊彦:親は薬物依存症、「自分が悪いから」傷つく子ども…松本俊彦さんに聞く. 弁護士ドットコム, 2019.1.30.
- 122) 松本俊彦:「カフェインで頑張る」は元気の前借り 震えに注意… 返済は計画的に. Withnews, 2019.2.7.
- 123) 松本俊彦:依存症 理解深めて 23日トークセッション. 大阪日日新聞, 2019.2.14.
- 124) 松本俊彦:依存症は誤解されている 専門・松本俊彦氏に聞く. あなたの健康百科, 2019.2.15.
- 125) 松本俊彦:依存症は治療が必要な病=「1杯飲んだら元に戻る」-理解・啓発イベントを愛知で開催. JIJI.COM, 2019.2.20.
- 126) 松本俊彦:何かに依存していることは悪いことか?. 日経メディカル, 2019.2.22.
- 127) 松本俊彦:芸能界に転換点 ZIGGY 森重樹一氏登場!. Japan Indepth, 2019.2.22.
- 128) 松本俊彦:「病気と理解して考えが変わった」前園真聖、よみこ濱口、ZIGGY 森重樹一らが依存症についてマジトーク! ZIGGY の名曲「GRORIA」も生演奏. NewsWalkerplus.com, 2019.2.25.
- 129) 松本俊彦:結婚式でもお酒を勧めない 違法薬物も安心して相談を〜依存症の専門医 松本俊彦氏〜. 時事メディカル, 2019.3.2.
- 130) 松本俊彦:注目される薬物依存への“寛容な政策”. NHK-BS1「キャッチ!世界のトップニュース」, 2019.3.4.
- 131) 松本俊彦:清原和博氏の依存症啓発イベント登場 オファーした医師の思いとは. デイリースポーツ, 2019.3.7.
- 132) 松本俊彦:清原氏「勇気出して病院に」薬物啓発イベントに参加. 日本経済新聞, 2019.3.6.
- 133) 松本俊彦:清原氏、3年ぶり公の場で語った薬物依存の恐怖 厚労省イベントにサプライズ登場. SANSPO.COM, 2019.3.7.
- 134) 松本俊彦:清原さん、薬物治療依存訴え 事件後イベント初出演「勇気出し専門病院へ」. 毎日新聞, 2019.3.7.
- 135) 松本俊彦:依存症啓発に清原さん登場「勇気を出して」. 下野新聞, 2019.3.7.
- 136) 松本俊彦:「いだてん」出演のピエール瀧容疑者 コカイン使用で逮捕、多額の賠償金発生か. スポニチアネックス, 2019.3.13.
- 137) 松本俊彦:「回復を応援できる社会を」薬物依存症の専門家 松本俊彦さんのメッセージ. BuzzFeedNews, 2019.3.13.

- 138) 松本俊彦：ピエール瀧容疑者の逮捕から考える薬物依存症と治療やケア、周囲の理解の必要性。Yahoo ニュース, 2019.3.13.
- 139) 松本俊彦：ピエール瀧が麻薬取締法違反で逮捕。著名人薬物報道のあるべき姿は。CINRA.NET, 2019.3.13.
- 140) 松本俊彦：有明抄-薬物依存。佐賀新聞, 2019.3.14.
- 141) 松本俊彦, 田中紀子：薬物報道ガイドラインから見る今回の一連の報道。そして、依存症からの回復への道筋とは？。TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」, 2019.3.14.
- 142) 松本俊彦：電気グルーブ解散も ピエール瀧容疑者逮捕で結成 30 周年記念ライブ中止。SANSPO.COM, 2019.3.14.
- 143) 松本俊彦：ピエール瀧逮捕報道で炎上した深澤真紀は間違っていない！違法薬物問題に「厳罰より治療を」は世界の潮流だ。RITERA, 2019.3.17.
- 144) 松本俊彦：清原和博が依存症の啓発イベントで語った薬物の怖さ【今週の大人センテンス】。GetNavi web, 2019.3.15.
- 145) 松本俊彦：コカイン使用で逮捕されたピエール瀧を巡る自粛の嵐とワイドショー報道の是非。Wezzy, 2019.3.16.
- 146) 松本俊彦：ある医師が、刑務所で覚醒剤関連の受刑者たちと話した体験を本に記している（春秋）。日本経済新聞, 2019.3.18.
- 147) 松本俊彦：薬物問題 回復への道 高知東生氏。Japan In depth ニコ生チャンネル, 2019.3.20.
- 148) 松本俊彦：荻上チキさん、ピエール瀧容疑者の逮捕報道でメディアに苦言「何を狙っているのか...」。ハフポスト, 2019.3.20.
- 149) 松本俊彦：コカイン現場鑑定機器 警察庁導入へ 現行犯逮捕可能に。産経新聞朝刊, 2019.3.20.
- 150) 松本俊彦：薬物依存症。京都新聞, 2019.3.20.
- 151) 松本俊彦：ピエール瀧逮捕後に繰り返される”リンチ”的な報道、可罰や辱めよりすべきこと。Wezzy, 2019.3.20.
- 152) 松本俊彦：「コカイン使用」ピエール瀧容疑者逮捕 薬物報道 配慮求める声。朝日新聞, 2019.3.23.
- 153) 松本俊彦：必要なのは刑罰ではなく支援＝コカイン使用のピエール瀧容疑者-依存症専門医・松本俊彦氏が訴え。JIJI.COM, 2019.3.24.
- 154) 松本俊彦：薬物依存対策 危険強調だけではダメ。岩手日報, 2019.3.24.
- 155) 松本俊彦：依存症からの回復 社会はどう支える 啓発イベント 清原和博さん「つらいと言える環境を」。西日本新聞, 2019.3.27.
- 156) 松本俊彦：薬物依存とどう向き合う（全編）「安易な出演作の配信中止は問題」。毎日新聞, 2019.3.28.
- 157) 松本俊彦：薬物依存とどう向き合う（中編）「薬物問題、厳罰化で解決できない」。毎日新聞, 2019.3.29.
- 158) 松本俊彦：薬物依存度どう向き合う（後編）「地域社会の中での回復モデルを」。毎日新聞, 2019.3.30.
- 159) 松本俊彦：「児童虐待」を模倣させないため テレビでの伝え方を真剣に考えてほしい（水島宏明）。BLOGOS, 2019.3.30.
- 160) 松本俊彦：ピエール瀧さんを私がバッシングしない理由 深澤真紀さん、松本俊彦さん薬物報道を斬る(1)。BuzzFeedNews, 2019.3.30.
- 161) 松本俊彦：1999 年がターニングポイント？時代と共に変わる意識 深澤真紀さん、松本俊彦さん薬物報道を斬る(2)。BuzzFeedNews, 2019.3.31.
- 162) 松本俊彦：依存症叩きで自縄自縛のTV。Japan In-depth, 2019.3.31.
- 163) 船田正彦：濃縮大麻流行の兆し 簡単製造危険は数倍危険ドラッグから移行, 読売新聞（北海道版）, 2018.4.20.
- 164) 船田正彦：大麻濃縮物摘発が急増, 朝日新聞, 2018.5.23.
- 165) 船田正彦：四国の大麻検挙-最多, 朝日新聞（香川版）, 2018.5.30 .
- 166) 船田正彦：大麻や覚せい剤-電子タバコ悪用, 摘発相次ぐ, 日本経済新聞, 2018.8.28 .

- 167) 嶋根卓也：「ダメ、ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止一薬剤師の役割一。県薬しまね第 109 号，2019.1.
- 168) 嶋根卓也：ダルク追っかけ調査 2 年後の追跡率 9 割！完全断薬率 6 割超！。季刊 Be!135 号，2019.6.
- 169) 嶋根卓也：一薬物乱用の最新動向一増加する大麻に注意を。体と心 保健総合大百科〈中・高校編〉2019，少年写真新聞社，p34，2019.4.
- 170) 嶋根卓也：国の全国調査：大麻経験、推計 130 万人 若年層に浸透。毎日新聞 Web，2018.6.17.
- 171) 嶋根卓也：大麻使用 推計 133 万人 15～64 歳シンナー上回り最多 国の全国調査。毎日新聞，2018.6.18.
- 172) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 昨年度全国調査 乱用薬物で最多に。東京新聞，2018.6.18.
- 173) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 薬物乱用 シンナー越え最多。信濃毎日新聞，2018.6.18.
- 174) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 全国調査 シンナー越え最多乱用薬物に。静岡新聞，2018.6.18.
- 175) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 昨年度全国調査 国推計 乱用薬物で最多。岐阜新聞，2018.6.18.
- 176) 嶋根卓也：大麻経験 推計 130 万人 シンナー上回り乱用最多。北國新聞，2018.6.18.
- 177) 嶋根卓也：大麻経験 推計 130 万人 シンナー越え乱用薬物最多。京都新聞，2018.6.18.
- 178) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 乱用薬物調査 シンナー越え最多。神戸新聞，2018.6.18.
- 179) 嶋根卓也：若年層 抵抗感薄く 大麻経験 推計 133 万人 成分濃縮、高まる危険。四国新聞，2018.6.18.
- 180) 嶋根卓也：大麻 若者に急拡大 有害 抵抗感薄く。高知新聞，2018.6.18.
- 181) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 シンナー越え最多乱用薬物 若年層に浸透。山陽新聞，2018.6.18.
- 182) 嶋根卓也：若年層急増 薄い抵抗感 大麻経験 130 万人超。佐賀新聞，2018.6.18.
- 183) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 人口の 1.4% シンナー越え最多薬物。長崎新聞，2018.6.18.
- 184) 嶋根卓也：大麻経験 推計 133 万人 シンナー上回る 若者に浸透、急増。宮崎新聞，2018.6.18.
- 185) 嶋根卓也：大麻経験 推計 130 万人 15～64 歳全国調査 シンナー越え最多。琉球新報，2018.6.18.
- 186) 嶋根卓也：大麻が最多に一女性で鎮痛薬常用が増加 厚生労働省研究班。薬事日報 Web，2018.6.18.
- 187) 嶋根卓也：【アメリカを読む】先進国初の大麻解禁、“実験”でカナダ社会はどうか。サンケイビズ，2018.11.7.
- 188) 嶋根卓也：コカイン摘発 増加傾向 密輸、流通経路解明急ぐ。宮崎日日新聞，2019.1.7.
- 189) 嶋根卓也：大麻、若年層の乱用深刻化。静岡新聞，2019.1.25.

4. 行動医学研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

平成30年4月より、心身医学研究部と成人精神保健研究部が統合され、行動医学研究部となった。

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態であるPTSDの神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。また関係諸機関（厚生労働省、警察庁、内閣府等中央省庁、精神保健福祉センター、災害医療センター、保健医療科学院、世界保健機構、兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築、共同研究の推進、教育研修活動も積極的に行っているところである。自然災害、犯罪被害者への対応に関するガイドラインの作成、普及、研修に取り組んでいる。

また、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocialモデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究し、効果的な治療法や予防法を開発している。前年度に引き続き精神保健対策費補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業による摂食障害全国基幹センターが当研究部内に設置された。

臨床面では研究部のスタッフが引き続きセンター病院心療内科外来で診療・研究に携わっている。

平成30年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金吉晴（1月より併任）。診断技術研究室長：篠崎康子。ストレス研究室長：安藤哲也。心身症研究室長：関口敦。認知機能研究室長：堀弘明。常勤研究員は伊藤真利子、大沼麻実（10月～）。流動研究員は大沼麻実（～9月）、小原千郷、河西ひとみ、島津恵子、大滝涼子（7月～）。科研費研究員は船場美佐子、菅原彩子、伊藤まどか、中山未知、笥亮子、勝沼るり（2月～）。科研費研究補助員は國重寛子、秀美保（8月～）。科研費研究助手は横倉芳望。併任研究員は有賀元、富田吉敏、勝沼るり（9月～1月）。協力研究員は倉尚樹。外来研究員は袴田優子、林明明。研究生は上田鼓、大滝涼子（～6月）、河瀬さやか、宮本悦子、松田陽子、赤井利奈、Tajan Nicolas、古家実可子、国弘志保、菅原まゆみ（7月～）、井上朋子（9月～）、樽松文子、樋上巧洋、高野真弓、高橋晶。客員研究員として兒玉直樹、大和滋、西園マーハ文、藤井靖、菊地裕絵、近喰ふじ子、守口善也（8月～）、加茂登志子、小西聖子、宮地光恵、井筒節、堤敦朗、栗山健一（～12月）、福地成、松本和紀、濱崎由紀子、中島聡美各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) PTSDに対する持続エクスポージャー療法に関する指導者育成システムの研究

現在各国のガイドラインでPTSDに対する治療法として最もエビデンスがあるとされている、持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy）の治療者の効果的育成についてのシステム研究を行った。（金）

2) 複雑型PTSDに関する認知行動療法の検討

複雑性PTSDに対する認知行動療法である、STAIR/NSTの日本での実施可能性、安全性、有効性を検討するために、オープン前後比較試験を実施中である。またスーパーバイズ体制の構築と治療者育成を行っている。今年度は、複雑性PTSDの自記式評価尺度である国際トラウマ質問票（ITQ: International Trauma Questionnaire）の日本語版を公表した。（金、伊藤まどか）

3) PTSDの病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者（PTSD発症群，非発症群）と健常者を対象とし，遺伝子解析（遺伝子多型，遺伝子発現，DNAメチル化），内分泌・免疫系や自律神経系指標を含むバイオマーカー測定，脳MRI計測，認知機能測定，多角的な心理・臨床的評価を行う．PTSD発症群に対しては持続エクスポージャー療法等の治療を行い，治療反応性との関連も検討する．これらの検討により，PTSDの病因・病態解明，生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す．PTSD患者では広汎な認知機能障害が認められること（Narita-Ohtaki et al., 2018 J Affect Disord），PTSD患者では炎症系が亢進しており，それが認知機能障害を惹起している可能性があること（Imai et al., 2018 J Psychiatr Res），PTSDではネガティブな情報への記憶バイアスが存在し，それは記憶機能の低さと関連すること（Itoh et al., 2019 J Affect Disord）を明らかにしたことなどが本年度の主要な成果である。（堀，関口，伊藤真利子，林，伊藤まどか，金）

4) PTSDに対するメマンチンの有効性に関するオープン臨床試験

PTSD患者を対象として，アルツハイマー型認知症の治療に用いられているNMDA受容体拮抗薬メマンチンを投与し，PTSD治療におけるメマンチンの有効性を検討する．PTSD症状と認知機能を主要アウトカム指標とする．本研究では，予備的検討としてオープン臨床試験を行い，効果サイズや安全性を検討することにより，その後予定しているRCTのプロトコールを作成することを目的とする．（堀，金）

5) 災害時精神保健医療ガイドライン作成

国内外のガイドラインを精査し，その内容を解体，再統合し，専門家の意見をとりいれつつ包括的ガイドラインを作成している．災害情報データベースの作成を行っている．（金，島津，篠崎）

6) 地域精神保健相談の実態調査

地域精神保健相談支援ツール作成のため，昨年度実施した責任者の立場にある経験豊かな保健師3名への日頃の精神保健業務に関するヒヤリング結果をもとにオンラインアンケートを作成し，全国自治体保健所に勤める保健医療福祉専門職を対象に，精神保健相談支援ツールへの希望ならびに日頃の精神保健業務内容について全国アンケート調査を実施し，結果を解析した．また，精神保健相談支援ツールのプロトタイプを作成し，地域住民の精神保健相談対応に従事している保健師，臨床心理士等の医療専門職を対象に地域精神保健相談研修を企画，実施した．受講者よりモニターとして精神保健相談支援ツールのプロトタイプへのフィードバックを受け，支援ツールの改善と効果的な普及をめざす．（金，島津，寛）

7) 摂食障害治療支援センターにおける相談・支援事例の調査

摂食障害治療支援センター（支援センター）での相談・支援事例を収集，集積し，内容を解析し，解析内容を支援センターにフィードバックして業務の改善に役立て，摂食障害支援ガイドラインの開発および支援体制モデルの確立のための基礎資料とするための研究を実施した．平成30年度は，4全国4カ所の支援センターの2018年4月～2018年12月末までの相談事例延べ1155件を解析し報告書にまとめた．また，相談事例からみた，患者と家族が抱く医療への不満・要望についてまとめ，学会報告した（小原，安藤）

8) 摂食障害の全国疫学調査

20床以上全国の医療機関の精神科，心療内科，内科，小児科，産婦人科から規模別に層化抽出した5220施設（診療科単位）を2014～2015年の1年間の診断・性別ごと受診患者数を調べ，24,506人と推計し報告した．平成30年度は，患者を報告した施設に対して実施された2次調査（臨床疫学調査）を解析し学会報告した．（安藤，菊地）

9) 全国の診療所における摂食障害の患者数調査

全国の精神科・心療内科を標榜している診療所を対象に抽出調査を行い，全国の精神科・心療内科を標榜する診療所を受診した摂食障害の患者数を推計するための調査を実施し，患者数を推計した．（安藤）

10) 精神保健研究所の摂食障害相談支援実態と課題の調査

精神保健福祉センターでの相談・支援実態や課題の質問紙調査を TMC 立森久照室長と共同で実施し、全てのセンター（69 か所）から回答を得た。当事者・家族支援や普及啓発、研修の実施の現状と今後の予定、支援を行うのに必要な事項を把握した。（安藤）

11) 神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」(enhanced cognitive behavior therapy : CBT-E) の効果検証のための東京大学、東北大学、九州大学、国立国際医療研究センター国府台病院および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験の研究体制構築、計画と倫理申請、および準備を終了し、被験者の募集を開始した。また、CBT-E の原著者によるケーススーパービジョンにより介入実施者を養成した。（小原、関口、菅原彩子、船場、河西、安藤、富田）

12) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムの実現可能性および有効性の検討

これまでに過敏性腸症候群 (IBS) に対する内部感覚暴露を用いた CBT (CBT-IE) の日本語版を作成し、単群 20 例の前後比較によるフィジビリティ研究により、高い効果量をもって腹部症状や QOL の改善が認められた（論文投稿中）。さらに CBT-IE プログラムのコストを軽減するため、対面セッションの前にビデオ教材を視聴するプログラムを開発し、センター病院心療内科 富田吉敏医師、消化器内科有賀 元医長と共同でフィジビリティ研究を実施した。解析結果を国際学会で発表した。（船場、河西、藤井、富田、安藤）

13) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

IBS に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学、東北大学、国立国際医療研究センター病院、同国府台病院および当センター病院、TMC との多施設共同無作為化比較試験の研究体制構築、計画と倫理申請、および準備を終了した。介入者養成のための研修会を実施した。被験者の募集を開始した。プロトコル論文を英文誌に投稿した。（河西、船場、関口、藤井、小原、富田、安藤）

14) 心療内科で実施する心理療法の認知神経科学的メカニズムの解明のための観察研究

国立国際医療センター (NCGM) 国府台病院の心療内科で実施している心理療法前後で、認知心理検査を実施し、心理療法の認知科学的な治療構造を明らかにすることを目指している。主に、心身症の認知的モデルとして注目されている、内受容知覚の変容に着目をして、心理療法の治療構造の解明を目指している。NCGM 国府台病院診療内科河合啓介診療科長、田村奈穂医師、庄子雅保心理士、馬場安希心理士、および慶應大学文学部寺澤悠理助教らとの共同研究として実施している。NCGM の倫理審査の承認を受け、検査バッテリーを確定させ、データ収集を継続している。（関口、菅原彩子）

15) 機能性腸障害関連認知評価尺度および過敏性腸症候群関連行動反応評価尺度

過敏性腸症候群に特化した認知・行動的側面の評価尺度とする機能性腸障害関連認知評価尺度および過敏性腸症候群関連行動反応評価尺度の日本語版を標準化する研究を横浜市立大学健康社会学ユニットの菅谷渚助教と実施している（船場、河西、小原、関口、有賀、富田、安藤）

16) エクソーム解析による摂食障害原因変異の網羅的探索

摂食障害発症に寄与する原因変異ならびに遺伝子を同定するため、東海大学の岡 晃講師との共同研究により、摂食障害罹患同胞 10 家族を対象に罹患者 20 名および非罹患者 18 名の計 38 名のエクソームシーケンシングを東海大学の岡 晃講師との共同研究で実施した。全ての遺伝様式について罹患同胞で一致する変異を抽出し、たんぱく質の構造を変化させると予測される変異を絞り込んだ。（安藤）

17) ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究

トラウマ歴やストレス負荷などが脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスに与える影響を疾患

横断的に検証し、多様な表現型を有するストレス関連疾患の新たな診断法の開発を目指している。成人精神保健研究部との共同研究として実施しており、PTSD 患者、IBS 患者及び健常群、延べ 74 名のデータを収集した。(関口、菅原彩子、勝沼、伊藤真利子、林、伊藤まどか、堀、金)

18) 疾患横断的脳画像レジストリ研究

摂食障害患者と、心身症患者の疾患横断的な脳画像レジストリを構築している。脳 MR 画像は、3 テスラ MRI 装置が利用できる共同研究施設(東北大学、千葉大学、産業医科大学、九州大学)において、可能な限り撮像シーケンスを統一し、安静時 fMRI、拡散テンソル強調画像、T1 強調画像による撮像を行なっている。同時に質問紙や認知課題での心理評価・症状評価を行なっている。疾患の枠組みを超え、認知・心理・行動指標に特異的な脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスの異常の解明をするための、研究基盤構築を行っている。各施設における総数では、摂食障害患者のベースライン 76 例、フォローアップ 30 例、健常群ベースライン 108 例、フォローアップ 30 例の脳 MR 画像および心理検査データが収集できた。(関口、安藤、河西、船場、小原、菅原彩子、勝沼)

19) 脳画像データ統合による解析研究

脳画像研究を実施している心療内科関連施設(東北大学、千葉大学、産業医科大学、九州大学)で収集した脳画像データを NCNP に集約し、脳画像の前処理及び個人内解析を半自動的に実行できる解析パイプラインを構築している。更に、分担施設でも解析を実施するためのデータダウンロードシステムを構築し、解析用 PC を導入して横断的な解析研究を行い疾患横断的な認知・心理・行動指標に特異的な脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスの異常の解明を目指している。(関口、安藤、河西、船場、小原、菅原彩子、勝沼)

20) 内受容知覚訓練の認知神経科学的効果の検証

心身症の認知的モデルとして注目されている、内受容知覚に着目した研究であり、バイオフィードバックの手法を用いた内受容感覚訓練を実施し、訓練前後に脳 MRI、認知検査を実施することにより、認知神経科学的な効果を検証している。慶應大学文学部の寺澤悠理助教との共同研究で実施しており、訓練課題を開発し、14 名の健常大学生を対象とした訓練介入データを収集した。(関口、菅原彩子、勝沼)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 小学館女性セブン「危うすぎる日本「狂気の時代」2018.6.28. (金)
- ・ 東京読売新聞 夕刊 11 面「震災 8 年 心の相談 なお 2 万件 ケア 6 年「救われた」 20 代男性」2019.3.9. (金)
- ・ 金 吉晴：朝日新聞 朝刊 2 面「(東日本大震災 8 年) 中高年男性、独居の壁 復興住宅で 60 歳孤独死「名前すら知らず」」2019.3.12. (金)
- ・ 摂食障害情報ポータルサイト(一般向け <http://www.edportal.jp/>、専門職向け <http://www.edportal.jp/pro/>) を運営し、市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った(安藤、関口、小原)。平成 30 年度は 1 年間に 1,513,256 ページビュー、839,000 セッション、702,000 ユーザー (google analytics) のアクセスがあった。
- ・ 家族にできるサポートを知ろう。宮城県摂食障害治療支援センター 摂食障害の家族教室、仙台、2019.1.15. (小原)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 全国の行政職員向け研修会等で、災害精神保健に関する最新知見を提供している。(金)
- ・ 連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科 (金)
- ・ 客員教授：山梨大学医学部 (金)、東北大学大学院医学系研究科 (金)、武蔵野大学 (金)、ニューヨーク大学医学部精神科 (金)、東京女子医科大学 (金)、東北大学大学院医学系研究科 (安藤)

- ・ 客員准教授：山梨大学大学院（安藤），東北大学大学院医学系研究科（関口）
- ・ 大学講師：京都大学医学部（金），東京大学医学部（安藤），二葉看護学院（安藤），東京家政大学（安藤），東北大学東北メディカル・メガバンク機構（関口）
- ・ 各地の医師会，大学等の依頼を受け，トラウマ対応，PTSD 治療，犯罪被害者対応，被災者・遺族対応，災害精神保健に関する一連の講演を行った（金）
- ・ センター病院受託実習生指導：早稲田大学大学院（2 名），明星大学大学院（2 名）（安藤，小原，河西）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて平成 30 年度精神保健に関する技術研修．第 1 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した．2018.5.23-24.（金，大沼）
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて平成 30 年度精神保健に関する技術研修．第 2 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した．2018.11.28-29.（金，大沼）
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて平成 30 年度精神保健に関する技術研修．第 16 回摂食障害治療研修を開催した．2018.8.28-8.31.（安藤，関口，小原）
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて平成 30 年度精神保健に関する技術研修．第 15 回摂食障害看護研修を開催した．2018.10.31-11.2.（安藤，関口，小原）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

① 公的委員会

- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問（金）
- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問（金）
- ・ 被災 3 県心のケア総合支援調査研究等事業 実施委員会 委員（金）

② 摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成 30 年度も 26～29 年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され，事務局実施責任者（センター長）を安藤哲也が，実施担当者を関口 敦（副センター長），小原千郷，菅原彩子が担当した．全国摂食障害対策連絡協議会開催及び摂食障害全国基幹センターの設置運営を行い神経性無食欲症や神経性大食症などの摂食障害対策を推進した．摂食障害治療支援センターを統括した．摂食障害情報ポータルサイトを運営した．平成 30 年度の摂食障害全国基幹センターおよび宮城県，静岡県，福岡県，千葉県の摂食障害治療支援センターの成果をまとめた報告書を作成した．摂食障害治療コーディネーター研修および養護教諭を対象にしたゲートキーパー研修を実施した．「摂食障害治療支援コーディネーターのための相談支援の手引き」を作成し，発刊した．摂食障害全国基幹センターHP で事業の活動と成果物を公開した．（精神保健等国庫補助金：安藤，関口，小原）

③ 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発

地域での摂食障害の多機関連携システムを構築するため，1）精神保健福祉センターや自治体の担当課を対象に，摂食障害の相談支援実態，地域連携構築のための課題を調査し，提言をまとめること，2）精神科領域，身体科領域および相互での連携の指針とマテリアルを作成すること，3）非専門家でも実施可能な簡易治療プログラムを開発すること，を目指して研究を大阪市立大学神経精神科井上幸紀教授，兵庫医科大学精神科神経科松永寿人教授，東京大学心療内科吉内一浩准教授，九州大学心療内科須藤信行教授，千葉大学精神科中里道子教授，NCGM 国府台病院心療内科河合啓介医長および TMC 立森久照室長との共同研究で実施中である．（AMED 障害者対策総合研究開発事業：安藤，関口，小原，菅原彩子，菊地）

(5) センター内における臨床的活動

- ・ センター病院に併任して毎週月曜日の心療内科外来を担当し心身症，摂食障害の診療を行った．

また、月 2 回 IBS 外来を担当し、過敏性腸症候群その他の機能性消化管疾患の診療を実施した。(安藤)

- ・ 病院において外来診療を行っている。(堀)
- ・ 機能性消化管疾患患者を対象に心理治療を実施している。(河西, 船場)

(6) その他

- ・ 行動医学研究部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し、専門家、一般に対し治療や対応についての啓発を行っている。(金)

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hori H, Nakamura S, Yoshida F, Teraishi T, Sasayama D, Ota M, Hattori K, Kim Y, Higuchi T, Kunugi H: Integrated profiling of phenotype and blood transcriptome for stress vulnerability and depression. *J Psychiatr Res* 104: 202-210, 2018.
- 2) Imai R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Ogawa S, Ishida M, Sekiguchi A, Matsui M, Kunugi H, Akechi T, Kamo T, Kim Y: Inflammatory markers and their possible effects on cognitive function in women with posttraumatic stress disorder. *J Psychiatr Res* 102: 192-200, 2018.
- 3) Narita-Ohtaki R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Sekiguchi A, Matsui M, Kunugi H, Kamo T, Kim Y: Cognitive function in Japanese women with posttraumatic stress disorder: Association with exercise habits. *J Affect Disord* 236: 306-312, 2018.
- 4) Itoh M, Hori H, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kim Y: Memory bias and its association with memory function in women with posttraumatic stress disorder. *J Affect Disord* 245: 461-467, 2019.
- 5) Hakamata Y, Mizukami S, Komi S, Sato E, Moriguchi Y, Motomura Y, Maruo K, Izawa S, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Attentional bias modification alters intrinsic functional network of attentional control: A randomized controlled trial. *J Affect Disord* 238: 472-481, 2018.
- 6) Takahashi H, Nakamura T, Kim J, Kikuchi H, Nakahachi T, Ishitobi M, Ebishima K, Yoshiuchi K, Ando T, Stickley A, Yamamoto Y, Kamio Y: Acoustic Hyper-Reactivity and Negatively Skewed Locomotor Activity in Children With Autism Spectrum Disorders: An Exploratory Study. *Front. Psychiatry* 9: 355, 2018.
- 7) Kodama N, Moriguchi Y, Takeda A, Maeda M, Ando T, Kikuchi H, Gondo M, Adachi H, Komaki G: Neural correlates of body comparison and weight estimation in weight-recovered anorexia nervosa: a functional magnetic resonance imaging study. *BioPsychoSocial Medicine* 12: 15, 2018.
- 8) Ogino K, Takahashi H, Nakamura T, Kim J, Kikuchi H, Nakahachi T, Ebishima K, Yoshiuchi K, Ando T, Sumiyoshi T, Stickley A, Yamamoto Y, Kamio Y: Negatively skewed locomotor activity is related to autistic traits and behavioral problems in typically developing children and those with autism spectrum disorders. *Front Hum Neurosci* 12: 518, 2018.
- 9) Matsuo J, Ota M, Hidese S, Teraishi T, Hori H, Ishida I, Hiraishi M, Kunugi H: Sensorimotor Gating in Depressed and Euthymic Patients with Bipolar Disorder: Analysis

- on Prepulse Inhibition of Acoustic Startle Response Stratified by Gender and State. *Front Psychiatry* 9: 123, 2018.
- 10) Ota M, Matsuo J, Ishida I, Takano H, Yokoi Y, Hori H, Yoshida S, Ashida K, Nakamura K, Takahashi T, Kunugi H: Effects of a medium-chain triglyceride-based ketogenic formula on cognitive function in patients with mild-to-moderate Alzheimer's disease. *Neurosci Lett* 690: 232-236, 2019.
 - 11) Hidese S, Ota M, Hori H, Matsuo J, Ishida I, Hiraishi M, Teraishi T, Hattori K, Kunugi H: The relationship between the Wechsler Memory Scale-Revised scores and whole-brain structure in patients with schizophrenia and healthy individuals. *Cogn Neuropsychiatry* 24(1): 80-91, 2019.
 - 12) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Shinada T, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R: Shorter sleep duration and better sleep quality are associated with greater tissue density in the brain. *Scientific Reports* 8(1): 5833, 2018.
 - 13) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Sassa Y, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Kawashima R: General intelligence is associated with working memory-related brain activity: new evidence from a large sample study. *Brain Structure and Function* 223(9): 4243-4258, 2018.
 - 14) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R: The effects of family socioeconomic status on psychological and neural mechanisms as well as their sex differences. *Frontiers in Human Neuroscience* 12: 543, 2019.
 - 15) Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Kotozaki Y, Shinada T, Maruyama T, Sekiguchi A, Iizuka K, Yokoyama R, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Magistro D, Sakaki K, Jeong H, Sasaki Y, Kawashima R: Mean diffusivity related to collectivism among university students in Japan. *Scientific Reports* 9(1): 1338, 2019.
 - 16) Matsunaga Y, Tagaya H, Fukase Y, Hakamata Y, Murayama N, Kumagai Y, Kuroyama M: Effects of zolpidem/triazolam on cognitive performance 12 hours after acute administration 52: 213-218, 2018.
 - 17) 金 吉晴: 統合失調症の背後にあるトラウマに気づく. *臨床精神医学* 47(7): 769-774, 2018.

(2) 総説

- 1) 金 吉晴: 特集 複雑性 PTSD の理論と治療 特集にあたって. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 25, 2018.
- 2) 金 吉晴, 中山未知, 丹羽まどか, 大滝涼子: 複雑性 PTSD の診断と治療. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 27-35, 2018.
- 3) 丹羽まどか, 加茂登志子, 金 吉晴: 性的虐待による複雑性 PTSD 患者に対する STAIR/NST. *トラウマティック・ストレス* 16(1): 45-53, 2018.
- 4) 金 吉晴: 災害への備え・災害対策. *日本精神科病院協会雑誌* 3(11): 4-9, 2018.
- 5) 金 吉晴: 災害と精神医療. *精神医学* 60(12): 1375-1383, 2018.
- 6) 金 吉晴, 篠崎康子, 大沼麻実, 島津恵子, 大滝涼子: 災害時の社会心理支援. *精神保健研究* (65): 51-55, 2019.
- 7) 河西ひとみ, 船場美佐子, 富田吉敏, 藤井 靖, 関口 敦, 安藤哲也: 腸管ガスに関連する症状

を主訴とする病態と治療法の研究の動向. 心身医学 58(6) : 488-497, 2018.

- 8) 小原千郷 : 栄養指導に活かす行動医学の視点 集団指導のコツ. 臨床栄養 132(6) : 747-750, 2018.

(3) 著書

- 1) 堀 弘明 : 第 8 章 第 2 節 心的外傷後ストレス障害. 精神保健医療福祉白書編集委員会 編 : 精神保健医療福祉白書 2018/2019. 中央法規出版, 東京, pp159-159, 2018.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴 : こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総括・分担研究報告書, 平成 30 年度総括研究報告書. pp1-4, 2019.
- 2) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子 : 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者 : 金 吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp5-134, 2019.
- 3) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子 : 地域精神保健相談研修. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者 : 金 吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp155-286, 2019.
- 4) 金 吉晴 : こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総合研究報告書, 平成 28 年度～30 年度総合研究報告書. pp1-2, 2019.
- 5) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子 : 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者 : 金 吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp3-178, 2019.
- 6) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子 : 地域精神保健相談研修. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者 : 金 吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp203-334, 2019.
- 7) 金 吉晴 : 災害時のこころの支援に関する実務保健師の役割と求める能力、知識・技術・態度の検討—SOLAR プログラム (Skills for Life Adjustment and Resilience Program 生活への適応と回復スキルのためのプログラム) に関する研究—. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者 : 宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp21-29, 2019.
- 8) 宮崎美砂子, 奥田博子, 春山早苗, 石川麻衣, 金谷泰宏, 金 吉晴, 植村直子 : 実務保健師に求められる災害時の役割とコンピテンシー、その遂行に求められる知識・技術・態度—デルファイ法による災害対応経験のある自治体実務保健師等への意見調査. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者 : 宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp67-103, 2019.
- 9) 堀 弘明, 伊藤真利子, 林 明明, 丹羽まどか, 井野敬子, 今井理紗, 小川 成, 加茂登志子, 金 吉晴 : PTSD 女性患者における認知機能. メンタルヘルス岡本記念財団 2017 年度 (第 29 号)

研究助成報告集. pp101-106, 2018.

- 10) 堀 弘明, 中村誠二, 吉田冬子, 寺石俊也, 篠山大明, 太田深秀, 服部功太郎, 金 吉晴, 樋口輝彦, 功刀 浩: ストレス脆弱性についての表現型と末梢血トランスクリプトームの統合解析. 臨床薬理の進歩: pp140-151, 2018.
- 11) 安藤哲也: 平成 30 年度事業の活動と報告. 平成 30 年度精神保健対策費補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業報告書. pp22-27, 2018.3.
- 12) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子, 國重寛子: 摂食障害全国基幹センター活動報告書 平成 30 年度. 平成 30 年度精神保健対策費補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業報告書. pp32-48, 2018.
- 13) 堀 弘明: 遺伝子発現プロファイルによる精神疾患発症予測法開発. 上原記念生命科学財団研究報告集. pp156-156, 2018.
- 14) 関口 敦: 中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と、エビデンスに基づく患者ケア法の開発. 平成 30 年度厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業 総括・分担研究報告書. pp1-56, 2019.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 伊藤真利子, 堀 弘明, 金 吉晴: 健常成人女性における幼少期トラウマと認知バイアスの関連. 精神科臨床 Legato 5(1): 29-32, 2019.
- 2) 安藤哲也, 小原千郷 編: 厚生労働省補助金 摂食障害支援センター設置運営事業 摂食障害治療支援コーディネーターのための相談支援の手引き. 2019.
- 3) 安藤哲也: 摂食障害と地域連携 特集—摂食障害の今日的理解と治療 II. 精神科治療学 33(12): 1455-1461, 2018.
- 4) 大沼麻実: 【講義・ロールプレイ】心理社会的サポート. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「平成 30 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 (DVD) 4(15), 2019.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Hori H: Cognitive dysfunction in schizophrenia and other psychiatric disorders: potential role of inflammation. WFSBP2018KOBE, Hyogo, 2018.9.7-9.
- 2) 金 吉晴, 中山未知, 丹羽まどか: 複雑性 PTSD の診断評価について. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 3) 金 吉晴: PTSD の初期心理教育の重要性と効果. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21-23.
- 4) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法とトラウマからの回復. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
- 5) 金 吉晴: PTSD からの回復. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
- 6) 金 吉晴: 医療の現場で子どもと親子のトラウマやストレスに対処する—トラウマの医学と治療の現在を踏まえて. 第 31 回日本総合病院精神医学会総会, 東京, 2018.11.30-12.1.
- 7) 金 吉晴: トラウマ記憶と解離. 精神病理コロック名古屋, 愛知, 2019.1.26.
- 8) 井野敬子, 金 吉晴, 田中英三郎, 須賀楓介: トラウマ記憶を語ることで患者は何を得るのか—PE の作用機序の観点から—. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.
- 9) 金 吉晴: 回復された児童期のトラウマ記憶と PTSD からの回復. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.

- 10) 金 吉晴：複雑性 PTSD の認知行動療法。第 11 回日本不安症学会学術大会，愛知，2019.3.1-2.
- 11) 安藤哲也：我が国における摂食障害治療の研究の展開。第 59 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，愛知，2018.6.8-9.
- 12) 安藤哲也：摂食障害。シンポジウム 9 様々な依存症を通して考える、これからの依存症治療。平成 30 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，京都，2018.9.8-10.
- 13) 安藤哲也：摂食障害治療支援センター設置運営事業の今後の展開。第 22 回日本摂食障害学会学術集会，万国津梁館，沖縄，2018.11.8-9.
- 14) 安藤哲也：摂食障害治療支援センター設置運営事業について。日独交流プログラムシンポジウム。第 23 回日本心療内科学会総会・学術大会，北海道，2018.11.23-24.
- 15) 大沼麻実：3.11 を契機とする地域の健康福祉システムの再構築シンポジウム。東北福祉大学感性福祉研究所研究プロジェクト 3.11，山形，2018.7.5-6.
- 16) 小原千郷：インストラクションシリーズ 家族心理教育のエビデンス・ミニマルエッセンシャルズ。第 22 回日本摂食障害学会学術集会，沖縄，2018.11.8-9.
- 17) 林 明明：学習後ストレスが記憶に及ぼす影響～PTSD との関連～ シンポジウム SS-090 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション (8)：PTSD のメカニズムと治療。日本心理学会第 82 回大会，宮城，2018.9.25-27.
- 18) 丹羽まどか，加茂登志子：性的虐待といじめによる複雑性 PTSD 症例に対する STAIR/NST の実践。第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会，大分，2018.6.20-21.

(2) 一般演題

- 1) Ohnuma A, Kim Y: A Comparative Study on the Effects of One-Day Workshops and Lectures on Psychological First Aid. World Congress of Asian Psychiatry, Sydney, 2019.2.21-24.
- 2) Lin M, Tanno Y, Kim Y: Does post-learning stress selectively enhance emotional memory? 8th Annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, Sofia, 2018.9.5-8.
- 3) Funaba M, Kawanishi H, Fujii Y, Higami K, Tomita Y, Sekiguchi A, Ando T: The feasibility and effectiveness of cognitive-behavioral therapy using interoceptive exposure with psychoeducational video for irritable bowel syndrome. The 77th Annual Meeting of the American Psychosomatic Society, Vancouver, 2019.3.6-9.
- 4) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Ando T: Local statistical characteristics of physical activity may reflect momentary psychological stress in ambulatory settings. 77th Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, Vancouver, 2019.3.6-9.
- 5) Sekiguchi A, Sugawara A, Terasawa Y: Neural underpinnings of an effect of interoceptive training on decision making processing. The 77th Annual Meeting of the American Psychosomatic Society, Vancouver, 2019.3.6-9.
- 6) Miyamae M, Ito M, Yamashita Y, Yokoyama C, Komazawa A, Ueno O, Niwa M, Honda M, & Horikoshi M: A preliminary evaluation of the feasibility and utility of combined intervention of positive-valence system focused cognitive behavior therapy and inaudible high-frequency sound presentation for anhedonia. ADAA 39th Annual Conference, Chicago, 2019.3.28-31.
- 7) 堀 弘明，中村誠二，吉田冬子，寺石俊也，篠山大明，太田深秀，服部功太郎，金 吉晴，樋口輝彦，功刀 浩：ストレス脆弱性とうつ病についての表現型—末梢血トランスクリプトーム統合解析。第 15 回日本うつ病学会総会，東京，2018.7.27-28.
- 8) 大沼麻実，金 吉晴，神尾陽子，立森久照：東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査。第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会，大分，2018.6.9-10.

- 9) 林 明明, 金 吉晴: ストレスイベント体験有無の回答へ及ぼす調査方法による影響. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 10) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: 虚記憶へ及ぼす処理水準およびストレスの効果. 日本心理学会第 82 回大会, 宮城, 2018.9.25-27.
- 11) 安藤哲也, 菊地裕絵, 立森久照: 全国の病院の摂食障害受診患者数調査患者数調査—2 次調査による臨床疫学像. 第 22 回日本摂食障害学会学術集会, 沖縄, 2018.11.8-9.
- 12) 河西ひとみ, 関口 敦, 富田吉敏, 船場美佐子, 本田 暉, 樋上巧洋, 藤井 靖, 安藤哲也: 腸管ガスに関連する症状を主訴とする 患者への認知行動療法の無効例から考える 今後の臨床研究の方向性. 第 59 回 日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 愛知, 2018.6.8-9.
- 13) 菅原彩子, 小原千郷, 関口 敦, 安藤哲也, 鈴木真理: 日本の一般女性のやせやダイエットに伴う健康障害の認識度の検討. 第 22 回日本摂食障害学会学術集会, 沖縄, 2018.11.8-9.
- 14) 小原千郷, 北島智子, 高倉 修, 竹林淳和, 栗田大輔, 阿部麻衣, 遠藤由香, 河合啓介, 安藤哲也: 摂食障害治療支援センターへの相談事例からみた、患者と家族が抱く医療への不満・要望. 第 22 回日本摂食障害学会学術集会, 沖縄, 2018.11.8-9.
- 15) 菊地裕絵, 吉内一浩, 山本義春, 安藤哲也: アクチグラフを用いた日常生活下のストレスの客観指標の開発. 第 23 回日本心療内科学会学術大会, 北海道, 2018.11.23-24.
- 16) 中川誠秀, 竹内 光, 瀧 靖之, 野内 類, 事崎由佳, 品田貴光, 丸山 司, 関口 敦, 飯塚邦夫, 横山諒一, 山本悠貴, 塙 杉子, 荒木 剛, 宮内 誠 カルロス, Daniele Magistro, 榊 浩平, 鄭 嬌婷, 佐々木結咲子, 川島隆太: MRI 平均拡散率を用いた集団主義の神経基盤の同定. 第 114 回日本精神神経学会学術総会. 兵庫, 2018.6.21-23.
- 17) 宮前光宏, 横山知加, 伊藤正哉, 駒沢あさみ, 丹羽まどか, 堀越 勝: Clinician administered version of Snaith-Hamilton Pleasure Scale (SHAPS-C) 日本語版の作成: 第一報. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-24.

(3) 研究報告会

- 1) 安藤哲也: 摂食障害の多機関連携システムの開発. AMED 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発平成 30 年度第 1 回班会議, 東京, 2018.7.22.
- 2) 安藤哲也: 摂食障害の多機関連携システムの開発. AMED 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発平成 30 年度第 2 回班会議, 大阪, 大阪 2019.2.17.
- 3) 堀 弘明: PTSD と炎症系. 医療心理懇話会第 3 回集会, 東京, 2018.10.3-4.
- 4) 堀 弘明: ストレス対処方略が遺伝子発現プロファイルに与える影響の検討. パブリックヘルス科学研究助成金 2017 年度研究成果報告会, 東京, 2018.12.15.

(4) その他

- 1) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子: 全国基幹センターにおける平成 30 年度の事業計画の策定. 第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会, 東京, 2018.8.19.
- 2) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子: 基幹センター・支援センターの平成 30 年度の活動実績報告. 第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会, 東京, 2019.3.3.
- 3) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子: 第 1 回摂食障害治療支援センター連携ミーティングおよびランチミーティング. 東京, 2018.8.19.
- 4) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子: 第 2 回摂食障害治療支援センター連携ミーティングおよびランチミーティング. 東京, 2019.3.3.

C. 講演

- 1) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 北里大学医学部精神科学, 神奈川, 2018.4.12.
- 2) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 東京大学医学部付属病院精神神経科, 東京, 2018.5.28.

- 3) 金吉晴, 堀弘明: PTSD の病態と治療. 精神保健研究所, 東京, 2018.6.4.
- 4) 金吉晴: 子どもをめぐるトラウマとうつ. 第 46 回多摩精神科医療懇話会, 東京, 2019.3.7.
- 5) 金吉晴: PTSD からの回復とその経路. 京都精神科治療懇話会, 京都, 2019.3.9.
- 6) 大沼麻実: 災害支援の心理的支援～サイコロジカル・ファーストエイドについて～. 北九州市保健福祉局精神保健福祉センター, 福岡, 2018.8.9.
- 7) 大沼麻実: 災害時における保健医療の対応. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「平成 30 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会, 東京, 2018.12.2.
- 8) 大沼麻実: 災害時、あなたの心も守るために-知っておきたい被災者と支援者のメンタルヘルス. 南多摩保健所, 東京, 2019.3.5.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies 委員
- 3) 金吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 4) 金吉晴: 自殺予防学会 理事
- 5) 金吉晴: 日本不安症学会 理事
- 6) 安藤哲也: 日本摂食障害学会 理事
- 7) 安藤哲也: 日本心身医学会 評議員
- 8) 安藤哲也: 日本心療内科学会 評議員
- 9) 安藤哲也: 日本ストレス学会 評議員
- 10) 堀弘明: 日本生物学的精神医学会 評議員
- 11) 関口敦: 日本心身医学会 幹事
- 12) 小原千郷: 日本摂食障害学会 評議員

(3) 座長

- 1) 金吉晴, 加藤知子: シンポジウム A-1 複雑性 PTSD の概念と治療. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.
- 2) 金吉晴: 大会企画シンポジウム 2 ト라우マ被害と認知行動療法. 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
- 3) 金吉晴: ワークショップ 2 不安症治療の最適化を目指して～その異様性をいかに捉え、いかに治療に反映させるのか～. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.
- 4) 金吉晴: シンポジウム 2 PTSD の治療. 第 11 回日本不安症学会学術大会, 愛知, 2019.3.1-2.
- 5) 関口敦, 津田 彰: 口演 精神生理・検査・実験. 第 59 回日本心身医学会総会, 愛知, 2018.6.8-9.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board member
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board member
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

6) Hori H: Frontiers in Psychiatry, editorial board**E. 研修**

(1) 研修企画

1) Kim Y: Educational lecture and group discussion. Tokyo, 2018.5.30.

(2) 研修会講師

1) Kim Y: Japanese Experience of Disaster Mental Health Care. Educational lecture and group discussion. Tokyo, 2018.5.30.2) Lily Brown, 小西聖子, 金 吉晴: アドバンスト PE ワークショップ, 東京, 2018.7.6-7.3) 金 吉晴: 性犯罪被害者への精神的ケア (PTSD への対応). 性犯罪・性暴力被害者支援に関する研修会, 東京, 2018.11.17.4) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 東海林渉: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第 1 回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.5.23.5) 金 吉晴, 大沼麻実, 山崎千鶴子, 鈴江毅, 佐野弘枝, 鈴木吏良: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第 2 回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.11.28.6) 安藤哲也: 摂食障害病態・治療概論. 第 16 回摂食障害治療研修, 東京, 2018.8.28-31.7) 安藤哲也: 摂食障害病態・治療概論. 第 15 回摂食障害看護研修, 東京, 2018.10.31-11.2.8) 安藤哲也: CBT-E の概要とエビデンス、体形確認回避、体形比較と肥満感. 第 1 回神経性過食症に対する CBT-E 研修会, 神経性過食症に対する認知行動療法 CBT-E 簡易マニュアル運用のための研修会ワーキンググループ, 東京大学医学部, 東京, 2018.7.29.9) 安藤哲也: CBT-E の概要、体形確認回避、体形比較と肥満感. 第 2 回神経性過食症に対する CBT-E 研修会, 神経性過食症に対する認知行動療法 CBT-E 簡易マニュアル運用のための研修会ワーキンググループ, 東邦大学医学部, 東京, 2018.9.23.10) 安藤哲也: CBT-E の概要、体形確認回避、体形比較と肥満感. 第 3 回神経性過食症に対する CBT-E 研修会, 神経性過食症に対する認知行動療法 CBT-E 簡易マニュアル運用のための研修会ワーキンググループ, 九州大学医学部, 福岡, 2019.2.3.11) 安藤哲也: 摂食障害の最新の知見と摂食障害治療支援センター設置運営事業について. 第 28 回日本女性心身医学会研修会, 東京大学医学部, 東京, 2019.2.2.12) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 1, 東京, 2019.2.5.13) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2, 東京, 2019.2.19.14) 大沼麻実: リラクゼーション演習. 第 1 回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.5.24.15) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修. JAMSNET, シンガポール, 2018.6.1-3.16) 大沼麻実: PFA ファシリテーターブースター研修, みやぎ心のケアセンター, 宮城, 2018.6.29.17) 大沼麻実: PFA 一日研修会. 東北福祉大学感性福祉研究所研究プロジェクト 3.12, 山形, 2018.7.6.18) 大沼麻実: PFA 研修会. Ministry of Public health in Thailand, バンコク, 2018.8.2.19) 大沼麻実, 川原正人: 緊急時の心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド). 愛知県精神保健福祉センター災害時メンタルヘルス研修会, 愛知, 2018.10.16.20) 大沼麻実: 医学教養「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid」. 東京女子医科大学, 東京, 2018.10.19.21) 大沼麻実, 宮川治, 滝友秀, 吉元なるよ, 原田大幹, 諸見秀太, 高江洲慶: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 沖縄県立総合精神保健福祉センター, 沖縄, 2018.10.26.

- 22) 大沼麻実, 平安明, 赤嶺遼太郎, 井上幸代, 諏訪賀一, 滝 友秀:サイコロジカル・ファーストエイド研修. 沖縄県精神科病院協会, 沖縄, 2018.10.27.
- 23) 大沼麻実, 尾崎雅子: WHO 版 PFA 研修. さいたま市保健所, 埼玉, 2019.3.1.
- 24) 小原千郷: 家族支援. 第 16 回摂食障害治療研修, 東京, 2018.8.28-31.
- 25) 小原千郷: ケアとコミュニケーションのスキル. 第 15 回摂食障害治療研修, 東京, 2018.10.31-11.2.
- 26) 小原千郷: 家族にできるサポートを知ろう. 宮城県主催 摂食障害の家族教室, 宮城, 2019.1.15.
- 27) 大滝涼子: STAIR とリラクゼーション. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.5.

F. その他

5. 児童・予防精神医学研究部

I. 研究部の概要

現在、精神科医療の焦点は三次予防から二次予防、一次予防へと移行している。多くの精神疾患において、顕在発症してからの治療には限界があり、より早期の段階からの介入が、より効果が高いことが知られている。さらに、発症を未然に予防することが、国民のこころの健康の増進に寄与すると期待されている。特に、児童、青年、成人期を通して、精神疾患の発症前から切れ目のない包括的な対策が重要である。児童・予防精神医学研究部は、精神疾患の早期介入および予防、児童・青年期のメンタルヘルス、ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている。

早期介入・予防に向けた活動としては、統合失調症、気分障害、発達障害などにみられる認知機能障害を、1) これらの精神疾患の早期発見指標、2) 患者の QOL 向上に直結する治療の対象、などと位置付けた研究を展開している。具体的には、認知機能の精緻な評価法の開発と神経生物学的指標との関連や、薬物あるいはニューロモデュレーションを用いた認知機能障害に対する治療法の開発についてのトランスレーショナルな研究が挙げられる。

児童・青年期の精神科的障害については、発達障害における聴覚過敏の新たな神経生理学的マーカーの開発やコホート研究などを継続している。また、発達障害者支援法に沿った、エビデンスに基づく知識の普及および支援体制の社会実装を推進するため、多領域の専門家に向けた情報発信および啓発活動にも取り組んでいる。

人員構成は以下のとおりである。部長：住吉太幹、児童期精神保健研究室長：高橋秀俊（2019年1月まで）精神疾患早期支援・予防研究室長：松元まどか（2018年12月より）、科研費研究員：Andrew M. Stickley, 斎藤 彩, 末吉一貴, 科研費心理療法士（1名）：長谷川由美, 客員研究員（12名）：神尾陽子, 飛松省三, 池澤 聡, 中村 亨, 上野佳奈子, 熊崎博一, 青木保典, 石井良平, 住吉チカ, 樋口悠子, 川崎康弘, 鈴木道雄 併任研究員（2名）：立森久照, 菅原典夫, 研究生（7名）：荻野和雄, 海老島健, 岡 琢哉, 原口英之, 上田奈津貴, 近藤和樹, 成田 瑞（2018年7月まで）

II. 研究活動

1) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究）（住吉, 松元, 末吉, 長谷川）

経頭蓋直流刺激 (tDCS) を用いた統合失調症など精神疾患の治療法、および反応予測法の開発を展開している。これまで、統合失調症患者における認知機能および日常生活技能が tDCS により改善することや、精神病症状の改善効果の程度が、近赤外線スペクトロスコピーのデータにより予測できることを世界で初めて報告してきた。現在、統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験を、病院やトランスレーショナル・メディカルセンターの支援を受け行っている。

2) 統合失調症と精神病発症リスク状態における生物学的マーカーおよび介入法開発に関する研究（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究）（樋口, 住吉）

精神病発症リスク状態 (ARMS) 者を対象に、事象関連電位や赤血球膜の不飽和脂肪酸濃度などの神経生物学的指標を測定し、統合失調症への脆弱性や発症に関与するマーカーの探索を行っている。また、ARMS 者における精神病症状、認知機能、社会機能への有効な治療法開発にも取り組んでいる。2018年度は、事象関連電位であるミスマッチ陰性電位 (MMN) の縦断的データを解析し、ARMS 者のうち、後に統合失調症を発症する場合にのみ、MMN 振幅が継時的に減少することを発見した。以上の成果を国際学会のシンポジウムなどで発信した。

- 3) **Negative Valence Systems** を対象とした治療法創出と臨床評価法に関する研究 (精神・神経疾患研究開発費:「精神疾患の NVS (negative valence system) に対する治療法の開発」: 代表 中込和幸) (住吉, 松元, 末吉, 長谷川)

精神疾患を対象とし、以下を目的とする。1) NVS に関連する精神症状 (不安, うつ, 不満足など) および神経・社会認知機能の検討, 2) 疾患横断的に得られた臨床症状と、他の分担研究者が施行する脳機能など生物学的指標との関連の検討, 3) ニューロモデュレーションなどを用いた介入法の効果の検討, 4) NVS に関連する臨床症状の治療反応性を予測する指標の特定。2018 年度は、ニューロモデュレーションである経頭蓋直流刺激 (tDCS) の認知症あるいは MCI に対する効果についてメタ解析を行った。その結果、現時点では tDCS のこれらの疾患に対する有意な効果は見出せなかった (印刷中)。現在、統合失調症を含む早期精神病の社会認知機能障害に対する tDCS の効果について、系統的レビューによる検討を行っている。また、国内外の研究者と協働し、統合失調症の認知機能への tDCS の効果に関するメタ解析に着手した。

- 4) **睡眠障害における社会機能・認知機能評価手法の確立** (精神・神経疾患研究開発費:「社会機能/QOL 改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発」) (住吉, 松元, 末吉, 長谷川)

睡眠障害の診断治療ガイドラインの作成に資する、統合失調症の社会機能評価尺度の検証を行う。方法として、国内外で広く用いられている統合失調症患者の主観的社会機能 (=QOL) および客観的社会機能の尺度を用いる。まず、これまでに蓄積されているデータに基づき、睡眠の質との関連が示唆されている認知機能領域などとの関連を調べる。併せて当研究班の枠組みでデータ収集を前向きに行い、代表研究者および他の分担研究者が得た臨床的指標との関連を調べる。このようにして得られた知見により、統合失調症に認める睡眠障害の診断治療ガイドラインの作成を支援する。2018 年度は、面接法を用いた客観的評価法を用いる社会機能尺度である Specific Levels of Functioning Assessment Scale (SLOF) の得点について、患者による自己評価得点と評価者による客観的評価得点の差異が、患者の社会認知やメタ認知の障害と関連することを初めて示した。

- 5) **精神疾患ブレインバンクの推進** (精神・神経疾患研究開発費:「NCNP ブレインバンクの運営および生前登録システムの推進」: 代表 齊藤祐子) (住吉)

精神疾患の病態解明や根治的治療法の開発には、死後脳を用いた研究は重要である。本研究は、NCNP ブレインバンクへの精神疾患患者死後脳リソースの蓄積を促進することを目的とする。その一環として、精神疾患患者からの検体収集を促進する活動を実施している。2018 年度は、当センター病院に通院中の精神疾患患者からの生前同意登録について、4 名の患者より同意を得た。

- 6) **精神疾患レジストリの構築**: 第 2 層: 認知, 社会機能 (日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業:「精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究」: 代表 中込和幸) (住吉, 松元, 末吉, 長谷川)

精神科疾患レジストリ第 2 層 (認知, 社会機能) 評価項目の選定について、当研究班全体会議 (2 回) に加え、第 1,2 層グループ会議を、当該の他の分担研究者らとともに別途 4 回開催した。項目の選定に際しては、1) すでに妥当性が検討されている, 2) 著作権 (開発者からの同意) が得られている/使用許可が得られている, あるいは購入が可能である, 3) 第 2 層の他の領域の臨床指標の評価と併せた場合に、あまり長時間にならない (時間的な feasibility) について、特に配慮がなされた。以上の結果、認知, 社会機能評価には、Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia (面接法, 30 分), および Japanese Adult Reading Test (面接法, 5 分) を採用することになった。

7) 児童・思春期の心の健康問題支援のためのケースマネジメント手法の開発（日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業：「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」：代表 水野雅文）（住吉，末吉，長谷川）

児童・思春期の心の健康問題支援のためのケースマネジメント手法の開発に向け、「ケースマネジメントに関する好事例の収集，分析」および、「ケースマネジメント施行のための課題抽出，施行準備」について，関連文献や先行研究の調査を主に行った．その結果，複数の機関の関わり方や連携の仕方について記されたものは多数あるものの，個々のケースにおける連携について詳しく記された文献は，医学系専門誌においては5編のみで，それぞれ「精神科医を含む専門職チームによる学校へのアウトリーチ支援の報告」，「行為障害のある児童，青年に青年精神科医療における機関連携システムの可能性と問題点の検討」，「教育現場で見られやすい不適応状態と気分障害の関連性についての事例」，「東京都における関係機関と連携した総合的な不登校児童・生徒支援のモデル事業に精神科として参加した医師の事例」，「初回エピソード精神病の生徒を学校と医療機関とで協力してケアにあたったことで奏効した症例」についての検討であった．

8) 気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対する Lurasidone 併用療法 (ELICE-BD) の有効性評価のための 6 週間のランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験（代表 Lakshmi Yatham, University of British Columbia）（住吉，末吉）

双極性障害患者の認知機能障害は重大な臨床課題であり，気分状態の安定期であっても患者の機能に影響を及ぼす．本研究では，5カ国が参加する多施設国際共同の大規模なランダム化二重盲検プラセボ対照試験により，双極性障害患者の認知機能の改善に関する lurasidone の有効性を調査する．主要評価項目は，国際双極性障害学会の神経認知評価バッテリー (ISBD-BANC) の総合認知スコアのベースラインからエンドポイントの変化量を指標とした認知機能であり，二次的評価項目には，住吉らが開発した UCSD 日常生活技能簡易評価尺度 (UPSA-B) によるベースラインからエンドポイントの変化量を用いる．現在，本邦における5施設 (NCNP, 北海道大学, 藤田医科大学, 関西医科大学, 産業医科大学)，および米国 (Case Western Reserve University, Harvard University)，カナダ (University of British Columbia)，イギリス (King's College of London)，スペイン (University of Barcelona) において，被験者のリクルートが進行中である．

9) 超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究（ヤンセンファーマ社からの研究助成金研究）（代表 中込和幸）（住吉，松元）

睡眠異常は統合失調症の神経生物学的側面として重要な症状の1つであり，前駆期や発症早期に訴える症状としてしばしば認められ，顕在発症後も不眠は持続する事が多い．したがって，睡眠状態のモニタリングにより得られる睡眠異常に関するパラメータは UHR 該当者において初回エピソード精神病発現に関連するバイオマーカーとなる可能性がある．睡眠障害の他に考えられる発症予測バイオマーカーとしてサイトカインがあげられる．統合失調症における神経炎症および免疫遺伝学の関与，脳内でのサイトカインの異常が疾患と関連するとのデータが蓄積されている．以上より，本研究は以下などを目的とする；

1. 睡眠に関するパラメータについて，健常対照と比較して UHR 該当者で差異が見られるか評価する．また UHR 該当者での睡眠パターン障害と症状の重症度との関係性を評価する．
2. 健常対照者と比較して UHR 該当者でサイトカイン濃度が異なるか評価する．またサイトカイン濃度が症状の重症度および UHR 該当者における睡眠障害にどのように関連しているか評価する．
3. UHR 該当者においては，12ヶ月間の縦断的観察を行い，睡眠に関するパラメータおよびサイトカイン濃度の変化と陽性症状の重症度の関係性を探索し，UHR 該当者での精神病移行リスクパターンを同定する．

2018年度は、東邦大学、千葉大学、富山大学、奈良県立医大、久留米大学による被験者のリクルートおよび検体の測定が行われた。

10) 抗うつ薬の単剤治療を新たに開始する大うつ病患者を対象とした認知機能、抑うつ症状、社会機能の追跡調査に関する多施設共同前向き観察研究 (PERFORM-J) (武田薬品工業、ルンドベックとの共同研究) (住吉)

PERFORM-Jは、日常診療において抗うつ薬の単剤治療を新たに開始するMDD外来患者(初回治療か抗うつ薬の変更かは問わない)を対象とし、認知機能、抑うつ症状などの推移を6ヵ月追跡した多施設共同前向き観察研究である。2018年度は、大うつ病性障害(MDD)患者518例における認知機能、抑うつ症状および心理社会的機能の関連を、PERFORM-Jのベースラインデータを用いて横断的に検討した。その結果、抗うつ薬の単剤治療を新たに開始するMDD患者において、1)抑うつ症状が重度であるほど認知機能が低いこと、2)認知機能が低いほど心理社会的機能及びQOLが低いことが示唆された。これらの結果の演題発表に対し、第28回日本臨床精神神経薬理学会/第48回日本神経精神薬理学会・合同年会から優秀プレゼンテーション賞が授与された。現在、同知見の論文化とともに、PERFORM-Jの縦断的データの解析を行っている。

11) 発達障害の早期治療法の確立を目指す社会実装研究 (原口、齊藤、神尾)

本研究は、精神・神経疾患研究開発費(発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ:一戸班)の分担として行われた。精神保健研究所と所沢市の精研との間で締結した事業の一環としての社会実装研究であり、計画段階からNCNPの研究者や共同研究者(お茶の水女子大学菅原ますみ教授)だけでなく、さまざまなステークホルダーに参加して共同で検討し、合意をとりながら一歩ずつすすめてきている。30年度は、年1回の電子アンケート調査(所沢子どもの心の健康調査:Tokorozawa Survey of Children's Mental Health: TOUCH ME“タッチミー”)の実施に向けて、質問項目調査項目(フェイスシート項目15,子どもに関する項目150-200,親に関する項目130,子どもの年齢により多少変動あり)を確定し、プロトコルを決定し、入力システムをデザインし、予備調査を行ったのちに、本調査を開始した。

12) 児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究 (齊藤、神尾)

本研究は、長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)の分担として計画された。国際的に研究や臨床現場で広く用いられている児童青年の心の健康測定尺度(SDQ, Strengths and Difficulties Questionnaire:子どもの強さと困難さアンケート)を、日本の学校関係者が適切に定期健診などの機会を利用して教育現場に取り入れ、児童生徒やその保護者、教師から得られた質問紙データを正しく解釈し、教育現場のメンタルヘルス向上に役立てることを目的に、今年度は、昨年度実施した全国調査で得られた高校生データを用いて、日本の高校生のSDQの標準化を行った。結果は、学年による平均得点の差は、困難さについては、有意ではなかった。性による違いは、困難さの尺度では、情緒の問題以外の下位尺度および総合的困難さでは男児の方が有意に困難さが大きかった($p<.001$)。学校種別の比較では、総合的困難さおよび困難さの下位尺度得点は、定時制の方が有意に全日制よりも高かった($p<.001$)。総合的困難さは学校種別と性の交互作用が有意で($p<.05$)、全日制では男児が女児よりも困難度が高かったが($p<.001$)、定時制では男女で有意差はなかった。また、情緒の問題も学校種別と性の交互作用が有意で($p<.05$)、定時制での男女差は全日制での男女差よりも大きい、すなわち定時制女子生徒の情緒の問題は高かった。向社会的な行動は学校種別に有意差はなかった。これらを、親評定SDQ,教師評定SDQ,本人評定SDQの平均得点(標準偏差):学校種別,男女別をそれぞれ作表した。学校種別,評定者別のパーセンタイル表(度数分布表)も全体,男女別にそれぞれ作表した。得点の解釈としては、カットオフを使うことは推奨せず、パーセンタイル表を参照し、個々の生徒の、あるいは学校全体のメンタルヘルスに関するニーズを把握する手がかりとするように推奨することにした。作成したウェブを通し

て発信していく (<http://webpaper.work/SDQ/>)。

13) 聴覚情報処理に関わる神経生理学的基盤を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる病態解明に関する研究 (精神・神経疾患研究開発費) (「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」: 一戸班) (高橋, 神尾)

これまで客観的指標を用いた研究が乏しくエビデンスが不足している ASD の感覚過敏・鈍麻に関する新知見を提供し、プレスリリースも行い、複数のメディアからの注目も大きかった。高橋らは、本研究において、児童期から発症する精神医学的障害の生理学的な早期マーカーを同定することを目標として、コホート児童 (ASD・定型発達) を主な対象に、聴覚性驚愕反射 (Acoustic Startle Response: ASR) とその制御機構 (馴化・プレパルス抑制 [prepulse inhibition: PPI]) にかかわる生理学的指標と、臨床指標・遺伝子解析などの関連の発達的变化を、多次元的・総合的に評価した。これまでに ASR の潜時の延長や微弱な刺激に対する驚愕反応の亢進といった基礎的な指標が、自閉症特性と関連することを報告しているが、ASR の制御機構に関しても、ASR の馴化は対人的動機づけと、PPI は情緒・行動の問題などの臨床特性と関連することを見出した。低次知覚処理を反映する ASR の指標は高い再検査信頼性および安定性が示され、子どもの ASD 症状や併存する情緒・行動上の問題を予測するエンドフェノタイプとなる可能性が示唆された。さらに ASR の非定型性は標準化された尺度で評価した感覚過敏や感覚探究などの表現型と関連したことから、妥当性を支持する。ASR とその制御指標と、ASD 児の言語指標や運動指標などの関連を調べた結果、ASD 児の自然発話での韻律異常と関連することを見出し、ASR が反映する低次知覚処理の異常が ASD 児の言語発達の早期マーカーとなりうる可能性が示唆された。さらに低次知覚処理を反映する ASR およびアクチグラフで評価された身体活動動態のような単純な指標が ASD に関連する臨床指標の生物学的マーカーになる可能性を報告した。感覚過敏を ASD の QOL や適応困難の要因として注目することで、あらたな環境調整や治療法に結び付け可能性があり、建築、障害福祉、教育などの領域との共同研究への発展のステップとなった。

14) 発達障害児に対するグループベースの包括的なメンタルヘルスプログラムの有用性に関する研究 (岡, 荻野, 神尾)

本研究は日本生命財団「実践的研究助成」委託研究 (2 年委託) の初年度の研究で、不安軽減に効果の実証された認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) をベースにし、言語理解に困難のある発達障害児に適用可能な修正を加えた CBT プログラム (予備的研究で実施可能性は検証済み) を実際の臨床で小集団で実施した場合の有効性を「ランダム化比較試験」デザインにて検証するものである。H30 年度は 2 つの医療機関でリクルートを行い、第 1 クール、第 2 クールを実施した。H31 年度には第 3 クールを実施し、3 時点での不安症状評価をアウトカムに CBT の有効性を解析し、学会発表と論文発表の予定である。

15) 室内音環境と聴覚情報処理特性が子どものメンタルヘルスに及ぼす影響に関する研究 (文部科学科研挑戦的萌芽研究, 基盤 B) (高橋)

教室における音環境を測定し、子どもの発達特性・感覚特性および情緒・行動の問題との関連について評価し、音環境調整を行い、子どもの感覚特性に応じて音環境がメンタルヘルスにどのような影響をもたらすか調べることで、学校メンタルヘルス改善につながる最適な音環境対策を提案することを目的とする。将来的には、子どもから成人まで広く聴覚過敏・聴覚鈍麻を有する者に医療・教育・福祉の多領域において応用可能で、治療方法や環境調整法の開発に結び付けやすく、意義は大きい。東京都大島町の保育園の協力を得て、子どもの発達特性や感覚特性が、行動動態に与える影響について調査を行っている。

16) こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究, 発達障害モジュール開発 (厚生労働科学研究費補助金事業障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) H28-) (神尾)

発達障害支援において地域精神保健は柱組みとして重要である。それは発達障害の支援が早期から地域で、ライフステージに応じたニーズで提供されるべきであること、そして発達障害には高率にメンタルヘルスの問題が合併すること、メンタルヘルスの予防が発達障害の予後を改善すること、家族のメンタルヘルスへの対応は子育て支援と密接であること、などから明らかである。地域保健が発達障害にアプローチする方法は、現状では2つあり、全住民を対象とする乳幼児期の健診システムの整備、そして就学を終えた人々への個別対応がある。前者は国内外のエビデンスに裏付けられており、地域に実装するためには地域の精神保健の対応力の向上が必要である。一方、児童期に適切な支援を受けておらず、未診断の発達障害者の相談事例ではニーズが複雑で絡み合っていることが多く、相談窓口だけで対応できる問題でないことが多い。今年度は、幅広いニーズを持つ発達障害についての基礎知識と対応での原則に焦点を当てたモジュールを作成した (<https://www.ncnp.go.jp/nimh/behavior/phn/index.html>)。今後、地域の保健所がライフステージに応じて発達障害への支援を効果的に提供するためには、地域内の他機関との連携や、より早期からの支援システムの整備などが必要となる。そのためには、今後、成人来談者やそのニーズ、これまでの地域サービスの利用状況など、調査研究を実施して情報収集が必要である。地域の保健所が対応すべき発達障害者のニーズが明らかになれば、保健師に求められるスキルの向上に焦点化した研修計画が可能になると考えられる。

17) 自閉症スペクトラム障害における病態生理・発症脆弱性・治療反応性等の解明, および新規治療法・診断予防法の開発を目指した遺伝子解析研究

ASD 児の唾液, 毛髪 (毛根含む) から抽出された DNA, RNA について, ゲノムワイドな遺伝子多型解析や遺伝子発現解析などの手法を用いて, 感受性遺伝子群を同定する。当部ではデータを収集し, 解析は理研が担当しており, 現在, 解析中である。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 社会全体のニーズの高まりに対応して、全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座などで講演等を行った。また HP を通じて研究成果を逐次更新し、発信した。さらに、テレビ、新聞、雑誌等のメディア取材を通じ、精神疾患の予防や発達障害に関する知識の普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- 住吉と高橋は直接の指導により、2名の大学院生 (全員 児童精神科医) について学位を取得させた。
- 臨床実習の一環として防衛医大の臨床実習生に対する児童精神医学の講義を担当した。
- 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」をセンター外から第一線の研究者を講師に招き、3回開催し、内外の若手医師および若手研究者の多数参加を得、活発な意見交換を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

- 厚生労働省の発達障害者支援事業の一環として、全国のかかりつけ医対象の発達障害研修を実施する人材育成を目的として、2回の研修 (小児科医等を対象とする第13回発達障害早期総合支援研修, 小児科医, 内科医, 精神科医を対象とする第11回発達障害精神医療研修) を企画・実施し、両研修会において住吉, 神尾, 石飛, 原口が講義も担当した。事後も年間を

通して、発達障害早期総合支援研修の受講者から早期発見に関してメールでの問い合わせにも対応している。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- 高橋は、東京都大島町からの要請により、全島の発達障害の診断・治療・調査・研究を含めた支援体制の構築に向けて月1回赴いている。

(5) センター内における臨床的活動

- 住吉はセンター病院の業務として、統合失調症専門外来（初診；部長診を兼ねる）、および気分障害センター外来（初診）を月曜日に行っている。また、金曜日には再来患者を診察している。
- 高橋は、研究協力希望者に対する臨床活動および地域コホートの外来診療をセンター病院にて行った。

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kamio Y, Takei R, Stickley A, Nakagawa A: Impact of temperament and autistic traits on psychopathology in Japanese children: A nationwide cross-sectional study. *Personality and Individual Differences* 124: 1-7, 2018.
- 2) Haraguchi H, Stickley A, Saito A, Takahashi H, Kamio Y: Stability of autistic traits from 5 to 8 years of age among children in the general population. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 49(1): 324-334, 2019.
- 3) Oh H, Koyanagi A, DeVlyder JE, Stickley A: Seasonal allergies and psychiatric disorders in the United States. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 15(9): pii: E1965, 2018.
- 4) Oh H, Stickley A, Singh F, Koyanagi A: Self-reported asthma diagnosis and mental health: Findings from the Collaborative Psychiatric Epidemiology Surveys. *Psychiatry Research* 271: 721-725, 2019.
- 5) Stickley A, Leinsalu M, Ruchkin V, Oh H, Narita Z, Koyanagi A: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and perceived mental health discrimination in adults in the general population. *European Psychiatry* 56: 91-96, 2019.
- 6) Inoue Y, Howard A.G, Stickley A, Yazawa A, Gordon-Larsen P: Sex and racial/ethnic differences in the association between childhood attention-deficit/hyperactivity disorder symptom subtypes and body mass index in the transition from adolescence to adulthood in the United States. *Pediatric Obesity* 14(5): e12498, 2019.
- 7) Stickley A, Kuposov R, Koyanagi A, Inoue Y, Ruchkin V: ADHD and depressive symptoms in adolescents: the role of community violence exposure. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* 54(6): 683-691, 2019.
- 8) Stickley A, Oh H, Koyanagi A, Leinsalu M, Narita Z, Roberts B and McKee M: Perceived discrimination and psychological distress in nine countries of the former Soviet Union. *International Journal of Social Psychiatry* 65(2): 158-168, 2019.
- 9) Oh H, Waldman K, Stickley A, DeVlyder JE, Koyanagi A: Psychotic experiences and physical health conditions in the United States. *Comprehensive Psychiatry* 90: 1-6, 2019.

- 10) Oh H, Stickley A, Koyanagi A, Yau R, DeVlylder JE: Discrimination and suicidality among racial and ethnic minorities in the United States. *Journal of Affective Disorders* 245: 517-523, 2019.
- 11) Narita Z, Inagawa T, Stickley A, Sugawara N: Physical activity for diabetes-related depression: A systematic review and meta-analysis. *Journal of Psychiatric Research* 113: 100-107, 2019.
- 12) Koyanagi A, Veronese N, Stubbs B, Vancampfort D, Stickley A, Oh H, Shin J, Jackson S, Smith L, Lara E: Food insecurity is associated with mild cognitive impairment among middle-aged and older adults in South Africa: Findings from a nationally representative survey. *Nutrients* 11(4): pii: 749, 2019.
- 13) Narita Z, Sumiyoshi T: Successful treatment with Olanzapine of psychosis in dentatorubral-pallidoluyisian atrophy: A case report. *Clinical Psychopharmacology and Neuroscience* 16(2): 221-223, 2018.
- 14) 西山志満子, 住吉太幹, 樋口悠子, 鈴木道雄: 認知行動療法により症状および社会認知機能の改善とともに神経認知機能が改善した Ultra High Risk for Psychosis の一例. *日本社会精神医学会雑誌* 27(2): 123-132, 2018.
- 15) Sumiyoshi T, Watanabe K, Noto S, Sakamoto S, Moriguchi Y, Okamoto S: Prospective epidemiological research on functioning outcomes related to major depressive disorder in Japan (PERFORM-J): Protocol for a prospective cohort study. *JMIR Research Protocols* 7(6): e161, 2018.
- 16) Narita Z, Noda T, Setoyama S, Sueyoshi K, Inagawa T, Sumiyoshi T: The effect of transcranial direct current stimulation on psychotic symptoms of schizophrenia is associated with oxy-hemoglobin concentrations in the brain as measured by near-infrared spectroscopy: A pilot study. *Journal of Psychiatric Research* 103: 5-9, 2018.
- 17) Ueda N, Maruo K, Sumiyoshi T: Positive symptoms and time perception in schizophrenia: A meta-analysis. *Schizophrenia Research. Cognition* 13(13): 3-6, 2018.
- 18) Nishida K, Toyomaki A, Koshikawa Y, Niimura H, Morimoto T, Tani M, Inada K, Ninomiya T, Hori H, Manabe J, Katsuki A, Kubo T, Shirahama M, Kohno K, Kinoshita T, Kusumi I, Iwanami A, Ueno T, Kishimoto T, Terao T, Nakagome K, Sumiyoshi T: Social cognition and metacognition contribute to accuracy for self-evaluation of real-world functioning in patients with schizophrenia. *Schizophrenia Research* 202: 426-428, 2018.
- 19) Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Shiino T, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Genetic overlap between general cognitive function and schizophrenia: A review of cognitive GWASs. *International Journal of Molecular Sciences* 19(12): pii: 3822, 2018.
- 20) Sumiyoshi C, Fujino H, Yamamori H, Kudo N, Azechi H, Fujimoto M, Yasuda Y, Ohi K, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting work outcome in patients with schizophrenia: Influence of IQ decline. *Schizophrenia Research* 201: 172-179, 2018.
- 21) Ogino K, Takahashi H, Nakamura T, Kim J, Kikuchi H, Nakahachi T, Ebishima K, Yoshiuchi K, Ando T, Sumiyoshi T, Stickley A, Yamamoto Y, Kamio Y: Negatively Skewed Locomotor Activity Is Related to Autistic Traits and Behavioral Problems in Typically Developing Children and Those With Autism Spectrum Disorders. *Frontiers in Human Neuroscience* 12: 518, 2018. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2018.00518>
- 22) Stickley A, Koyanagi A, Takahashi H, Ruchkin V, Inoue Y, Yazawa A, Kamio Y: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and happiness among adults in the general population. *Psychiatry Research* 265: 317-323, 2018.

- 23) Takahashi H, Nakamura T, Kim J, Kikuchi H, Nakahachi T, Ishitobi M, Ebishima K, Yoshiuchi K, Ando T, Stickley A, Yamamoto Y, Kamio Y: Acoustic hyper-reactivity and negatively skewed locomotor activity in children with autism spectrum disorders: An exploratory study. *Frontiers in Psychiatry* 9: 355, 2018.
- 24) Stickley A, Tachimori H, Inoue Y, Shinkai T, Yoshimura R, Nakamura J, Morita G, Nishii S, Tokutsu Y, Otsuka Y, Egashira K, Inoue M, Kubo T, Tesen H, Takashima N, Tominaga H, Koyanagi A, Kamio Y: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and suicidal behavior in adult psychiatric outpatients. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 72(9): 713-722, 2018.
- 25) Takahashi H, Nakahachi T, Stickley A, Ishitobi M, Kamio Y: Relationship between physiological and parent-observed auditory over-responsiveness in children with typical development and those with autism spectrum disorders. *Autism* 22: 291-298, 2018.
- 26) Ebishima K, Takahashi H, Stickley A, Nakahachi T, Sumiyoshi T, Kamio Y, Relationship of the Acoustic Startle Response and Its Modulation to Adaptive and Maladaptive Behaviors in Typically Developing Children and Those With Autism Spectrum Disorders: A Pilot Study. *Frontiers in Human Neuroscience*, 2019. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2019.00005/>
- 27) 秋山 剛, 神尾陽子, 吉田友子, 福田真也, 田川杏那, 増田紗弓, 高橋秀俊, ピーター・バーニック, 尾崎紀夫: 自閉スペクトラム特性を有する患者へのリワーク支援の手引きの作成と有用性調査. *精神神経学雑誌* 120(6) : 469-487, 2018.

(2) 総説

- 1) Miskowiak K W, Burdick K E, Martinez-Aran A, Bonnin C M, Bowie C R, Carvalho A F, Gallagher P, Lafer B, López-Jaramillo C, Sumiyoshi T, McIntyre R S, Schaffer A, Porter R J, Purdon S, Torres I J, Yatham L N, Young A H, Kessing L V, Vieta E: Assessing and addressing cognitive impairment in bipolar disorder: the International Society for Bipolar Disorders Targeting Cognition Task Force recommendations for clinicians. *Bipolar Disorders* 20(3): 184-194, 2018.
- 2) 住吉太幹: 気分障害の認知機能障害の臨床的意義と治療. *臨床精神薬理* 22(01) : 3-8, 2019.
- 3) Burdick KE, Millett CE, Del Mar Bonnin C, Bowie C, Carvalho AF, Eyler LT, Gallagher P, Harvey P, Kessing LV, Lafer B, Langenecker SA, Lewandowski KE, López-Jaramillo C, Marshall DF, Martinez-Aran A, McInnis M, McIntyre R, Miskowiak KW, Porter RJ, Purdon S, Ryan KA, Sumiyoshi T, Torres IJ, Van Rheenen TE, Vieta E, Woodward N, Yatham LN, Young A: The International Consortium Investigating Neurocognition in Bipolar Disorder (ICONIC-BD). *Bipolar Disorders* 21(1): 6-10, 2019.
- 4) 末吉一貴, 山田悠至, 住吉太幹: 精神疾患における神経認知、社会認知の障害の意義. *精神科* 34(3) : 209-213, 2019.
- 5) 住吉太幹, 長谷川由美: 心理社会支援の対象となる認知機能障害. *精神保健研究* 32(1) : 57-60, 2019.
- 6) 高橋秀俊, 神尾陽子: 自閉スペクトラム症の感覚の特徴. *精神神経学雑誌* 120(5) : 369-383, 2018.

(3) 著書

- 1) Koukkou M, Koenig T, Banninger A, Rieger K, Hernandez LD, Higuchi Y, Sumiyoshi T: Neurobiology of schizophrenia. Vignapiano A, Giordano GM, Amodio A, Mucci A, eds.: *Advances in Psychiatry*, Springer, Berlin, 2018.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 高橋秀俊: 書評 精神障がいのある親に育てられた子どもの語り—困難の理解とリカバリーへの支援—. 精神神経学雑誌 120(5): 461-461, 2018.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 樋口悠子, 住吉太幹, 西山志満子, 鈴木道雄: 脳波による精神疾患診断へのアプローチ. 第 114 回日本精神神経学会, 兵庫, 2018.6.21-23.
- 2) 住吉太幹: 双極性障害の認知機能障害の評価と治療. 国際双極性障害学会 Cognition Task Force が目指すもの. 第 15 回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.27-28.
- 3) 住吉太幹: RDoC の発展の可能性について. 第 38 回日本精神科診断学会, 埼玉, 2018.10.18-19.
- 4) 樋口悠子, 住吉太幹, 西山志満子, 川崎康弘, 鈴木道雄: 臨床神経生理学が精神疾患の治療において果たす役割—update—. 第 48 回日本臨床神経生理学会, 東京, 2018.11.8-10.
- 5) 樋口悠子, 住吉太幹, 西山志満子, 立野貴大, 鈴木道雄: ミスマッチ陰性電位の精神科臨床応用. 第 48 回日本臨床神経生理学会, 東京, 2018.11.9-10.
- 6) 住吉太幹: 気分障害のアンメットニーズ. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会/第 48 回日本神経精神薬理学会・合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 7) 高橋秀俊: 自閉スペクトラム症の感覚処理特性の生理学的基盤と sensory friendly な取組について. 日本 LD 学会第 27 回大会, 新潟, 2018.11.24.
- 8) 小塩靖崇, 住吉太幹, 藤井千代, 水野雅文: 学校におけるメンタルヘルス教育のあり方. シンポジウム「好事例を通して考える学校教育と精神保健医療との連携」. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.1-2.
- 9) Sumiyoshi T: Intervention into cognitive and social dysfunction in psychosis and mood disorders; an update. In Special Lecture “Recent update in management of psychosis and mood disorders”. Asian Congress of Neuropsychopharmacology – AsCNP-ASEAN International Congress of Neuropsychopharmacology, Yogyakarta, Indonesia: 2019.2.28-3.2.
- 10) Sumiyoshi T: Early intervention for psychosis; Psychoneurobiological perspective. In Symposium “Developmental Views on Early Intervention for Psychiatric Conditions”. Asian Congress of Neuropsychopharmacology – AsCNP-ASEAN International Congress of Neuropsychopharmacology, Yogyakarta, Indonesia: 2019.2.28-3.2.
- 11) Matsumoto M: Development of Translatable Brain Markers for the Prevention of Psychosis. In Symposium “Developmental Views on Early Intervention for Psychiatric Conditions”. Asian Congress of Neuropsychopharmacology - AsCNP-ASEAN International Congress of Neuropsychopharmacology, Yogyakarta, Indonesia: 2019.2.28-3.2.

(2) 一般演題

- 1) 齊藤 彩, 原口英之, 高橋秀俊, 住吉太幹, 神尾陽子: 就学前の自閉症的行動特性は 10 歳時の情緒・行動の問題を予測するか—地域コホート研究による縦断的検討—. 日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会, 東京, 2018.8.26-27.
- 2) 齊藤 彩, 田中麻未, 菅原ますみ: 思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連における遺伝と環境. 日本教育心理学会第 60 回総会, 東京, 2018.9.15-17.

- 3) Narita Z, Noda T, Setoyama S, Sueyoshi K, Inagawa T, Sumiyoshi T: Prediction of response to transcranial direct current stimulation by near-infrared spectroscopy in schizophrenia. International Congress of Neuropsychopharmacology - 31st World Congress, Vienna, 2018.6.16-19.
- 4) Higuchi Y, Sumiyoshi T, Nishiyama S, Takahashi T, Suzuki M: Mismatch negativity as a neurophysiological biomarker in schizophrenia. World Congress of Biological Psychiatry - WFSBP Asia Pacific Regional Congress of Biological Psychiatry, Kobe, 2018.9.7-9.
- 5) Sumiyoshi T: Predictive accuracy for work outcome in patients with schizophrenia; Effect of functioning levels. Cognition in Schizophrenia 2018. A Satellite Meeting of the Schizophrenia International Research Society, Florence, 2018.4.4-8.
- 6) Narita Z, Noda T, Setoyama S, Sueyoshi K, Inagawa T, Sumiyoshi T: Prediction of response to transcranial direct current stimulation by near-infrared spectroscopy in schizophrenia. International Congress of Neuropsychopharmacology - 31st World Congress, Vienna: 2018.6.16-19.
- 7) 椎野智子, 住吉チカ, 藤野陽生, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 大井一高, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症における認知機能障害評価法の臨床応用. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.1-2.
- 8) 樋口悠子, 住吉太幹, 西山志満子, 立野貴大, 高橋 努, 鈴木道雄: 持続長ミスマッチ陰性電位の統合失調症発症前後における縦断的变化. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.1-2.
- 9) 大町佳永, 住吉太幹: 初回エピソード精神病に対し抗精神病薬は減量・中止すべきか; 認知機能および社会機能的予後についての検討. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.1-2.
- 10) 高橋秀俊, 上野佳奈子, 渡邊真之佑, 中村 亨, 山本義春, 神尾陽子: 室内音環境が子どものメンタルヘルスに与える影響. こども環境学会 2018 年大会, 埼玉, 2018.5.20.
- 11) 高橋秀俊, 上野佳奈子, 中村 亨, 山本義春: 教室内音環境が子どものメンタルヘルスに与える影響. 第 49 回全国学校保健・学校医大会/東京都医師会学校医連絡会, 鹿児島, 2018.10.27.
- 12) 高橋秀俊, 海老島健, 原口英之, 住吉太幹: 自閉スペクトラム児における ヒト粘膜常在細菌と臨床指標との関連. 日本児童青年精神医学会第 59 回総会, 東京, 2018.10.12.
- 13) 高橋秀俊, 海老島健, 原口英之, 住吉太幹: 保育室・教室内の音環境が子どものメンタルヘルスに与える影響. 第 59 回日本児童青年精神医学会, 東京, 2018.10.11.
- 14) 高橋秀俊, 上野佳奈子, 渡邊真之佑, 中村 亨, 山本義春, 神尾陽子: 室内音環境が子どものメンタルヘルスに与える影響. こども環境学会 2018 年大会, 埼玉, 2018.5.20.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 高橋秀俊: 発達障害の子どもの成育環境: 自閉スペクトラム症の感覚過敏の問題と音環境に対する多領域からの支援を中心に. 日本学術会議 心理学・教育学委員会・臨床医学委員会・健康・生活科学委員会・環境学委員会・土木工学・建築学委員会合同子どもの成育環境分科会 (第 24 期・第 6 回), 東京, 2019.1.16.

C. 講演

- 1) 住吉太幹: 知ろう! 気付こう! 統合失調症～早期診断と治療～. NCNP 市民公開講座, 東京, 2018.12.15.
- 2) 高橋秀俊: 自閉スペクトラム症の感覚の特徴: 早期発見から就労支援まで. 平成 30 年度 高知

大学大学院医学専攻 DC セミナー，高知，2018.5.16.

- 3) 高橋秀俊：クワイエットアワーについて．内閣府 平成 30 年度障害者週間「連続セミナー」，東京，2018.12.7.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 住吉太幹：第 28 回日本臨床精神神経薬理学会/第 48 回日本神経精神薬理学会・合同年会，東京，2018.11.14-16.
- 2) 住吉太幹：第 22 回日本精神保健・予防学会，東京，2018.12.1-2.

(2) 学会役員

- 1) Sumiyoshi T：World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Chair,
- 2) Sumiyoshi T：EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
- 3) 住吉太幹：Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会，理事
- 4) 住吉太幹：日本神経精神薬理学会，評議員，トランスレーショナル・メディカルサイエンス委員会委員，編集委員
- 5) 住吉太幹：日本生物学的精神医学会，評議員
- 6) 住吉太幹：日本臨床精神神経薬理学会，評議員
- 7) 住吉太幹：日本脳科学会，評議員
- 8) 住吉太幹：日本統合失調症学会，評議員
- 9) 住吉太幹：日本精神保健・予防学会，評議員

(3) 座長

- 1) Sumiyoshi T, Symposium “Mismatch negativity as a neurophysiological biomarker in schizophrenia”; World Congress of Biological Psychiatry - WFSBP Asia Pacific Regional Congress of Biological Psychiatry, Kobe, 2018.9.8 (September 7- 9).
- 2) Sumiyoshi T: Symposium “Developmental Views on Early Intervention for Psychiatric Conditions”. Asian Congress of Neuropsychopharmacology – AsCNP-ASEAN International Congress of Neuropsychopharmacology, Yogyakarta, Indonesia, 2019.3.1 (February 28 – March 2).
- 3) 住吉太幹：CNP/NP 合同シンポジウム「気分障害のアンメットニーズ」．第 28 回日本臨床精神神経薬理学会/第 48 回日本神経精神薬理学会・合同年会，東京，2018.11.16(2018.11.14-16).
- 4) 住吉太幹：NP/日本神経科学会合同シンポジウム「神経炎症に対するニューロサイエンスと精神薬理学の協働」．第 28 回日本臨床精神神経薬理学会/第 48 回日本神経精神薬理学会・合同年会，東京，2018.11.15 (2018.11.14-16).
- 5) 住吉太幹：特別講演．統合失調症は治るのか？～リカバリー概念～．第 22 回日本精神保健・予防学会，東京，2018.12.1 (2018.12.1-2).
- 6) 住吉太幹：シンポジウム．発達障害に対する早期介入と支援．第 22 回日本精神保健・予防学会，東京，2018.12.2 (2018.12.1-2).

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor
- 2) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
- 3) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member
- 4) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Editorial Board Member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 住吉太幹, 高橋秀俊 : 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 13 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2018.7.25.
- 2) 住吉太幹, 高橋秀俊 : 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 11 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2018.10.4.
- 3) 住吉太幹, 高橋秀俊 : 平成 30 年度 第 1 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2018.5.7.
- 4) 住吉太幹, 高橋秀俊 : 平成 30 年度 第 2 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2018.9.4.
- 5) 住吉太幹, 松元まどか : 平成 30 年度 第 3 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2019.3.15.

(2) 研修会講師

- 1) 神尾陽子 : 発達障害のある児の早期発見と早期支援の意義. 第 13 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2018.7.25.
- 2) 原口英之 : 自閉症スペクトラムの早期兆候のアセスメント. 第 13 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2018.7.25.
- 3) 住吉太幹 : 発達障害の発達の道筋 : 子どもからおとなへ. 第 11 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2018.10.4.
- 4) 熊崎博一 : 自我々はロボットとどのように付き合うべきか. 第 1 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2018.5.7.
- 5) 松元まどか : 自己形成の脳内機構と精神疾患—トランスレータブル脳指標の開発と早期介入、予防にむけて—. 第 2 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2018.9.4.
- 6) 樋口悠子 : 統合失調症および早期介入研究における電気生理学的所見の有用性. 第 3 回 児童・予防精神医学研究会, 東京, 2019.3.15.

F. その他

6. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的には、我が国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床研究を実施するとともに、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。

精神薬理研究部には、分子精神薬理研究室と向精神薬開発研究室の2室が所属している。平成30年度常勤研究員は部長の山田光彦、分子精神薬理研究室長の三輪秀樹、向精神薬研究開発室長の古家宏樹の3名であった。流動研究員は、國石 洋、小林桃子の2名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は川島義高（日本学術振興会特別研究員）であった。併任研究員は、野田隆政（国立精神・神経医療研究センター病院第二精神科医長）であった。客員研究員は、稲垣正俊（島根大学医学部精神科医学講座教授）、岡淳一郎（東京理科大学薬学部）、亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授）、神庭重信（九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授）、白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者）、高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授）、中嶋智史（広島修道大学健康科学部心理学科講師）、西川 徹（昭和大学医学部薬理学講座医科薬理学部門客員教授）、古川壽亮（京都大学大学院医学研究科教授）、吉澤一巳（東京理科大学薬学部疾患薬理学研究室講師）、米本直裕（ファイザー株式会社アウトカム&エビデンスグループ）であった。研究生は、請園正敏、遠藤 香、大槻露華、川島友子、後藤玲央、高橋 弘、西岡玄太郎、渡辺恭江、早田暁伸、中武優子、萱島修平、実習生は、石井香織であった。科研費研究助手は、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

1) 分子精神薬理研究室による研究

分子精神薬理研究室では、光遺伝学等の最先端の神経回路研究手法を駆使して、精神疾患の病態研究を進めている。対象となる精神疾患は、統合失調症、大うつ病、PTSD等である。研究成果は、基礎研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

2) 向精神薬研究開発室による研究

向精神薬研究開発室では、新規向精神薬候補化合物の基礎研究開発に加えて、ドラッグリポジショニング研究（他の疾患を適応症として有する薬剤を新規向精神薬として新たに開発する研究）を推進している。対象となる薬剤は、ヒトにおける安全性や薬物動態が既に解明され製造販売承認されているため、研究開発コストを格段に低下させることができる。

III. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

市民講座、保健所、地方自治体等による講演会、マスメディア等にて普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- ・東京理科大学薬学部より学部生及び大学院生を受け入れ指導した。
- ・日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医、日本臨床薬理学会認定医として、昭和大学において精神医学の卒前卒後の教育活動を実施。（山田光彦）
- ・東京工業大学において生命理工オープンイノベーションハブ（三輪秀樹）
- ・青山学院大学教育人間学部「心理検査演習」非常勤講師（川島義高）
- ・明治学院大学心理学部「神経心理学」非常勤講師（川島義高）

- ・和光大学現代人間学部「健康・医療心理学」非常勤講師（川島義高）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・厚生労働省自殺未遂者再企図防止事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・大型臨床試験 ACTION-J study（自殺企図の再発防止に対する複合的ケース・マネージメントの効果を検証した多施設共同無作為化比較試験）の成果を元に，厚生労働省は平成 28 年度の診療報酬改定で「自殺企図後の患者に対する継続的な指導の評価」を新設した。平成 30 年度は算定要件となる継続支援研修を厚生労働省による事業として開催した。

(5) センター内における臨床的活動

- ・日本臨床精神神経薬理学会専門医制度の研修施設である NCNP 病院において専門医・指導医として，病院レジデント等への教育／指導を実施。（山田光彦）

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Saitoh A, Tominaga H, Ogawa Y, Irukayama-Tomobe Y, Yamada M, Yanagisawa M, Nagase H: Effects of the delta opioid receptor agonist KNT-127 on electroencephalographic activity in mice. *Pharmacol Rep* 70(2): 350-354, 2018.
- 2) Levis B, Benedetti A, Riehm KE, Saadat N, Levis AW, Azar M, Rice DB, Chiovitti MJ, Sanchez TA, Cuijpers P, Gilbody S, Ioannidis JPA, Kloda LA, McMillan D, Patten SB, Shrier I, Steele RJ, Ziegelstein RC, Akena DH, Arroll B, Ayalon L, Baradaran HR, Baron M, Beraldi A, Bombardier CH, Butterworth P, Carter G, Chagas MH, Chan JCN, Cholera R, Chowdhary N, Clover K, Conwell Y, de Man-van Ginkel JM, Delgadillo J, Fann JR, Fischer FH, Fischler B, Fung D, Gelaye B, Goodyear-Smith F, Greeno CG, Hall BJ, Hambridge J, Harrison PA, Hegerl U, Hides L, Hobfoll SE, Hudson M, Hyphantis T, Inagaki M, Ismail K, Jetté N, Khamseh ME, Kiely KM, Lamers F, Liu SI, Lotrakul M, Loureiro SR, Löwe B, Marsh L, McGuire A, Mohd Sidik S, Munhoz TN, Muramatsu K, Osório FL, Patel V, Pence BW, Persoons P, Picardi A, Rooney AG, Santos IS, Shaaban J, Sidebottom A, Simning A, Stafford L, Sung S, Tan PLL, Turner A, van der Feltz-Cornelis CM, van Weert HC, Vöhringer PA, White J, Whooley MA, Winkley K, Yamada M, Zhang Y, Thombs BD: Probability of major depression diagnostic classification using semi-structured versus fully structured diagnostic interviews. *Br J Psychiatry* 212(6): 377-385, 2018.
- 3) Kato T, Furukawa TA, Mantani A, Kurata K, Kubouchi H, Hirota S, Sato H, Sugishita K, Chino B, Itoh K, Ikeda Y, Shinagawa Y, Kondo M, Okamoto Y, Fujita H, Suga M, Yasumoto S, Tsujino N, Inoue T, Fujise N, Akechi T, Yamada M, Shimodera S, Watanabe N, Inagaki M, Miki K, Ogawa Y, Takeshima N, Hayasaka Y, Tajika A, Shinohara K, Yonemoto N, Tanaka S, Zhou Q, Guyatt GH, SUN©D Investigators: Optimising first- and second-line treatment strategies for untreated major depressive disorder - the SUN©D study: a pragmatic, multi-centre, assessor-blinded randomised controlled trial. *BMC Medicine* 16(1): 103, 2018.
- 4) Sugiyama A, Yamada M, Saitoh A, Nagase H, Oka JI, Yamada M: Administration of a delta

- opioid receptor agonist KNT-127 to the basolateral amygdala has robust anxiolytic-like effects in rats. *Psychopharmacology (Berl)* 235(10):2947-2955, 2018.
- 5) Kawanishi C, Ishii T, Yonemoto N, Yamada M, Tachikawa H, Kishimoto T, Tsujii N, Hashimoto S, Kinoshita T, Mimura M, Okubo Y, Otsuka K, Yoshimura R: Protocol for a prospective multicentre registry cohort study on suicide attempters given the assertive case management intervention after admission to an emergency department in Japan: post-ACTION-J Study (PACS). *BMJ Open* 8(9): e020517, 2018.
 - 6) Saitoh A, Soda A, Kayashima S, Yoshizawa K, Oka JI, Nagase H, Yamada M: A delta opioid receptor agonist, KNT-127, in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuates glial glutamate transporter blocker-induced anxiety-like behavior in mice. *J Pharmacol Sci* 138(3): 176-183, 2018.
 - 7) Yonemoto N, Kawashima Y, Endo K, Yamada M: Implementation of gatekeeper training programs for suicide prevention in Japan: a systematic review. *Int J Ment Health Syst* 13:2, 2019.
 - 8) Inagaki M, Kawashima Y, Yonemoto N, Yamada M: Active contact and follow-up interventions to prevent repeat suicide attempts during high-risk periods among patients admitted to emergency departments for suicidal behavior: a systematic review and meta-analysis. *BMC Psychiatry* 19(1):44, 2019.
 - 9) Yonemoto N, Kawashima Y, Endo K, Yamada M: Gatekeeper training for suicidal behaviors: A systematic review. *J Affect Disord* 246: 506-514, 2019.
 - 10) Gotoh L, Yamada M, Hattori K, Sasayama D, Noda T, Yoshida S, Kunugi H, Yamada M: Levels of lysophosphatidic acid in cerebrospinal fluid and plasma of patients with schizophrenia. *Psychiatry Res* 273: 331-335, 2019.
 - 11) Sugiyama A, Yamada M, Furuie H, Gotoh L, Saitoh A, Nagase H, Oka JI, Yamada M: Systematic administration of a delta opioid receptor agonist KNT-127, facilitates extinction learning of fear memory in rats. *J Pharmacol Sci* 139(3): 174-179, 2019.
 - 12) Mori-Yoshimura M, Mizuno Y, Yoshida S, Minami N, Yonemoto N, Takeuchi F, Nishino I, Murata M, Takeda S, Takahashi Y, Kimura E: Social involvement issues in patients with Becker muscular dystrophy: A questionnaire survey of subjects from a patient registry. *Brain Dev* 40(4): 268-277, 2018.
 - 13) Mori-Yoshimura M, Mitsuhashi S, Nakamura H, Komaki H, Goto K, Yonemoto N, Takeuchi F, Hayashi YK, Murata M, Takahashi Y, Nishino I, Takeda S, Kimura E: Characteristics of Japanese Patients with Becker Muscular Dystrophy and Intermediate Muscular Dystrophy in a Japanese National Registry of Muscular Dystrophy (Remudy): Heterogeneity and Clinical Variation. *J Neuromuscul Dis* 5(2):193-203, 2018.
 - 14) Furukawa TA, Imai H, Horikoshi M, Shimodera S, Hiroe T, Funayama T, Akechi T: FLATT Investigators: Behavioral activation: Is it the expectation or achievement, of mastery or pleasure that contributes to improvement in depression? *J Affect Disord* 238: 336-341, 2018.
 - 15) Furukawa TA, Kato T, Akechi T, Shimodera S, Okada N, Yanai I, Ozaki K, Kinou K: Dropouts in an Antidepressant Trial: How Do They Fare Afterwards? *Psychother Psychosom* 87(6): 380-382, 2018.
 - 16) Akechi T, Kato T, Watanabe N, Tanaka S, Furukawa TA, SUN©D Investigators: Predictors of hypomanic and/or manic switch among patients initially diagnosed with unipolar major depression during acute-phase antidepressants treatment. *Psychiatry Clin Neurosci* 73(2) 90-91, 2019.

- 17) 川島義高, 大槻露華, 安東友子, 山田光彦: 医療領域での他職種協働: 心理職に必要なとされるスキルとその評価に関する系統的レビュー. 臨床心理学 19(2): 221-232, 2019.

(2) 総説

- 1) 山田光彦, 赤木希衣, 山田美佐, 齋藤顕宜, 岡淳一郎: 恐怖記憶の処理過程を制御する新規薬物療法の開発. 日本生物学的精神医学会誌 29(2): 60-63, 2018.
- 2) 齋藤顕宜, 山田光彦: 情動制御におけるオピオイドδ受容体の役割と創薬への可能性. 日本生物学的精神医学会誌 29(2): 73-77, 2018.
- 3) 山田光彦: 第2章 気分障害「寛解しているうつ病患者さんから抗うつ薬の中止に関する相談がありました. どう対応するのが望ましいでしょうか?」. 精神科治療学「精神科臨床 144のQ&A」Vol.33増刊号: 82-83, 2018.
- 4) 川島義高, 山田光彦: [特集 心理社会支援] 救急医療機関を入口として始まる精神疾患患者の心理社会的支援. 精神保健研究 65: 61-65, 2019.
- 5) 櫻村正美, 河西智也, 山下真里, 川島義高, 石渡明子, 館野 周, 野村俊明: 認知症介護家族のための心理教育プログラム START (STrAtegies for RelaTives) の紹介. 日本医科大学基礎科学紀要 47: 15-29, 2019.

(3) 著書

- 1) 山田光彦, 稲垣正俊, 川島友子, 川島義高, 米本直裕: 救急医療から地域へとつなげる自殺未遂者支援のエッセンス. 監修 日本自殺予防学会, 編集 国立研究開発法人日本医療研究開発機構障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)「精神疾患に起因した自殺の予防法に関する研究」研究班: HOPEガイドブック. へるす出版, 東京, 2018.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 稲垣正俊, 川島義高, 米本直裕, 河西千秋, 山田光彦: 救急医療を起点とした自殺未遂者支援介入の科学的根拠. 第114回日本精神神経学会学術総会. 兵庫, 2018.6.21-23.
- 2) 山田光彦, 米本直裕, 川島義高: 救急医療を起点とした自殺未遂者支援: ケース・マネージャー育成プログラムについて. 第114回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21-23.
- 3) 米本直裕, 川島義高, 稲垣正俊, 河西千秋, 山田光彦: 未遂者介入研究の現状とその課題. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 4) 河西千秋, 山田光彦: ACTION-J研究成果の施策化と現状・課題. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 5) 山田光彦: 医薬品開発プロセスにおける非臨床試験を再考する. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 6) 山田光彦: CNP・NP合同シンポジウム1 産学協同で行う開発会議—シグマアゴニストをどう開発するか. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 7) 三輪秀樹: 視床網様核におけるGAD67遺伝子欠損のノンレム睡眠スピンドル波発生への影響. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-

- 16.
- 8) 則本和伸, 池下克実, 米本直裕, 河西千秋, 下田重朗, 岸本年史: II軸診断を合併した自殺未遂者の再企図防止における介入効果の検証. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- (2) 一般演題
- 1) Furuie H, Akagi K, Yamada M, Saitoh A, Nagase H, Oka JI, Yamada M: Effect of post-reexposure administration of KNT-127 on extinction learning or reconsolidation of contextual fear memory in rats. The 40th Annual Meeting of Japanese Society of Biological Psychiatry, The 61st Annual Meeting of the Japanese Society for Neurochemistry. Hyogo, 2018.9.6-8.
- 2) Nakatake Y, Furuie H, Yamada M, Kuniishi H, Ukezono M, Yoshizawa K, Yamada M: Witnessing the defeat of a conspecific induces social avoidance in mice. WFSBP Asia Pacific Regional Congress of Biological Psychiatry (WFSBP 2018 KOBE), Hyogo, 2018.9.7-9.
- 3) Furuie H, Kuniishi H, Yamada M: Neonatal blockade of NR2A-containing NMDA receptors induces schizophrenia-like behavior in adult rats. Society for Neuroscience 48th Annual Meeting, USA, 2018.11.3-7.
- 4) Nakatake Y, Yamada M, Furuie H, Kuniishi H, Ukezono M, Yoshizawa K, Yamada M: Chronic social defeat stress induces social avoidance and changes the plasma cytokines levels in mice. Society for Neuroscience 48th Annual Meeting, USA, 2018.11.3-7.
- 5) Nakatake Y, Yamada M, Furuie H, Yoshizawa K, Yamada M: A ROCK inhibitor, fasudil, prevents behavioral changes induced by social defeat stress in mice. 第92回日本薬理学会年会, 大阪, 2019.3.14-16.
- 6) 川島義高, 山田光彦: 救急医療機関でのエビデンスに基づいた自殺未遂者支援の実施に必要な施設内体制の検討とチェックシート作成. 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会, 愛知, 2018.5.31-6.2.
- 7) 古家宏樹, 赤木希衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦: リルゾールは恐怖条件づけ文脈学習課題において遠隔恐怖記憶を減弱する. 第41回日本神経科学大会, 兵庫, 2018.7.26-29.
- 8) 國石 洋, 山田大輔, 和田圭司, 山田光彦, 関口正幸: 光遺伝学的手法による眼窩前頭皮質・扁桃体シナプス伝達の単離とストレスが与える影響の検討. 第41回日本神経科学大会, 兵庫, 2018.7.26-29.
- 9) 川島義高, 米本直裕, 山田光彦: 医療機関に勤務する心理職の他職種協働スキルに関する実態調査. 第15回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.27-28.
- 10) 川島義高, 菅原大地, 太刀川弘和, 山田光彦: カロリンスカ大学で開発された Youth Aware of Mental Health Program (YAM) の日本への導入可能性の検討. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 11) 米本直裕, 遠藤 香, 川島義高, 山田光彦: ゲートキーパーに研修に関する系統的レビュー. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 12) 國石 洋, 山田光彦, 関口正幸: ストレスによるマウスの眼窩前頭皮質・扁桃体シナプス伝達の変化. 2018年度 遺伝研 研究会, 静岡, 2018.9.28-29.
- 13) 古家宏樹, 國石 洋, 山田光彦: 新生仔期ラットへの NR2A 選択的拮抗薬慢性投与は成体期に統合失調症様行動異常を引き起こす. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 14) 國石 洋, 山田大輔, 和田圭司, 山田光彦, 関口正幸: ストレスはマウスの眼窩前頭皮質・扁桃体および前部帯状回・扁桃体経路のシナプス伝達に異なる影響を与える. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.

- 15) 川島義高, 山田美佐, 古家宏樹, 國石 洋, 野田隆政, 山田光彦: 不安を主症状とする精神疾患に対する Riluzole の効果についての検討: システムティックレビュー. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会 第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 16) 中武優子, 古家宏樹, 山田美佐, 國石 洋, 請園正敏, 吉澤一巳, 山田光彦: 心理的ストレスと身体的ストレスはマウスの行動と免疫系に異なる影響を及ぼす. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会 第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 17) 川島義高, 榊原佐和子, 石田 航, 曾根英恵, 上野まどか, 米本直裕, 金沢吉展, 山田光彦: 自殺・自殺未遂者への対応場面における救急隊員に必要とされる技能の探索-Consensual Qualitative Research 法を用いた質的研究. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.2.28-3.1.
- 18) 三輪秀樹: 統合失調症の病態に迫る—From bench to bedside を目指して—. 医療心理懇話会 第 3 回集会, 東京, 2018.10.3-4.
- 19) 高井美智子, 川本静香, 川島義高, 松本俊彦, 上条吉人: 臨床心理士による自殺未遂者支援の現状と今後期待される役割について. 第 42 回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 20) 高井美智子, 川本静香, 川島義高, 松本俊彦, 上条吉人: 臨床心理士による自殺未遂者支援に資する知識とスキルの検討・自殺未遂者を支援する臨床心理士を対象としたトレーニングプログラムの開発. 日本心理学会第 82 回大会, 宮城, 2018.9.25-27.

(3) 研究報告会

- 1) 三輪秀樹, 古家宏樹, 國石 洋, 山田光彦: 遺伝子改変マウスを用いた統合失調症モデルマウスの開発と評価. 精神・神経疾患研究開発費 (30-9)「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経筋疾患の病態解明」班 キックオフミーティング, 東京, 2018.6.4.
- 2) 川島義高, 山田美佐, 古家宏樹, 國石洋, 野田隆政, 山田光彦: トランスレーショナル・メディカルセンター主催若手育成カンファレンス「不安障害に対する Riluzole の有効性と安全性についての検討—基礎実験の結果を起点とした臨床研究のプロトコル作成—」. 東京, 2019.1.23.
- 3) 三輪秀樹, 國石 洋, 小林桃子, 山田光彦: 遺伝子改変マウスを用いた統合失調症モデルマウスの開発と評価. 精神・神経疾患研究開発費 (30-9)「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経筋疾患の病態解明」班 平成 30 年度班会議, 東京, 2019.2.14.
- 4) 三輪秀樹, 山田光彦: GABA 仮説に基づく統合失調症モデルマウスの有用性の評価. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 30 年度研究報告会, 東京, 2019.3.18.
- 5) 國石 洋, 和田圭司, 関口正幸, 山田光彦: ストレス負荷は負情動行動と眼窩前頭皮質・扁桃体経路のシナプス可逆性を変化させる: マウスの光遺伝学を用いた検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 30 年度研究報告会, 東京, 2019.3.18.

(4) その他

- 1) 古家宏樹: 優秀プレゼンテーション賞受賞. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会 第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 2) 國石 洋: 若手発表賞受賞. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 30 年度研究報告会, 東京, 2019.3.18.

C. 講演

- 1) 山田光彦: 精神薬理学への招待. 昭和大学薬理連合セミナー, 東京, 2018.6.19.
- 2) 山田光彦: 脳の不思議と精神疾患・精神薬理学研究への招待. 北海道大学大学院医学研究院, 北海道, 2018.9.28.
- 3) 山田光彦: 救急医療を起点とした自殺未遂者支援のエビデンスとその社会実装. 第 1 回普及と実装科学研究会 国立がん研究センター, 東京, 2018.11.18.

- 4) 三輪秀樹: 研究キャリアはじめての一步. キャリアディスカバリーフォーラム, 東京, 2018.6.30.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 山田光彦: プログラム委員. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.

(2) 学会役員

- 1) 山田光彦: 日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦: 日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 評議員
- 5) 山田光彦: Mayo Neuroscience Forum 地区幹事
- 6) 山田光彦: 躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事
- 7) 山田光彦: Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse: JGIDA group 幹事
- 8) 川島義高: 日本自殺予防学会「自殺企図患者に対する継続支援研修委員会」委員

(3) 座長

- 1) 山田光彦: 救急医療を起点とした自殺未遂者支援 (司会・コーディネーター). 第114回日本精神神経学会学術集会, 兵庫, 2018.6.21-23.
- 2) 山田光彦: 自殺予防Ⅰ. 第15回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.27-28.
- 3) 山田光彦: 若年者の自殺. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 4) 山田光彦, 河西千秋: ACTION-J のその後: 二次解析, 普及・啓発新たな施策化. 第42回日本自殺予防学会総会, 奈良, 2018.9.21-23.
- 5) 山田光彦: 医療心理懇話会 第3回集会, 東京, 2018.10.3-4.
- 6) 山田光彦: シンポジウム2 精神神経疾患と睡眠の新たな関係. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 7) 山田光彦: シンポジウム10 向精神薬開発のための非臨床試験を再考する: 第Ⅱ-Ⅲ相試験での臨床開発中止を最小限にするために. 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14-16.
- 8) 山田光彦: セッションⅡ報告5 精神薬理研究部 平成30年度 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成30年度研究報告会, 東京, 2019.3.18.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦: 分子精神医学 編集同人
- 2) 山田光彦: 日本臨床薬理学会 認定医
- 3) 山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 専門医, 指導医, 治験登録医.
- 4) 山田光彦: 日本精神神経医学会 専門医

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 川島義高: 日本精神神経学会主催「複雑事例を通して学ぶ自殺予防のエッセンシャルズ」, 神戸, 2018.6.21.
- 2) 川島義高: 日本自殺予防学会主催「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」, 第2回関東地区研修会1, 東京, 2018.12.15-16.

- 3) 川島義高: 日本自殺予防学会主催「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」, 第 3 回九州地区研修会 1, 福岡, 2019.2.16-17.

F. その他

- 1) 三輪秀樹: 第 4 回 LiHub フォーラム-価値の共有による未来型健康管理社会の実現に向けて-, 東京工業大学 生命理工オープンイノベーションハブ, 東京, 2018.6.25.
- 2) 「意識はどこにあるのか??? 脳の中を観察してみよう!」世界脳週間 2018 レクチャー&ラボツアー「脳の科学の最前線」, 東京, 2018.7.14.

7. 精神疾患病態研究部

I. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では、精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している。平成 30 年 7 月 1 日より、橋本亮太郎部長が着任し、精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている。精神疾患の生物学的な研究は、認知社会機能、脳神経画像、神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて、統合失調症、気分障害、発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより、病態を解明し、新たな診断法・治療法の開発を行っている。この研究は、当研究部においてのみ行うものではなく、国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国 39 の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORO (Cognitive Genetics Collaborative Research Organization: 認知ゲノム共同研究機構) を運営しオールジャパン体制で遂行している。精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は、EGUIDE プロジェクトという全国 42 大学を含む 131 医療機関の共同研究組織を牽引し、全国でガイドラインの講習を行い、その効果検証を行っている。

平成 30 年度の人員構成は次のとおりである。部長：橋本亮太、室長：宇野洋太（平成 31 年 1 月 1 日～）、流動研究員：椎野智子（平成 30 年 8 月 1 日～）、科研費研究補助員：山縣眞美子（平成 30 年 7 月 1 日～）、研究助手：梅田佳子（平成 30 年 7 月 18 日～）、岩野千恵（平成 30 年 11 月 1 日～）、松嶋千代（平成 30 年 12 月 1 日～）、併任研究員：久保田智香、客員研究員（平成 30 年度末時点：45 名）、研究生（平成 30 年度末時点：16 名）。

II. 研究活動

A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

精神疾患の病態解明研究として、精神疾患の克服とその障害支援にむけた研究推進を行っている。精神科の多施設共同研究体制である COCORO を牽引し、統合失調症、気分障害、発達障害等の臨床研究データ、バイオリソース等の収集、蓄積及び管理を行い、新たな疾患分類による病態解明と診断法・治療法の開発を実施する。脳の幅広い表現型である中間表現型やゲノムなどの生体試料を用いて、症状や病態仮説に基づくことなく精神神経疾患の新たな疾患カテゴリーの分類とその病態の解明を目的として研究を行っている。その結果、精神疾患の成因・病態生理等における遺伝要因の解明、および新たな診断と治療法の開発、脳機能の分子メカニズムの解明に資することができ、精神疾患患者の精神症状や社会機能障害といったクリニカルリカバリー指標を改善させるだけでなく、患者の主観的満足感の改善を加えたパーソナルリカバリーに貢献できると考えている。

1) 認知社会機能プロジェクト（橋本、宇野、椎野）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し、普及のため各地で講習会などを行っている。COCORO の認知・社会機能の標準バッテリーとなっており、2000 例程度の精神疾患と健常者のデータの集積が出来ている。認知機能障害は、簡略版 WAIS で測定する推定知能と Japanese Adult Reading Test (JART) で測定する推定病前知能の差にて算出し、社会機能は最も重要なもののひとつである労働時間を測定している。これらを用いて、認知機能障害が統合失調症患者の労働時間の推定に役立つことを見出した（橋本, Sumiyoshi et al Schizophrenia Res, 2018）。

2) 精神疾患の眼球運動研究（橋本、椎野）

統合失調症をはじめとする精神疾患では、眼球運動の異常が認められることが知られている。

特に統合失調症では、フリービューイング課題、滑動性追跡眼球運動課題、注視課題からなる眼球運動スコアにより 80%程度で健常者と判別できることを示してきた。本年度は、統合失調症の眼球運動スコアが労働時間と相関すること、そして眼球運動の全ゲノム関連解析にて、滑動性追跡眼球運動課題が、脳に発現する 1q21. 3 と 20q13. 12 の遺伝子と関連することを見出した（橋本, Morita et al, Schizophrenia Res, 2018; Kikuchi et al, Sci Rep, 2018）。

3) 精神疾患の脳神経画像研究（橋本）

精神疾患の中でも統合失調症を中心に FreeSurfer の手法を用いた三次元脳構造画像解析や、拡散テンソル画像解析などを行っている。拡散テンソル画像解析では、前頭葉白質や脳梁が統合失調症の社会機能と関連することを見出した（橋本, Koshiyama et al, Schizophrenia Res, 2018）。Soluble Tumor Necrosis Factor Receptor 2 (sTNFR2) の血漿中の濃度が、統合失調症で増加しており、海馬体積及び認知機能とも相関することを見出した（橋本, Kudo et al, Int J Neuropsychopharmacol, 2018）。国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMA との共同研究を行い、FreeSurfer の解析を行い、統合失調症の大脳皮質厚の異常について 9572 例のデータを用いて報告した（橋本, van Erp, Biological Psychiatry, 2018）。

B. 精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1) 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（橋本, 宇野, 椎野, 久保田）

EGUIDE プロジェクトは、精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い、ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である。対象とするガイドラインは、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインであり、日本神経精神薬理学会、日本うつ病学会、日本臨床精神神経薬理学会のバックアップを受けて行っている。2016年に開始した EGUIDE プロジェクトは、本年度 42 大学 131 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり、毎年 20 回以上の講習会を全国で行い、延べ 1200 名以上の精神科医が講習を受講した。この講習は、受講者の評判がよく、周りの精神科医にも勧めたいという声が上がっており、これが広がっていく大きな要因であると考えられている。講習を担当する EGUIDE 指導医は初年度の 23 名から 44 名に増えており、順調に育成が進んでいる。EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は、講習受講直後のガイドラインの理解度の向上、その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上という形で示されており、学会発表を行っている。更に、処方行動を診療の質（Quality Indicator: QI）という形で測定し、例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し、経時的に測定することにより、講習の効果の有無についての検討を行っており、学会発表を行っている。日本精神科病院協会や日本精神神経科診療所協会にも働きかけ、学術大会においてガイドラインに関するシンポジウムを行った。

2) 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

統合失調症薬物治療ガイドラインは専門家である精神科医向けに作られており、当事者などにはわかりにくかった。そこで、当事者・家族・支援者でも理解できる簡単な「統合失調症薬物治療ガイド」を、当事者・家族・支援者の協力を得て作成し、学会のホームページで無料で公開し、本としても出版し、関連学会・協会等にて、本ガイドのシンポジウムや特別講演を行い、普及につとめた。更に、当事者・家族・支援者の協力関係を生かして、統合失調症薬物治療ガイドラインの改訂において、当事者・家族・支援者の協力を得て一緒に作成を行っている。統合失調症薬物治療ガイドラインは、精神科領域で初めて日本医療機能評価機能の EBM 推進事業である Minds の方法論で作成されたものであり、このようなエビデンスに基づくガイドラインを当事者・家族・支援者と共に作成することは大きな一歩であるといえる。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 地域における自治体主催の講演会や勉強会、当事者の家族会の集まりなどに招待され、講演や講義を行った。また、忌憚ない意見交換ができる懇親会や談話会、情報交換会にも参加し社会をニーズの把握し、コメディカルなどを対象とした研修会を多数企画し講師を務め、専門知識の啓発活動を行った（橋本）。

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い、精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトも全国展開している。EGUIDE プロジェクトにおいては、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い、その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い、精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している。平成 30 年度は、全国で 27 回の講習を行い 200 名以上が参加した。また、受講者が更にステップアップするためのアドバンストコースを行い、20 名程度の熱心な受講者が全国から集まり、より、高度なガイドラインの使いこなし方について、議論が盛り上がった。更に、普及を推進するために、日本精神科病院協会や日本精神神経科診療所協会にも働きかけ、それぞれの学術大会においてガイドラインに関するシンポジウムを行った（橋本）。
- ・ 開発した統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法についての講習会を全国各地で行い、評価シートを配布し普及活動を行った（橋本）。
- ・ 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科、連合小児発達学研究科および情報科学研究科においては招へい教授として、奈良県立医科大学においては非常勤講師として、精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ 日本精神神経学会、日本生物学的精神医学会、日本神経精神薬理学会、日本うつ病学会など 13 の精神医学関連諸学会がまとめた「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進」の政策提言の作成に関する活動に従事した。この提言では、本邦の精神疾患研究の現状と総力を挙げてとりくむべき課題やロードマップを示したうえで、精神疾患の研究を行い、病態の解明、診断法・治療法の開発、介入法を開発することは国民の保健・医療・福祉の向上に資するのみならず、大きな社会の負担を軽減し産業振興に寄与すると提言している（橋本）。

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Miki K, Nakae A, Shi K, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Ikeda M, Shibata M, Yukioka M, Hashimoto R: Frequency of mental disorders among chronic pain patients with or without fibromyalgia in Japan. *Neuropsychopharmacol Rep* 38(4): 167-174, 2018.
- 2) Koshiyama D, Fukunaga M, Okada N, Morita K, Nemoto K, Yamashita F, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Kelly S, Jahanshad N, Kudo N, Azechi H, Watanabe Y, Donohoe G,

- Thompson PM, Kasai K, Hashimoto R: Role of frontal white matter and corpus callosum on social function in schizophrenia. *Schizophr Res* 202: 180-187, 2018.
- 3) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Shishido E, Shiino T, Takahashi J, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Hirano Y, Koshiyama D, Okada N, Ikeda M, Onitsuka T, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Abnormalities of eye movement are associated with work hours in schizophrenia. *Schizophr Res* 202:420-422, 2018.
 - 4) Sumiyoshi C, Fujino H, Yamamori H, Kudo N, Azechi H, Fujimoto M, Yasuda Y, Ohi K, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting work outcome in patients with schizophrenia: Influence of IQ decline. *Schizophr Res* 201: 172-179, 2018.
 - 5) van Erp TGM, Walton E, Hibar DP, Schmaal L, Jiang W, Glahn DC, Pearlson GD, Yao N, Fukunaga M, Hashimoto R, (178 名中 10 番目) Okada N, Yamamori H, Bustillo JR, Clark VP, Agartz I, Mueller BA, Cahn W, de Zwarte SMC, Hulshoff Pol HE, Kahn RS, Ophoff RA, van Haren NEM, Andreassen OA, Dale AM, Doan NT, Gurholt TP, Hartberg CB, Haukvik UK, Jørgensen KN, Lagerberg TV, Melle I, Westlye LT, Gruber O, Kraemer B, Richter A, Zilles D, Calhoun VD, Crespo-Facorro B, Roiz-Santiañez R, Tordesillas-Gutiérrez D, Loughland C, Carr VJ, Catts S, Croypley VL, Fullerton JM, Green MJ, Henskens FA, Jablensky A, Lenroot RK, Mowry BJ, Michie PT, Pantelis C, Quidé Y, Schall U, Scott RJ, Cairns MJ, Seal M, Tooney PA, Rasser PE, Cooper G, Shannon Weickert C, Weickert TW, Morris DW, Hong E, Kochunov P, Beard LM, Gur RE, Gur RC, Satterthwaite TD, Wolf DH, Belger A, Brown GG, Ford JM, Macciardi F, Mathalon DH, O'Leary DS, Potkin SG, Preda A, Voyvodic J, Lim KO, McEwen S, Yang F, Tan Y, Tan S, Wang Z, Fan F, Chen J, Xiang H, Tang S, Guo H, Wan P, Wei D, Bockholt HJ, Ehrlich S, Wolthuisen RPF, King MD, Shoemaker JM, Sponheim SR, De Haan L, Koenders L, Machielsen MW, van Amelsvoort T, Veltman DJ, Assogna F, Banaj N, de Rossi P, Iorio M, Piras F, Spalletta G, McKenna PJ, Pomarol-Clotet E, Salvador R, Corvin A, Donohoe G, Kelly S, Whelan CD, Dickie EW, Rotenberg D, Voineskos AN, Ciufolini S, Radua J, Dazzan P, Murray R, Reis Marques T, Simmons A, Borgwardt S, Egloff L, Harrisberger F, Riecher-Rössler A, Smieskova R, Alpert KI, Wang L, Jönsson EG, Koops S, Sommer IEC, Bertolino A, Bonvino A, Di Giorgio A, Neilson E, Mayer AR, Stephen JM, Kwon JS, Yun JY, Cannon DM, McDonald C, Lebedeva I, Tomyshev AS, Akhadorov T, Kaleda V, Fatouros-Bergman H, Flyckt L; Karolinska Schizophrenia Project, Busatto GF, Rosa PGP, Serpa MH, Zanetti MV, Hoschl C, Skoch A, Spaniel F, Tomecek D, Hagenaars SP, McIntosh AM, Whalley HC, Lawrie SM, Knöchel C, Oertel-Knöchel V, Stäblein M, Howells FM, Stein DJ, Temmingh HS, Uhlmann A, Lopez-Jaramillo C, Dima D, McMahon A, Faskowitz JI, Gutman BA, Jahanshad N, Thompson PM, Turner JA: Cortical Brain Abnormalities in 4474 Individuals With Schizophrenia and 5098 Control Subjects via the Enhancing Neuro Imaging Genetics Through Meta Analysis (ENIGMA) Consortium. *Biol Psychiatry* 84(9): 644-654, 2018.
 - 6) Kushima I, Aleksic B, Nakatochi M, Shimamura T, Okada T, Uno Y, Morikawa M, Ishizuka K, Shiino T, Kimura H, Arioka Y, Yoshimi A, Takasaki Y, Yu Y, Nakamura Y, Yamamoto M, Iidaka T, Iritani S, Inada T, Ogawa N, Shishido E, Torii Y, Kawano N, Omura Y, Yoshikawa T, Uchiyama T, Yamamoto T, Ikeda M, Hashimoto R, (80 名中 29 番目) Yamamori H, Yasuda Y, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Nunokawa A, Itokawa M, Arai M, Miyashita M, Kobori A, Suzuki M, Takahashi T, Usami M, Kodaira M, Watanabe K, Sasaki T, Kuwabara H, Tochigi M, Nishimura F, Yamasue H, Eriguchi Y, Benner S, Kojima M, Yassin W, Munesue T, Yokoyama S, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Ishitobi M, Ohmori T, Numata S, Yoshikawa T, Toyota T, Yamakawa K, Suzuki T, Inoue Y, Nakaoka K, Goto YI, Inagaki M,

- Hashimoto N, Kusumi I, Son S, Murai T, Ikegame T, Okada N, Kasai K, Kunimoto S, Mori D, Iwata N, Ozaki N: Comparative Analyses of Copy-Number Variation in Autism Spectrum Disorder and Schizophrenia Reveal Etiological Overlap and Biological Insights. *Cell Rep* 24(11): 2838-2856, 2018.
- 7) Zhang Y, Hishimoto A, Otsuka I, Watanabe Y, Numata S, Yamamori H, Boku S, Horai T, Someya T, Ohmori T, Hashimoto R, Sora I: Longer telomeres in elderly schizophrenia are associated with long-term hospitalization in the Japanese population. *J Psychiatr Res* 103: 161-166, 2018.
 - 8) Kikuchi M, Miura K, Morita K, Yamamori H, Fujimoto M, Ikeda M, Yasuda Y, Nakaya A, Hashimoto R: Genome-wide Association Analysis of Eye Movement Dysfunction in Schizophrenia. *Sci Rep* 8(1): 12347, 2018.
 - 9) Kudo N, Yamamori H, Ishima T, Nemoto K, Yasuda Y, Fujimoto M, Azechi H, Niitsu T, Numata S, Ikeda M, Iyo M, Ohmori T, Fukunaga M, Watanabe Y, Hashimoto K, Hashimoto R: Plasma Levels of Soluble Tumor Necrosis Factor Receptor 2 (sTNFR2) Are Associated with Hippocampal Volume and Cognitive Performance in Patients with Schizophrenia. *Int J Neuropsychopharmacol* 21(7): 631-639, 2018.
 - 10) Hibar DP, Cheung JW, Medland SE, Mufford MS, Jahanshad N, Dalvie S, Ramesar R, Stewart E, van den Heuvel OA, Pauls DL, Knowles JA, Stein DJ, Thompson PM, Enhancing Neuro Imaging Genetics through Meta Analysis (ENIGMA) Consortium, International Obsessive Compulsive Disorder Foundation Genetics Collaborative (IOCDF-GC): Significant concordance of genetic variation that increases both the risk for obsessive-compulsive disorder and the volumes of the nucleus accumbens and putamen. *Br J Psychiatry* 213(1): 430-436, 2018.
 - 11) Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Shiino T, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Genetic Overlap between General Cognitive Function and Schizophrenia: A Review of Cognitive GWASs. *Int J Mol Sci* 19(12): 3822, 2018.
 - 12) Numata S, Umehara H, Ohmori T, Hashimoto R: Clozapine Pharmacogenetic Studies in Schizophrenia: Efficacy and Agranulocytosis. *Front Pharmacol* 9: 1049, 2018.
 - 13) 村田篤信, 五十嵐 中, 橋本亮太, 桑原秀徳, 谷藤弘淳, 林 貴史, 三輪高市, 善本正樹, 吉尾隆: 費用効果分析による精神科病棟薬剤業務の薬剤経済学的有用性評価. *日本病院薬剤師会雑誌* 54(7): 835-840, 2018.

(2) 総説

- 1) 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイドラインとは-ガイドラインの概念と使い方-. *日本精神薬学会誌* 2(2): 68-69, 2019.
- 2) 大井一高, 嶋田貴充, 片岡 譲, 栗田有紀, 橋本亮太: Conference Report:第 31 回国際神経精神薬理学会(CINP). *臨床 Legato* 4(3): 50-52, 2018.
- 3) 橋本亮太: わかりやすい「統合失調症薬物治療ガイドライン」. *メンタルヘルスマガジン* ころの元気+12(11): 26-27, 2018.
- 4) 橋本亮太: ガイドラインにおける clozapine. *臨床精神薬理* 21(11): 1451-1458, 2018.
- 5) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトによる精神科医療の普及と教育. *Depression Strategy* うつ病治療の新たなストラテジー8(3): 4-7, 2018.
- 6) 橋本亮太: 本邦での統合失調症ガイドライン. *月刊精神科* 33(1): 45-51, 2018.

(3) 著書

- 1) 統合失調症薬物治療ガイド作成メンバー (日本神経精神薬理学会): 統合失調症薬物治療ガイ

ド—患者さん・ご家族・支援者のために—。じほう, 2018.

(4) 研究報告書

- 1) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクトによる大学病院での向精神薬の処方実態の調査と診療の質指標による評価。平成30年度厚生科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究（代表：三島和夫）」（H29-精神-一般-001）分担研究報告書。2019.
- 2) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクトによる大学病院での向精神薬の処方実態の調査と診療の質指標による評価。H29年度-H30年度 厚生科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」（H29-精神-一般-001）総合研究報告書。2019.
- 3) 橋本亮太：統合失調症の脳画像・生理・認知行動解析による病態神経回路解明。H30年度日本医療研究開発機構 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト 「大規模脳画像解析とヒト—霊長類を連結するトランスレータブル脳・行動指標開発にもとづく精神疾患の病態神経回路解明（研究開発代表者：笠井清登）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.
- 4) 橋本亮太：ガイドラインの普及活動。H30年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「うつ病性障害における包括的治療ガイドラインの標準化および普及に関する研究（研究開発代表者：渡邊衡一郎）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.
- 5) 橋本亮太：認知機能障害評価法と薬物治療ガイドラインのリカバリーとの関連についての研究。H30年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「主体の人生のための統合失調症リカバリー支援—当事者との共同創造 co-production による実践ガイドライン策定（研究開発代表者：福田正人）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.
- 6) 橋本亮太：レジストリの構築（評価項目の品質管理）。H30年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究（研究開発代表者：中込和幸）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.
- 7) 橋本亮太：うつ症状に関する精神疾患横断的な血漿を用いたバイオマーカー開発。H30年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「血液メタボローム解析による精神疾患の層別化可能な客観的評価法の確立と治療最適化への応用（研究開発代表者：神庭重信）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.
- 8) 橋本亮太：気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究。H30年度日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム 「縦断的 MRI データに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明（研究開発代表者：岡本泰昌）」2018年度 委託研究開発成果報告書。2019.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 橋本亮太：インタビュー 病前と現状を比較する「15分認知機能測定法 簡略版」を開発、認知機能障害にアプローチする。「CONSONANCE 統合失調症治療を考える」2019 WINTER 通巻第69号：2-3, 2019.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Hashimoto R: Behavior/Self-Reports/Paradigms based on RDoC focusing on cognitive impairment, Symposium, WFSBP Asia Pacific Regional Congress of Biological Psychiatry (WFSBP 2018 KOBE), Hyogo, 2018.9.9.
- 2) Okada N, Hashimoto R, Ozaki N, Kasai K: Circuits/Physiology biomarkers based on RDoC. Symposium, WFSBP Asia Pacific Regional Congress of Biological Psychiatry (WFSBP 2018 KOBE), Hyogo, 2018.9.9.
- 3) Hashimoto R: Cross-disorder analysis of neuroimaging data in Psychiatry, Japan-UK Neuroscience Symposium 2019, Chiba, 2019.2.10.
- 4) 山本果奈, 松村憲佑, 中澤敬信, 永安一樹, 栗生俊彦, 馬場優志, 田熊一敬, 鶴崎美徳, 安田由華, 山森英長, 松本直通, 橋本亮太, 橋本 均: 多発家系患者の iPS 分化神経細胞を用いた統合失調症の分子病態解析. 次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム 2018, 福岡, 2018.8.25.
- 5) 越山太輔, 福永雅喜, 岡田直大, 山下典生, 山森英長, 安田由華, 藤本美智子, 大井一高, 藤野陽生, 渡邊嘉之, 笠井清登, 橋本亮太: 統合失調症の皮質下体積と認知・社会機能の相関解析. シンポジウム, 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 兵庫, 2018.9.8.
- 6) 橋本亮太: 共同研究の上手な進め方 - 多施設共同研究ってどうやるの?. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 兵庫, 2018.9.8.
- 7) 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイドラインとは-ガイドラインの概念と使い方. 第 2 回日本精神薬学会総会・学術総会, 愛知, 2018.9.16.
- 8) 橋本亮太: 精神科医療における標準治療と臨床経験との関係. 第 7 回日本精神科医学会, 長野, 2018.10.5.
- 9) 畠山卓也, 橋本亮太, 加藤 玲, 堀合研二郎: 「統合失調症薬物治療ガイド_患者さん・ご家族・支援者のために」を活用してみませんか?. 第 25 回日本精神科看護専門学術集会 in 香川, 香川, 2018.10.26.
- 10) 橋本亮太: 慢性疼痛と精神疾患: 「やるべきこと」と「やってはならないこと」. 日本線維筋痛症学会第 10 回学術集会, 東京, 2018.9.30.
- 11) 中澤敬信, 橋本亮太, 田熊一敬, 橋本 均: iPS 細胞関連技術とヒト型疾患モデルマウスを用いた精神疾患の分子病態解析. シンポジウム, 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.15.
- 12) 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイド-当事者・当事者家族・支援者のために. シンポジウム, 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.15.
- 13) 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイド作成の趣旨. シンポジウム, 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.15.
- 14) 三木健司, 史 賢林, 柴田政彦, 行岡正雄, 橋本亮太: 線維筋痛症・広範囲慢性疼痛の集学的診療の取り組み 精神科診断について. 第 11 回日本運動器疼痛学会, 滋賀, 2018.12.2.

(2) 一般演題

- 1) Matsumura K, Nakazawa T, Okada S, Nagayasu K, Miura H, Kasai A, Takuma K, Yamamori H, Yasuda Y, Hashimoto R, Hashimoto H: The de novo Q1042R POGZ mutation in sporadic ASD disrupts the neuronal differentiation. 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology (WCP2018 Kyoto), Kyoto, 2018.7.5.
- 2) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Shishido E, Shiino T, Takahashi J, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Hirano Y, Koshiyama D, Okada N, Ikeda M, Onitsuka T, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Abnormalities of eye movement are associated with work hours in

- schizophrenia: A multi-site study. 7th BESETO International Psychiatry Conference, Seoul, 2018.9.15.
- 3) Pisanu C, Akula N, Consortium on Lithium Genetics, Zompo M.D., Squassina A, McMahon F.J: Integrative analysis of omics summary data to identify genes associated with lithium response and related phenotypes in patients with bipolar disorder. 26th WCPG (World Congress of Psychiatric Genetics), Glasgow, 2018.10.14.
 - 4) Takahashi J, Miura K, Morita K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Shishido E, Okazaki K, Shiino T, Kasai K, Hirano Y, Hashimoto R, Onitsuka T: Eye Movement Abnormalities in Major Depressive Disorder. The 21st Annual ISBD Conference (International Society for Bipolar Disorders), Sydney, 2019.3.21.
 - 5) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Azechi H, Okada N, Koshiyama D, Kawakami S, Morita S, Ikeda M, Kasai K, Hashimoto R: Eyemovement abnormalities and their association with cognitive impairments in schizophrenia. 第 41 回日本神経科学大会, 兵庫, 2018.7.26-28.
 - 6) Takamura T, Nakamura T, Yoshinaga K, Ogata Y, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R, Hanakawa T: Resting-state functional connectivity MRI classification of major depressive disorder in multi-site data. 第 41 回日本神経科学大会, 兵庫, 2018.7.26-28.
 - 7) 坪井貴嗣, 高江洲義和, 田形弘実, 辻野尚久, 稲田 健, 橋本亮太, 渡邊衡一郎: うつ病治療ガイドラインの教育効果についての検証: 平成 28 年度 EGUIDE プロジェクトからの報告. 第 15 回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.28.
 - 8) 伊賀淳一, 越智紳一郎, 安田由華, 山本智也, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太, 上野修一: 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究 (EGUIDE プロジェクト) 参加施設のうつ病治療の診療の質の評価. 第 15 回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.28.
 - 9) 橋本直樹, 成田 尚, 岡田直大, 福永雅喜, 橋本亮太, 久住一郎: 炭酸リチウムと抗精神病薬が感情障害患者の皮質下脳体積に与える影響についての検討. 第 15 回日本うつ病学会総会, 東京, 2018.7.28.
 - 10) 岡田研一, 三浦健一郎, 藤本美智子, 森田健太郎, 山森英長, 安田由華, 稲垣未来男, 篠崎隆志, 藤田一郎, 橋本亮太: 過去の注視位置が統合失調症患者の視覚探索に与える影響. 視覚科学フォーラム, 大阪, 2018.9.5.
 - 11) 住吉チカ, 藤野陽生, 住吉太幹, 山森英長, 工藤紀子, 畦地裕統, 藤本美智子, 安田由華, 橋本亮太: 統合失調症における労働状態の予測因子: 確率予測による検討. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学学会大会合同年会, 兵庫, 2018.9.6.
 - 12) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Shishido E, Shiino T, Takahashi J, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Hirano Y, Koshiyama D, Okada N, Ikeda M, Onitsuka T, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Abnormalities of eye movement are associated with work hours in schizophrenia. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学学会大会合同年会, 兵庫, 2018.9.6.
 - 13) Takahashi J, Miura K, Morita K, Fujimoto M, Yamamori H, Yuka Y, Kudo N, Shishido E, Okazaki K, Kasai K, Hirano Y, Hashimoto R, Onitsuka T: Eye Movement Abnormalities in Major Depressive Disorder. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学学会大会合同年会, 兵庫, 2018.9.7.
 - 14) 佐田あゆ美, 福留隆志, 釘抜利明, 橋本亮太: 簡易認知機能検査をアセスメントに用いた支援の実践. 日本デイケア学会第 23 回年次大会, 千葉, 2018.10.18.
 - 15) 大西 隆, 根本清貴, 山下典生, 山森英長, 安田由華, 藤本美智子, 工藤紀子, 畦地裕統, 渡邊嘉之, 福永雅喜, 橋本亮太: 統合失調症におけるネットワーク障害: グラフ理論による解析. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14.

- 16) 大西 隆, 根本清貴, 山下典生, 山森英長, 安田由華, 藤本美智子, 工藤紀子, 畦地裕統, 渡邊嘉之, 福永雅喜, 橋本亮太: 統合失調症における白質線維障害: 新しい解析手法 local connectometry の応用. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14.
- 17) 藤本美智子, 三浦健一郎, 森田健太郎, 工藤紀子, 畦地裕統, 山森英長, 安田由華, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症患者のクロザピン治療による中間表現型の変化. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.14.
- 18) 松井佑樹, 大石 智, 滝澤毅矢, 工藤紀子, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトからの報告～過去 2 年間のガイドラインの教育効果と質の考察～. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.15.
- 19) 市橋香代, 堀 輝, 安田由華, 山本智也, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 笠井清登, 橋本亮太: 統合失調症治療における施設群ごとの Quality Indicator の検討: 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究 (EGUIDE) より. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2018.11.15.
- 20) 橋本亮太, 市橋香代: リエゾン精神科医のためのガイドライン活用術. 第 31 回総合病院精神医学会総会, 東京, 2018.11.30.
- 21) 椎野智子, 住吉チカ, 藤野陽生, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 大井一高, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症における認知機能障害評価法の臨床応用. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2019.12.1.
- 22) Miyanishi H, Uno K, Iwata M, Kikuchi Y, Ohi K, Hashimoto R, Sumiyoshi T, Nitta A: Increase of methylation of DNA from blood on SHATI/NAT8L promotor site in the patients with depression with no prior treatment. 第 92 回日本薬理学会年会, 大阪, 2019.3.15.

(3) 研究報告会

- 1) 橋本亮太: 多施設共同研究体制の構築. 第 16 回 IGC 第 12 回 COCORO 合同会議, 東京, 2018.12.8.
- 2) 橋本亮太: 精神疾患のバイオタイプによる診断・治療法の開発. 第 16 回 IGC 第 12 回 COCORO 合同会議, 東京, 2018.12.9.
- 3) 橋本亮太: 統合失調症の眼球運動研究. 平成 30 年度京都大学霊長類研究所共同利用研究会, 愛知, 2019.3.16.
- 4) 橋本亮太, 椎野智子: 精神疾患の病態解明とその障害への支援に関する研究. 平成 30 年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2019.3.18.

(4) その他

- 1) 橋本亮太: 大規模リソース及び iPS 技術を用いた統合失調症の病態予測のバイオマーカー開発. 基盤研究 (B) 特設分野研究代表者交流会, 東京, 2018.10.3.
- 2) 橋本亮太: 統合失調症の眼球運動障害のゲノム解析. H30 年度 AMED 「疾病克服に向けたゲノム医療実現プロジェクト」研究交流会, 東京, 2018.12.11.

C. 講演

- 1) Hashimoto R, Yasuda Y, Ohi K, Fukunaga M: Cross disorder analysis of brain measures: implication of new diagnosis. Laboratory Seminar, Imaging Genetics Center, University of Southern California, Los Angeles, 2018.8.16.
- 2) Hashimoto R, Yasuda Y, Ohi K, Fukunaga M: Cross disorder analysis of brain measures: implication of new diagnosis. UCI Medical Center Grand Rounds, Irvine, 2018.8.15.
- 3) Hashimoto R, Yasuda Y, Ohi K, Fukunaga M: Cross disorder analysis of brain measures:

implication of new diagnosis. Luncheon Seminar, Atlanta, 2018.8.13.

- 4) 橋本亮太, 中込和幸: 統合失調症は治るのか〜リカバリー概念から. 第 5 回 NCNP メディア塾, 東京, 2018.8.24.
- 5) 橋本亮太: 精神疾患の克服とその障害支援への挑戦. 阪神精神科医会学術講演会, 兵庫, 2018.8.30.
- 6) 橋本亮太: 当事者・家族・支援者に優しい統合失調症薬物治療ガイド. リカバリー全国フォーラム 2018, 東京, 2018.9.17.
- 7) 住吉チカ, 藤野陽生, 山森英長, 工藤紀子, 畦地裕統, 藤本美智子, 安田由華, 大井一高, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症患者の労働状態: 推定精度に関わる要因. 精神疾患と認知機能研究会, 東京, 2018.11.10.
- 8) 橋本亮太: 精神疾患の克服とその障害支援への挑戦. 横浜 YPS ピアスタッフの集い, 神奈川, 2018.11.29.
- 9) 橋本亮太: 統合失調症一薬物治療の基本を学ぶ. 新宿区精神障害者家族会新宿フレンズ昼の家族会, 東京, 2019.1.12.
- 10) 橋本亮太: 精神疾患の克服とその障害支援への挑戦. むさしの会: 1 月の例会・学習会, 東京, 2019.1.26.
- 11) 橋本亮太: 精神疾患の克服と障害支援への挑戦. 第四回認知機能をチーム医療で考える会, 東京, 2019.1.31.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 橋本亮太: 日本神経精神薬理学会 理事, 広報委員会委員長, 評議員, 選挙管理委員会委員, 統合失調症薬物治療ガイドライン作成タスクフォース委員, 編集委員会委員, 国際学術委員会委員, 執行委員会委員
- 2) 橋本亮太: 日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員, 薬事委員会委員, 精神医学研究推進委員会委員
- 3) 橋本亮太: 日本神経化学会 将来計画委員会委員長, 利益相反委員会委員, 評議員
- 4) 橋本亮太: 日本統合失調症学会 評議員
- 5) 橋本亮太: 日本うつ病学会 評議員, 気分障害の治療ガイドライン作成委員会委員
- 6) 橋本亮太: 日本生物学的精神医学会 将来計画委員会委員, 関連学会対応委員会副委員長, 評議員
- 7) 橋本亮太: 国際神経精神薬理学会 フェローシップ表彰委員会委員, 教育委員会委員, 評議員

(3) 座長

- 1) 橋本亮太: 「統合失調症の認知機能障害を 15 分で誰でも簡便に測定できる実習コース」. 統合失調症における認知機能障害を考える会 in 金沢, 金沢, 2018.7.14.
- 2) 橋本亮太, 笠井清登: シンポジウム「基礎研究で活躍する精神科医の魂は進化したのか?」. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 神戸, 2018.9.6.
- 3) 橋本亮太: ポスターセッション「気分障害」. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 神戸, 2018.9.6.
- 4) 橋本亮太, 鬼塚俊明: 日本生物学的精神医学会「第 4 回最優秀奨励賞受賞者受賞講演」. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 神戸, 2018.9.7.
- 5) 橋本亮太, 村松里衣子: 教育講演 3. 第 40 回日本生物学的精神医学会・第 61 回日本神経化学会大会合同年会, 神戸, 2018.9.8.

- 6) 橋本亮太：教育講演 2「ゲノムから考える早期介入」. 第 22 回日本精神保健・予防学会，東京，2018.12.2.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員
 2) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会機関誌「Neuropsychopharmacology Reports」「日本神経精神薬理学雑誌」編集委員会委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 橋本亮太：統合失調症における認知機能障害を考える会 in 金沢，金沢，2018.7.14.
 2) 橋本亮太：第 15 回日本うつ病学会総会，EGUIDE プロジェクト：うつ病治療ガイドライン講習会，東京，2018.7.29.
 3) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，北海道，2018.10.6.
 4) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習，うつ病治療ガイドライン講習，札幌，2018.10.7.
 5) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，石川，2018.10.7.
 6) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，金沢，2018.10.8.
 7) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，山口，2018.10.13.
 8) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，山口，2018.10.14.
 9) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，東京，2018.10.20.
 10) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，東京，2018.10.21.
 11) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，大阪，2018.10.21.
 12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，大阪，2018.10.28.
 13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，東京，2018.10.28.
 14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，福岡，2018.11.3.
 15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，福岡，2018.11.4.
 16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.10.
 17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北講習，うつ病治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.11.
 18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト沖縄講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，沖縄，2018.11.17.
 19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト沖縄講習，うつ病治療ガイドライン講習，沖縄，2018.11.18.
 20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，東京，2018.11.18.
 21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト新潟講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.23.

- 22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト新潟講習，うつ病治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.24.
- 23) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，東京，2018.11.25.
- 24) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，愛媛，2018.12.15.
- 25) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，愛媛，2018.12.16.
- 26) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中部地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，愛知，2018.12.22.
- 27) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中部地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，愛知，2018.12.23.

(2) 研修会講師

- 1) 橋本亮太：統合失調症の認知機能障害を 15 分で誰でも簡便に測定できる実習コース，統合失調症における認知機能障害を考える会 in 金沢，石川，2018.7.14.
- 2) 橋本亮太：統合失調症・うつについて.平成 30 年度第一回薬物療法専門薬剤師集中講義，大阪，2018.7.28.
- 3) 橋本亮太：児童思春期，第 15 回日本うつ病学会総会，EGUIDE プロジェクト・うつ病治療ガイドライン講習会，東京，2018.7.29.
- 4) 橋本亮太：統合失調症薬物治療を正しく理解し正確に伝えるために，埼玉県精神障害者家族会連合会 精神障害者家族間の支援者（ピアサポート）養成研修会，埼玉，2018.10.1.
- 5) 橋本亮太：治療抵抗性，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，山口，2018.10.13.
- 6) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，山口，2018.10.13.
- 7) 橋本亮太：軽症，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，山口，2018.10.14.
- 8) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，うつ病治療ガイドライン講習，山口，2018.10.14.
- 9) 橋本亮太：その他の臨床的諸問題，EGUIDE プロジェクト東北講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.10.
- 10) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト東北講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.10.
- 11) 橋本亮太：児童思春期，EGUIDE プロジェクト東北講習，うつ病治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.11.
- 12) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト東北講習，うつ病治療ガイドライン講習，宮城，2018.11.11.
- 13) 橋本亮太：治療抵抗性，第 28 回日本臨床精神神経薬理学会・第 48 回日本神経精神薬理学会合同年会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習会，東京，2018.11.16.
- 14) 橋本亮太：治療抵抗性，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，沖縄，2018.11.17.
- 15) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，沖縄，2018.11.17.
- 16) 橋本亮太：治療計画の策定，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，うつ病治療ガイドライン講習，沖縄，2018.11.18.
- 17) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，うつ病治療ガイ

ドライン講習，沖縄，2018.11.18.

- 18) 橋本亮太：治療抵抗性，EGUIDE プロジェクト新潟講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.23.
- 19) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト新潟講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.23.
- 20) 橋本亮太：児童思春期，EGUIDE プロジェクト新潟講習，うつ病治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.24.
- 21) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック，EGUIDE プロジェクト新潟講習，うつ病治療ガイドライン講習，新潟，2018.11.24.

F. その他

- 1) 橋本亮太：研究会主宰，第16回 IGC 第12回 COCORO 合同会議，東京，2018.12.8-9.
- 2) 橋本亮太：総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，山口，2018.10.13.
- 3) 橋本亮太，総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト中国地区講習，山口，2018.10.14.
- 4) 橋本亮太，総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト東北講習，宮城，2018.11.10.
- 5) 橋本亮太，総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト東北講習，宮城，2018.11.11.
- 6) 橋本亮太，総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，沖縄，2018.11.17.
- 7) 橋本亮太，総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト沖縄講習，沖縄，2018.11.18.
- 8) 橋本亮太，総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト新潟講習，新潟，2018.11.23.
- 9) 橋本亮太，総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト新潟講習，新潟，2018.11.24.

8. 睡眠・覚醒障害研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、認知症、神経症・心身症などの病態および治療法を解明することを目的としている。このため、精神生理学、時間生物学、神経薬理学、分子生物学、神経内分泌学、脳機能イメージングなどの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長 1 名、室長 2 名に加え、流動研究員 2 名、科研費研究員 1 名、協力研究員 2 名および、国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究部の構成

部長：三島和夫（～8/31）、栗山健一（1/1～）。精神生理機能研究室長：肥田昌子。臨床病態生理研究室長：北村真吾。流動研究員：綾部直子、吉村道孝。科研費研究員：勝沼るり（～1/31）。協力研究員：阿部又一郎、梶 達彦。併任研究員：都留あゆみ（センター病院）。客員研究員：樋口重和（九州大学）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、内山 真（日本大学）、兼板佳孝（日本大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、阿部高志（筑波大学）、守口善也（ルンドベックジャパン）、福水道郎（瀬川記念小児神経学クリニック）、榎本みのり（東京工科大学）、有竹清夏（埼玉県立大学）、亀井雄一（上諏訪病院）、渡辺和人（獨協医科大学）、三島和夫（秋田大学）。そのほか科研費研究補助員 1 名、センター研究補助員 2 名、研究生 13 名、外来研究員 1 名。

II. 研究活動

1) 向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究（H29-精神-一般-001）

厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（主任研究者：三島和夫、研究協力者：綾部直子、吉村道孝）

本研究班では、1) 国内の 6 種の向精神薬（抗精神病薬、抗うつ薬、気分安定薬、睡眠薬、抗不安薬、ADHD 治療薬）の処方実態とその臨床的問題点を明らかにし、2) 向精神薬の適正処方を実践するための実証的データとエビデンスを収集して政策提言を行い、3) 専門家によるコンセンサスマーティングを通じて向精神薬の適正処方を実践するためのガイドラインと応用指針を作成した。

目的を達成するため以下の課題に取り組んだ。各分担研究班は関連領域の研究協力者を募り学際的に研究を進め、定期的に班会議を開催し、相互に連携してデータの分析と解釈を行った。

- 1) 大規模診療報酬データを用いた向精神薬処方に関する実態調査研究
- 2) 医師・薬剤師を対象とした向精神薬処方に関する意識調査
- 3) 薬物乱用・依存リスクの高い向精神薬と乱用・依存患者の背景要因に関する研究
- 4) EGUIDE プロジェクトと連動した向精神薬の処方実態調査と診療の質指標による教育効果の評価
- 5) 向精神薬の適正処方、減薬基準、減薬方法などに関するエビデンスの抽出方法の策定
- 6) 向精神薬の適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインの作成

2) 社会機能/QOL 改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発

精神・神経医療研究開発費研究事業（主任研究者：三島和夫（～30年8月）、栗山健一（31年1月～）、研究協力者：北村真吾、綾部直子、吉村道孝）

本研究事業では、精神疾患に随伴する不眠症、過眠症（眠気）、概日リズム睡眠-覚醒障害（夜型生活や昼夜逆転）に対する効果的で安心な睡眠障害用クリニカルパスを作成することを目的としており、クリニカルパスには患者の要望が大きい shared decision making と出口戦略（維持療法か治療終結かの判断）の視点を取り入れる。クリニカルパスを用いた睡眠医療によって患者の日常機能の大きな阻害要因である社会機能/QOL 障害の向上に資するか検証する。これらの目的のために以下の研究事業に取り組んだ。1) 睡眠障害による社会機能/QOL 障害の実態調査：睡眠障害による社会機能/QOL 障害の同定に適した臨床評価尺度を選択・作成し、睡眠障害の存在が精神疾患患者の社会機能/QOL 障害に及ぼす寄与度を明らかにするための多施設共同実態調査の準備を行った。2) 睡眠障害用クリニカルパスの作成：睡眠症状と社会機能/QOL 障害のアセスメント、治療、寛解・回復基準、減薬・休薬までの流れを明示的に示す睡眠医療クリニカルパスの作成に着手した。不眠、過眠、睡眠リズム異常に対する薬物療法をベースとして、認知行動療法（CBT-I, CBT-R）を活用することでリスクベネフィットと社会機能/QOL の向上を図る診療マニュアルの作成に着手した。3) 検証試験：NCNP 病院および共同研究機関において、睡眠障害用クリニカルパスの有効性を検証する多施設共同試験を実施する予定である。

3) こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究：睡眠障害モジュール開発

厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（分担研究者：三島和夫、研究協力者：綾部直子）

地域精神保健医療の現場においても、不眠症をはじめとする睡眠問題を抱えている相談者は多い。しかしながら、これまで地域精神保健医療における相談業務で遭遇する睡眠障害を早期に同定する診断モジュールはなかった。そこで本研究では、保健師や対人援助職向けのガイドライン、マニュアルの作成および研修プログラムを構築することを目的とする。まず、睡眠障害の診断や治療に関するガイドライン、睡眠衛生指導や睡眠障害に対する心理社会的支援を中心とした相談対応マニュアル、相談者が在宅で実施可能な対処スキルや睡眠衛生指導を盛り込んだリーフレットを作成した。次に、地域精神医療に関わる保健師等、実際に相談対応にあたる者を対象として上記資料を活用した研修を行った。参加者の意見は概ね好評であった。今後は実際の相談対応で困った具体的な事例などを盛り込むことや、より活用しやすい資料に改良していく必要があると考えられる。相談者が抱える睡眠問題に対する生活指導や対処方法の指導、ならびに簡便な睡眠障害のスクリーニングが行えるマニュアルの存在は、相談対応者自身の対応スキルの向上のみならず、相談者のセルフケア行動や受診行動の促進にもつながることが期待される。

4) 高齢者の睡眠障害に関わる環境及び遺伝の相互作用の解明

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 B（主任研究者：三島和夫、研究協力者：肥田昌子）

睡眠・生体リズム機能の加齢変化にエピゲノム制御が関わっているか調べるため概日変動を示すメチル化領域（概日メチル化領域）の探索を行った。そこで、在宅調査中の睡眠時間帯や総睡眠時間が安定しており、うつ症状のない若年被験者 4 名（平均年齢 23 歳）と高齢被験者 4 名（平均年齢 66.5 歳）を選んだ。エピゲノム解析対象の被験者についても、高齢者は若年者より睡眠時間帯が早く、朝型指向性が強かった。また、PSG 解析によると高齢者 4 名はいずれも深睡眠が少なく中途覚醒が多い高齢者に特徴的な睡眠構造を示した。若年者 4

人全員にリズム性が認められた領域は 55 箇所、3 人にリズム性が認められた領域は 2156 箇所検出された。一方、高齢者 4 人全員にリズム性が認められた領域は 87 箇所、3 人にリズム性が認められた領域は 2695 箇所であった。また、若年者 3 人以上と高齢者 3 人以上に共通して概日リズム性が認められた領域は 16 箇所存在し、加齢変化というよりも概日リズム性の形成・維持に重要なメチル化領域である可能性が高い。若年者群で概日リズムを示したが高齢者群でリズム性が失われたメチル化領域や若年者群で概日リズムを示さなかったが高齢者群でリズム性を示したメチル化領域は、少なくともその一部は睡眠・生体リズム機能の加齢変化制御に関わっていると考えられる。

5) 生体リズムと気分調節における機能障害の分子メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (主任研究者：肥田昌子)

概日リズム睡眠-覚醒障害は望ましい時間帯に入眠して覚醒することが困難となる疾患で、生物時計システムの入力・時計本体・出力に関連する機能の障害によって生じると考えられている。概日リズム睡眠-覚醒障害にはいくつかのサブタイプが存在するが、時計システムそのものに障害があると考えられる原発性の睡眠-覚醒相前進障害、睡眠-覚醒相後退障害、非 24 時間睡眠-覚醒リズム障害、不規則睡眠-覚醒リズム障害と、人為的・社会的理由により内因性の生物時計と外界環境の睡眠-覚醒リズムが大きく乖離することによって生じる二次性の時差障害、交代勤務障害の二つのグループに分けられる。概日リズム睡眠-覚醒障害は発症メカニズムが明らかになっていないだけでなく遺伝要因も同定されていない。そこで、睡眠-覚醒相後退障害、非 24 時間睡眠-覚醒リズム障害、一般生活者について時計遺伝子 *PER3* 反復配列多型のタイピングを行い、この *PER3* 反復配列多型と概日リズム睡眠-覚醒障害ならびにコントロールにおいて朝型夜型指向性との関連性を調査した。今までに *PER3* 反復配列多型は種々の概日特性や睡眠特性と関連性が報告されていたが、日本人集団においては有意な関連性は認められず、*PER3* 反復配列多型は概日特性や睡眠特性の普遍的な遺伝マーカーではないことを明らかにした。今後は、概日リズム睡眠-覚醒障害の新たな遺伝要因を探索し、睡眠覚醒リズム異常の発症機序解明を目指す。

6) 子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (主任研究者：北村真吾)

本研究の目的は、子どもの年齢変化に伴う睡眠調節の機能変化に対する要因としての睡眠恒常性機能諸側面（主観的眠気、脳波検査）と概日リズム機能諸側面（放熱反応、概日リズム位相後退、夜型化）の寄与の検証である。本年度は、児童のための新しい活動量計 FS-760 による睡眠覚醒判定アルゴリズムを作成した。

研究協力者は 35 名の男女児童である（平均年齢 10.8 ± 2.7 歳、範囲 6~15 歳、男女比 57%:43%）。すべての児童本人及び保護者へ説明を行い書面による同意を得た。児童は実験施設で 1 夜の睡眠ポリグラフ (PSG) と活動量 FS-760 の同時測定を行った。児童を Group A (N=18) と Group B (N=17) に割付け、Group A の活動量データから判別分析により 5 次元の線型判別関数を算出し、Group B の活動量データにより精度を検証した。

判別関数の一致率は $86.37 \pm 1.31\%$ と一定の精度を示した。感度（睡眠の正解率）は $88.08 \pm 1.54\%$ 、特異度（覚醒の正解率）は $64.15 \pm 5.68\%$ と成人の値 (Nakazaki, 2014) と同等であった。ステージごとの一致率では S1 でやや低い値がみられた (S1: $63.51 \pm 5.53\%$) もの、それ以外では $82.72 \sim 97.63\%$ と高い一致率がみられた。連続出現エポック数により入眠潜時および中途覚醒の最適化を t 検定および級内相関係数 ICC で検証した結果、入眠潜時では最適化不要であったが、中途覚醒では 5 エポック (20 分) が PSG での結果と最も高い整合性を示した。

本研究で作成した FS-760 のための新しい児童用睡眠覚醒判定アルゴリズムは十分な精度

を有することが示された。

7) 不眠や気分障害予防における過覚醒状態の評価方法の確立及び臨床的有用性の検討
文部科学省科学研究費補助金 若手研究 (B) (研究代表者：綾部直子)

Hyperarousal Scale (以下, HAS) は, 不眠症や気分障害等の背景に存在する生理的過覚醒を評価する自記式評価スケールである。HAS は 26 項目から構成され, 先行研究においては不眠症群は健常者群と比較するとその HAS 得点が有意に高いことや, 過覚醒状態はうつ症状やストレス, 睡眠問題と関連していることが示唆されている。本研究では, HAS 日本語版を用いて評価した過覚醒状態が, 不眠症や気分障害のスクリーニングツールとして有用であるか検証することを目的としている。これまでの研究結果から, 地域住民と比較すると不眠症患者は HAS 得点が有意に高いことが示され, また, 不眠症状が寛解している不眠症患者においてもなお HAS 得点が高い者が一定数存在することが示された。すなわち, 寛解状態にあっても不眠障害や気分障害の再発リスクを抱えている状態にある可能性が示唆された。さらにこれらの結果をふまえ, 地域住民を対象として, 不眠や抑うつ状態には至っていないが過覚醒得点の高い者はその後の不眠や抑うつ症状発現のリスク要因となり得るか検討したところ, 抑うつ状態を呈していなくても過覚醒状態が高い者は 1 年後の抑うつ症状増悪のリスク因子となることが示された。最終年度も, 引き続き調査に参加している地域住民 348 名のうち 161 名からデータを収集し解析を行っている。研究成果の一部については, 不眠研究会や国際学会等にて発表を行うとともに国際医科学誌論文の執筆を進めている。

III. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は, 都民・市民のための公開講座, 講演会などにおいて睡眠と健康づくり, 睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ, ラジオ, オンラインサイト, 新聞, 雑誌等のメディアを通して, 睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は, 国内各地の学術集会, 研究会, 談話会, 医師会講演会などで睡眠障害, 気分障害, 認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。三島和夫は, 東京農工大学(客員教授), 山梨大学(客員教授), 東京医科歯科大学(非常勤講師), 秋田大学(非常勤講師), 早稲田大学, 筑波大学, 慶應義塾大学など教育機関において学生教育の援助を行った。栗山健一は滋賀医科大学(非常勤講師)において学生教育の援助を行った。北村真吾は, 京都大学(非常勤講師), 神奈川大学(非常勤講師)など教育機関において学生教育の援助を行った。

また, 研究員は日本睡眠学会, 日本時間生物学会, 日本生物学的精神医学会, 日本公衆衛生学会, 不眠研究会, 睡眠学研究会, 関東睡眠障害懇話会, 日本生理人類学会, 関東脳核医学研究会などにおける理事, 評議員, 世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会, 米国睡眠学会, ヨーロッパ睡眠学会, 国際時間生物学会等, 米国心身医学会, ヨーロッパ CBT 学会, 等において講演者, シンポジスト, オーガナイザーとして研究成果を発表し, 各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

研究員は, 認知行動療法センターと連携して平成 30 年度睡眠の問題に対する認知行動療法の研修(ベーシック・アドバンス)を実施した。2018.11.9-2018.11.10。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

三島和夫は、社会保障審議会統計分科会専門委員として、ICD-11の策定準備作業に関わった。独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員として新薬の審査にたずさわった。東京都健康推進プラン 21 推進会議中間評価部会委員として都の健康増進事業の評価を行った。栗山健一は日本睡眠学会用語委員会副委員長として、ICSD-3 および ICSD-11 の策定準備作業に関わった。

(5) センター内における臨床的活動

三島和夫、栗山健一、綾部直子、吉村道孝は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った。

(6) その他

三島和夫は医学専門家として新規睡眠障害治療薬の臨床治験に関わった。三島和夫、北村真吾、吉村道孝および研究員は企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

北村真吾および研究員は企業から要請された診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

IV. 研究業績**A. 刊行物****(1) 原著論文**

- 1) Hida A, Kitamura S, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kamei Y, Mishima K: Lack of association between PER3 variable number tandem repeat and circadian rhythm sleep-wake disorders. *Human Genome Variation* 5: 17, 2018.
- 2) Miyagawa T, Khor SS, Toyoda H, Kanbayashi T, Imanishi A, Sagawa Y, Kotorii N, Kotorii T, Ariyoshi Y, Hashizume Y, Ogi K, Hiejima H, Kamei Y, Hida A, Miyamoto M, Ikegami A, Wada Y, Takami M, Higashiyama Y, Miyake R, Kondo H, Fujimura Y, Tamura Y, Taniyama Y, Omata N, Tanaka Y, Moriya S, Furuya H, Kato M, Kawamura Y, Otowa T, Miyashita A, Kojima H, Saji H, Shimada M, Yamasaki M, Kobayashi T, Misawa R, Shigematsu Y, Kuwano R, Sasaki T, Ishigooka J, Wada Y, Tsuruta K, Chiba S, Tanaka F, Yamada N, Okawa M, Kuroda K, Kume K, Hirata K, Uchimura N, Shimizu T, Inoue Y, Honda Y, Mishima K, Honda M, Tokunaga K: A variant at 9q34.11 is associated with HLA-DQB1*06:02 negative essential hypersomnia. *J Hum Genet* 63(12): 1259-1267, 2018.
- 3) Kitazawa M, Yoshimura M, Murata M, Sato-Fujimoto Y, Hitokoto H, Mimura M, Tsubota K, Kishimoto T: Associations between problematic Internet use and psychiatric symptoms among university students in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2018 Jul;72(7):531-539.
- 4) Kitazawa M, Sakamoto C, Yoshimura M, Kawashima M, Inoue S, Mimura M, Tsubota K, Negishi K, Kishimoto T: The Relationship of Dry Eye Disease with Depression and Anxiety: A Naturalistic Observational Study. *Translational Vision Science & Technology*. 2018. 7(6): 35.
- 5) Ayabe N, Okajima I, Nakajima S, Inoue Y, Watanabe N, Yamadera W, Uchimura N, Tachimori H, Kamei Y, Mishima K: Effectiveness of cognitive behavioral therapy for pharmacotherapy-resistant chronic insomnia: a multi-center randomized controlled trial in Japan. *Sleep Med* 50: 105-112, 2018.
- 6) Tsukada E, Kitamura S, Enomoto M, Moriwaki A, Kamio Y, Asada T, Arai T, Mishima K: Prevalence of childhood obstructive sleep apnea syndrome and its role in daytime sleepiness. *PLoS One* 13: e0204409, 2018.

- 7) Okada M, Otaga M, Tsutsui T, Tachimori H, Kitamura S, Higuchi S, Mishima K: Association of sleep with emotional and behavioral problems among abused children and adolescents admitted to residential care facilities in Japan. PLoS One 13: e0198123, 2018.

(2) 総説

- 1) 綾部直子, 三島和夫: 睡眠薬減量に対する CBT-I の貢献と課題 —日本における多施設共同ランダム化比較試験による CBT-I の有効性—. 心身医学 58(7): 622-627, 2018.
- 2) 綾部直子, 三島和夫: 睡眠障害と心理社会支援. 精神保健研究 65: 37-42, 2019.
- 3) 肥田昌子: 概日リズムを末梢で計測する. Clinical Neuroscience 36(9): 1107-1108, 2018.
- 4) 北村真吾: サーカディアンミスライメントを防ぐ個人裁量労働制への展開. 労働の科学 73(10): 12-16, 2018.

(3) 著書

- 1) 三島和夫: 神経発達障害に見られる睡眠問題とその臨床的意義, 発達障害 診断と治療の ABC130. 千海俊幸 編: 最新医学社, 東京, pp93-99, 2018.
- 2) 北村真吾: 第Ⅱ章 子どもの「睡眠負債」—今、大人にできること. 子どものからだと心・連絡会議 編: 子どものからだと心白書 2018, ブックハウス HD, 東京, pp35-37, 2018.

(4) 研究報告書

- 1) 三島和夫: 向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 ((障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究 (研究代表者: 三島和夫)」 pp1-32, 2019.
- 2) 三島和夫: 睡眠障害モジュール開発に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)). 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. pp139-142, 2019.
- 3) 三島和夫: 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)). 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. pp5-134, 2019.
- 4) 三島和夫: 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)). 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 28 年度～30 年度 総合研究報告書. pp183-192, 2019.
- 5) 三島和夫: 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)). 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 28 年度～30 年度 総合研究報告書. pp3-178, 2019.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 吉村道孝: 日本生理人類学会第 77 回大会優秀発表賞, 2018.6.17
- 2) 綾部直子: 不眠研究会第 34 回研究発表会大熊賞, 2018.11.17
- 3) 肥田昌子: 日本睡眠学会第 43 回定期学術集会ベストプレゼンテーション賞, 2018.7.13.

- 4) 北村真吾：日本睡眠学会第 43 回定期学術集会ベストプレゼンテーション賞，2018.7.13.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) 三島和夫：【講演】医療現場で遭遇する睡眠障害の診たて方と対処法．熊本県保険医協会，熊本，2018.5.11.
- 2) 三島和夫：【講演】多摩睡眠医学セミナー『睡眠薬はやめられますか？』『睡眠薬でボケますか？』不眠治療の FAQ に答えるための基礎知識．東京，2018.6.30.
- 3) 三島和夫：【シンポジウム】赤ちゃんのねむり～乳幼児期の睡眠環境を考える．日本赤ちゃん学会第 18 回学術集会，東京，2018.7.7.
- 4) 三島和夫：【共催シンポジウム】睡眠薬の適正使用～減量・休薬について考える～：睡眠薬の適正使用－依存形成について．日本睡眠学会第 43 回定期学術集会，北海道，2018.7.11-13.
- 5) 三島和夫：【ランチョンセミナー】うつ病診療の質を高める睡眠指導、睡眠医療．第 15 回日うつ病学会総会，東京，2018.7.27.
- 6) 三島和夫：【講演】高齢者の睡眠問題の診立てと治療のポイント．福井県内科医会，福井，2018.7.28.
- 7) 三島和夫：【講演】なぜ診療報酬改定が必要であったのか：今後の不眠症の薬物療法のあり方を考える．睡眠と生活習慣病研究会，沖縄，2018.8.31.
- 8) 肥田昌子：【講演】時計遺伝子が睡眠をコントロール？ 日本睡眠学会第 22 回睡眠科学研究講座，北海道，2018.7.10.
- 9) 吉村道孝：【シンポジウム】メンタルヘルスから見た未病指導の可能性．第 25 回日本未病システム学会学術総会，東京，2018.10.27.
- 10) 吉村道孝：【シンポジウム】労働者の睡眠の質．AI for social good, Google AI Impact Cchallenge, 東京，2018.12.8.
- 11) 北村真吾：【シンポジウム】睡眠・生体リズムの個人差．日本生理人類学会第 77 回大会，九州，2018.06.16.
- 12) 北村真吾：【講演】アクチグラフィによる睡眠評価．日本生理人類学会 2018 年度夏期セミナー，北海道，2018.09.04.
- 13) 栗山健一：【講演】睡眠障害と睡眠薬の効果的な使い方、減薬法に関して．国分寺市医師会・小金井市医師会合同学術講演会，東京，2019.2.13.
- 14) 栗山健一：【講演】サーカディアンリズムと健康医学．Joint Symposium on Insomnia, 京都，2019.3.14.

(2) 一般演題

- 1) Katsunuma R, Motomura Y, Itasaka M, Yoshimura M, Moriguchi Y, Mishima K: The neural associations of pleasantness in moral judgements with sleep deprived. Australasian Society for Social and Affective Neuroscience, Melbourne, Australia, 2017.6.15.
- 2) 肥田昌子, 鶴飼基生, 北村真吾, 綾部直子, 加藤美恵, 亀井雄一, 三島和夫：76 遺伝子を対象とした非 24 時間睡眠-覚醒リズム障害遺伝要因の探索．日本睡眠学会第 43 回定期学術集会，北海道，2018.7.11-13.
- 3) Yoshimura M, Motomura Y, Katsunuma R, Tsubota K, Mishima K: The effect of sleep deprivation on body balance of healthy subjects. The 9th Congress of Asian Sleep Research Society (ASRS), Sapporo, 2018.7.11-13.
- 4) Kitazawa M, Yoshimura M, Liang KC, Wada S, Mimura M, Tsubota K, Kishimoto T: Differences of Sleep in Healthy Subjects and Patients with Mood Disorders in Remission.

- The 9th Congress of Asian Sleep Research Society (ASRS), Sapporo, 2018.7.11-13.
- 5) Yoshimura M, Kitamura S, Eto N, Hida A, Katsunuma R, Ayabe N, Motomura Y, Nishiwaki Y, Negishi K, Tsubota K, Mishima K: Relationship between Indoor Daytime Light Exposure and Circadian Phase Response under Laboratory Free-Living Conditions. Asian Forum on Chronobiology in 2018, Sapporo, 2018.7.11-13.
 - 6) 吉村道孝, 元村祐貴, 勝沼るり, 北村真吾, 北沢桃子, 岸本泰士郎, 三村 將, 坪田一男, 三島和夫: 画像解析を用いた短時間睡眠による表情変化検出の試み. 第 77 回生理人類学会, 福岡, 2018.6.16-17.
 - 7) 西村英伍, 元村祐貴, 尾方義人, 勝沼るり, 吉村道孝, 三島和夫: 機械学習を用いた動画からの生体情報抽出技術の開発: 上眼瞼の動き検出に用いた一例. 第 77 回生理人類学会, 福岡, 2018.6.16-17.
 - 8) 吉村道孝, 元村祐貴, 勝沼るり, 北沢桃子, 北村真吾, 三村 將, 坪田一男, 岸本泰士郎, 三島和夫: 短時間睡眠における顔部変化の客観的検出. 第 43 回日本睡眠学会, 北海道, 2018.7.11-13.
 - 9) 北沢桃子, 吉村道孝, Liang Kuo-Ching, 和田智之, 三村 將, 坪田一男, 岸本泰士郎: 寛解状態の気分障害患者および健常者における睡眠に関する考察. 第 25 回日本未病システム学会学術総会, 東京, 2018.10.27-28.
 - 10) Ayabe N, Okajima I, Nakajima S, Inoue Y, Watanabe N, Yamadera W, Uchimura N, Tachimori H, Kamei Y, Mishima K: Effectiveness of cognitive behavioural therapy for insomnia: The tapering rate of hypnotics, sleep quality, and depression, 48th Annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies (EABCT 2018), Sofia, Bulgaria, 2018.9.6-9.8.
 - 11) 岡島 義, 三島和夫, 山寺 亘, 稲田 健, 田中春仁, 藤田雅彦, 小林美奈, 綾部直子, 河村麻果, 陳内彩音, 井上雄一: 慢性不眠障害に対する人的支援を伴わない Web-based CBTi の有効性: 多施設共同研究による無作為化比較試験. 日本睡眠学会第 43 回定期学術集会, 北海道, 2018.7.12-13.
 - 12) Motomura Y, Kitamura S, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K: Recovery from Unrecognized sleep debt accumulated in daily life improved mood regulation: arterial spin labeling fMRI study. The 9th Congress of Asian Sleep Research Society (ASRS), Sapporo, Japan, 2018.7.11-13.
 - 13) Kitamura S, Enomoto M, Miidera H, Tachimori H, Mishima K: Psychotropic drugs use and the risk of hip fracture among Japanese middle-aged and elderly people. The 9th Congress of Asian Sleep Research Society (ASRS), Sapporo, Japan, 2018.7.11-13.
 - 14) Komada Y, Okajima I, Kitamura S, Inoue Y: Morningness-Eveningness, social jetlag, and work performance in a sample of Japanese workers. 24th Congress of the European Sleep Research Society, Basel, Switzerland, 2018.9.25-28.
 - 15) 北村真吾, 立森久照, 宮田裕章: 睡眠習慣改善のための Web フィードバックの試み. 日本生理人類学会第 78 回大会, 東京, 2018.10.27-28.
 - 16) 北村真吾, 肥田昌子, 三島和夫: 日周指向性と社会的ジェットラグは精神的健康度と直接的に関連するが、クロノタイプは間接的に関連する. 第 25 回日本時間生物学会学術大会, 長崎, 2018.10.20-21.
 - 17) 武岡功汰, 江藤太亮, 李 相逸, 北村真吾, 樋口重和: 子どもの光曝露履歴と夜の光感受性に関する研究. 日本生理人類学会第 78 回大会, 東京, 2018.10.27-28.
 - 18) 黒川修行, 小野村薫子, 高瀬佳実, 小宮秀明, 北村真吾, 樋口重和: 女子大学生における睡眠状況と月経との関係について. 日本生理人類学会第 78 回大会, 東京, 2018.10.27-28.
 - 19) 江藤太亮, 西村佳菜, 武岡功汰, 李 相逸, 鹿野晶子, 野井真吾, 北村真吾, 樋口重和: 自然

- の明暗サイクルに従った睡眠/覚醒リズムが子どものメラトニン分泌特性に及ぼす影響. 第25回日本時間生物学会学術大会, 長崎, 2018.10.20-21.
- 20) 元村祐貴, 北村真吾, 中崎恭子, 大場健太郎, 勝沼るり, 寺澤悠理, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫: 精神運動ヴィジランス課題時の脳活動. 日本生理人類学会第78回大会, 東京, 2018.10.
- 21) 北村真吾, 肥田昌子, 三島和夫: 社会的ジェットラグおよび睡眠規則性と体組成・代謝機能との関連. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 22) 樋口重和, 西村佳菜, 江藤太亮, 李相逸, 北村真吾, 鹿野晶子, 野井真吾: 自然の光環境でのキャンプ生活が子どもの概日リズムに及ぼす影響. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 23) 肥田昌子, 鶴飼基生, 北村真吾, 綾部直子, 加藤美恵, 亀井雄一, 三島和夫: 76 遺伝子を対象とした非24時間睡眠-覚醒リズム障害遺伝要因の探索. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 24) 都留あゆみ, 木村綾乃, 三島和夫, 北村真吾, 角野友哉, 亀井雄一: 中枢性過眠症におけるレストレスレッグス症候群 (RLS) の合併に関する報告. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 25) 江藤太亮, 武岡功汰, 李相逸, 北村真吾, 樋口重和: 自然環境での光曝露が子どもの瞳孔の対光反射に及ぼす影響. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 26) 榎本みのり, 北村真吾, 肥田昌子, 樋口重和, 岡田(有竹)清夏, 三島和夫: クロノタイプ別の睡眠負債耐性の違い. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.07.11-13.
- 27) 鶴飼基生, 肥田昌子, 北村真吾, 加藤美恵, 井上雄一, 三島和夫: 家族性概日リズム睡眠-覚醒相前進障害に関わる遺伝要因の探索. 日本睡眠学会第43回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.
- 28) 黒川修行, 野井真吾, 鹿野晶子, 千竈健人, 北村真吾, 樋口重和: 小児期における睡眠と初経発来時期の関係について. 日本生理人類学会第77回大会, 福岡, 2018.6.16-17.
- 29) 元村祐貴, 勝沼るり, 北村真吾, 綾部直子, 吉村道孝, 肥田昌子, 三島和夫: 睡眠習慣と安静時脳活動の関連: ASL-fMRI を用いた検討. 日本生理人類学会第77回大会, 福岡, 2018.6.16-17.
- 30) 岡田真一, 神尾陽子, 北村真吾, 樋口重和, 三島和夫: 一般児童における睡眠と情緒・行動上の問題との関連. 日本生理人類学会第77回大会, 福岡, 2018.6.16-17.
- 31) 榎本みのり, 北村真吾, 肥田昌子, 樋口重和, 岡田(有竹)清夏, 三島和夫: 睡眠負債に対する耐性-クロノタイプ別の検討-. 日本生理人類学会第77回大会, 福岡, 2018.6.16-17.

(3) 研究報告会

- 1) 綾部直子, 中島 俊, 立森久照, 北村真吾, 肥田昌子, 三島和夫: 認知的過覚醒指標はその後の不眠と抑うつ発症リスクを予測できるか?. 不眠研究会第34回研究発表会, 東京, 2018.11.17.
- 2) 綾部直子: 睡眠障害モジュール開発に関する研究. 「心の健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」(班会議), 東京, 2018.9.3.
- 3) 栗山健一, 北村真吾, 綾部直子, 吉村道孝: 精神・神経疾患研究開発費事業「社会機能/QOL改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発」(班会議), 東京, 2019.3.10.
- 4) 三島和夫, 綾部直子, 吉村道孝: 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」班会議(班会議), 東京, 2019.2.3.

(4) その他

C. 講演

- 1) 三島和夫：【一般講演】人生 100 年時代のための スマートエイジング EXPO : 疲れがどんどんとれる「本当の睡眠術」(睡眠負債、生体リズムなど)。東京, 2018.7.21.
- 2) 綾部直子：【一般講演】子どもの睡眠 ～体内時計を整えてよい睡眠をとるコツ～。千葉県浦安市学校保健会全体研修会, 東京, 2018.5.17.
- 3) 綾部直子：【一般講演】「睡眠の大切さ」を知ろう。静岡県富士宮市立大富士中学校学校保健委員会, 静岡, 2018.6.28.
- 4) 綾部直子：【一般講演】眠れない子どもたちの生活習慣の改善について～家庭と連携を図りながら子どもの睡眠について考える～。福島県学校保健会北会津支部保健主事・養護教諭合同研修会, 福島, 2018.8.20.
- 5) 綾部直子：【一般講演】健康づくりと睡眠～快眠のための生活改善と休養～。東京都千代田区保健所平成 30 年度第 2 回健康づくり推進員研修会, 東京, 2018.10.12.
- 6) 綾部直子：【一般講演】眠りの価値を見直す～睡眠負債が引き起こす様々な弊害と対策～。平成 30 年度第 4 回豊島区職員メンタルヘルス講座, 東京, 2018.11.2.
- 7) 綾部直子：【一般講演】「睡眠の大切さ」を知ろう。千葉県市川市立新浜小学校学校保健委員会, 千葉, 2018.12.17.
- 8) 綾部直子：【一般講演】快眠のすすめ。東京都荒川区精神保健福祉講演会, 東京, 2019.2.15.
- 9) 綾部直子：【一般講演】心地よく眠るためのヒケツ平塚市睡眠に関する健康講話。神奈川, 2019.2.16.
- 10) 綾部直子：【一般講演】子どもたちの健康な生活と睡眠の関係について。東京都江戸川区立清新第一小学校学校保健委員会, 東京, 2019.2.20.
- 11) 綾部直子：【一般講演】良い睡眠で健康づくり～質の良い睡眠とは?。東京都墨田区うつ病予防講演会, 東京, 2019.3.11.
- 12) 北村真吾：【一般講演】体内時計を整えて、スッキリ朝を迎えよう。サンケイリビング主催未病女子セミナー, 東京, 2018.5.17.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 三島和夫：日本睡眠学会 理事
- 2) 三島和夫：日本時間生物学会 理事
- 3) 三島和夫：日本生物学的精神医学会 評議員
- 4) 三島和夫：日本公衆衛生学会 評議員
- 5) 三島和夫：脳科学関係学会連合 評議員
- 6) 三島和夫：精神科臨床睡眠懇話会 世話人
- 7) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 8) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 9) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 10) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 11) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員
- 12) 吉村道孝：日本未病システム学会 評議員

(3) 座長

- 1) 三島和夫：【共催シンポジウム座長】睡眠状態誤認を科学する。日本睡眠学会第 43 回定期学術集会, 北海道, 2018.7.11-13.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 三島和夫 : Frontiers in Sleep and Chronobiology, Associate editor.
- 2) 三島和夫 : Psychiatry Journal, Associate editor.
- 3) 三島和夫 : Sleep and Biological Rhythms, Advisory Board.
- 4) 三島和夫 : 睡眠医療 編集委員
- 5) 三島和夫 : ねむりと医療 編集委員
- 6) 肥田昌子 : Scientific Reports, Editorial Board.
- 7) 肥田昌子 : 時間生物学 編集委員
- 8) 北村真吾 : Journal of Physiological Anthropology, Handling editor.

E. 研修**(1) 研修企画****(2) 研修会講師**

- 1) 肥田昌子, 北村真吾 : 【講師】時間隔離実験室 : 睡眠と生体リズムの精密評価. 第 4 回メディア塾, 東京, 2017.8.25.
- 2) 綾部直子 : 【講師】いきいきと働くために セルフケアと健康管理室の利用について (新入職員研修). 文部科学省健康管理室, 東京, 2018.6.15, 6.29.
- 3) 綾部直子 : 【ワークショップ講師】CBT-I 総論とアセスメント. 日本睡眠学会第 43 回定期学術集会教育委員会セミナー『不眠症の認知行動療法』ワークショップ 2018 ベーシックコース, 北海道, 2018.7.14.
- 4) 綾部直子 : 【講師】不眠症の認知行動療法を学ぶ : 理論と実践. 長崎県臨床心理士会, 長崎, 2018.10.14.
- 5) 綾部直子 : 【ワークショップ講師】平成 30 年度睡眠の問題に対する認知行動療法の研修 (ベーシック). 国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター, 東京, 2018.11.9-10.
- 6) 綾部直子 : 【ワークショップ講師】平成 30 年度睡眠の問題に対する認知行動療法の研修 (アドバンス). 国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター, 東京, 2018.11.9-10.
- 7) 綾部直子 : 【講師】睡眠障害. 平成 30 年度厚生労働科学研究費厚生労働科学「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究班」地域精神保健相談研修, 東京, 2019.2.13
- 8) 綾部直子 : 【ワークショップ講師】漸進的筋弛緩法. 日本睡眠学会教育委員会「不眠の認知行動療法セミナー」ベーシックコース, 東京, 2019.2.23.

F. その他

- 1) 三島和夫 : 【新聞】睡眠の専門家に聞く 居眠りは日本文化. 慶應塾生新聞, 2018.4.27.
- 2) 三島和夫 : 【新聞】「心身に悪影響」関連ビジネス拡大 睡眠負債 高額な枕が人気 市場 1 兆円超? 眠り短い日本人. 朝日新聞 (大阪) 夕刊 9 面, 2018.5.2.
- 3) 三島和夫 : 【Web】GWは寝だめ…専門家ダメ出し「負債解消、1日で無理」. 朝日新聞 DIGITAL, 2018.5.2.
- 4) 三島和夫 : 【新聞】週末の寝だめ ご用心. 中国新聞 朝刊 16 面, 2018.5.9.
- 5) 三島和夫 : 【新聞】読売プレミアム ヨミドクター新連載 睡眠も妊活も. 読売新聞 朝刊 33 面, 2018.5.9.
- 6) 三島和夫 : 【新聞】週末の寝だめにリスク. 沖縄タイムス 暮らし面, 2017.5.10.
- 7) 三島和夫 : 【新聞】週末の寝だめ 疾病の危険/社会的ジェットラグ/心身の不調 回復できず. 河北新報 朝刊 23 面, 2018.5.11.
- 8) 三島和夫 : 【新聞】睡眠不足が招く生産性低下. 日本経済新聞 朝刊 2 面 (社説), 2018.5.12.

- 9) 三島和夫：【Web】週末寝だめで病気リスク増？ 社会的時差ボケ治すには. 日経 Gooday, 2018.5.21.
- 10) 三島和夫：【Web】健康を脅かす「不眠症」への超シンプルな対処法. 東洋経済オンライン, 2018.5.22.
- 11) 三島和夫：【新聞】深層 NEWS 睡眠負債の解消法解説. 読売新聞 朝刊 27 面, 2018.5.30.
- 12) 三島和夫：【Web】「眠れない」の先に何を聴き取るべきか?. 日経メディカル, 2018.5.31.
- 13) 三島和夫：【新聞・Web】患者支援アプリ 続々. 毎日新聞 朝刊 12 面, 2018.6.6.
- 14) 三島和夫：【Web】深い眠りで健康に?—「短時間睡眠法」のウソ. yomiDr., 2018.6.21.
- 15) 三島和夫：【Web】未来の睡眠は AI がコーチ 過剰な指導に合いはあるか. 日経電子版 ナショジオ, 2018.6.26.
- 16) 三島和夫：【Web】不眠症診断、ポイントは「夜だけ診ず昼も診る」. 日経メディカル, 2018.6.28.
- 17) 三島和夫：【雑誌】寝室が恐怖の場所にならぬよう睡眠薬との上手な付き合い方. 週刊実話, 2018.6.30.
- 18) 三島和夫：【Web】睡眠研究の第一人者が説く、良い眠りの「真常識」. 日経トレンドイネット, 2018.7.11.
- 19) 三島和夫：【Web】少ない睡眠時間で最大パフォーマンスを発揮するには?. 日経トレンドイネット, 2018.7.18.
- 20) 三島和夫：【Web】「朝が苦手」は遺伝かも...無理な早起きは事故やうつ、心疾患のリスク 夜型の人に理解を!. yomiDr., 2018.7.19.
- 21) 三島和夫：【Web】被災直後の不眠「正常です」 識者に聞く対処法. 朝日新聞デジタル, 2018.7.22.
- 22) 三島和夫：【Web】サマータイム導入のリスク 深刻な健康被害、交通事故増加も. NEWS ポストセブン, 2018.8.23.
- 23) 三島和夫：【Web】国民を馬鹿にするな！「サマータイム」強制的早起きで深刻な健康被害. J-CAST テレビウォッチ, 2018.8.24.
- 24) 三島和夫：【新聞】理想的な睡眠時間は?. 読売新聞 夕刊 6 面, 2018.8.25.
- 25) 三島和夫：【TV】朝方夜型の睡眠について. NHKBS プレミア「偉人たちの健康診断」, 2018.7.11.
- 26) 北村真吾：【Web】ブルーライトは目に悪い? 夜のスマホの影響は.... 朝日新聞デジタル, 2018.10.30.
- 27) 北村真吾：【新聞】ブルーライト 目への影響本当?. 朝日新聞夕刊 1 面, 2018.11.13.
- 28) 北村真吾：【雑誌】不十分な睡眠. Tarzan, p45, 2019.3.7.

9. 知的・発達障害研究部

I. 研究部の概要

平成 30 年 4 月に知的障害研究部は知的・発達障害研究部に名称変更された。併せて室名も変更となり、知的障害研究室、発達機能研究室長の二室体制となった。しかしながら、知的障害など発達障害に関する研究は変わらずに、むしろこれまで以上に広範に進めた。すなわち、精神遅滞（知的障害）、限局性学習症（SLD）、注意欠如・多動症（ADHD）や自閉スペクトラム症（ASD）などの発達障害とその近縁状態の発生要因解明、診断法開発、治療法策定、予防対策に関する研究をそれぞれ発展させた。

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因、年齢、重症度、養育環境によりまったく異なった症状を示し、多彩な課題を抱えている。これらの問題解決のために当研究部では、臨床例の解析に加えて、調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している。日本語名は変わったものの、英語名は Department of Developmental Disorders の表記のままであり、発達障害全般について中枢神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲を研究ターゲットとしている。

平成 30 年度の常勤研究員は部長（稲垣真澄）、知的障害研究室長（加賀佳美）、発達機能研究室長（北 洋輔）の 3 名であった。稲垣と加賀は、主として小児神経学、発達障害医学、臨床神経生理学の立場から研究を進めた。北は特別支援教育学、認知神経科学、臨床神経生理学の立場から研究を進めた。稲垣と加賀はセンター病院小児神経診療部の併任医師として ADHD、ASD や SLD といった発達障害児に対する診療を毎週定期的に行い、病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を継続した。

30 年度の流動研究員は上田理誉、江頭優佳、田中美歩の 3 名であり、併任研究員の中川栄二（センター病院特命副院長、外來部長）とともに研究を進めた。客員研究員（井上祐紀、加我牧子、軍司敦子、小池敏英、後藤隆章、竹市博臣、田中敦士、中村みほ、林 隆、三砂ちづる、宮島 祐、山崎広子）の 12 名は研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した。研究生の 13 名（新垣香菜子、大井雄平、大森幹真、奥村安寿子、北村柚葵、小林朋佳、崎原ことえ、鈴木浩太、中村雅子、三橋翔太、安村 明、米田れい子、李 珩）が常勤研究者と共に研究を進めた。白川由佳は科研費研究補助員として研究活動を支えた。なお、研究助手として井上さゆり、秋月由紀子、大橋啓子が事務的な補助を行った。稲垣、加賀、田中は神経研究所疾病研究所第二部の併任研究員あるいは研究生として、基盤研究にも携わった。

II. 研究活動

1) ADHD の診断・介入に関する研究

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている。特に視・聴覚認知機能に関する研究を推進し、精神遅滞、ASD、SLD、ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を明らかにした。ADHD 診断補助となりうる実行機能検査ソフトウェアの開発を進めて、特許取得から一般販売につながった。ADHD 児の多動性評価のためアクチグラフを活用する研究を継続し、定型発達小児、ASD 併存の特徴を見いだすべく発達障害児のデータ収集を精力的に進めた。てんかん合併 ADHD における前頭葉機能障害を事象関連電位や光トポグラフィー研究で明らかにした。また ADHD や ASD 児の睡眠時脳波の特徴をフーリエ解析で明らかにして国際学会で発表を行った。てんかんの外科手術（脳梁離断）後の神経ネットワークの解析を進め、予後良好例の特徴を見いだしつつある。（稲垣、加賀、北、江頭、上田、奥村、鈴木、加我、後藤、軍司、安村、中川。精神・神経疾患研究開発費）

2) 社会性認知機能評価に関する研究

ASD 児の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため、声認知や行動モニタリングに関する脳機能評価を継続している。多施設共同研究により進めていた ASD の copy number variation (CNV) を統合失調症と比較し、その特徴を論文化した。また、ビタミン B6 の有効性について検討した結果も論文化した。ヒト声や環境音を用いた新しい聴力検査法を確立して、健常幼児、小児および成人におけるデータ収集を行い、論文化を進めた。また小学校児童の保護者と担任による評定で発達障害の有病率の検討を進めて、併存が多い点も明らかにした。(稲垣, 北, 鈴木, 加我, 加賀, 崎原, 竹市, 軍司. 精神・神経疾患研究開発費)

3) 学習障害, 発達性協調運動障害に関する研究

発達性読み書き障害・算数障害の診断治療ガイドラインを小児科臨床現場で普及するように、講演や学会発表・誌上発表を通じて広報活動を進めた。部全体で学習障害と ADHD との併存に関する研究を進めて複数の総説を発表した。SLD 児の視覚性ミスマッチネガティビティを検出する脳磁図検査について研究をスタートした。読み書きの標準検査バッテリー確立のため多施設共同研究(山梨大学, 国立成育医療研究センター, 久留米大学)を継続した。一方、発達性協調運動障害 (DCD) の診断ツール MABC-2 (Movement Assessment Battery for Children) の定型小児データ収集を継続し、3~6 歳の Age band 2 の特徴を論文化した。発達性協調運動障害 (DCD) の病態解明研究として、爪サンプル DNA の解析や MABC-2 と関わる脳機能変化を脳波解析で見出す研究を始めた。(稲垣, 北, 加賀, 江頭, 山崎, 鈴木, 奥村, 白川, 小池. 精神・神経疾患研究開発費, 厚生労働科学研究)

4) 発達障害児を持つ家族のレジリエンス向上に関する研究

発達障害とくに ASD 児を持つ保護者の養育レジリエンスを客観的に評価可能な指標を確定し、各種保護者支援の介入前後の養育レジリエンスの変化について多くの共同研究施設で検討が進められた。また、共同研究者とともに家族レジリエンス尺度の開発についてもデータ収集を解析し、論文化した。(稲垣, 鈴木, 加賀, 加我. 厚生労働科学研究, 精神・神経疾患研究開発費)

5) 小児副腎白質ジストロフィー症 (ALD) に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型 ALD に対する骨髄移植 (造血幹細胞移植) 療法時期決定と治療後評価のための研究を継続した。脳波成分の特徴について解析を進め、発表し論文化をスタートした。(稲垣, 軍司, 崎原, 加我, 中村. 厚生労働科学研究)

6) 顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究

顕在化しにくい発達障害である「学習障害, 吃音, チック, 発達性協調運動障害」の早期アセスメントのために、保育士, 幼稚園教諭そして巡回相談員が簡便に利用可能な統合版調査票を確定し CLASP と命名した。2019 年 1 月に日本 LD 学会第 2 回研究集会「顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援」公開シンポジウムでこれらの成果を発表した。平成 30 年度障害者総合福祉推進事業により、上記発達障害の疑い例の精査を含めた追跡研究や評定者間信頼性の検証を行った。最終的に「吃音, チック症, 読み書き障害, 不器用の特性に気づくチェックリスト活用マニュアル」を完成させて、国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターのサイトに掲載されることとなった。今後は本マニュアルを広く普及する研修会や効果検証の研究が望まれる。(稲垣, 北, 加賀, 奥村, 新垣, 宮島. 厚生労働科学研究, 障害者総合福祉推進事業)

7) 発達障害児の行動異常モデルに関する研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中枢神経系病態解明はとくに ADHD, ASD など発達障害の病態

研究，治療研究につながるものと考えている。bv マウスの原因遺伝子 (Srrm4) の発現と不安様行動との関連や脳内 GABA 機能の異常に関する基盤研究を神経研究所疾病研究第二部後藤雄一郎長，井上健室長との共同で遂行している。これらは発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた研究につながっている。(稲垣，加賀，田中，白川，李，加我。精神・神経疾患研究開発費)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

常勤研究者は各種講演会，研修会などの場を通じて，研究成果を社会に還元した。常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において，日常的診療サポートを提供している。

(2) 専門教育面における貢献

常勤研究者は病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床，研究指導を日常的に行っている。毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い，加賀や北が主に講義，実習を担当し，稲垣は病院検査室で行われた電気生理学的検査の所見判読のアドバイスをを行った。また講演会や各種セミナー，講義などにより医師，看護師，保健師，福祉関係専門職，言語聴覚士，学校教員の教育に貢献している。

稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として小児科医師の専門知識の普及・向上に貢献した。稲垣は東京農工大学工学部の学生講義を担当し，国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科の学生に対する「リハビリテーション概論：LD，ディスレクシア」の講義を行った。加賀は山梨大学看護学科で身体観察法の中で小児発達などの診察法について講義を担当した。また加賀は平成 31 年 2 月から脳病態統合イメージングセンター神経生理研究室長の併任となり，東京工科大学の学生の脳磁図検査施設見学の際に検査法や施設についての講義を行った。北は東京学芸大学で学習障害教育学特論，学習障害指導法について，首都大学東京で発達の心理と健康について学生講義を担当した。鈴木は常葉大学で生理心理学，東京学芸大学で発達と障害の心理について，立教大学で神経心理学について，大阪教育大学で知的障害者の心理・生理・病理について，立正大学で生理心理学と神経心理学について学生講義を担当した。奥村は複数言語環境にある子どもの相談室の運営に相談員として関わった。7 月の国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは，全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った。NCNP 全体の行事である世界脳週間イベントに協力し，高校生ラボツアーで聴覚誘発電位 (ABR) の実際の計測を稲垣，加賀，江頭が担当し好評であった。また，第 5 回 NCNP メディア塾施設見学プログラムで，「読み書き障害に立ち向かう」をテーマに新聞社やテレビ局などメディア担当者に対して知的・発達障害研究部の研究成果を紹介した。防衛医科大学学生実習は稲垣，北が担当した。国立精神・神経医療研究センターの主催する発達障害やてんかんに関する市民講座には稲垣，加賀が貢献した。

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため，全国で開始された，かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として，発達障害支援医学研修を年二回 (夏季と冬季) に企画・実施した。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

稲垣は，環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査 (エコチル調査) の評価委員として参加した。稲垣は加我とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として，知的障害者の国際スポーツ大会参加における医学的判断という社会活動に貢献している。また，加賀は，障害者スポーツ医養成研修講師を務めた。併せて稲垣は独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員として，当該研究所の活動に関する指導助言を行った。稲垣は小平市教育委員会特別支援教育専門家

委員会委員, いじめ問題対策委員会委員として行政施策に対する提言を行った。また, 小平市の児童発達支援センター開設に向けた検討会メンバーとしても参画し, 支援センターに必要な条件等を提言した。稲垣は日本小児神経学会ガイドライン統括委員会委員に就任し, 日本医療機能評価機構が提供する診療ガイドライン作成手順を小児神経学分野で応用することに深く関わることとなった。稲垣と加賀はチック症診療ガイドライン作成ワーキングメンバーとしても参画している。

(5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり, 知的障害, 限局性学習症, ADHD, ASD など発達障害の診療に定期的に携わっている。

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Suzuki K, Kita Y, Oi Y, Okumura Y, Okuzumi H, Inagaki M: Right prefrontal cortex specialization for visuospatial working memory and developmental alterations in prefrontal cortex recruitment in school-age children. *Clinical Neurophysiology* 129(4): 759-65, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.clinph.2018.01.010>
- 2) Suzuki K, Okumura Y, Kita Y, Oi Y, Shinoda H, Inagaki M: The relationship between the superior frontal cortex and alpha oscillation in a flanker task: Simultaneous recording of electroencephalogram (EEG) and near infrared spectroscopy (NIRS). *Neuroscience Research* 131: 30-5, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.neures.2017.08.011>.
- 3) Hirata S, Kita Y, Yasunaga M, Suzuki K, Okumura Y, Okuzumi H, Hosobuchi T, Kokubun M, Inagaki M, Nakai A: Applicability of the Movement Assessment Battery for Children-Second Edition (MABC-2) for Japanese children aged 3-6 years: A preliminary investigation emphasizing internal consistency and factorial validity. *Frontiers in Psychology* 9: 1452, 2018. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.01452>
- 4) Kushima I, Inagaki M (69th author), et al: Comparative analyses of copy number variation in autism spectrum disorder and schizophrenia reveal etiological overlap and biological Insights. *Cell Reports* 24(11): 2838-56, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.celrep.2018.08.022>
- 5) Obara T, Ishikuro M, Tamiya G, Ueki M, Yamanaka C, Mizuno S, Kikuya M, Metoki H, Matsubara H, Nagai M, Kobayashi T, Kamiyama M, Watanabe M, Kakuta K, Ouchi M, Kurihara A, Fukuchi N, Yasuhara A, Inagaki M, Kaga M, Kure S, Kuriyama S: Potential identification of vitamin B6 responsiveness in autism spectrum disorder utilizing phenotype variables and machine learning methods. *Scientific Reports* 8: 14840, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-018-33110-w>
- 6) Tanaka M, Sato A, Kasai S, Hagino Y, Kotajima-Murakami H, Kashii H, Takamatsu Y, Nishito Y, Inagaki M, Mizuguchi M, Hall FS, Uhl GR, Murphy D, Sora I, Ikeda K: Brain hyperserotonemia causes autism-relevant social deficits in mice. *Molecular Autism*, 9(60), 2018. DOI: <https://doi.org/10.1186/s13229-018-0243-3>
- 7) Suzuki K, Hiratani M, Mizukoshi N, Hayashi T, Inagaki M: Family resilience elements alleviate the relationship between maternal psychological distress and the severity of children's developmental disorders. *Research in Developmental Disabilities* 83: 91-8, 2018. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.ridd.2018.08.006>
- 8) Arai Y, Iwasaki Y, Suzuki T, Ide S, Kaga M: Elimination of amyloid precursor protein in senile

plaques in the brain of a patient with Alzheimer-type dementia and Down syndrome. *Brain and Development* 41(1): 106-10, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2018.07.017>

- 9) Kato K, Maemura R, Wakamatsu M, Yamamori A, Hamada M, Kataoka S, Narita A, Miwata S, Sekiya Y, Kawashima N, Suzuki K, Narita K, Doisaki S, Muramatsu H, Sakaguchi H, Matsumoto K, Koike Y, Onodera O, Kaga M, Shimozawa N, Yoshida N: Allogeneic stem cell transplantation with reduced intensity conditioning for patients with adrenoleukodystrophy. *Molecular Genetics and Metabolism Reports* 18: 1-6, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.ymgmr.2018.11.001>
- 10) 中村達也, 北 洋輔, 藤本淳平, 甲斐智子, 稲田 稯, 鮎沢浩一, 小沢 浩: 重症心身障害児者の嚥下時舌骨運動の特徴: 健常成人との比較. *日本摂食嚥下リハビリテーション学会雑誌* 22(3): 205-13, 2018.
- 11) 鈴木浩太, 稲垣真澄: 読み書きの困難さを示す発達性協調運動障害児に対する漢字指導: 聴覚法と指なぞり法の併用の有用性について. *認知神経科学* 20(3,4): 165-71, 2018.
- 12) 鈴木浩太, 平谷美智夫, 稲垣真澄: 保育者・教員の発達障害児に関する記述の特徴: テキストマイニングによる年齢と診断名に着目した検討. *チャイルドヘルス* 22(4): 66-70, 2019.

(2) 総説

- 1) 加賀佳美, 稲垣真澄: 特集 注意欠如・多動症 (AD/HD) I. 総論 AD/HD の疫学 小児期. *日本臨牀* 76(4): 561-5, 2018.
- 2) 加賀佳美: 生理検査の選択と解釈. 特集 けいれん・意識障害 小児内科. *東京医学社* 50(4):470-73, 2018.
- 3) 加我牧子: 構音障害・吃音への対応. 特集 発達障害—小児科での具体的な診かたと多職種連携小児科. *金原出版* 59(6): 849-54, 2018.
- 4) 加賀佳美: 事象関連電位 (ERP) 研究の進歩 —発達障害児の脳機能評価—. *臨床神経生理学* 46(3): 119-23, 2018. DOI: <https://doi.org/10.11422/jscn.46.119>
- 5) 稲垣真澄, 田中美歩: 音読検査 (特異的読字障害を対象にしたもの). 特集 小児科医ができる発達検査・心理検査 小児内科. *東京医学社* 50(9): 1418-21, 2018.
- 6) 稲垣真澄, 米田れい子: コミュニケーション症/コミュニケーション障害. *精神疾患 (社会心理学的疾患)* 小児内科. *東京医学社* 50 (増刊号): 816-7, 2018.
- 7) 北 洋輔, 稲垣真澄, 井上明浩: リハビリテーション医療が支える障がい者スポーツ—現状と課題 8. 障害とスポーツの現状⑦ 知的障害. *Journal of Clinical Rehabilitation* 28(2): 163-9, 2019.
- 8) 井上祐紀, 稲垣真澄: ADHD における認知機能障害. 特集 I 精神疾患における認知機能障害—社会機能的転帰との関連, 評価, 治療法について *精神科. 科学評論社* 34(3):243-7, 2019.3.28.
- 9) 加賀佳美, 稲垣真澄: 発達障害と心理社会支援. *精神保健研究* 65: 43-49, 2019.

(3) 著書

- 1) 稲垣真澄: 顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援に向けて—総論. 稲垣真澄 編: 発達障害医学の進歩 30. 日本発達障害連盟, 東京, pp1-7, 2018.
- 2) 北 洋輔: 学習障害の早期アセスメントと支援. 稲垣真澄 編: 発達障害医学の進歩 30. 日本発達障害連盟, 東京, pp54-65, 2018.
- 3) 稲垣真澄, 田中美歩: 限局性学習症. 小児の治療指針. 診断と治療社, 東京, pp894-896, 2018.
- 4) 北 洋輔: 読み書き処理と脳活動. 室橋春光, 荻阪満理子 編: 生理心理学と精神生理学 第Ⅲ巻 展開. 北大路書房, 京都, pp167-181, 2018.
- 5) 稲垣真澄: 顕在化しにくい発達障害. 日本発達障害連盟 編: 発達障害白書 2019年版. 明石書店, 東京, p56, 2018.

- 6) 中川栄二: てんかんガイドライン. 日本発達障害連盟 編: 発達障害白書 2019年版. 明石書店, 東京, pp52-53, 2018.
- 7) 加我牧子: 第9章 第6節 小児副腎白質ジストロフィー. No.1969 希少疾患用医薬品の適応拡大と事業性評価. 技術情報協会, 東京, pp425-430, 2018.
- 8) 稲垣真澄: 読字の発達とその障害の検出法. 宮本信也 編: 学習障害のある子どもを支援する. 日本評論社, 東京, pp51-72, 2019.
- 9) 稲垣真澄, 米田れい子: 知的障害. 1336 専門家による 私の治療 2017-18 年度版. 日本医事新報社, 東京, 2019. DOI: <https://www.jmedj.co.jp/premium/treatment/2017/d230801/>

(4) 研究報告書

- 1) 稲垣真澄, 小池敏英, 成田まい: 読書きアセスメントアプリケーションの評価. 平成30年度文部科学省 学習上の支援機器等教材活用評価研究事業 報告書. 東京学芸大学附属小金井小学校 ICT×インクルーシブ教育. pp41-42, 2019.
- 2) 稲垣真澄: 医療計画のモニタリングに資する指標の検討—4 府県における研究会をもとに—. 平成30年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業) 精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究 分担研究(研究分担者として). 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所/川崎市精神保健福祉センター. pp1-47, 2019.
- 3) 稲垣真澄, 加賀佳美, 上田理登, 田中美歩, 齋藤貴志, 中川栄二, 佐々木征行, 岩崎真樹: てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 精神・神経疾患研究開発費(28-4) てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究(主任研究者: 中川栄二) 平成28~30年度 総括研究報告書. pp46-54, 2019.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 稲垣真澄: 障がい各論「知的障がい」. 中級障がい者スポーツ指導員養成講習会(5), 障がい者スポーツ指導者養成講習会・活動実績報告書 平成29年度. pp298-304, 2018.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kaga Y, Tanaka M, Ueda R, Kita Y, Inagaki M: Mental health of Japanese children with learning disorders. 2019 ACONAMI Annual Meeting, Tokyo, 2019.3.19.
- 2) 稲垣真澄: 小児神経疾患への発達症候学的アプローチ. 実践教育セミナー6: 小児神経科医のための診断推論 第60回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.30.
- 3) 加賀佳美: 発達障害の非侵襲的脳機能評価. 実践教育セミナー3 第4回小児脳機能研究会—臨床に役立つ臨床神経生理— 第60回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.30.
- 4) 小倉加恵子, 久保田健夫, 加賀佳美, 鈴木由佳, 宮島 祐: 学会と社会(政策提言, 学会声明のあり方等). 長期計画委員会ワークショップ: 長期計画委員会企画 2035年の小児神経科医 第60回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.31.
- 5) 加賀佳美: 小児の発達障害—その診断と治療—. 妊娠と薬情報センターフォーラム, 東京, 2018.10.14.
- 6) 中川栄二: 神経発達症とてんかん. 第52回日本てんかん学会学術集会 シンポジウム5, 神奈川, 2018.10.26.
- 7) 中川栄二: てんかんと自閉スペクトラム症の診断と治療. 第52回日本てんかん学会学術集会 シンポジウム5, 神奈川, 2018.10.26.
- 8) 中村みほ: Williams 症候群の認知発達. 第48回日本臨床神経生理学会学術大会 サテライトシ

- ンポジウム 3 小児脳機能研究会, 東京, 2018.11.8.
- 9) 竹市博臣: 脳波 (生理信号) 解析: 小児への応用. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会 サテライトシンポジウム 3 小児脳機能研究会, 東京, 2018.11.8.
- 10) 稲垣真澄: 発達障害における事象関連電位. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会 エキスパートレクチャー10, 東京, 2018.11.10.
- 11) 山下裕史朗, 向笠章子, 江上千代美, 稲垣真澄: ADHD 児童と保護者へのサマートリートメントプログラム. 第 22 回日本精神保健・予防学会学術集会 シンポジウム 3, 東京, 2018.12.2.
- 12) 稲垣真澄: 顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援 総論. 日本 LD 学会第 2 回研究集会公開シンポジウム, 東京, 2019.1.13.
- 13) 北 洋輔: 読み書き障害の早期発見と支援. 日本 LD 学会第 2 回研究集会公開シンポジウム, 東京, 2019.1.13.

(2) 一般演題

- 1) Kita Y, Inoue Y: The influence of ADHD symptoms on self-esteem and depression in young adolescents. 12th European Conference on psychological theory and research on Intellectual and Developmental Disabilities, Padova, 2018.6.28-30.
- 2) Kitamura Y, Kita Y, Okumura Y, Nakamura M, Inagaki M, Okuzumi H, Ishikawa Y: Enhanced pitch discrimination ability in Williams syndrome: A case study with newly – invented non – verbal assessment. 15th International Conference on Music Perception and Cognition, Graz, 2018.7.26.
- 3) Kita Y, Suzuki K, Shirakawa Y, Kaga Y, Okumura Y, Kitamura Y, Arakaki K, Mitsuhashi S, Inagaki M, Okuzumi H: An ERP study of inhibitory control in adults with developmental coordination disorder. 19th World Congress of Psychophysiology, Lucca, 2018.9.4-8.
- 4) Okumura Y, Kasai K, Takeya R, Murohashi H: Early perceptual representations of visual words are manifested differently by task demands: Evidence from ERP measures of spatial attention. 19th World Congress of Psychophysiology, Lucca, 2018.9.7.
- 5) Kaga Y, Ueda R, Tanaka M, Kita Y, Suzuki K, Okumura Y, Mitsuhashi S, Kitamura Y, Nakagawa E, Inagaki M: Disinhibition in children with ADHD: Simultaneous study of fNIRS and ERPs in Go/NoGo task. fNIRS 2018, Tokyo, 2018.10.6.
- 6) 鈴木浩太, 平谷美智夫, 林 隆, 稲垣真澄: 家族レジリエンス要素質問票短縮版の開発と発達障害児をもつ養育者への適用. 第 121 回日本小児科学会学術集会, 福岡, 2018.4.20.
- 7) 北村柚葵, 北 洋輔, 奥村安寿子, 稲垣真澄, 奥住秀之, 石川裕司: 小児期の音楽経験が音高弁別能力に与える影響. 日本音楽知覚認知学会 2018 年度春期研究発表会・日本音響学会音楽音響研究会 2018 年 5 月研究会, 新潟, 2018.5.26.
- 8) 田中美歩, 加賀佳美, 白川由佳, 李 コウ, 井上 健, 後藤雄一, 稲垣真澄: Srrm4 部分欠損マウスにおける社会性行動異常及び睡眠異常. 東京農工大学-国立精神・神経医療研究センター 第 4 回合同シンポジウム, 東京, 2018.5.30.
- 9) 白久博史, 中川栄二, 加賀佳美, 北 洋輔, 稲垣真澄: 発達障害に併存する睡眠障害と VPA 治療効果. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.31.
- 10) 佐藤敦志, 田中美歩, 笠井慎也, 萩野洋子, 古田島浩子, 柏井洋文, 西藤泰昌, 稲垣真澄, 曾良一郎, 水口 雅, 池田和隆: セロトニントランスポーター欠損マウスの自閉症様行動はトリプトファン欠乏食によって改善する. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.5.31.
- 11) 上田理誉, 加賀佳美, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 中川栄二, 須貝研二, 佐々木征行, 稲垣真澄: 小児てんかんの適応行動に関わる要因の検討: 予備的研究. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.6.1.
- 12) 江頭優佳, 岸田 文, 中島孝明, 綿貫茂喜: 異なる湿度環境が聴覚オドボール課題時の P300 振幅

- に及ぼす影響. 日本生理人類学会 第 77 回大会, 福岡, 2018.6.17.
- 13) 鈴木浩太, 稲垣真澄: 読み書きの困難さをもつ発達性協調運動障害児に対するアセスメントと漢字指導. 第 23 回認知神経科学学会学術集会, 神奈川, 2018.6.22.
 - 14) 奥村安寿子, 北 洋輔, 加賀佳美: 日本語を話せない子どもの心理アセスメント: スウェーデン語母語児の知能・学習検査の事例. 2018 年度バイリンガル・マルチリンガル (BM) 子どもネット研究会, 東京, 2018.8.12.
 - 15) 鈴木浩太, 平谷美智夫, 稲垣真澄: テキストマイニングによる発達障害児に関する記述の検討. 日本特殊教育学会 第 56 回大会, 大阪, 2018.9.22.
 - 16) 鈴木浩太, 平谷美智夫, 水越菜那, 林 隆, 稲垣真澄: 発達障害児をもつ母親の心理的苦痛と家族レジリエンス. 日本心理学会第 82 回大会, 宮城, 2018.9.25.
 - 17) 加賀佳美, 中川栄二, 稲垣真澄: 限局性学習症のメンタルヘルスに関する研究—生活の質と適応行動についての予備調査. 第 59 回日本児童青年精神医学会総会, 東京, 2018.10.12.
 - 18) 上田理誉, 松田博史, 佐藤典子, 岩崎真樹, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 竹市博臣, 加賀佳美, 稲垣真澄: 小児薬剤抵抗性てんかん患者の脳梁離断術後の脳構造ネットワーク変化の解析. 第 52 回日本てんかん学会学術集会, 神奈川, 2018.10.25.
 - 19) 安村 明, 大森幹真, 福田亜矢子, 高橋純一, 安村由希子, 中川栄二, 小池敏英, 山下裕史朗, 宮島 祐, 小枝達也, 相原正男, 立森久照, 稲垣真澄: 前頭葉機能計測による ADHD 児の診断予測. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
 - 20) 上田理誉, 加賀佳美, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 中川栄二, 佐々木征行, 稲垣真澄: 小児てんかんにおける実行機能の行動学的・電気生理学的検討. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
 - 21) 江頭優佳, 北 洋輔, 鈴木浩太, 白川由佳, 加賀佳美, 北村柚葵, 三橋翔太, 新垣香菜子, 稲垣真澄, 奥住秀之: 運動の不器用さと抑制性の事象関連電位の関係. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
 - 22) 北 洋輔, 鈴木浩太, 白川由佳, 江頭優佳, 加賀佳美, 北村柚葵, 三橋翔太, 新垣香菜子, 稲垣真澄, 奥住秀之: 遺伝子多型が抑制機能の事象関連電位に及ぼす影響. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
 - 23) 加我牧子, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子, 古島わかな, 稲垣真澄: 聴覚失認で発症した副腎白質ジストロフィー症 (ALD) 児における系統的神経生理学的評価の重要性. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
 - 24) 田中美歩, 加賀佳美, 白川由佳, 稲垣真澄: Srrm4 部分欠損マウスが呈する睡眠調節リズム及び社会性行動の異常. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.9.
 - 25) 加賀佳美, 上田理誉, 田中美歩, 北 洋輔, 鈴木浩太, 奥村安寿子, 三橋翔太, 北村柚葵, 中川栄二, 稲垣真澄: 注意欠如多動症児の臨床神経生理学的バイオマーカー: Go/NoGo 課題試行中の NIRS と事象関連電位の同時計測による抑制機能の検討. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.9.
 - 26) 田中美歩, 加賀佳美, 白川由佳, 稲垣真澄: バルプロ酸投与による Srrm4 部分欠損マウスの自閉スペクトラム症様行動と睡眠指標の変化. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会 第 48 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 東京, 2018.11.16.
 - 27) 加賀佳美: 漢字の視覚情報処理の神経生理学的検討: N170 や MMN などの脳活動に着目して. 第 2 回 MMN 研究会, 福島, 2019.2.2.
 - 28) 加賀佳美, 田中美歩, 上田理誉, 北 洋輔, 福水道郎, 中川栄二, 稲垣真澄: 注意欠如多動症のメンタルヘルスに対するリスク因子の検討. 日本 ADHD 学会第 10 回総会, 神奈川, 2019.3.3.
 - 29) 竹市博臣, 軍司敦子, 稲垣真澄, 鈴木浩太, 小林朋佳, 小久保奈緒美, 安村 明, 山本寿子, 井上祐紀, 加我牧子: コミュニケーション障害・発達評価指標としての音声聴取特異反応: PARS ス

コアと相関を示す事象関連脱同期. 第 21 回日本ヒト脳機能マッピング学会, 東京, 2019.3.15.

(3) 研究報告会

- 1) 稲垣真澄, 加賀佳美, 上田理蒼, 田中美歩, 齋藤貴志, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 岩崎真樹: てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 30 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2018.6.10.
- 2) 中川栄二: 前頭葉欠伸てんかんの依存症と治療. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 30 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2018.6.10.
- 3) 中川栄二, 山之内芳雄, 齋藤貴志, 宮川 希, 岡崎光俊, 岩崎真樹: レセプトデータ解析によるてんかん患者疫学調査. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 30 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2018.6.10.
- 4) 稲垣真澄: 発達障害(読み書き障害、チック、吃音、不器用)の特性に気づくチェックリスト活用マニュアルの作成に関する調査. 弘前市特別セミナー チック・吃音の特性 ～チェックリスト活用について～, 青森, 2018.11.23.
- 5) 稲垣真澄: てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 国立精神・神経医療研究センター 精神神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 30 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2018.11.25.
- 6) 中川栄二: 神経発達症併存難治てんかんにおける新規抗てんかん薬の効果. 国立精神・神経医療研究センター 精神神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 30 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2018.11.25.
- 7) 稲垣真澄: 衝動性・多動性の診断と治療メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 平成 30 年度班会議, 東京, 2018.12.11.
- 8) 北 洋輔: 不器用の診断と治療メニューの作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 平成 30 年度班会議, 東京, 2018.12.11.
- 9) 小池敏英: 漢字・英語の学習障害診断メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 平成 30 年度班会議, 東京, 2018.12.11.
- 10) 中川栄二: 神経学的評価と睡眠異常の診断と治療メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 平成 30 年度班会議, 東京, 2018.12.11.
- 11) 加賀佳美: 実行機能・社会性機能障害の診断と治療メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 平成 30 年度班会議, 東京, 2018.12.11.

(4) その他

- 1) 奥村安寿子, 北 洋輔: スライド, 質疑通訳 Understanding recent research on DCD: From data to practice. 第 2 回日本 DCD 学会学術集会, 青森, 2018.4.15.
- 2) 稲垣真澄, 加賀佳美, 江頭優佳: ラボツアー 音刺激による脳の指紋を比べてみよう. 世界脳週間 2018 NCNP レクチャー&ラボツアー 脳の科学の最前線, 東京, 2018.7.14.
- 3) 加賀佳美: ディスカッション 発達障害. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.9.

- 4) 加賀佳美：ディスカッサント 脳機能画像. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.9.
- 5) 稲垣真澄, 北 洋輔：防衛医科大学学生実習. 東京, 2018.12.4.

C. 講演

- 1) 稲垣真澄：発達障害児の保護者・家族の養育レジリエンス. 第 21 回広島発達障害研究会, 広島, 2018.4.7.
- 2) 稲垣真澄：リハビリテーション概論 LD, ディスレクシア. 国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科講義, 埼玉, 2018.6.14.
- 3) 稲垣真澄：顕在化しにくい発達障害：早期抽出可能なアセスメントツールの紹介. 国立精神・神経医療研究センター 第 25 回発達障害支援医学研修, 東京, 2018.7.4.
- 4) 稲垣真澄：子どもの脳の病気：その特徴と発症のメカニズム. 東京農工大学 平成 30 年度脳神経科学講義, 東京, 2018.7.11.
- 5) 稲垣真澄：発達障害総論：ADHD と LD を中心に. 第 24 回国立精神・神経医療研究センター 小児神経セミナー, 東京, 2018.7.20.
- 6) 北 洋輔：幼少期におけることばの読みの力の発育について - 徳之島町 3 年間の追跡調査の結果から -. 平成 30 年度 第 1 回徳之島町 保・幼・小連携連絡協議会, 鹿児島, 2018.7.27.
- 7) 北 洋輔：気になる子の理解とかかわり方. 高知県私立幼稚園連合会 平成 30 年度夏季教育研修大会, 高知, 2018.7.30.
- 8) 北 洋輔：LD 等の心理・病理及び指導法. 平成 30 年度静岡県教育委員会免許法認定講習, 静岡, 2018.8.21-22.
- 9) 稲垣真澄：学習障がいへの理解と児童生徒への支援策. 平成 30 年度 第 4 回草加市特別支援教育 担当教員育成研修会, 埼玉, 2018.8.23.
- 10) 稲垣真澄：読み書き障害に立ち向かう. 第 5 回 NCNP メディア塾 施設見学プログラム, 東京, 2018.8.24.
- 11) 北 洋輔：学習障害とは何か：書字障害を中心に. 新島高校特別支援講演会, 東京, 2018.8.24.
- 12) 稲垣真澄：わかりにくい発達障害：学習障害を中心に. 北多摩地区発達障害 Seminar, 東京, 2018.10.31.
- 13) 中川栄二：注意欠如多動症（ADHD）の診断と新規の薬物療法. 北多摩地区発達障害 Seminar, 東京, 2018.10.31.
- 14) 加賀佳美：発達障害のメンタルヘルス支援に向けて. 精神保健研究所 ランチョンセミナー, 東京, 2019.2.4.
- 15) 中川栄二：自閉スペクトラム症. NCNP 市民公開講座 発達障害の診断と治療の進歩, 東京, 2019.2.16.
- 16) 稲垣真澄：学習障害. NCNP 市民公開講座 発達障害の診断と治療の進歩, 東京, 2019.2.16.
- 17) 加賀佳美：注意欠如多動症. NCNP 市民公開講座 発達障害の診断と治療の進歩, 東京, 2019.2.16.
- 18) 加賀佳美：知的・発達障がいの病理. 平成 30 年度障がい者スポーツ医養成講習会, 埼玉, 2019.2.22.
- 19) 稲垣真澄：学習障害の診断と支援. 第 30 回練馬区医師会学術部 子どもの心研究会, 東京, 2019.3.20.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 稲垣真澄：日本臨床神経生理学会 理事
- 2) 稲垣真澄：日本小児神経学会 評議員

- 3) 稲垣真澄：日本小児神経学会 ガイドライン統括委員会 委員
- 4) 稲垣真澄：日本小児神経学会 脳波等神経生理検査時の鎮静における医療安全に関する提言・指針作成 WG 委員
- 5) 稲垣真澄：日本小児神経学会 チック診療ガイドライン策定 WG 委員
- 6) 稲垣真澄：日本神経精神薬理学会 評議員
- 7) 稲垣真澄：小児脳機能研究会 代表世話人
- 8) 稲垣真澄：日本発達障害学会 評議員
- 9) 稲垣真澄：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 10) 加賀佳美：日本小児神経学会 評議員
- 11) 加賀佳美：日本小児神経学会 長期計画委員会 委員
- 12) 加賀佳美：日本小児神経学会 チック診療ガイドライン策定 WG 委員
- 13) 加賀佳美：日本臨床神経生理学会 代議員
- 14) 加賀佳美：山梨小児神経懇話会 評議員
- 15) 加賀佳美：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 16) 加賀佳美：小児脳機能研究会 世話人
- 17) 北 洋輔：日本発達性協調運動障害学会 理事

(3) 座長

- 1) 加賀佳美：座長 電気生理. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 千葉, 2018.6.1.
- 2) 稲垣真澄：司会 一般口演. 第 23 回認知神経科学会学術集会, 神奈川, 2018.6.22.
- 3) 稲垣真澄：座長 シンポジウム 5 関連講演. 第 52 回日本てんかん学会学術集会, 神奈川, 2018.10.26.
- 4) 稲垣真澄：座長 奨励賞受賞記念講演. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
- 5) 稲垣真澄：当番世話人・座長 サテライトシンポジウム 3 小児脳機能研究会. 第 48 回日本臨床神経生理学会学術大会, 東京, 2018.11.8.
- 6) 田中美歩：座長 ポスター21 基礎研究 2. 第 28 回日本臨床精神神経薬理学会 第 48 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 東京, 2018.11.16.
- 7) 稲垣真澄：座長 発達障害に対する早期介入と支援. 第 22 回日本精神保健・予防学会学術集会, 東京, 2018.12.2.
- 8) 稲垣真澄：座長 研究発表 2. 第 2 回 MMN 研究会, 福島, 2019.2.2.
- 9) 竹市博臣：座長 一般口演 1. 第 21 回日本ヒト脳機能マッピング学会, 東京, 2019.3.15.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 稲垣真澄：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Managing Editor
- 2) 稲垣真澄：日本発達障害学会機関誌「発達障害研究」編集委員
- 3) 加賀佳美：日本小児神経学会 「脳と発達」編集委員会 副編集長
- 4) 北 洋輔：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Editorial Board
- 5) 北 洋輔：日本小児神経学会機関誌 「脳と発達」編集委員会 アドバイザー

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第 25 回発達障害支援医学研修, 東京, 2018.7.4-5.
- 2) 第 26 回発達障害支援医学研修, 東京, 2019.1.30-31.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 稲垣真澄：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 運営委員
- 2) 稲垣真澄：環境省 エコチル調査企画評価委員

10. 地域・司法精神医療研究部

I. 研究部の概要

平成 30 年 4 月、社会復帰研究部と司法精神医学研究部が統合し、地域・司法精神医療研究部が新設された。当研究部は、生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え、地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発、その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている。また、医療観察法に基づく医療の検証を通じて、医療観察法の対象者への支援や権利擁護のあり方、それらの一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである。研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し、自治体や専門職、市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより、研究成果の社会への還元を行っている。

研究の実施にあたっては、以下の人員構成で活動を行うとともに、センター病院専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」のデイケア、訪問看護ステーション PORT、医療観察法病棟との協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

平成 30 年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：藤井千代、精神保健サービス評価研究室長：山口創生、臨床援助技術研究室長：佐藤さやか、司法精神保健研究室長：菊池安希子、制度運用研究室長：河野稔明、常勤研究員：大隅尚広、流動研究員：松長麻美、小塩靖崇、小池純子、橋本理恵子（～11/30）、科研費研究員：塩澤拓亮、鈴木浩太、小川 亮（9/1～）、科研費研究補助員：小川 亮（～8/31）、岡野茉莉子、相田早織、吉田美紗子、併任研究員：平林直次、坂田増弘、佐竹直子、客員研究員：伊藤順一郎、原 敬造、福井里江、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、橘 薫子、杉山直也、美濃由紀子、研究生：安間尚徳（5/15～）、富澤典子（7/1～）、橋本理恵子（12/1～）、久永文恵、種田綾乃、澤田宇多子、御園恵将。

また、平成 30 年 10 月からは、所沢市より「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業」を受託し、以下のチーム構成で所沢市民に対する保健型アウトリーチサービスを提供している。統括管理責任者、看護師：下平美智代、中西清晃、精神保健福祉士：西内絵里沙、真行寺伸江、作業療法士：大迫直樹、非常勤心理療法士：臼井 香、曹 由寛、非常勤医師：藤井千代。

II. 研究活動

1) 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究（藤井、佐藤、山口）

平成 25 年の精神保健福祉法改正を受け、精神障害者の地域保健医療福祉サービスの展開について具体的かつ実現可能な方法を提示することが本研究の目的である。外来診療によるケースマネジメント（包括的支援マネジメント）の強化、自治体による地域精神保健活動支援の在り方、精神科デイケアの機能分化、多職種アウトリーチに関する研究等に加え、相模原事件の検証および再発防止策検討チームの報告書を踏まえ、措置入院制度運用の現状分析及び今後の改善策への提言を目的に措置入院患者の地域包括支援のあり方に関する研究も実施している。また、全国精神医療審査会全国協議会と協働し、精神障害者の権利擁護のあり方についても検討を開始した。全国の自治体に対するアンケート調査の分析、措置診断書、症状消退届の分析、入院歴のある当事者へのアンケート調査、措置入院者の特徴の分析等の結果および先行研究レビュー、エキスパートコンセンサスにより、措置入院の運用に係る自治体職員を対象としたガイドラインを作成した。さらに、自治体による退院後支援に関するガイドライン、精神障害者の退院後支援ニーズアセスメントを完成させ、これらの研究に基づいて厚生労働省より措置入院制度運用及び退院後支援に関する通知が発出された。これらの通知に基づく実践の普及のため、平成 30 年度は研究部主催の全国研修会を 4 日間にわたって実施した。

2) 精神科救急・急性期病棟の入院患者のコホート研究 (ePOP-J 研究) (山口, 藤井, 菊池, 松長, 小塩, 小池, 小川)

プロジェクト名は「早期に退院する精神障害者における再入院と地域定着に影響する要因に関する縦断研究 (Early discharge and Prognostic community Outcomes for Psychiatric inpatients in Japan [ePOP-J]: A longitudinal study)」としている。本研究は、多施設での前向き縦断研究を通して、精神科医療機関における救急病棟や急性期病棟に入院し、かつ1年未満で退院する入院患者を対象として、入院時から追跡を開始し、退院後12ヵ月間にわたって追跡調査を実施し、退院後12ヵ月間の再入院(アウトカム)と個人の主観的指標(特に生活の質)の推移の関連を探ることを第1の目的とする。また、その他の曝露データ(個人の特性・薬剤治療の内容・入院中の薬剤以外の支援内容、退院後の支援状況、地域・環境の特性)を収集し、アウトカムに関連しうる要因を包括的に検証することを第2の目的としており、順調にリクルートが進んでいる。

3) デイケアからの地域移行に関する研究 (佐藤, 藤井)

今年度の活動は就労継続支援 A 型事業所を利用する精神障害者の臨床像と労働時間の関係を検討することが目的であった。就労継続支援 A 型事業所全国協議会(全 A ネット)に参加する全国10事業所の利用者98名(男性76名, 女性22名: 平均年齢44.6±9.3歳)から調査参加の同意を得た。まず調査時点での勤務時間と勤務開始時の勤務時間, スタッフから見た最長勤務可能時間, 利用者が考える最長勤務時間, 利用者が希望する勤務時間について, 各変数間の相関係数を算出した。この結果, 調査時点での勤務時間とスタッフから見た最長勤務可能時間の相関係数がもっとも大きく有意であった ($R=0.833$, $p<0.000$)。このことから, 利用者の現在の勤務時間についてはスタッフの判断が大きく影響していることが示唆された。次にスタッフからみて, 勤務時間が「妥当もしくは長い」か「短い」かの2値を目的変数としてロジスティック回帰分析を行った。この結果, PSP 得点, VCRS のスタッフ評価得点, WHO-QOL26 得点, VCRS の利用者評価得点とスタッフ評価得点との差分の4変数が有意傾向であり, スタッフからみて全般的機能や作業能力が高く, 自分に対する自己評価とスタッフ評価のずれが少ないものほど長く働いている実態が示唆された。また長く働いているほど, 利用者の生活の質が高く, 満足していることが示された。

本研究の限界として, 現在の勤務時間と勤務可能時間の差分等の乖離を説明するための回帰分析で有効な変数の探索ができなかった。これは調査対象となったのが調査に非常に協力的で良質な支援機関であったため, 結果的にデータのばらつきが少なくなったことが一因と考えられる。今後は全国規模のサンプル調査などより詳細な検討が望まれる。

4) アウトリーチ支援における認知行動療法の提供に関する研究 (佐藤, 松長, 塩澤, 小川)

Assertive Community Treatment (ACT) 支援における認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) の効果について Cluster Randomized Controlled Trial (クラスターRCT) デザインによる介入研究を実施した。全国の ACT チーム15機関から研究協力を得て, これらのチームをランダムに2群に分け, 8チームを介入群, 7チームを対照群とし, それぞれ50名(平均年齢45.11±9.93歳), 44名(平均年齢42.16±11.56歳)の利用者をリクルートした。ベースライン調査終了後から2ヵ月1回, 介入群チームを対象に CBT に関する研修及び事例検討会を実施し, これを踏まえた CBT 実践を各チームで12ヵ月間を提供した。分析の結果, 精神症状や社会的機能だけでなく, 主観的な不安感等にも介入群にのみ有意な改善があった。また, 利用者1人あたりにかかる医療費, 障害福祉サービス費および訪問回数の1ヵ月あたりの平均値を算出した。この結果, 対照群と比べて対照群のほうがかかる費用が低く, 訪問回数も少なかった。以上の検討から ACT チームのような多職種アウトリーチチームによる CBT の提供は利用者の臨床像や生活上の課題を改善することに加え, 医療費や障害福祉サービス費用を

抑えられることが示唆された。

5) 個別援助付き雇用に関する研究 (山口, 佐藤, 松長, 小塩, 塩澤)

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる individual placement and support (IPS)に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化とプロセスに関する調査に取り組んだ。具体的には実践者とネットワークを構築し、日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した。また、統合失調症の利用者に対する支援要素を検証するための長期追跡調査も平行して実施中である。

6) 認知機能リハと個別援助付き雇用モデルによる就労支援 (佐藤, 山口, 松長, 藤井, 小川, 安間)

本研究は①オリジナルソフト“Jcores”のブラッシュアップと使用方法の普及、②Vocational service non-responderを対象とした Randomized Controlled Trial デザインによる CR+SE の効果検討、③SE の支援の質や内容を担保するためのフィデリティ調査の 3 要素で構成されている。昨年度までの②の対象者リクルートを終了し (n = 63)、現在追跡期間中である。

7) ピアサポートの効果検証に関する研究 (山口, 小川, 相田)

ピアスタッフの効果検証を行うことを目的とし、関東および福岡県における地域活動支援センターおよび就労継続支援 B 型事業所 (合計 31 機関, うち 17 機関はピアスタッフを雇用) を対象に、ナチュラルコース・コホートを実施した。現在、全てのデータ収集を完了し、分析を実施中である。なお、本研究は日本で初めてのピアサポートの効果検証研究である。

8) 障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究 (山口, 藤井)

障害領域におけるピアサポートの専門性および有効性を高めるための研修カリキュラムの作成にあたり、一般社団法人メンタルヘルスピアサポート専門員機構のピアサポート専門員養成研修の全受講者に対して、研修ニーズを把握するための無記名自記式質問紙調査を実施した。本年度は、特に研修が参加者のバーンアウトやストレスに与える影響を調べた。

9) 精神障害者に対するスティグマに関する研究 (山口, 小川, 小塩, 松長, 藤井)

東京大学および Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience (IoPPN) の研究者と共同し、精神障害者のスティグマ是正を図るための全般的かつ学術的な研究を推し進めた。2018 年度は、メディアを用いた介入の効果を検証する長期無作為比較試験を論文化した。また、INDOG READ という医学生に向けた教育プログラムの効果検証の日本サイトとして、データ種集を完了した。

10) 訪問看護ステーションによる支援で実施可能な家族支援に関する研究 (佐藤, 松長, 塩澤, 安間)

海外での先行研究でエビデンスの示されている家族心理教育の普及をめざし、現在の我が国の地域精神保健システムの枠内でもっとも普及しているアウトリーチ活動である精神科訪問看護による支援の過程で実施できる家族支援の在り方について家族や訪問看護ステーションスタッフに対するインタビュー等を実施し検討を行った。また家族および訪問看護ステーションスタッフに対するインターネット調査も実施した。得られたデータは家族が 305 名分、ステーションスタッフが 52 名分であった。現在データを精査中である。

11) 統合失調症に関するリハビリガイドラインの作成に関する研究 (山口, 松長)

2018 年度より、AMED 研究費において、統合失調症患者を対象とした治療や支援のガイドラ

イン作成に携わった。利用者の主体性に関する尺度開発に関するデータ収集および分析を実施した。

12) 暴力のリスクアセスメントツールの信頼性・妥当性に関する遡及的研究（菊池，橋本，岡野，相田）

諸外国の司法精神科サービスにおいて標準的に使用されている暴力のリスクアセスメントツールである HCR-20 第 3 版の日本版を作成し，医療観察法指定入院医療機関における暴力の予測妥当性を遡及的に検討した。その結果，HCR-20 第 3 版は，院内暴力の予測に十分な予測妥当性を持つことが示された。

13) 暴力のリスクアセスメントツールの信頼性・妥当性に関する多施設研究（菊池，橋本，岡野，相田）

諸外国の司法精神科サービスにおいて標準的に使用されている暴力のリスクアセスメントツールである HCR-20 第 3 版の日本版を作成し，医療観察法指定入院医療機関における暴力の予測妥当性を検討するため，多施設において 1 年間の前向き調査を実施した。9 つの指定入院医療機関の協力を得て 52 名のデータを収集し，現在，データを精査中である。

14) 医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究（菊池，橋本，岡野，相田）

医療観察法の通院処遇は最長 5 年で終了し，対象者は一般精神科医療によるケアへと移行していく。通院処遇中に対象者のどのような要因が変化して処遇終了に至るのかを検討することを目的として，単年度あたりの全国の医療観察法処遇終了者を対象に，地域処遇開始時と終了時のニーズ・プロフィールのデータを収集した。地域処遇開始時と終了時の情報が揃っている 170 名のデータが得られ，変化の特徴を抽出した。

15) 医療観察法入院データベースを活用した研究（河野，小池，藤井）

厚生労働省の重度精神疾患標準的治療法確立事業では，医療観察法指定入院医療機関が実施主体となり，同法入院対象者の診療情報をデータベース化して分析・共有することにより，医療を向上させ対象者の社会復帰を促進することを目指している。本研究では，(a) データベースの研究への二次利用に向けた準備，(b) データベースと臨床上の問題意識等に関するインタビュー調査，(c) 年次集計報告書「医療観察統計資料（仮）」の設計を行った。(b) では 2 施設の医療観察法病棟の多職種スタッフにインタビュー調査を行い，データベース活用推進に向けて重点的に取り組むべき点を明らかにした。

16) 精神科救急に関する研究（杉山，藤井，山口，塩澤）

現在運用に大きな地域差がある精神科救急医療体制整備事業（地方自治体）の実態と，医療機関間で多様性がある精神科救急及び急性期の医療内容を把握し，課題の抽出を行って標準化を推進するための諸策について，指針としてまとめるための提言を行った。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的
に実施した。（藤井）
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。
- ・NHK BS1 キャッチ！世界のトップニュース「学校で教えるメンタルヘルスリテラシー教育」
出演（小塩）

(2) 専門教育面における貢献

- ・愛媛大学 疫学・予防医学「社会医学I 特別講義 精神保健学」非常勤講師（藤井）
- ・東京医科歯科大学 地域精神看護学（N3）「認知行動療法の基礎：認知行動療法に役立つコミュニケーション」非常勤講師（菊池）
- ・明治大学 EMDR 東京スタディ・グループ「三分岐プロトコルに基づく治療計画」非常勤講師（菊池）
- ・帝京平成大学大学院 臨床心理学研究科「司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開」非常勤講師（菊池）
- ・早稲田大学 人間科学部「ケースフォーミュレーション」非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 現代心理学部「健康・医療心理学」非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 大学院臨床心理学専攻「心理実践実習1」非常勤講師（佐藤）
- ・東洋大学 大学院「精神保健福祉論」「地域福祉システム特論IX」非常勤講師（山口）
- ・文教大学「就労支援サービス」「精神科リハビリテーション」「精神障害者の生活支援システム」非常勤講師（山口）
- ・東洋大学「精神障害者の生活支援システム」「精神科リハビリテーション」「就労支援サービス」（精神保健福祉士国家試験直前対策講座）非常勤講師（山口）
- ・法政大学「精神保健ソーシャルワークII」非常勤講師（山口）
- ・早稲田大学 人間社会学部「リカバリー志向型の就労支援」非常勤講師（山口）
- ・東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 精神行動医科学分野勉強会（河野）
- ・明治学院大学 心理学部「知覚・認知心理学」非常勤講師（大隅）
- ・日本社会事業大学 社会福祉学部「精神保健」非常勤講師（松長）
- ・東京大学 医学部健康総合科学科・精神看護学「社会的包摂：アンチスティグマと意思決定支援」非常勤講師（松長）
- ・東京大学 教育学部「学校におけるメンタルヘルス教育：安全・安心教育」非常勤講師（小塩）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・第1回 精神障害者地域包括支援研修の主任・講師（藤井），副主任（佐藤・山口）
- ・第2回 地域におけるリスクアセスメント研修の主任・講師（藤井），副主任（菊池・山口）
- ・第6回 医療における個別就労支援研修の主任（藤井），副主任・講師（佐藤・山口）
- ・第16回 多職種による包括型アウトリーチ研修の主任・講師（藤井），副主任・講師（佐藤・山口）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・厚生労働省「障害者支援のあり方に関する調査研究委員会」委員（藤井）
- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（藤井）
- ・PaRIS Working Group on Patient-Reported Indicators for Mental Health Care Meeting #1, Online meeting（菊池）
- ・内閣府「被害者支援における危険度判定に基づく加害者対応に関する調査研究事業」検討委員（菊池）
- ・「精神保健観察から一般精神科医療への移行パターンの検証結果等について」法務省保護局医療観察制度中央連絡協議会。（菊池）
- ・法務省保護局「保護観察における見立てのためのケース・フォーミュレーションの試行について」第2回社会内処遇の体系化に関する研究会（菊池）
- ・障害者職業総合センター「効果的な就労支援のための就労支援機関と精神科医療機関等との情報共有に関する研究」委員会 オブザーバー（佐藤）

- ・ NPO 法人小山そよかぜ, 法人理事, 相談支援事業所顧問 (小池)
- ・ 川崎市と精神保健研究所の協定に基づく調査研究—川崎市精神保健福祉センターにおける警察官通報への対応実態の分析 (小池, 河野)
- ・ 重度精神疾患標準的治療法確立事業のデータ二次利用における審査委員会の組織, 規程の整備などの研究支援 (河野, 小池, 藤井)

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 地域精神科モデル医療センターの訪問看護ステーション, および精神科デイケアと連携し, センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している (藤井, 佐藤, 山口)
- ・ 国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 程度, 訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した (佐藤)

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Sasaki N, Yamaguchi S, Shimodaira M, Sato S, Taneda A, Yoshida K, Ito J: Development and validation of a Japanese Fidelity scale for supported employment. *Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Services Research* 45(2): 318-327, 2018.
- 2) Deb T, Lempp H, Bakolis I, Vince T, Waugh W, Henderson C, INDIGO READ study group, Thornicroft G, Ando S, Yamaguchi S, Matsunaga A, Kondo S, Ichihashi K, Ojio Y, Ogawa M, Fujii C, Kasai K, Candelas A, Martín L, Jiménez A, Castañeda C, Hernández C, de la Higuera J, Muñoz-Negro JE, Sola M, García R, Gota JM, Mula JF, López A, Oria A, Cervilla JA, Bono A, Franco D, Gómez J, Jiménez C, Dorado R, Ingunza E, Márquez I, de la Vega D, G^a-Cubillana P, Ouali U, Jouini L, Zgueb Y, Jomli R, Nacef F, Campbell M, Stein D, Harangozo J, Ojo TM, Ogunwale A, Sowunmi AO, Awhangansi SS, Ogundapo D, Sodiya OT, Fadipe B, Olagunju AT, Erinfolami AR, Ogunnubi PO, Tomás CC, Krupchanka D, Pascucci M, Bacle SV, Colliez A, Sebbane D, Mengin A, Vidailhet P, Cazals C, Ucock A, Fiorillo A, Sampogna G, Savorani M, Del Vecchio V, Luciano M, Borriello G, Poci B, Nwaubani P, James Y, Tocca A, Pattnaik R, Chilasagaram S, Wufang Z: Responding to experienced and anticipated discrimination (READ): anti-stigma training for medical students towards patients with mental illness - study protocol for an international multisite non-randomised controlled study. *BMC Medical Education* 19(1): 41, 2019.
- 3) Koike S, Yamaguchi S, Ojio Y, Ohta K, Shimada T, Watanabe K, Thornicroft G, Ando S: A randomised controlled trial of repeated filmed social contact on reducing mental illness-related stigma in young adults. *Epidemiology and Psychiatric Sciences* 27(2): 199-208, 2018.
- 4) Yamaguchi S, Ojio Y, Ando S, Bernick P, Ohta K, Watanabe K-I, Thornicroft G, Shiozawa T, Koike S: Long-term effects of filmed social contact or internet-based self-study on mental health-related stigma: a 2-year follow-up of a randomised controlled trial. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* 54(1): 33-42, 2019.
- 5) Osumi T, Tsuji K, Shibata M, Umeda S: Machiavellianism and early neural responses to others' facial expressions caused by one's own decisions. *Psychiatry Research* 271: 669-677, 2019.
- 6) Nishida A, Ando S, Yamasaki S, Koike S, Ichihashi K, Miyakoshi Y, Maekawa S,

- Nakamura T, Natsubori T, Ichikawa E, Ishigami H, Sato K, Matsunaga A, Smith J, French P, Harima H, Kishi Y, Fujita I, Kasai K, Okazaki Y: A randomized controlled trial of comprehensive early intervention care in patients with first-episode psychosis in Japan: 1.5-year outcomes from the J-CAP study. *J Psychiatr Res* 102: 136-141, 2018.
- 7) Shiina A, Ojio Y, Sato A, Sugiyama N, Iyo M, Fujii C: The recognition and expectations of ex-inpatients of mental health services: A web-based questionnaire survey in Japan. *PLoS One* 15;13(10): e0197639. 2018.
 - 8) Ojio Y, Foo JC, Usami S, Fuyama T, Ashikawa M, Ohnuma K, Oshima N, Ando S, Togo F, Sasaki T. Effects of a school teacher-led 45-min educational program for mental health literacy in pre-teens. *Early Interv Psychiatry*. 2018 [Epub ahead of print].
 - 9) Yasuma N, Watanabe K, Nishi D, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Sampson L, Galea S, Kawakami N: Urbanization and Internet addiction in a nationally representative sample of adult community residents in Japan: A cross-sectional, multilevel study. *Psychiatry research* 273: 699-705, 2019.
 - 10) 佐藤さやか: アウトリーチチームにおける CBTp-ACT チームとの共同-. 認知療法研究 11 : 138-140, 2018.
 - 11) 米倉裕希子, 山口創生: 日本語版知的障害者本人が経験するスティグマ評価の尺度開発. 関西福祉大学研究紀要 21 : 33-40, 2018.
 - 12) 種田綾乃, 山口創生, 吉田光爾, 伊藤順一郎, 齋川信幸: 利用者視点からの臨床スタッフのストレングス志向の支援態度: 精神科医療機関を拠点とした多職種アウトリーチチームの介入による影響. *精神障害とリハビリテーション* 22 (1) : 68-76, 2018.
 - 13) 水野雅之, 種田綾乃, 澤田宇多子, 相川章子, 濱田由紀, Naoko Yura Yasui, 山口創生: ピアスタッフとともに働くこととスタッフの支援態度および職場環境の関連: クロスセクショナル調査. *精神医学* 60(7) : 773-781, 2018.
 - 14) 千葉理恵, 梅田麻希, 宮本有紀, 山口創生, 後藤恭平: 精神疾患をもつ人々のリカバリーを支援するために, 専門職者が大切であると認識していること: 自由記載の質的分析から. *看護科学研究* 16(3) : 70-78, 2018.
 - 15) 山口創生, 水野雅之, 佐藤さやか, 松長麻美, 種田綾乃, 澤田宇多子, 吉田光爾, 佐々木奈都記, 下平美智代, 藤井千代: 日本版個別型援助付き雇用フィデリティ尺度におけるカットオフ値の検証. *臨床精神医学* 47(12) : 1431-1438, 2018.
 - 16) 山口創生, 川副泰成, 名雪和美, 青木 勉, 藤井千代: 精神科医療機関におけるケースマネジメントサービス利用者と非利用者の特性の比較: 探索的外来患者調査. *精神医学* 61(1) : 81-91, 2019.
 - 17) 谷山 牧, 荒木田美香子, 山下留理子, 橋本 (小市) 理恵子, 大久保豪, 甲斐一郎: 就労支援を受ける生活困窮者の就労意欲に影響を与える健康特性の構造の明確化, *日本看護科学会誌* 38: 263-273, 2018.
 - 18) 鈴木浩太, 山口創生, 川副泰成, 名雪和美, 青木 勉, 藤井千代: 包括的支援マネジメントの必要性に関する精神科通院者の特徴: 決定木分析による検討, *臨床精神医学* 48(1) : 125-131, 2019.
- (2) 総説
- 1) 藤井千代: 精神科措置入院に関する診療報酬改定—退院後の医療・支援の充実. *精神科治療学* 34(3) : 307-312, 2019.
 - 2) 藤井千代: 措置入院者の退院後支援に関するガイドライン. *精神科臨床 Legato* 5(1) : 58-59, 2019.
 - 3) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムとは. *精神科* 34(3) : 254-258, 2019.

- 4) 藤井千代: アウトリーチを支える制度 新たなアウトリーチ制度と自治体による退院後支援. 精神科臨床サービス 18(4): 406-410, 2018.
- 5) 藤井千代: 措置入院者の退院後支援. 精神科治療学 33(10): 1253-1257, 2018.
- 6) 藤井千代: 精神障害者に対するアウトリーチ支援の充実. 日本精神科病院協会雑誌 37(9): 921-927, 2018.
- 7) 藤井千代: 措置入院をめぐる課題. 精神科 33(3): 236-240, 2018.
- 8) 藤井千代: 外来医療 (地域精神医療). 精神科 32(4): 343-347, 2018.
- 9) 菊池安希子: 触法精神障がい者の入院治療. 五十嵐禎人 編: 特別企画「治療のための司法精神医学」. こころの科学 199, 40-44, 2018.
- 10) 菊池安希子: 司法領域の認知行動療法と公認心理師. 認知療法研究, 11(2), 121-123, 2018.
- 11) 菊池安希子: 統合失調症の認知行動療法 (CBTp) -多様な地域支援-. 認知療法研究 11(2), 143-145, 2018.
- 12) 菊池安希子: 知っておきたい CBTp グローバルスタンダード①英国編. 臨床心理学 110, 19(2): 133-138, 2019.
- 13) 佐藤さやか: 「医者にかかりたくない」「薬を飲みたくない」-治療・支援を拒む心理をサポートする-. こころの科学 202: 16-21, 2018.
- 14) 佐藤さやか: 公認心理師のための職場地図「アウトリーチ」. 臨床心理学 18(4): 455-456, 2018.
- 15) 佐藤さやか: ACT チームと取り組む認知行動療法. 最新精神医学 24(2): 83-89, 2019.
- 16) 山口創生, 佐藤さやか: 統合失調症を含む重い精神障害を持つ人に対する就労支援: 科学的根拠に基づく援助つき雇用. 精神科 32(3): 234-242, 2018.
- 17) 山口創生: 実践の見える化 (第 4 回): 先行研究. 精神保健福祉 50(2): 194-196, 2019.
- 18) 山口創生: 精神障害者雇用と個別支援: これまでの歩みと課題. 心と社会 175: 65-74, 2019.
- 19) 荒田 寛, 山口創生: 研究倫理: 実践の見える化 (連載第 2 回). 精神保健福祉 49(3): 284-285, 2018.
- 20) 小池進介, 山口創生, 小塩靖崇, 安藤俊太郎: 精神医学のフロンティア スティグマの親子関係と, 統合失調症名称変更の知識がスティグマに与える影響. 精神神経学雑誌 120(7): 551-557, 2018.
- 21) 小塩靖崇, 小池進介: 精神疾患のスティグマ軽減戦略と学校における精神保健教育. 心と社会 49(1): 104-110, 2018.
- 22) 安間尚徳, 塩澤拓亮, 松長麻美, 佐藤さやか, 藤井千代: 統合失調症と心理社会支援 訪問看護師による家族心理教育の提案. 精神保健研究 65: 5-10, 2019.

(3) 著書

- 1) 藤井千代: 精神障害の特性. 水野雅文, 藤井千代, 佐久間啓, 村上雅昭 編: リカバリーのためのワークブック. 中央法規, 東京, pp9-14, 2018.
- 2) 藤井千代: 希望, 目標, ニーズ. 水野雅文, 藤井千代, 佐久間啓, 村上雅昭 編: リカバリーのためのワークブック. 中央法規, 東京, pp94-102, 2018.
- 3) 渡邊 理, 藤井千代: 事前指示. 水野雅文, 藤井千代, 佐久間啓, 村上雅昭 編: リカバリーのためのワークブック. 中央法規, 東京, pp201-216, 2018.
- 4) 菊池安希子: ゴール設定「できたらいいな」を現実に. 岩壁 茂 編著: カウンセリングテクニック入門: プロカウンセラーの技法 30. 金剛出版, 東京, pp153-161, 2018.
- 5) 菊池安希子: 6 医療観察法指定医療機関. 生島 浩 編著: 公認心理師分野別テキスト 4 司法・犯罪分野 理論と支援の展開. 創元社, 東京, pp55-57, 2019.
- 6) 菊池安希子: 事例 9 医療観察法指定医療機関一病識がなく内省が深まりにくい対象者. 生島 浩 編著: 公認心理師分野別テキスト 4 司法・犯罪分野 理論と支援の展開. 創元社, 東京, pp100-103, 2019.

- 7) 菊池安希子：21 医療観察法通院処遇中の入院 Q&A. 生島 浩 編著：公認心理師分野別テキスト 4 司法・犯罪分野 理論と支援の展開. 創元社，東京，p126，2019.
- 8) 菊池安希子：22 医療観察法指定入院医療機関への被害者や遺族からの問合せ Q&A. 生島 浩 編著：公認心理師分野別テキスト 4 司法・犯罪分野 理論と支援の展開. 創元社，東京，p127，2019.
- 9) 菊池安希子：4 保健医療分野②：法律と制度. 子安増生，丹野義彦 編：公認心理師エッセンシャルズ第 2 版. 有斐閣，東京，pp108-113，2019.
- 10) 菊池安希子：「気づきを促す面接」対象者の準拠枠を活用した取り組み. 渡邊 悟 編：面接雑考～非行・犯罪臨床における面接をめぐる～. 株式会社タカラ，大阪，pp12-13，2019.
- 11) 佐藤さやか：保健・医療の諸機関の機能と役割. 鈴木伸一，田中恒彦，小林清香 編：公認心理師養成のための保健・医療系実習ガイドブック. 北大路書房，京都，pp2-9，2018.
- 12) 佐藤さやか：保健・医療の制度と関連法規. 鈴木伸一，田中恒彦，小林清香 編：公認心理師養成のための保健・医療系実習ガイドブック. 北大路書房，京都，pp9-13，2018.
- 13) 佐藤さやか：海外・国内の調査研究から見る地域精神医療の現状. 伊藤順一郎 監，小林 茂，佐藤さやか 編：病棟に頼らない地域精神医療論. 金剛出版，東京，pp34-47，2018.
- 14) 澤田恭一，丸山次郎，佐藤さやか：働くことを支える. 伊藤順一郎 監，小林 茂，佐藤さやか 編：病棟に頼らない地域精神医療論. 金剛出版，東京，pp71-81，2018.
- 15) 藤田大輔，佐藤さやか：薬物療法. 伊藤順一郎 監，小林 茂，佐藤さやか 編：病棟に頼らない地域精神医療論. 金剛出版，東京，pp115-123，2018.
- 16) 佐藤さやか：精神科デイケア. 下山晴彦他 編：公認心理師技法ガイド. 文光堂，東京，pp849-853，2019.
- 17) 山口創生：意思決定支援 (Assisted decision making). 精神保健医療福祉白書編集委員会 編：精神保健医療福祉白書 2018/2019. 中央法規出版，東京，p27，2018.
- 18) 山口創生：障害別の基礎的理解と特性に応じた支援Ⅱ：精神障害. 介護福祉士養成講座編集委員会 編：介護福祉士養成講座 14：障害の理解. 中央法規出版，東京，pp172-183，2019.
- 19) 山口創生：精神疾患の特徴. 山口創生 編：精神障害者雇用の ABC. 星和書店，東京，pp15-19，2018.
- 20) 山口創生：障害者差別解消法. 山口創生 編：精神障害者雇用の ABC. 星和書店，東京，pp103-104，2018.

(4) 研究報告書

- 1) 藤井千代：精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野)平成 28～30 年度 総合研究報告書, pp1-28, 2019.
- 2) 藤井千代：精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野)平成 30 年度 総括研究報告書, pp1-5, 2019.
- 3) 藤井千代：精神保健医療に関する制度の国際比較. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」平成 30 年度 総括・分担研究報告書. pp150-165, 2019.
- 4) 藤井千代：好事例分析. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究：コホート研究」平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp41-46, 2019.
- 5) 杉山直也：精神科救急および急性期医療の質向上に関する政策研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp1-14, 2019.
- 6) 杉山直也：精神科救急および急性期医療の質向上に関する政策研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))平成 29～30 年度 総合研究報告書. pp1-26,

2019.

- 7) 藤井千代, 平林直次, 菊池安希子, 山之内芳雄: 疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」, 平成 30 年度 総括研究報告書. pp1-7, 2019.
- 8) 藤井千代: アウトリーチ支援における家族心理教育を中心とした家族支援の効果に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」. 平成 28~30 年度 総括・研究分担報告書, pp9-14, 2019.
- 9) 菊池安希子, 橋本理恵子, 岡野茉莉子, 相田早織: 医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」, 平成 28~30 年度 総括研究報告書. pp45-52, 2019.
- 10) 菊池安希子: 問題行動の評価: 評価項目の選定. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究: コホート研究」平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp31-36, 2019.
- 11) 佐藤さやか: 医療機関における就労支援に関する研究: 就労継続支援 A 型事業所における精神障害者の就労状況に関わる要因の探索. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)「精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究」平成 30 年度 研究分担報告書. pp243-249, 2019.
- 12) 山口創生: 入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究: コホート研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp1-12, 2019.
- 13) 山口創生: 精神科救急及び急性期医療後の退院困難例の要因分析及び適切なケアのあり方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「精神科救急および急性期医療の質向上に関する政策研究」平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp200-221, 2019.
- 14) 山口創生: ピアサポート養成研修と職場におけるピアサポーターの精神保健との関連. 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))平成 30 年度 総括・研究分担報告書. pp77-83, 2019.
- 15) 小池純子, 石井慎一郎, 関山友子, 竹島 正, 立森久照, 宇田英典, 辻本哲士, 佐々木英司, 菌田剛史, 河本次生, 岡田隆志, 佐藤裕大: 全国 23 条通報受理機関に対するアンケート調査 — 通報事例に対するケアマネジメント体制の構築に向けた検討—. 文部科学省科学研究費助成事業 (基盤研究 (C) 16K12269)「精神障害者による他害行為の予防に対する精神保健医療福祉体制の整備に関する研究」研究報告書. 2018.
- 16) 平林直次, 河野稔明, 小池純子, 藤井千代: 指定入院医療機関データベースシステムを活用した研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))「医療観察法の制度対象者の治療・支援体制の整備のための研究」(研究代表者: 平林直次) 総括・分担研究報告書, pp10-20, 2019.

(5) 翻訳

- 1) 菊池安希子 監訳, 菊池安希子, 河野稔明, 相田早織, 岡野茉莉子, 橋本理恵子 訳, Christopher D. Webster, Mary-Lou Martin, Johann Brink, Tonia L. Nicholls, Sarah L. Desmarais 著: START「心配な転帰」のリスクと治療反応性の短期アセスメント. 星和書店, 東京, 2018.

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Sato S: Development and evaluation of effectiveness of a combination programme for a original software-based cognitive remediation and supported employment on vocational outcomes - A new research project in Japan-. 13th World congress for World Association for Psychosocial Rehabilitation, Madrid, Spain, 2018.7.6.
 - 2) Yamaguchi S: Evidence-based psychosocial services in Japan. Symposium Evidence-based psychosocial rehabilitation in East Asia. 13th World congress for World Association for Psychosocial Rehabilitation, Madrid, Spain, 2018.7.6.
 - 3) Yamaguchi S: Effectiveness and cost-effectiveness of cognitive remediation and supported employment. Symposium Impact and implementation of cognitive remediation therapy and supported employment for people with mental illness in non-Western countries. 13th World congress for World Association for Psychosocial Rehabilitation, Madrid, Spain, 2018.7.6.
 - 4) Akiyama T, Iwasaki K, Yamaguchi S, Miyamoto Y, Taneda A: Development of Peer Supporter Training Programs in Japan. 18th WPA World Congress of Psychiatry, Mexico City, Mexico, 2018.9.27.
 - 5) Yamaguchi S, Ojio Y: Long-term effects of interventions on mental health-related stigma in young people. International symposium on adolescent health and personalized value 2018, Tokyo, 2018.11.18
 - 6) 藤井千代: 精神科臨床倫理の在り処 その 5-メディアと精神科医-"Goldwater rule"を念頭にして 精神科医師の倫理綱領における Goldwater rule. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.22.
 - 7) 藤井千代: 地域で暮らすために必要な資源とそのあり方 地域における支援の統合 誰がマネジメントを行うか? 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.23.
 - 8) 藤井千代: 今回の精神保健福祉法改正を巡って 措置入院者の退院後支援をどう考えるか. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.23.
 - 9) 藤井千代: 精神保健福祉法改正—あらためて誰のため, 何のための法改正か?—. 第 7 回日本精神科医学会学術大会, 長野, 2018.10.4.
 - 10) 藤井千代: 措置入院者の退院後支援—多職種アプローチと共同意思決定—. 第 26 回日本精神科救急学会学術総会, 沖縄, 2018.10.11.
 - 11) 上田英一郎, 菊池安希子, 白川美也子: 「医師, 心理士が遵守すべき倫理規範」教育講演 (講師). 日本 EMDR 学会第 13 回学術大会, 兵庫, 2018.7.20.
 - 12) 菊池安希子: START-J ワークショップ (講師), 第 14 回日本司法精神医学会大会, 山口, 2018.6.18.
 - 13) 松本和紀, 菊池安希子: 医療観察方病棟における妄想性障害の男性に対する妄想への取り組み. ケーススタディ 4 (スーパーバイザー), 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
 - 14) 菊池安希子: 精神病に対する認知行動療法の新たな展望. シンポジウム 9 統合失調症の認知行動療法 (指定討論), 第 18 回日本認知療法・認知行動療法学会, 岡山, 2018.11.23-25.
 - 15) 菊池安希子, 國吉美也子, 堀口陽子, 石田周良: 受刑者の一般改善指導としての R & R (Reasoning & Rehabilitation 2) の導入. ミニ・シンポジウム 1 (話題提供者), 日本犯罪心理学会第 56 回大会, 奈良, 2018.12.8-9.
 - 16) 山口創生, 佐藤さやか, 吉田光爾: 見える化時代の精神科リハビリテーション: 最新の実践エビデンスのレビューから考える. 第 26 回 日本精神障害者リハビリテーション学会 東京大会, 東京, 2018.12.15.
 - 17) 山口創生: 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の費用対効果: 無作為化比較試験 (野

- 中賞受賞講演). 第 26 回 日本精神障害者リハビリテーション学会, 東京大会, 東京, 2018.12.16.
- 18) 山口創生: 若手研究者の立場から, 現在議論すべきと考えられる研究の方向性. 第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会, 東京大会, 東京, 2018.12.16.
- 19) 下平美智代: 「マインドフルネスを体験してみよう」大会研修セミナー⑦ (講師). 日本精神神経障害者リハビリテーション学会第 26 回東京大会, 東京, 2018.12.14.
- 20) 下平美智代: 「リフレティングとオープンダイアログ」ワークショップ (講演). 第 7 回ナラティヴ・コロキウム大会, 東京, 2019.3.16.
- 21) 小塩靖崇: 学校におけるメンタルヘルス授業のあり方. 第 22 回日本精神保健・予防学会, 東京, 2018.12.1.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi A, Kashiwagi H, Okano M, Takahashi F, Fujii C: Retrospective file based study of HCR-20V3 in Japanese forensic inpatients: Interim report. 18th Annual Conference for International Association of Forensic Mental Health Services, Antwerp, Belgium, 2018.6.13.
- 2) Ojio Y, Sabouri S, Kishi A, Togo F: Association of depressive symptoms with sleep duration and timing in Japanese adolescents. The 9th Congress of Asian Sleep Research Society, Sapporo, Japan, 2018.7.11.
- 3) 鈴木航太, 新村秀人, 山澤涼子, 山田香代子, 根本隆洋, 水野雅文, 三村 將, 藤井千代: 就労支援を目的とした精神科デイケアにおける個別支援の効果について. 第 22 回日本精神保健・予防学術集会, 東京, 2018.12.1.
- 4) 菊池安希子, 岡野茉莉子, 大森まゆ, 大迫充江, 高野和夫, 等々力信子, 平林直次: 医療観察法入院処遇中の対象者による暴力の実態について. 第 14 回日本司法精神医学学会大会, 山口, 2018.6.1-2.
- 5) 河野稔明, 竹田康二, 山田悠至, 小池純子, 藤井千代, 平林直次: 医療観察法入院処遇期間の適切な指標の探索—集計期間の幅に着目して—. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.2.28-3.1.
- 6) 熊倉陽介, 小川芳範, 山北輝裕, 清野賢司, 渡邊 乾, 岩本雄次, 武田裕子, 高桑郁子, 佐野莊一郎, 稲葉 剛, 山口創生, 森川すいめい: 日本型ハウジングファーストのフィデリティ作成のための文献レビューと実施者による項目案の検討. 第 114 回日本精神神経学会学術総会, 兵庫, 2018.6.21.
- 7) 山口創生, 種田綾乃, 吉田光爾: 日本版援助付き雇用フィデリティ尺度と実践家調査員における評価者間信頼性: クロスセクショナル調査の追試. 第 66 回日本社会福祉学秋季大会, 愛知, 2018.9.9.
- 8) 澤野文彦, 大塚淳子, 名雪和美, 綿貫祐子, 加藤雅恵, 熊谷彰人, 吉田光爾, 榎原紀子, 今村浩司, 平川 央, 山口創生, 竹中秀彦: 診療報酬委員会の活動報告. 第 54 回日本精神保健福祉士協会全国大会, 長崎, 2018.9.15.
- 9) 山口創生, 種田綾乃, 三宅美智, 御菌恵将, 岩崎 香: ピアサポーター養成研修への参加と知識・心理的アウトカムとの関連. 第 7 回日本精神保健福祉学会 学術研究集会, 長崎, 2018.9.16.
- 10) 大隅尚広, 米田恵子, 河野稔明: 喜びは上, 悲しみは下 —上下方向による顔表情の分類における事象関連電位. 第 36 回日本生理心理学会大会, 福岡, 2018.5.26-27.
- 11) 大隅尚広: 社会的意思決定における心臓活動と内受容感覚の機能的役割. 日本心理学会第 82 回大会, 宮城, 2018.9.25-27.
- 12) 松長麻美, 高馬章江, 多田克彦, 北村俊則: Mother-to-Infant Bonding Scale は経時的に測定不変か? 産後 5 日および 1 か月時点における検討. 第 15 回周産期メンタルヘルス学会, 兵庫, 2018.10.27-28.
- 13) 松長麻美, 宮本有紀: 精神疾患のセルフスティグマ尺度日本語版の作成および信頼性・妥当性

- の検討. 第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会 東京大会, 東京, 2018.12.14-16.
- 14) 種田綾乃, 松長麻美, 澤田宇多子, 山口創生: 統合失調症をもつ当事者が「主体的」に生きるうでの要素とは: フォーカスグループ・インタビュー調査. 第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会 東京大会, 東京, 2018.12.15.
 - 15) 森田展彰, 新井清美, 山口玲子, 小池純子, 望月明見, 大宮宗一郎, 渡邊敦子, 山田 理, 受田恵理, 野村照幸, 道重さおり, 若林 馨: 更生保護施設を中心とする地域連携による薬物事犯の回復支援. シンポジウム 33 刑の一部執行猶予制度施行後における薬物依存症地域支援の現状と課題 第 114 回精神神経学会, 兵庫, 2018.6.21
 - 16) 井ノ口恵子, 五十嵐愛子, 森田展彰, 新井清美, 佐藤栄児, 小池純子: 薬物依存症者の社会復帰を看護の視点から検討する - 第 2 弾 -. 第 17 回日本アディクション看護学会, 長崎, 2018.9.2
 - 17) 小池純子, 佐藤裕大, 新井清美, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度下における更生保護施設を中心とした薬物問題を持つ人に対する地域支援一栃木県交流会から見えた現状と課題. 第 7 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019.1.26.
 - 18) 佐藤裕大, 佐々木英司, 河本次生, 藪田剛史, 小池純子: 通報等制度の対応上の課題解決に向けて-全国 23 条通報受理機関調査から. 第 7 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019.1.27.
 - 19) 石井慎一郎, 半澤節子, 酒井克子, 永井優子, 路川達阿起, 宮城純子, 谷田部佳代弥, 小池純子, 板橋直人, 中根秀之: 隔離と倫理的問題に対する精神科看護師の認識. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.2.28-3.1.
 - 20) 橋本理恵子, 谷山 牧, 窪田光枝, 園 環樹: 精神科病院に勤務する病棟看護師の退院支援に関する研究. 日本精神保健看護学会第 28 回学術集会, 東京, 2018.6.23-24.
 - 21) 谷山 牧, 荒木田美香子, 山下留理子, 橋本(小市)理恵子, 大久保 豪, 保母 恵, 若林和枝, 甲斐一郎: 就労支援を受ける生活困窮者の就労意欲に影響を与える精神的・社会的健康特性. 第 38 回日本看護科学学会学術集会, 愛媛, 2018.12.15-16.
 - 22) 谷山 牧, 荒木田美香子, 山下留理子, 保母 恵, 橋本理恵子: 就労支援を受ける生活困窮者の就労意欲に影響を与える健康特性 - 彼らの強みとなる要素 -. 第 7 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019.1.26-27.
 - 23) 鈴木浩太, 平谷美智夫, 林 隆, 稲垣真澄: 家族レジリエンス要素質問票短縮版の開発と発達障害児をもつ養育者への適用. 第 121 回日本小児科学会学術集会, 福岡, 2018.4.19-20.
 - 24) 塩澤拓亮, 藤井千代, 野田寿恵, 杉山直也: 精神科救急医療体制整備事業の実態把握-後方視調査による経年動向の検討-. 第 26 回日本精神科救急学会学術総会, 沖縄, 2018.10.11-12.
 - 25) 塩澤拓亮, 相田早織, 船田大輔, 小塩靖崇, 佐竹直子, 藤井千代: フィリピン共和国におけるメンタルヘルスリテラシー教育の現状と今後の方向性の検討. 第 38 回日本社会精神医学会, 東京, 2019.2.28-3.1.
 - 26) 岡野茉莉子, 大森まゆ, 大迫充江, 菊池安希子: 医療観察法病棟医療従事者が受ける暴力の実態調査. 第 14 回日本司法精神医学学会大会, 山口, 2018.6.1-2.

(3) 研究報告会

- 1) 菊池安希子, 河野稔明, 藤井千代: 医療観察法通院処遇中の対象者の変化に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 30 年度研究報告会(第 30 回), 東京, 2019.3.18.
- 2) 河野稔明, 竹田康二, 山田悠至, 小池純子, 藤井千代, 平林直次: 研究班報告-データベース事業(医療観察法重度精神疾患標準的治療法確立事業)概要および進捗状況説明. 第 14 回医療観察法関連職種研修会, 大阪, 2018.9.29.
- 3) 山口創生, 水野雅之, 種田綾乃, 澤田宇多子, 小川 亮, 相田早織: 精神保健福祉サービス事業所における新規利用者のモニタリングおよびピアサポートの効果検証に関する研究 研究報告

- 会，東京，2019.3.19.
- 4) 山口創生，水野雅之，種田綾乃，澤田宇多子，小川 亮，相田早織：精神保健福祉サービス事業所における新規利用者のモニタリングおよびピアサポートの効果検証に関する研究 研究報告会，福岡，2019.3.26.
 - 5) 佐藤さやか，小川 亮，松長麻美，山口創生，菊池安希子，藤井千代：Assertive Community Treatment (ACT) における認知行動療法の効果と医療経済的検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 30 年度研究報告会（第 30 回），東京，2019.3.18.
 - 6) 下平美智代，佐藤さやか，山口創生，藤井千代：『精神障害にも対応した地域包括ケアシステム』の構築」に資する「所沢モデル」開発プロジェクト．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 30 年度研究報告会（第 30 回），東京，2019.3.18.
 - 7) 大隅尚広：責任能力の指標の探究 —自己の行動の結果に対する事象関連電位．慶應義塾大学論理と感性のグローバル研究センター2018 年度末公開成果報告会，東京，2019.2.28.

(4) その他

C. 講演

- 1) 藤井千代：精神障害者の退院後支援—多機能型診療所だからできること—．第 4 回多機能型精神科診療所研究会，大阪，2018.5.27.
- 2) 藤井千代：地域包括ケアシステムで精神障害者支援はどう変わる？和歌山県精神保健福祉士協会総会，和歌山，2018.6.3.
- 3) 藤井千代：統合失調症のリカバリーを支えるインテンシブ・ケースマネジメント．滋賀精神科専門医トレーニング研究会，滋賀，2018.6.17.
- 4) 藤井千代：精神科医療における国の動向と今後の精神科訪問看護への期待．埼玉県アウトリーチ研究会，埼玉，2018.7.14.
- 5) 藤井千代：精神障害者の退院後支援について．関東中核市精神保健担当者会，埼玉，2018.7.21.
- 6) 藤井千代：地域包括ケアシステムにおける精神科診療所の役割と方向性．九州精神神経科診療所協会学術講演会，福岡，2018.9.29.
- 7) 藤井千代：パーソナル・リカバリーのための共同意思決定．第 25 回精神科看護専門学術集会学術講演，香川，2018.10.26.
- 8) 藤井千代：措置入院制度（23 条通報）運用について．平成 30 年度島根県精神保健福祉相談員資格取得講習会，島根，2018.11.19.
- 9) 菊池安希子，竹内 伸，太田茂行：三分岐プロトコルに基づく治療計画．EMDR 東京スタディグループ，明治大学，東京，2018.9.29.
- 10) 菊池安希子：医療観察法処遇中の心理療法において内省をいかに扱うか．医療観察法等司法精神医学委員会勉強会，東京，2018.12.14.
- 11) 山口創生：IPS と希望を大切にす個別就労支援：IPS と個別支援．第 2 回からびな学習会，北海道，2018.09.28.
- 12) 山口創生：Individual placement and support に関する研究．2018 年度西川病院講演会，島根，2019.3.6
- 13) 下平美智代：Open Dialogue—フィンランドにおけるネットワークの対話を基盤とした精神医療．群馬県精神神経科診療所協会学術講演会，群馬，2018.12.22.
- 14) 小塩靖崇：心の健康に役立つ生活習慣とは～睡眠を中心に～．船橋市教育委員会学校教育部 保健体育課保健係，千葉，2018.8.22.
- 15) 小塩靖崇：心の健康に役立つ生活習慣，飯能市立吾野中学校．学校保健委員会，埼玉，2018.7.17.
- 16) 小塩靖崇：SOS の出し方に関する教育について．岐阜県教育委員会，岐阜，2018.9.20.

D. 学会活動**(1) 学会主催****(2) 学会役員**

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会 理事
- 2) 藤井千代：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 3) 藤井千代：日本司法精神医学会 評議員
- 4) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員
- 5) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員
- 6) 藤井千代：日本精神神経学会 男女共同参画委員
- 7) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 8) 山口創生：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 9) 山口創生：日本精神保健福祉学会 編集委員
- 10) 山口創生：日本統合失調症学会 パブリックリレーション委員会 アドバイザリーボード
- 11) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 12) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事
- 13) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事 トレーニング委員会委員長，倫理委員会委員長
- 14) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 15) 菊池安希子：医療観察法心理士ネットワーク 幹事
- 16) 菊池安希子：日本臨床心理士会 司法矯正領域委員会委員（～平成 30 年 7 月）
- 17) 松長麻美：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 18) 松長麻美：日本精神障害者リハビリテーション学会 研修委員
- 19) 橋本理恵子：不眠研究会 監事（～平成 30 年 11 月）

(3) 座長

- 1) 藤井千代：シンポジウム 25 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けてー多職種・多機関協働の推進とデータの活用（座長）. 第 114 回日本精神神経学会学術総会，兵庫，2018.6.21.
- 2) 藤井千代：ランチョンセミナー4 精神疾患早期段階における治療ー若者のこころの理解とともにー（座長）. 第 38 回日本社会精神医学会，東京，2019.2.28-3.1.
- 3) 菊池安希子：「いじめ，EMDR と家族」口頭発表（座長）. 日本 EMDR 学会第 13 回学術大会，兵庫，2018.7.20.
- 4) 下平美智代：「研究口頭発表 3：リカバリー・啓発（研究）」（6 演題）（座長）日本精神神経障害者リハビリテーション学会第 26 回東京大会，東京，2018.12.15.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌編集委員
- 2) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員
- 5) 山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
- 6) 山口創生：Canadian Journal of Psychiatry: reviewer registration
- 7) 山口創生：Epidemiology and Psychiatric Sciences: reviewer registration
- 8) 山口創生：American Academy of Child and Adolescent Psychiatry: reviewer registration
- 9) 菊池安希子：日本認知療法・認知行動療法学会 編集委員
- 10) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 英文監修者

- 11) 河野稔明：日本司法精神医学会 編集委員
- 12) 橋本理恵子：日本看護科学学会 和文誌専任査読委員
- 13) 橋本理恵子：Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing: reviewer registration
- 14) 橋本理恵子：日本看護管理学会 査読委員
- 15) 松長麻美：Archives of Women's Mental Health: reviewer registration
- 16) 鈴木浩太：Research in Developmental Disabilities: reviewer registration
- 17) 鈴木浩太：Cognitive Neurodynamics: reviewer registration

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 藤井千代：措置入院の運用に関する研修会。東京，2018.4.18，4.26.
- 2) 藤井千代：精神障害者の退院後支援に関する研修会。東京，2018.4.19，4.27.
- 3) 藤井千代，小池純子：第1回 精神障害者地域包括支援研修。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2018.8.27-28.
- 4) 藤井千代，佐藤さやか，山口創生：第16回 多職種による包括型アウトリーチ研修。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2018.8.29-31.
- 5) 藤井千代，山口創生，佐藤さやか：第6回 医療における個別就労支援研修。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2018.8.29-31.
- 6) 藤井千代，菊池安希子，山口創生：第2回 地域におけるリスクアセスメント研修。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2018.9.1.
- 7) 下平美智代：Story Sharing の活動研修会。埼玉，2019.3.19.
- 8) 平林直次，竹田康二，河野稔明：第8回医療観察法診療情報管理研修会。東京，2018.6.29.

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代：退院後支援ガイドラインの概要。石川県立高松病院・保健所合同研修会，石川，2018.5.21.
- 2) 藤井千代：退院後支援ガイドラインの概要と運用のポイント。「地方公共団体による精神障害者の退院後支援に関するガイドライン」の運用に関する研修会，東京，2018.6.8.
- 3) 藤井千代：自治体との協働による危機介入。日本精神科救急学会教育研修会 in 郡山，福島，2018.7.7.
- 4) 藤井千代：平成30年度全国保健師長会東京特別区支部研修会，東京，2018.7.17.
- 5) 藤井千代：措置入院の運用について。「措置入院の運用に関する研修会」伝達研修会，岩手，2018.7.31.
- 6) 藤井千代：ひきこもり・精神障害者等への地域支援の実態と国の動向について。尾道精神保健福祉関係者研修会，広島，2018.8.6.
- 7) 藤井千代：地方公共団体による精神障害者の退院後支援ガイドラインの概要と具体的な手順について。精神障害者の退院後支援に関する研修会，新潟，2018.9.4.
- 8) 藤井千代：地方公共団体による精神障害者の退院後支援ガイドラインの概要と進め方。石川県精神障害者の退院後支援事業における研修会，石川，2018.9.6.
- 9) 藤井千代：地方公共団体による精神障害者の退院後支援ガイドラインの概要。精神障害者の退院後支援に関する研修会，福井，2018.9.7.
- 10) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。多様な精神疾患等に対応できる医療連携構築支援研修会，東京，2018.11.15.
- 11) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。第43回全国精神保健福祉業務研修会 in 和歌山，和歌山，2019.1.26.
- 12) 藤井千代：退院後支援の計画作成と支援について。広島県ガイドライン研修，広島，2019.2.7.

- 13) 藤井千代：地方公共団体による精神障害者の退院後支援に関するガイドライン成立までの経緯とその目的。平成30年度第3回保健所精神保健福祉関係職員業務研修会，愛知，2019.2.15.
- 14) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。平成30年度第3回保健所精神保健福祉関係職員業務研修会，愛知，2019.2.15.
- 15) 藤井千代：精神障害者の退院後支援と地域包括ケアシステムの構築について。平成30年度精神障害者退院後支援に関する研修会，群馬，2019.2.23.
- 16) 菊池安希子：訪問におけるリスクマネジメント。地域精神科モデル医療研修シリーズ 第16回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2018.8.31.
- 17) 菊池安希子：リスクアセスメントの歴史。第2回地域におけるリスクアセスメント研修，東京，2018.9.1.
- 18) 菊池安希子：リスクアセスメント演習。第2回地域におけるリスクアセスメント研修，東京，2018.9.1.
- 19) 菊池安希子：リスクアセスメントの進め方。第2回地域におけるリスクアセスメント研修，東京，2018.9.1.
- 20) 堀越 勝，伊藤正哉，菊池安希子，片柳章子，今村扶美，中島聡美，森田展彰，高岸百合子，宮前光宏，蟹江絢子：認知処理療法。国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター主催認知行動療法研修，東京，2018.10.13.
- 21) 菊池安希子：医療観察におけるリスクアセスメント。第11回社会復帰調整官初任研修，東京，2018.11.1.
- 22) 菊池安希子：事例検討会スーパーバイザー。国立精神・神経医療研究センター病院医療連携福祉部 PORT 勉強会・事例検討会，東京，2019.2.4.
- 23) 菊池安希子：事例検討会スーパーバイザー。国立精神・神経医療研究センター病院医療連携福祉部 PORT 勉強会・事例検討会，東京，2019.3.4.
- 24) 河野稔明：医療観察法データベースシステム操作・データ修正の注意点。第8回医療観察法診療情報管理研修会，東京，2018.6.29.
- 25) 河野稔明，竹田康二，山田悠至，小池純子，藤井千代，平林直次：研究班報告—データベース事業（医療観察法重度精神疾患標準的治療法確立事業）概要および進捗状況説明。第14回医療観察法関連職種研修会，大阪，2018.9.29.
- 26) 山口創生：リカバリーを重視した支援とは。2018年度滋賀のみんなでつくる地域精神保健医療福祉チーム事業研修会，滋賀，2019.2.13.
- 27) 山口創生：IPSの哲学と現在地：原則の再確認とエビデンスの展開。2018年度特定非営利活動法人 コミュニット楽創職員研修，北海道，2018.9.29.
- 28) 山口創生：「正しい」ストレングスモデル入門。2018年度所沢アウトリーチチーム研修，埼玉，2018.11.15.
- 29) 山口創生：ピアスタッフとリカバリー志向型 SDM ツール「SHARE」による新しい共同意思決定システム。2018年度精神障がい者ピアスタッフスキルアップ研修会，福岡，2019.03.26.
- 30) 下平美智代：オープンダイアログ～開かれた対話がなげかけるもの。第1回北海道文教大学作業療法学科セミナー事業研修会，北海道，2018.11.10.
- 31) 西内絵里沙：訪問で活かせる認知行動療法①②。第9回 ACT 全国研修会浜田大会，島根，2018.11.24.
- 32) 小池純子：「地方公共団体による精神障害者の退院後支援ガイドライン」に沿った退院後支援研修会。島根，2018.11.20.
- 33) 小池純子：精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けて。平成30年度滋賀県のみんなでつくる地域精神保健医療福祉チーム事業研修会，滋賀，2019.2.13.
- 34) 松長麻美：ボンディング障害の症状構造。第5回周産期メンタルヘルスセミナー，東京，2018.11.11.

- 35) 松長麻美：希死念慮事例における対人関係理論. 北村メンタルヘルス学術振興財団研修会 周産期希死念慮と自傷行為：基礎と臨床，東京，2018.11.25.

F. その他

11. 自殺総合対策推進センター

I. センターの概要

平成 28 年 4 月 1 日に施行された改正自殺対策基本法の新しい理念と趣旨に基づき、学際的な観点から関係者が連携して自殺対策の PDCA サイクルに取り組むためのエビデンスの提供及び民間団体を含め地域の自殺対策を支援する機能を強化することを使命としている。

自殺総合対策推進センター (JSSC) は、センター長のもとに評議委員会が設置され、さらに自殺実態・統計分析室、地域連携推進室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、自殺総合対策研究室の 4 室を置いている。

センター長：本橋 豊，自殺実態・統計分析室長：金子善博，自殺総合対策研究室長：藤田幸司，室長（国際連携担当）：木津喜雅（10/1 から），研究員：越智真奈美（10/31 まで），森口 和，非常勤研究員：松永博子，田中元基，朴 恵善（4/16 から），中村 円（4/16 から），吉野さやか（10/1 から）
客員研究員：須賀万智，藤原佳典，藤原武男，井門正美，大塚耕太郎，尾崎健一，猪飼周平，センター研究補助員：堀口泰代，武内砂由美，青木みあ，大友眞弓，軽部結花，白水恵子，吉野さやか（6/1 から 9/30 まで），科研費研究補助員：木船妙子，科研費事務助手：土屋美保，岡田義子（12/1 から 2/28 まで）。

II. 研究活動

1) センター長統括

① 地域の実情に応じた自殺対策推進のための包括的支援モデルの構築と展開方策に関する研究(厚生労働科学研究：センター長が統括)

平成 28 年 4 月に試行された改正自殺対策基本法において、都道府県・市町村における自殺対策計画の策定が義務付けられ、計画に基づき地域自殺対策がすべての自治体において推進されることになった。都道府県・政令市に地域自殺対策推進センターが設置され、「生きることの包括的支援としての自殺対策」が推進される枠組みが整えられた。今後数年間の自殺対策の優先課題は、地域自殺対策計画に基づく地方自治体の自殺対策の推進を円滑かつ強力に支援することである。本研究の目的は、改正自殺対策基本法の趣旨を踏まえ、地域における自殺対策のための包括的支援モデルと展開方策を確立し、地域自殺対策の推進に必要な政策的・実務的支援の展開方策を社会実装させることであり、これにより厚生労働行政における自殺対策の施策展開に資することを目的とする。

② 革新的自殺研究推進プログラムの推進

改正自殺対策基本法の新しい理念と趣旨に基づき、政府が推進すべき自殺対策の指針として、新たな自殺総合対策大綱（平成 29 年 7 月 25 日閣議決定）が策定された。革新的自殺研究推進プログラムとは、新たな大綱に示された科学的根拠に基づいた自殺総合対策を強力に推進することを目的に、必要な研究のための環境の整備を総合的かつ効果的に行うためのプログラムである。自殺研究のイノベーションをはかるため、次の 3 領域を中心に進めている。

領域 1：社会経済的な要因に着目した研究

領域 2：行政施策の企画立案及び効率的な推進のための研究

領域 3：公衆衛生学的アプローチによる研究

平成 30 年度は次の 12 の研究課題が公募により採択され、精力的に研究が進められた。

- ・政治経済的要因に注目した日本における自殺対策と自殺率についての研究
（研究代表者：早稲田大学政治経済学術院准教授 上田路子）
- ・がん医療における自殺ならびに専門的・精神心理的ケアの実態把握
（研究代表者：国立研究開発法人国立がん研究センター支持療法開発部門長 内富庸介）
- ・高齢者ボランティアと協働するソーシャル・キャピタル強化による自殺対策の推進に向けた

研究

- (研究代表者：地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 藤原佳典)
- ・自殺予防に対して医療、保健、福祉、心理等の専門家をめざす学生が有すべき知識と技術向上のための教材開発に関する研究
(研究代表者：北里大学医学部公衆衛生学教授 堤 明純)
 - ・自殺対策と連動した死因究明と法医学研究—特に無理心中と子どもの死および遺族対応に焦点を当てて
(研究代表者：国立大学法人千葉大学大学院医学研究院法医学教室 岩瀬博太郎)
 - ・総合的自殺対策に資する公的マイクロデータの統合的探索的政策形成支援モデルの開発
(研究代表者：多摩大学経営情報学部准教授 久保田貴文)
 - ・インターネット・SNS等の仮想空間における若者の援助希求に関する意識と自殺対策の政策的方向性に関する研究
(研究代表者：公益財団法人中曽根康弘世界平和研究所研究本部主任研究員 高橋義明)
 - ・国際的視野から見た労働条件・働き方と自殺問題に関する研究
(研究代表者：産業医科大学医学部公衆衛生学教授 松田晋哉)
 - ・社会格差が自殺や精神的健康に及ぼす影響に関する社会疫学的影響評価研究
(研究代表者：国立研究開発法人国立長寿医療研究センター老年学評価研究部長 近藤克則)
 - ・子供の貧困と自殺対策に関する総合的研究
(研究代表者：国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授 藤原武男)
 - ・精神保健医療福祉サービスの連動性の向上と過労自殺防止対策に関する研究
(研究代表者：独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所過労死等防止調査研究センター長 伊藤弘人)
 - ・ICTを用いた自殺対策の新たな方向性の検討
(研究代表者：特定非営利活動法人OVA代表理事 伊藤次郎)

プログラムの運営については、ガバナリングボードによるプログラム推進の基本方針と運営方針の策定に基づき、プログラムディレクターが各課題の進捗状況を把握し、研究課題推進委員会による個別課題への助言を行う仕組みが構築され、運用が開始されている。

採択された研究課題は、いずれも自殺総合対策大綱で示された新たな自殺総合対策の方向性を踏まえた学際的・国際的な最新の研究であり、その成果をわが国の自殺総合対策の実務に迅速に還元することを目指す意欲的なものである。

これらの研究成果を官民学の自殺対策関係者と情報共有するため、市町村の自殺対策担当者および研究者に向けた「自殺対策推進レアル」※④を企画・開催した(2019年2月)。

③ 第3回国際自殺対策フォーラムの開催

2019年2月2日に第3回国際自殺対策フォーラムを開催した。本フォーラムでは、韓国の忠南自殺予防センター副所長の金渡潤先生による基調講演「韓国の地方(農村)における地域社会の自殺予防の最新動向」と併せ、シンポジウム「自殺対策の政策評価の基礎となるエビデンスの提供と活用」を行った。

金先生による基調講演は、韓国における先進的な自殺対策の取組は日本の自殺対策にとっても学ぶべき点が多く、また日本と韓国が最新の自殺対策の情報を共有することで、両国の自殺対策の更なる発展に寄与できると考えられるものとなった。

シンポジウムでは、革新的自殺研究推進プログラムの成果の一部が発表され、すべての基礎自治体による地域自殺対策計画の策定の後、次の課題となる自殺対策の政策評価の基礎となるエビデンスをいかに蓄積し、それら成果をどのように社会に還元していくべきか、その方策について討議を行った。

④ 平成 30 年度自殺対策推進レアールの開催

2019 年 2 月 14 日（木）に平成 30 年度自殺対策推進レアールを開催した。自殺対策推進レアールは、革新的自殺研究推進プログラムと厚生労働科学研究、これら二つの研究プロジェクトのフィールドで得られた成果物を、中央市場（Les Halles：レアール）に持ち寄って、その成果物を吟味し交換（情報共有）するため、平成 30 年度に第一回を開催した。このレアールの目的は、この場で共有された成果物を各自が自分のフィールドに持ち帰り、次のステップを更に進めていくこと、最終的には自殺対策の現場へ研究成果を還元することである。

⑤ WHO 協力センター（自殺対策・人材育成：JPN-92）としての活動

JSSC は 2015 年に WHO 協力センターとして承認され活動しているが、2019 年に承認期限が終了することから、再認証を得るための手続きを進めた。その結果、2019 年以降も再び WHO 協力センターとして承認され、活動を継続することとなった。

WHO 協力センターの活動として、2018 年 10 月、WHO 主催の会議“WHO mhGAP Forum 2018”（ジュネーブ市）に参加し、招待講演者として日本の国家自殺対策戦略について発表した。また 2018 年 11 月ベトナム・ホーチミン市で開催された WHO 西太平洋地域事務局主催の WHO 協力センター一会議に出席し、自殺総合対策推進センターの活動を紹介した。

その他の主な活動としては、WHO の公式文書“National Suicide Prevention Strategies”の本文作成のための資料提供を行い、日本の自殺対策戦略を国外に向けて広く発信することに貢献した。2019 年度には上記文書の日本語訳を行い、自殺総合対策研究第 2 巻第 2 号で公表予定である。

また、WHO が発行した Preventing suicide: a community engagement toolkit: (World Health Organization; 2018) を翻訳し、自治体・民間団体の自殺対策に関わる関係者への配布を目的に、「コミュニティが自殺対策に主体的に関与するための手引きとツール集」として発刊し、併せて JSSC のウェブサイトにも掲載した。

現在は WHO の公式文書“Preventing suicide :A resource for media professionals Update 2017”の日本語訳を行っており、2019 年度にはメディア関係者および行政担当者に公表する予定である。

⑥ 学会等での研究発表

2018 年 5 月“2018 IASP Asia Pacific Conference”（ニュージーランド、パイヒア市）にて、地域自殺対策政策パッケージ及び自死遺族支援対策に関する研究発表を行った。2018 年 7 月“European Congress of Epidemiology”（リヨン市）にて、SOS の出し方に関する教育の研究発表（本橋、越智）を行った。2018 年 9 月“2018 Annual Conference of Taiwanese Society of Suicidology”（台北市）において、本橋センター長が基調講演者として招聘され、日本の国家自殺対策戦略について発表した。また同月“the 4th ZERO Suicide Summit 2018”（ロッテルダム市）への参加、併せて“the 17th European Symposium on Suicide & Suicidal Behaviour”（ヘント市）に参加し、ESSSB17 においてはシンポジウムにて日本の国家自殺対策戦略について発表した（本橋）。

2018 年 10 月 24 日、第 77 回日本公衆衛生学会総会（福島 郡山市）にてシンポジウム「SNS 時代の若者に対する新たな自殺対策の構築～座間事件の再発防止を視野に入れて～」を開催した。SNS 空間における自殺念慮を有する若者の実情について明確化し、具体的な対策について発表・討議を行った。

⑦ 国外研究機関等への視察・調査および国外からの視察等の受け入れ

2018 年 3 月にフランス（パリ市）にて、全国自殺観察機構（Observatoire National du Suicide）の運営の実情、SOS Amitie のチャット相談事業の実情と課題、職場のモラルハラスメントに関する調査研究を行った。この訪問調査の成果は、2019 年 9 月発行の自殺総合対策研究第 2 巻第 2 号にて公表する予定である。

2018 年 7 月 26 日、韓国のチェジュ広域精神健康福祉センター、西帰浦(ソグィボ)市保健所の視察チームを受け入れ、本橋センター長による地域自殺対策計画の策定についての講義及び両国の自殺対策の動向についての意見交換を行った。

2018年8月21日、米国のThe National Institute of Mental Health (NIMH)の視察団を受け入れ、日本の国家自殺対策戦略について講義し、両国の自殺対策の動向について意見交換を行った。

2018年10月15日、ノルウェーの記者Ingrid Halvorsen氏の訪問を受け、日本の自殺対策の動向について取材を受けた。

2019年12月18日、本橋センター長が英国BBC記者Phoebe Keane氏による電話取材を受け、その内容はBBC World Service Radio programmeにて放送された。

2019年2月2日、本橋センター長がロイター通信の記者Elaine Lies氏の取材を受け、日本の自殺対策の現状と動向についての情報提供を行った。

2) 自殺実態・統計分析室の研究活動

自殺実態・統計分析室では、平成28年度から実施している地域の自殺実態プロファイルの研究、開発を引き続き行い、平成29年度に地域自殺実態プロファイルとして完成させた。これは、改正自殺対策基本法により国及び自殺総合対策推進センターに作成が求められているものであり、法改正により全国自治体に義務づけられた自殺対策計画の策定に際し、地域の自殺の実状を勘案する際の参考とされるものである。その目的は、地域の実態の分析及び地域特性（地域の課題）の効果的な把握であり、自治体における自殺の基本的分析、自殺の地域特性にあった政策形成、対策事業の企画及び評価に活用されることが期待されている。この中では、自殺統計、人口動態統計、国勢調査、経済センサスやその他の公的統計や官公庁の事業統計、民間団体の調査など新たな自殺対策に関連する各種の資料を包括的に活用することが求められている。このプロファイルは都道府県政令指定都市及び都道府県、市区町村に対する自殺対策のための包括的な情報提供として、国内全自治体（1741カ所）を対象として作成され、項目内容だけでなく効率的な作成配付方法についての研究開発も併せて行った。平成28年度中に自殺統計を中心とした第一版を作成し、自殺総合対策推進センターから、国内全自治体に対して配付した。

平成29年度にはこのプロファイルを基に、国内全自治体が策定する自殺対策計画の策定基盤として地域自殺対策政策パッケージを完成させ公表し、平成30年度にはこのプロファイルの更新版をリリースした。

3) 地域連携推進室の研究活動

都道府県及び政令指定都市に対して、地域自殺対策推進センター連絡会議の開催、メールや電話等を用いた相談により、自殺総合対策の推進並びに自殺対策計画の策定支援を行った。具体的には2018年6月21日、「第1回地域自殺対策推進センター等連絡会議」を開催し、全国の都道府県・市区町村自殺対策関係者を対象に、国の政策動向及び地域自殺対策計画策定支援における地域自殺対策推進センターの役割についての説明及び質疑を行った。

併せて、都道府県並びに市区町村の首長を対象とする都道府県自殺対策トップセミナー（平成30年度は5道県）や、地域自殺対策計画策定に関して指導（研修会講師の要請等）を求めてきた自治体に対し、講師を派遣した（札幌市、山形市、新潟市、岐阜市、高知市、山口市、長崎市）。

また、平成29年度に実施した「モデル市町村自殺対策計画策定事業」の成果を踏まえ、平成30年度は事業の事後追跡を行い、計画の進捗状況のチェックリストの作成を行った。

4) 自殺未遂者・遺族支援等推進室

平成29年度から継続して行っていた「自死遺族支援ガイドライン」の策定について、2018年11月、「自死遺族等を支えるために～総合的支援の手引」として編纂・発行し、すべての都道府県・市区町村の自死遺族支援に関わる関係者に配布した。

2019年1月12日、「自殺未遂者ケア研修（一般救急版）」を日本臨床救急医学会と共催で、また2019年1月27日、「自殺未遂者ケア研修（精神科救急版）」を日本精神科救急学会と共催で開催し

た。精神保健福祉分野の従事者を対象に、臨床現場で役立つ自殺未遂者ケアのポイントをガイドラインに沿って体系的に、またワークショップを通じ実践的に習得するための内容を企画、実施した。

5) 自殺総合対策研究室

革新的自殺研究推進プログラムの円滑な遂行のため、プログラムの推進体制の構築（研究課題推進委員会の設置、諸規定の再整備、ガバニングボードの選任、Program Director の選任、研究代表者会議の開催等）を行った※Ⅱ-②。2018年度の研究課題の公募・選考を2018年6月に実施し、12件の研究課題が採択された。この12研究課題に対し研究費を外部委託し、各機関において研究が開始された。革新的自殺研究推進プログラムの研究成果の一部は、2月2日開催の第3回国際自殺対策フォーラムのシンポジウム※Ⅱ-③、2月14日開催の平成30年度自殺対策推進レアル※Ⅱ-④にて公表した。

また、自殺実態・統計分析室にて実施した地域自殺実態プロファイルの研究・開発を基に、国内全自治体が策定する自殺対策計画の策定基盤として、平成29年度に地域自殺対策政策パッケージを開発し完成させた。平成30年度はその政策パッケージにおける自殺対策の事例をデータベース化し、ウェブサイトで公表した。これによりインターネット上にて全国自治体の自殺対策先進事例の検索が可能となった。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

本橋 豊は読売新聞の取材を受け、若年層の自殺対策の現状と課題とその対策についてコメントし、その内容は2018年6月6日、同誌朝刊に掲載された。

本橋 豊は韓国 MBC テレビの撮影取材を受け、「自殺対策 世界では」というテーマにてコメントし、その収録は2018年9月10日に放映された。

本橋 豊はNHK総合の撮影取材を受け、若者・子どもの自殺の現状とその対策についてコメントし、その収録は2018年11月4日のNHK総合「おはよう日本」にて放映された。

本橋 豊はNHKEテレ「ハートネットTV」シリーズ：平成がのこした“宿題”「第3回“自殺”～生き心地の良い社会を目指して～」に自殺対策に関わる専門家として出演、日本の自殺対策の現状とこれからの課題についてコメントをし、その収録は2018年12月5日に放映された。

朴 恵善は中央日報（韓国）の取材を受け、日韓における自殺対策の比較研究について情報提供を行い、その内容は2018年10月4日の同誌に掲載された。

2019年3月7日、山梨県議会議員連盟の訪問団を受け入れ、国の自殺対策の方向性及び自殺対策の現状と課題について情報提供を行い、意見交換を行った。

(2) 専門教育面における貢献

精神保健福祉分野の従事者を対象に、1月12日に自殺未遂者ケア研修（一般救急版）を、また1月27日に自殺未遂者ケア研修（精神科救急版）を開催した。※（4）

本橋 豊は、京都大学 inochi 学生プロジェクトによる企画「inochi 学生フォーラム2018」にてフォーラム参加者の大学生・高校生に対し、わが国における自殺の現状、現在の自殺対策及びその問題点について講演を行った。

本橋 豊は、広島大学医学部にて客員教授、東京大学大学院医学系研究科にて非常勤講師を務めた。金子善博は、東京医科歯科大学医学部、弘前大学医学部にて非常勤講師を務めた。

(3) 精研の研修の主催と協力

平成28年4月に改正自殺対策基本法の施行に伴い、自治体（都道府県及び市町村）に対して、自殺対策計画の策定が義務付けられたことにより、自殺対策の企画・運営に関わる自治体職員の自

自殺対策の企画・運営・推進能力の向上を目的に、各課題に合わせ、以下の研修会が実施された。

- ・2018年6月21日、「第1回地域自殺対策推進センター研修会」を実施し、上述の会議の参加者に対し、的確かつ円滑な自殺対策計画の策定推進のために必要な知識や技術を提供した。さらに、実際この研修会に参加できなかった地方公共団体関係者に対し、当日の研修会の様子をインターネット上で動画配信するとともにリアルタイムで質疑応答できるウェブ研修会を企画し、2018年9月18日、9月28日の2回に分け実施した。
- ・平成29年度に実施したモデル市町村自殺対策計画策定事業の成果を踏まえ、自治体の自殺対策関係者等を対象に2018年7月19日、「全国市区町村自殺対策計画策定研修会」を開催した。これから自殺対策計画を策定する市町村に対し、計画策定の過程やその要点を提供した。
- ・全国の都道府県・市町村自殺対策関係者等を対象に、「生きることの包括的支援研修」を、2018年9月27日（第1回）、11月15日（第2回）、12月13日（第3回）の計3回に分け実施した。第1回：子ども・若者の自殺対策、第2回：勤務経営問題・生活困窮者対策、第3回：自殺未遂者・自死遺族支援対策の各テーマを設け、専門家によるシンポジウム形式で実施され、地域自殺対策計画推進のための基盤的施策、重点的施策などに挙げられる領域別の対策や、事業推進のための具体的な技術支援を行った。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

本橋 豊は厚生労働省の「自殺対策推進事業評価委員会」の委員として、国の自殺対策推進事業の評価を行った。また、「若者に向けた効果的な自殺対策推進事業検討委員会」の委員（議長）として、またその中核的事業である「SNSを活用した相談に関する作業部会」の委員（議長）として、SNS相談事業のガイドライン作成を中心に、国における若年層に対する支援事業の取りまとめを行った。

本橋 豊は東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会の委員を務め、同研究所における社会科学系研究についての評価を行った。また、労働者健康安全機構の医学研究倫理審査委員会の委員を務め、同機構の研究開発計画に関する審査を行った。

金子善博は労働者健康福祉機構の平成30年度両立支援周知広報事業評価選定委員会の委員を務め、同機構の支援事業に関する評価を行った。

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

日本の自殺対策の最新動向を世界に発信する媒体として、国際学術雑誌“Suicide Policy Research”第1巻第2号を発刊、地域自殺対策計画策定ガイドラインの英訳及び韓国語訳を掲載し、国際的情報発信を強化した。

和文学術雑誌「自殺総合政策研究」第1巻1号（2018年9月）第1巻2号（2019年2月）を発刊し、日本語による学術情報発信を強化した。

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Motohashi Y, Kaneko Y, Fujita K: Suicide Countermeasures for Attempted Suicide Survivors, Based on the General Principles of Suicide Prevention Policy. Japan Support Center for Suicide Countermeasures 2(1): 1-7, 2018.
- 2) Sakisaka K, Fujita K, Kaneko Y, Motohashi Y: Trends of Suicide and Suicide Countermeasures in Cambodia. Japan Support Center for Suicide Countermeasures 2(1): 8-15, 2018.

- 3) Sakisaka K, Fujita K, Kaneko Y, Motohashi Y: Local Suicide Countermeasure Policy Packages. Japan Support Center for Suicide Countermeasures 2(1): 16-36, 2018.
- 4) 本橋 豊: 自殺総合対策大綱 5 年ぶりの見直しとその意義. 日本精神科病院協会雑誌 37(6) : 5-11, 2018.
- 5) Yong Kim, Fong Roseline, 豊島雄人, 藤田幸司, 佐々久長: ひきこもりと生活習慣、心理社会的要因およびソーシャル・キャピタルとの関連. 秋田県公衆衛生学雑誌 14(5): 22-28, 2018.
- 6) 藤田幸司, 金子善博, 松永博子, 崎坂香屋子, 本橋 豊: カンボジアにおける自殺の状況と自殺対策. 自殺総合政策研究 1(1) : 104-112, 2018.

(2) 総説

- 1) Sakisaka K, Fujita K, Kaneko Y, Motohashi Y: Guidelines for Municipal Suicide Countermeasure Planning. Japan Support Center for Suicide Countermeasures 2(1): 37-65, 2018.
- 2) 本橋 豊, 金子善博, 木津喜雅, 藤田幸司, 青木みあ, 堀口泰代, 吉野さやか: コミュニティー・エンゲージメントは自殺対策とどのように関わるのか. 自殺総合政策研究 1(2) : 1-8, 2019.
- 3) 金子善博, 藤田幸司: 「地域自殺実態プロファイル」と「地域自殺対策パッケージ」. 法律のひろば 71(6) : 14-21, 2018.
- 4) 金子善博, 木津喜雅, 藤田幸司, 本橋 豊: 自殺総合対策と心理社会的支援. 精神保健研究 65 : 11-15, 2018.
- 5) 本橋 豊: 自殺総合対策大綱のポイント. 地域保健(5) : 8-13, 2018.
- 6) 本橋 豊: 今後に向けた自殺総合対策の取組. 法律のひろば 71(6) : 36-43, 2018.
- 7) 本橋 豊: 困難を抱えていても人々が暮らしやすい、生き心地のいい社会に. 月刊ガバナンス 208(8) : 1-4, 2018.
- 8) 本橋 豊: 自殺総合対策推進センターの国際的な役割と取り組み. 公衆衛生 82(9) : 704-707, 2018.
- 9) 本橋 豊, 金子善博, 藤田幸司, 松永博子, 崎坂香屋子: 自死遺族等を支えるために～総合的支援の手引. 自殺総合対策推進センター : 1-37, 2018.
- 10) 金子善博, 井門正美, 馬場優子, 本橋 豊: 児童生徒の SOS の出し方に関する教育—全国展開に向けての 3 つの実践モデル. 自殺総合対策推進センター1(1) : 1-47, 2018.

(3) 著書

- 1) 本橋 豊, 金子善博, 森口 和, 越智真奈美: 自殺対策計画策定ハンドブック. 株式会社ぎょうせい, 東京, pp1-291, 2018.
- 2) 本橋 豊, 他: 新たな自殺総合対策大綱と自殺対策の方向性について. 精神保健医療福祉白書 2017, 中央法規出版, pp35-35, 2018.

(4) 研究報告書

- 1) 藤田幸司: 平成 29 年度由利本荘市 生活と心の健康づくりに関する調査報告書. 自殺総合対策推進センター, pp1-196, 2019.
- 2) 朴 恵善, 藤田幸司, 金子善博, 本橋 豊: 韓国の「自殺予防の国家行動計画」について—国家行動計画策定の背景. 自殺総合政策研究 1(1), p6, 2018.
- 3) 木津喜雅: 第 10 回 WHO Mental Health Gap Action Programme (mhGAP) Forum 参加報告. 自殺総合政策研究 1(2), pp9-11, 2019.
- 4) 本橋 豊, 金子善博, 田中元基, 吉野さやか: 学校の場における自殺対策教育のエビデンス—海外のプログラミングと SOS の出し方に関する教育の比較—. 平成 30 年度自殺対策推進レアー

ル, 東京, pp43-44, 2019.

- 5) 吉野さやか: 公衆衛生学からみた若者の自殺対策の現状について. 自殺総合政策研究 1(2), pp14-15, 2019.
- 6) 藤田幸司: 自死遺族支援ガイドラインの経緯と解説. 自殺総合政策研究 1(2), pp16-17, 2019.

(5) 翻訳

- 1) 本橋 豊, 木津喜雅, 青木みあ: コミュニティーが自殺対策に主体的に関与するための手引きとツール集. 自殺総合対策推進センター, 東京, 2019. (Preventing suicide:a community engagement toolkit. World Health Organization, 2018)
- 2) 本橋 豊, 朴 恵善: 시정촌 자살대책계획 수립 지침서 ~ 누구도 자살로 내몰리지 않는 사회 실현을 목표로 ~. Japan Support Center for Suicide Countermeasures 2(1), pp66-96, 2018. (Korean translation of Guidelines Municipal Suicide Countermeasure Planning)

(6) その他

- 1) 本橋 豊: 子どもの自殺の実態と予防. 月刊 BAN (12), 株式会社教育システム, pp12-17, 2018.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Motohashi Y, Ochi M, Kaneko Y: The association between Japanese student's help-seeking behavior and their reliable adults. European Congress of Epidemiology 2018, Lyon, 2018.7.4-6.
- 2) Motohashi Y: Keynote Speech “Global Perspectives: The New Development in Suicide Prevention. 2018 Annual Conference of Taiwanese Society of Suicidology, Taipei, 2018.9.9-10.
- 3) 本橋 豊: 地域社会自殺予防の統合と新しい始まり. 韓・日自殺予防フォーラム, 羅州, 2018.10.5.
- 4) 金子善博: 日本の自治体の自殺対策計画の策定. 東大門区精神健康福祉センター開所 10 周年記念「韓日地域社会自殺予防シンポジウム」, ソウル, 2019.3.20.
- 5) 藤田幸司:【司会】自主企画フォーラム 高齢者の自殺を防ぐために、地域社会で何ができるか. 日本老年社会学会第 60 回大会, 東京, 2018.06.10.
- 6) 金子善博: 若者の自殺の現状と国の対策の方向性. 第 66 回精神保健福祉全国大会シンポジウム, 山形, 2018.10.19.
- 7) 本橋 豊: SNS 時代の若者に対する新たな自殺対策の構築～座間事件の再発防止を視野に入れて～. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24.
- 8) 松永博子: SNS を活用した自殺願望を有する若者への自殺対策～国の取組～. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24.
- 9) 本橋 豊: 国の自殺対策の現状と問題点～若者の自殺対策を中心に～. 京都大学 inochi 学生フォーラム, 京都, 2018.7.22.
- 10) 本橋 豊: Community Engagement と自殺対策. 第 3 回国際自殺フォーラム, 東京, 2019.2.2.
- 11) 金子善博: 地域自殺実態プロファイルと地域自殺対策政策パッケージの実用化について. 第 3 回国際自殺フォーラム, 東京, 2019.2.2.
- 12) 藤田幸司: 自死遺族等支援の情報提供体制整備・地域格差解消. 第 3 回国際自殺フォーラム, 東京, 2019.2.2.
- 13) 木津喜雅: Climate Change and Health. 東京医科歯科大学 Fundamentals of Global Health コース特別講義, 東京医科歯科大学, 東京, 2018.10.18

- 14) 金子善博: 自殺対策. 東京医科歯科大学医学部医学科講義, 東京医科歯科大学, 東京, 2018.5.8.
 15) 金子善博: 地域で取り組む自殺対策. 弘前大学医学部医学科講義, 弘前大学, 青森, 2018.6.8.

(2) 一般演題

- 1) Fujita K, Roseline Yong, Hisanaga Sasaki, Matsunaga H, Kaneko Y, Motohashi Y: Effects of Social Isolation Psychological Distress among community-Dwelling Elderly Adults: Cohort Study. IASP 8th Asia Pacific Regional Conference on Suicide Prevention, Bay of Islands, New Zealand, 2018.5.3.
- 2) Matsunaga H, Fujita K, Kaneko Y, Motohashi Y: The Utilization of Profiles of Actual Local Suicide Conditions and Policy Packages for Local Suicide Countermeasures. IASP 8th Asia Pacific Regional Conference on Suicide Prevention, Bay of Islands, New Zealand, 2018.5.3.
- 3) 木津喜雅, 藤原武男: 幼少期の逆境体験と職場の部下へのパワハラに関するインターネット調査. 福井, 2018.10.24-26.
- 4) 藤田幸司, 松永博子, 金子善博, 本橋 豊: 地域自殺対策政策パッケージにおける高齢者の自殺対策. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018.6.10.
- 5) 松永博子, 藤田幸司, 佐々木久長, 本橋 豊: 地域高齢者の被援助志向性と心のストレス、自己効力感との関連. 第13回日本応用老年学会大会, 東京, 2018.10.20-21.
- 6) 藤田幸司, 松永博子, 佐々木久長, 播摩優子, 金子善博, 本橋 豊: 社会参加をしていない高齢者の特徴とその関連要因 高齢者の包括的自殺対策に向けて. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 7) 松永博子, 藤田幸司, 渡邊 香, 金子善博, 本橋 豊: ベトナムにおける自殺対策の現状. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 8) 朴恵善, 藤田幸司, 金子義博, 本橋 豊: 韓国における自殺対策の現状と課題に関する研究. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 9) 金子善博, 藤田幸司, 松永博子, 越智真奈美, 本橋 豊: 地域自殺対策計画策定におけるモデル市町村計画策定事業の推進について. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 10) 播摩優子, 萩原智代, 佐々木久長, 藤田幸司, 松永博子, 金子善博, 本橋 豊: 地域住民の希死念慮と生活支援、就労支援窓口及び生活困窮者支援制度の周知との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 11) 山崎幸子, 藺牟田洋美, 藤田幸司: 閉じこもり高齢者の外出阻害要因 外出に対する心理的バリアの抽出. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.
- 12) 藺牟田洋美, 山崎幸子, 藤田幸司: 閉じこもり高齢者の外出阻害要因 秋田 A 町の社会環境阻害要因の解明と支援. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24-26.

(3) 研究報告会

- 1) 本橋 豊: 自殺対策に資する教育の推進について～SOS の出し方に教育に関する教育の推進～. 自殺予防教育連絡会, 東京, 2018.5.21.

(4) その他

C. 講演

- 1) 本橋 豊: 自殺対策の最新動向ー心理相談員の役割ー. 関東心理相談員大会, 東京, 2018.5.19.
- 2) 本橋 豊: 自治体における自殺対策推進計画の策定と実地方策. 長崎県自殺対策地域関係者研修会, 長崎, 2018.7.13.
- 3) 本橋 豊: 自殺対策推進計画策定に向けた進め方. 地域自殺対策関連研修会, 愛媛, 2018.5.23.

- 4) 本橋 豊：自殺総合対策大綱といのちの電話。第 35 回いのちの電話相談員全国研修会にいがた大会，新潟，2018.12.10.
- 5) 本橋 豊：児童生徒の SOS の出し方に関する教育の進め方。平成 30 年度自殺対策研修会，山形，2018.12.10.
- 6) 本橋 豊：児童生徒の SOS の出し方に関する教育の進め方。教員向けゲートキーパー研修，東京，2018.11.16.
- 7) 本橋 豊：児童生徒の SOS の出し方に関する教育の進め方。第 3 回いじめ対策等検討会議，新潟，2019.2.25.
- 8) 本橋 豊，金子義博：北海道自殺対策トップセミナー。北海道，2018.6.6.
- 9) 本橋 豊，金子義博：和歌山県自殺対策トップセミナー。和歌山，2018.7.9.
- 10) 本橋 豊，金子義博：沖縄県自殺対策トップセミナー。沖縄，2018.7.25.
- 11) 本橋 豊，金子義博：京都府自殺対策トップセミナー。京都，2018.8.3.
- 12) 本橋 豊，金子義博：奈良県自殺対策トップセミナー。奈良，2018.9.14.
- 13) 藤田幸司：自殺の現状や自殺対策の基礎知識、自殺対策の取組みについてなどの自殺対策に関して：職場におけるメンタルヘルスやゲートキーパーについて。帯広市自殺予防対策管理職研修会，北海道，2018.2.23.
- 14) 藤田幸司：ゲートキーパー養成講座講師。帯広市自殺対策ゲートキーパー養成講座，北海道，2018.2.24.
- 15) 藤田幸司：児童・生徒の SOS の出し方に関する教育～信頼できる大人の気づきにつなげるために～。福岡県教育委員会 平成 30 年度県立学校等生徒指導主事研修会（第 1 回），福岡，2018.7.9.
- 16) 藤田幸司：地域の実情に応じた市町自殺対策計画の策定に向けて～計画策定ガイドライン、自殺実態プロファイル、政策パッケージの活用方法等について。山口県精神保健福祉センター 平成 30 年度自殺対策行政担当職員研修，山口，2018.10.4.
- 17) 藤田幸司：みんなで支える心の健康づくりー誰も自殺に追い込まれることのないまちの実現に向けてー。平成 30 年度八峰町心といのちを考えるフォーラム，秋田，2018.10.20.
- 18) 藤田幸司：市町村自殺対策計画策定のポイント～棚卸し事業の計画への組み込み方と評価指標の設定～。平成 30 年度第 2 回市町村自殺対策主管課長及び担当者会議・研修会，福島，2018.11.22.
- 19) 藤田幸司：マルチレベル分析、交互作用について。東京福祉大学社会福祉学専攻社会福祉調査統計特論講義，東京，2018.12.21.
- 20) 金子善博：地域自殺対策計画策定について～地域自殺対策パッケージ及び地域自殺実態プロファイルの活用を踏まえて～。平成 30 年度市町自殺対策計画策定研修，三重，2018.5.11.
- 21) 金子善博：地域自殺対策計画策定及び地域自殺実態プロファイルの活用について。平成 30 年度第 1 回山梨県自殺対策企画研修，山梨，2018.5.14.
- 22) 金子善博：市町村自殺対策計画の策定について。市町自殺対策計画策定に係る研修会，静岡，2018.5.31.
- 23) 金子善博：地域自殺対策計画の策定プロセスについて～「地域自殺実態プロファイル」の活用を含む～。市町村自殺対策計画策定支援研修会，山形，2018.6.28.
- 24) 金子善博：市町村自死対策計画策定のポイント。市町村自死対策計画策定研修，島根，2018.7.31.
- 25) 金子善博：市町村自殺対策策定の進め方～モデル市町村の事例を通して～/市町村自殺対策施策の好事例について。平成 30 年度自殺対策研修会，福岡，2018.8.6.
- 26) 金子善博：子どもの SOS の出し方に関する教育の進め方/子どもの SOS の出し方に関する教育 実践事例の紹介。自殺対策関係者研修会，鹿児島，2018.12.27.
- 27) 金子善博：市町村自殺対策計画の評価について。第 2 回市町村自殺対策計画策定支援研修会，茨城，2019.1.29.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Motohashi Y.: Suicide Policy Research, Editor-in-chief.
- 2) 本橋 豊: 自殺総合対策研究, 編集委員長.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第 1 回生きることの包括的支援研修「子ども・若者対策」. 東京, 2018.9.27.
- 2) 第 2 回生きることの包括的支援研修「生活困窮者自立支援／勤務・経営対策」. 東京, 2018.11.15.
- 3) 第 3 回生きることの包括的支援研修「自殺未遂者支援／自死遺族等支援」. 東京, 2018.12.13.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 本橋 豊:【インタビュー掲載】論点スペシャル 若者の自殺対策 孤立しない居場所をつくろう. 読売新聞, 2018.6.6.
- 2) 本橋 豊:【インタビュー掲載】ウェブマガジン教育オピニオン「SOS の出し方に関する教育に潰え、担任教師が知っておきたいこと」. 中央図書出版, 2018.9.1.
- 3) 本橋 豊:【インタビュー掲載】子どもの自殺 なぜ彼らは「死」を選んだのか「9月1日の自殺問題」を回避した子どもの“その後”. リディラバジャーナル, 2018.9.7.
- 4) 本橋 豊:【インタビュー放映】おはよう日本. NHK 総合, 2018.11.4.
- 5) 本橋 豊:【テレビ出演】平成がのこした“宿題”「第 3 回“自殺”～生き心地の良い社会を目指して～」. NHKE テレハートネット TV, 2018.12.5.
- 6) 本橋 豊:【インタビュー放映】自殺防止対策、世界では. 韓国 MBC テレビ, 2018.9.10.

12. ストレス・災害時こころの情報支援センター

I. 研究部の概要

災害時こころの情報支援センターは、平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置された。

当センターの活動は、主に以下の 4 つである。

(1) 災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援、情報発信・連携

東日本大震災等の支援内容に関するデータの収集や、大規模事故、犯罪被害等が生じた際の精神保健医療活動の事例収集を災害精神保健医療情報システム (DMHISS) を通じて行い、収集した活動データの調査・分析、エビデンス蓄積、ガイドライン作成を行う職員を配置し、当該情報を地方自治体・関係機関に提供・発信することにより、今後新たに発生する災害時の対応力を強化した。

(2) 福島県避難者に対する相談事例の集約とフィードバック

①被災 3 県の心のケアセンターや精神保健福祉センター、民間団体等による福島県避難者の相談情報を集約し効果的に活用するため、センターにおいてデータ分析を行った。

②当該データ分析結果の発信を行うとともに、データ分析のエビデンスに基づいて、心のケア支援に当たる者や精神保健福祉センター職員および地方自治体職員等を対象とした専門的な研修として「災害に係る心のケア支援研修」を実施した。

平成 30 年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長 (併任) : 金 吉晴, 併任研究員 : 関口 敦, 高橋秀俊, 篠崎康子, 客員研究員 : 宮本有紀, 種市康太郎, 前田正治, 高橋 晶, 秋山 剛, 笠井清登, 富田博秋。

Ⅱ. 研究活動

- 1) 平成 23 年東日本大震災等被災者への支援内容に関するデータの収集・分析及び技術的指導・助言
- 2) 3 県心のケアセンター活動報告集計
- 3) WHO 版の心理的応急処置 (PFA) の普及活動とアジアへの e-learning 普及研究
- 4) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
- 5) 災害時精神保健医療対応に係るガイドライン作成

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下を通じて研究成果の社会還元を行った。

- 1) 金 吉晴 : 東京読売新聞 夕刊 11 面「震災 8 年 心の相談 なお 2 万件 ケア 6 年「救われた」 20 代男性」2019.3.9.
- 2) 金 吉晴 : 朝日新聞 朝刊 2 面「(東日本大震災 8 年) 中高年男性, 独居の壁 復興住宅で 60 歳孤独死「名前すら知らず」」2019.3.12.
- 3) 篠崎康子 : 練馬区精神保健講演会「災害時のメンタルヘルス」2018.8.7.

(2) 専門教育面における貢献

- 1) 平成 30 年度「こころの健康づくり対策事業」補助金による PTSD 対策専門研修事業
災害・事故・犯罪・児童虐待などのトラウマ的体験をされた方々に対して、基本的な精神保健医療対応 (こころのケア) を提供する人材を確保するため、精神保健医療福祉業務従事

者等に対し、下記 3 コースを実施した。

・心理的トラウマに関する理解を深め、初期対応、PTSD 等の治療の知識を得、基本的対応スキルを習得する通常コース (209 名受講)

A. 通常コース 1 平成 31 年 1 月 18 日 (金)

A. 通常コース 2 平成 31 年 1 月 30 日 (水)

・認知行動療法 (持続エクスポージャー療法) による実際の治療事例を呈示し、患者の回復の可能性と経路を学習し、そうした回復に向けての治療と支援のあり方についてのグループディスカッションを通じて、高度な専門支援のあり方を学ぶ専門コース (125 名受講)

B. 専門コース 1 平成 31 年 2 月 5 日 (火) ~6 日 (水)

B. 専門コース 2 平成 31 年 2 月 19 日 (火) ~20 日 (水)

・犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する犯罪・性犯罪被害者コース (66 名受講)

C. 犯罪・性犯罪被害者コース 平成 30 年 12 月 26 日 (水)

- 2) 当センターの HP で、専門家向けに e-learning を用いた災害時の精神保健医療に関する教育プログラムを実施した。
- 3) WHO 版 PFA を日本に導入し、WHO との研究協力書の下で PFA 指導者研修、一般研修を継続した。
- 4) PFA の e-learning を作成し、マレーシア、フィリピン、タイへの普及研究を進めた。
- 5) オーストラリア国立 PTSD センターと共同で災害後の心理的リカバリースキルの研究に着手し、資料の翻訳を行った。
- 6) 各種学術団体で、心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- 7) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。
- 8) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

金 吉晴：ふくしま心のケアセンター 顧問

金 吉晴：みやぎ心のケアセンター 顧問

金 吉晴：被災 3 県心のケア総合支援調査研究等事業 実施委員会 委員

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

(2) 総説

- 1) 金 吉晴：特集 複雑性 PTSD の理論と治療 特集にあたって、トラウマティック・ストレス 16(1)：25, 2018.
- 2) 金 吉晴，中山未知，丹羽まどか，大滝涼子：複雑性 PTSD の診断と治療。トラウマティック・ストレス 16(1)：27-35, 2018.
- 3) 金 吉晴：災害への備え・災害対策。日本精神科病院協会雑誌 37(11)：4-9, 2018.
- 4) 金 吉晴：災害と精神医療。精神医学 60(12)：1375-1383, 2018.

- 5) 金吉晴, 篠崎康子, 大沼麻実, 島津恵子, 大滝涼子: 災害時の社会心理支援. 精神保健研究 (65): 51-55, 2019.
 - 6) 丹羽まどか, 加茂登志子, 金吉晴: 性的虐待による複雑性 PTSD 患者に対する STAIR/NST. トラウマティック・ストレス 16(1): 45-53, 2018.
- (3) 著書
- (4) 研究報告書
- 1) 金吉晴: こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総括・分担研究報告書, 平成 30 年度総括研究報告書. pp1-4, 2019.
 - 2) 金吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子: 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp5-134, 2019.
 - 3) 金吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子: 地域精神保健相談研修. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp155-286, 2019.
 - 4) 金吉晴: こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 総合研究報告書, 平成 28 年度～30 年度総合研究報告書. pp1-2, 2019.
 - 5) 金吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子: 精神保健相談支援ツール作成のための精神保健相談業務全国調査に関する研究. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp3-178, 2019.
 - 6) 金吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子: 地域精神保健相談研修. 平成 28 年度～30 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金吉晴)」, 平成 28 年度～30 年度分担研究総合報告書. pp203-334, 2019.
 - 7) 金吉晴: 災害時のこころの支援に関する実務保健師の役割と求める能力, 知識・技術・態度の検討—SOLAR プログラム (Skills for Life Adjustment and Resilience Program 生活への適応と回復スキルのためのプログラム)に関する研究—. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者: 宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp21-29, 2019.
 - 8) 宮崎美砂子, 奥田博子, 春山早苗, 石川麻衣, 金谷泰宏, 金吉晴, 植村直子: 実務保健師に求められる災害時の役割とコンピテンシー, その遂行に求められる知識・技術・態度—デルファイ法による災害対応経験のある自治体実務保健師等への意見調査. 平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証 (研究代表者: 宮崎美砂子)」, 平成 30 年度分担研究報告書. pp67-103, 2019.
- (5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health/Well-being & Resilience after Disasters. GACD (Global alliance for Chronic Diseases) Implementation Science Workshop, Tokyo, 2018.7.5-6.
- 2) Kim Y: Department of mental health, ministry of public health. 17th Annual International Mental Health Conference & 15th Annual Child Mental Health and Psychiatry Conference “Mental Health in the Workplace”, Bangkok, 2018.8.1-3.
- 3) Kim Y: PTSD Disasters in Japan. The 18th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Seoul, 2018.8.24.
- 4) Kim Y: PTSD Treatment and Fear Memory Extinction. The 18th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Seoul, 2018.8.24.
- 5) Kim Y: The national scaling of mental health response capacity throughout Japan. The 14th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine, Kobe, 2018.10.16-17.
- 6) Kim Y: Expert roundtable on strategic and structured development of scientific evidence through collaboration among Asian and global researchers. The 14th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine, Kobe, 2018.10.16-17.
- 7) 金 吉晴: 東日本大震災後 7 年間の心のケアの実践と今後に向けて. 平成 30 年度みやぎ心のケアフォーラム, 宮城, 2018.10.26.

(2) 一般演題

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies 委員
- 3) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 4) 金 吉晴: 自殺予防学会 理事
- 5) 金 吉晴: 日本不安症学会 理事
- 6) 関口 敦: 日本心身医学会 幹事

(3) 座長

- 1) 金 吉晴, 加藤知子: シンポジウム A-1 複雑性 PTSD の概念と治療. 第 17 回日本トラウマティック・ストレス学会, 大分, 2018.6.9-10.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board member
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board member
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金吉晴: 災害後の心理的回復ワークショップ. 宮城, 2018.5.8.
- 2) 金吉晴: 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 1 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.5.23-24.
- 3) 金吉晴: 平成 30 年度精神保健に関する技術研修. 第 2 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.11.28-29.
- 4) 金吉晴: 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 C. 犯罪・性犯罪被害者コース. 東京, 2018.12.26
- 5) 金吉晴: 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1. 東京, 2019.1.18.
- 6) 金吉晴: 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2. 東京, 2019.1.30.
- 7) 金吉晴: 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 1. 東京, 2019.2.5-6.
- 8) 金吉晴: 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2. 東京, 2019.2.19-20.

(2) 研修会講師

- 1) Kim Y: Japanese Experience of Disaster Mental Health Care. Educational lecture and group discussion, Tokyo, 2018.5.30.
- 2) 金吉晴: 災害時のこころのケア-総論. 平成 30 年度精神保健に関する技術研修 第 1 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.5.23-24.
- 3) 金吉晴: 災害時のこころのケア-心理的リカバリーについて. 平成 30 年度精神保健に関する技術研修 第 1 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.5.23-24.
- 4) 金吉晴: 災害時における遺族の心のケア～中長期の回復を支えるために～. 遺族のこころのケアに関する研修会, 広島, 2018.11.22.
- 5) 金吉晴: 災害時のこころのケア-総論. 平成 30 年度精神保健に関する技術研修 第 2 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.11.28-29.
- 6) 金吉晴: 災害時のこころのケア-心理的リカバリーについて. 平成 30 年度精神保健に関する技術研修 第 2 回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2018.11.28-29.
- 7) 金吉晴: トラウマと PTSD 総論. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1, 東京, 2019.1.18.
- 8) 金吉晴: PTSD の生物学的基盤. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1, 東京, 2019.1.18.
- 9) 金吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカルファーストエイド) 概論. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1, 東京, 2019.1.18.
- 10) 金吉晴: トラウマと PTSD 総論. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2, 東京, 2019.1.30.
- 11) 金吉晴: PTSD の生物学的基盤. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2, 東京, 2019.1.30.
- 12) 金吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカルファーストエイド) 概論. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2, 東京, 2019.1.30.
- 13) 金吉晴: PTSD の診断と評価. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 1, 東京,

2019.2.5-6.

- 14) 金 吉晴：PTSD の心理療法. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.5-6.
- 15) 金 吉晴：PTSD の心理療法. グループワークによる研修 症例 1~4, 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.5-6.
- 16) 金 吉晴：PTSD の診断と評価. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.19-20.
- 17) 金 吉晴：PTSD の心理療法. 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.19-20.
- 18) 金 吉晴：PTSD の心理療法. グループワークによる研修 症例 1~4, 平成 30 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1, 東京, 2019.2.19-20.

F. その他

Ⅲ. 研 修 実 績

平成 30 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 30 年度には、災害時 PFA と心理対応研修 (2 回)、精神保健指導課程研修 (2 回)、発達障害支援医学研修 (2 回)、発達障害地域包括支援研修：早期支援、摂食障害治療研修、精神障害者地域包括支援研修、多職種による包括型アウトリーチ研修、医療における個別就労支援研修、地域におけるリスクアセスメント研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療、摂食障害看護研修、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修の計 17 回の研修を合計 765 名に対して実施した。

《災害時 PFA と心理対応研修》

平成 30 年 5 月 23 日から 5 月 24 日まで、第 1 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等 30 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴

5 月 2 3 日 (水)

PFA の定義と枠組み

PFA の活動原則(1)

PFA の活動原則(2)

大沼 麻実・大滝 涼子・東海林 渉

PFA ロールプレイ

セルフケアとチームのケア

5 月 2 4 日 (木)

災害時のこころのケア-総論

金 吉晴

子どものトラウマ

笠原 麻里

海外での経験 被災者への心理的対応で重要なこと

篠崎 康子

リラクゼーション実習

大沼 麻実

災害時のこころのケア-心理的リカバリーについて

金 吉晴

講師名簿

金 吉晴 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長

篠崎 康子 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

大沼 麻実 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員

大滝 涼子 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部流動研究員

東海林 渉 東北大学大学院医学系研究科予防精神医学寄附講座准教授

笠原 麻里 駒木野病院児童精神科診療部長

《精神保健指導課程研修》

平成 30 年 7 月 2 日、第 55 回精神保健指導課程研修《前期》を実施し、「新精神保健福祉資料の見方と使い方を中心に地域における課題と施策の立て方を習得する、平成 30 年度の 630 調査の留意点」を主題に、都道府県で精神疾患の医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画を企画立案する担当部署職員、政令市、中核市、精神保健福祉センター、保健所等で、同様の職務を行う職員 65 名に対して研修を行った。

課程主任 山之内 芳雄

7月2日(月)

新精神保健福祉資料の見方と使い方

山之内 芳雄
澤田 智彦
萱間 真美

NDB(ナショナルデータベース)について

山之内 芳雄

平成 30 年度の 630 調査の留意点

山之内 芳雄
臼杵 理人
臼田 謙太郎
古野 考志

地域における課題と施策の立て方

山之内 芳雄

ファシリテーター : 精神医療政策研究部スタッフ

講師名簿

山之内 芳雄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部部長
臼杵 理人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部室長
臼田 謙太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部科研費研究員
古野 考志	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部外来研究員
萱間 真美	聖路加国際大学大学院看護学研究科教授
澤田 智彦	日本アイ・ビー・エム

《発達障害支援医学研修》

平成30年7月4日から7月5まで、第25回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者53名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

7月4日(水)

発達障害支援施策について	加藤 永歳
頭在化しにくい発達障害：早期抽出可能なアセスメントツールの紹介	稲垣 真澄
発達障害児を持つ保護者へ伝えたいこと	林 隆
発達障害者の就労支援の新しいカタチ：農福連携から農福商工連携へ	濱田 健司
京都府発達障害者支援センターはばたきの目指すもの	長谷川 福美

7月5日(木)

頭在化しにくい発達障害：学習障害の診断と治療	小枝 達也
頭在化しにくい発達障害：吃音の診断と治療	菊池 良和
医療的ケアを必要とする子どもや大人への支援：鳥取大学の取り組み	前垣 義弘
ワークショップ：ADHD/発達障害児のストレングスをみたててポジティブな支援をめざす	井上 祐紀

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
林 隆	医療法人テレサ会西川医院発達診療部部長
濱田 健司	全国農福連携推進協議会会長
長谷川 福美	京都府発達障害者支援センターはばたきセンター長
小枝 達也	国立成育医療研究センターこころの診療部部長
菊池 良和	九州大学大学院医学系学府耳鼻咽喉科助教
前垣 義弘	鳥取大学医学部脳神経小児科教授
井上 祐紀	横浜市南部地域療育センター所長

《発達障害地域包括支援研修：早期支援》

平成30年7月25日から7月26日まで、第13回発達障害地域包括支援研修：早期支援を実施し、「地域における早期の自閉症発見とその後の発達支援のシステムのあり方について講義やワークショップを通して、派遣元の地域で実際にスムーズに運用するための課題とその克服のための方法を見つけていただき、研修後の体制整備に活用していただくこと」を主題に、各自治体において、行政的な立場で研修の実施に携わる者、医療、保健、福祉、教育等の分野で支援に携わっており、研修講師となりうる者53名に対して研修を行った。

課程主任 住吉 太幹 課程副主任 高橋 秀俊

7月25日(水)

発達障害者支援施策について	加藤 永歳
発達障害のある児の早期発見と早期支援の意義	神尾 陽子
地域特性における発達支援のあり方	高橋 脩

7月26日(木)

自閉症スペクトラムの早期徴候のアセスメント	原口 英之
鹿児島県の地域支援体制づくり～紹介票による診断前療育の整備と 自立支援協議会を活用した地域作り～	外岡 資朗
発達障害のある児の親支援と早期支援	井上 雅彦
ワークショップ：地域発達支援の行動計画立案	加藤 永歳

講師名簿

住吉 太幹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
神尾 陽子	お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所人間発達基礎研究部門客員研究員 国立精神・神経医療研究センター児童・予防精神医学研究部客員研究員
高橋 脩	豊田市福祉事業団理事長
原口 英之	筑波大学 心理・障害相談室非常勤相談員 国立精神・神経医療研究センター究精神保健研究所児童・予防精神医学研究部研究生
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
井上 雅彦	鳥取大学医学部大学院医学系研究科教授

《摂食障害治療研修》

平成 30 年 8 月 28 日から 8 月 31 日まで、第 16 回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者 27 名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 関口 敦

8月28日(火)

摂食障害病態・治療概論	安藤 哲也
慢性期・回復期の支援	武田 綾
当事者の話を聞く	武田 綾
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	西園マーハ文

8月29日(水)

小児科での初期対応と診療	作田 亮一
家族療法と家族支援	小原 千郷
身体管理・身体合併症	吉内 一浩
小児の摂食障害	宇佐美 政英

8月30日(木)

ガイドッド・セルフヘルプ	中里 道子
症例検討	佐藤 康弘
認知行動療法	高倉 修
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

8月31日(金)

心理教育	馬場 安希
精神科病院における診療体制	竹林 淳和
入院治療	河合 啓介

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
小原 千郷	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部臨床心理士
武田 綾	NPO 法人のびの会臨床心理療法士
西園 マーハ文	白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター教授
吉内 一浩	東京大学大学院医学系研究科ストレス防御・心身医学准教授
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長

中里 道子	国際医療福祉大学医学部精神医学主任教授
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科助教
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
馬場 安希	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科心理療法士
竹林 淳和	浜松医科大学医学部附属病院精神科神経科診療講師
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《精神障害者地域包括支援研修》

平成30年8月27日から28日まで、第1回精神障害者地域包括支援研修を実施し、「精神障害にも対応した地域包括ケアへの理解を深め、グループワークを通じて精神保健領域におけるアウトリーチ、措置入院者の退院後支援、ケアマネジメント等について学び、地域で活用できるようにする」を主題に、精神保健福祉センター、保健所、市町村等において、精神保健に関する直接支援、企画立案等に携わっている者（保健医療福祉資格の有無は問わない）又は精神科医療機関、障害福祉サービス事業所等に勤務する者51名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生

8月27日（月）

最近の精神保健医療福祉施策の動向	藤井 千代
グループワーク：地域における精神保健の課題	藤井 千代
リハビリを重視した支援とは	山口 創生
グループワーク：自治体におけるリハビリ支援	藤井 千代
協議の場の実際	大江 浩
協議の場で活用するデータの理解	山之内 芳雄
グループワーク：協議の場をどう設定するか	藤井 千代
自治体による退院後支援	藤井 千代

8月28日（火）

退院後支援の手順	藤井 千代
グループワーク：ニーズアセスメントと支援計画作成	藤井 千代
精神障害者アウトリーチ推進事業について	萱間 真美
実例から学ぶ地域づくり①	田中 文人
実例から学ぶ地域づくり②	名雪 和美
グループワーク：包括的支援における課題と実践	藤井 千代

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
山之内 芳雄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部部長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
大江 浩	富山県新川厚生センター所長
萱間 真美	聖路加国際大学大学院看護学研究科教授
田中 文人	株式会社円グループ
名雪 和美	総合病院国保旭中央病院精神保健福祉士

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《多職種による包括型アウトリーチ研修》

平成 30 年 8 月 29 日から 8 月 31 日まで、第 16 回多職種によるアウトリーチ研修を実施し、「医療支援および障害福祉サービスを含むアウトリーチ支援定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、障害者総合支援法における障害福祉サービス事業者等に勤務する者（医師、精神保健福祉士、臨床心理業務に従事する者、保健師、看護師、作業療法士、社会福祉士等）36 名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生

8月29日（水）

精神保健（福祉）の現状	藤井 千代
パーソナル・リカバリーとリカバリーを応援する支援 導入編	山口 創生
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・竹内 政治
グループワーク	ファシリテーター：山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治
リカバリー志向型のサービスの提供	山口 創生

8月30日（木）

アウトリーチ支援とは	吉田 光爾
ストレングスモデル（概念）	久永 文恵
ストレングスアセスメントとケアプラン作りの実際	下平 美智代
グループワーク	
ケアプラン（初版）作り	
ストレングスアセスメントのグループスーパービジョンとケアプラン改訂	
ファシリテーター：下平 美智代・久永 文恵・地域・司法精神医療研究部	

8月31日（金）

チームビルディングの実際	
看護師から見た多職種アウトリーチ支援	富沢 明美
精神保健福祉士から見た多職種アウトリーチ支援	西内 絵里沙
作業療法士から見た多職種アウトリーチ支援	足立 千啓
精神科医の役割	
病院精神科医の立場から	佐竹 直子
アウトリーチチームと地域連携	片倉 知雄
サービスユーザーから見た多職種アウトリーチ	PORT（訪問看護ステーション）利用者
訪問におけるリスクマネジメント	菊池 安希子
グループワーク	
「多職種アウトリーチ支援を自分の所属機関で実施するために明日からできることは何か？」	
コメンテーター：藤井 千代・佐竹 直子・片倉 知雄	

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
富沢 明美	国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション管理者
佐竹 直子	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO 法人颯埜扉
竹内 政治	さいたま市精神障害者当事者会・ウィーズ事務局長
吉田 光爾	東洋大学 ライフデザイン学部生活支援学科教授
久永 文恵	NPO 法人地域精神保健福祉機構コンボリハビリテーションカウンセラー
下平 美智代	訪問看護ステーション ACT-J 管理責任者
西内 絵里沙	ちはやACTクリニックチームリーダー
足立 千啓	NPO 法人リカバリーサポートセンターACTIPS チームリーダー
片倉 知雄	国保旭中央病院神経精神科作業療法士

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《医療における個別就労支援研修》

平成 30 年 8 月 29 日から 8 月 31 日まで、第 6 回医療における個別就労支援研修を実施し、「精神科デイケア等における個別支援と事業所外支援を中心とした個別型援助付雇用の就労支援を学び、そこから医療機関が周囲の就労支援機関と組む場合のありかたについて検討する」を主題に、精神科医療機関で臨床に従事しており、利用者の就労支援に関心を持つ者（医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士など）、および医療機関と密接な関係をもちながら精神障害者の個別就労支援に既に従事している者 18 名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生

8月29日（水）

精神保健（福祉）の現状	藤井 千代
パーソナル・リカバリーとリカバリーを応援する支援 導入編	山口 創生
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・竹内 政治
グループワーク	ファシリテーター：山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治
リカバリー志向型のサービスの提供	山口 創生

8月30日（木）

精神障害者就労支援：制度と現状	山本 貴彦
ハローワークが（医療における）就労支援に期待すること	小林 美樹・池田 真砂子
個別型援助付雇用型就労支援と個別支援の実際	山口 創生
ビジネスマナー/職場の開拓のグループワーク	池田 真砂子・佐藤 江美
医療機関における就労支援	佐藤 江美・木下 明雄
企業が就労支援に期待すること	鷺崎 清美・浅野 健太・鈴木 隆弘・池田 真砂子

8月31日（金）

医療機関からの就労支援：医師への関わり	坂田 増弘
地域における就労支援	
発達障害の就労支援	柴田 泰臣
京都における就労支援	池田 克之
市川における就労支援	梅田 典子
東京都における就労支援	池田 真砂子
パネルディスカッション「ES の役割と多業種・他機関との連携」	
	梅田 典子・池田 克之・柴田 泰臣
	池田 真砂子・佐藤 江美
グループ・ディスカッション	
	梅田 典子・池田 克之・柴田 泰臣
	池田 真砂子・佐藤 江美

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
坂田 増弘	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO 法人颯埜扉
竹内 政治	さいたま市精神障害者当事者会・ウィーズ事務局長
山本 貴彦	東京労働局職業安定部職業対策課課長補佐
小林 美樹	八王子公共職業安定所 専門援助第二部門
池田 真砂子	特定非営利活動法人ゆるら社会生活サポートセンターこみっと所長代理
佐藤 江美	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院デイケア生活支援員
木下 明雄	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院デイケア生活支援員
鷺崎 清美	Zebra Japan(株) 人事総務部部長
浅野 健太	Zebra Japan(株) 店長
鈴木 隆弘	Zebra Japan(株)
柴田 泰臣	ユースキャリアセンターフラッグ施設長
池田 克之	就労移行支援事業所就労支援センターそらいろ所長
梅田 典子	NPO 法人 NECST 障害者就職サポートセンタービルド施設長

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《医療におけるリスクアセスメント研修》

平成 30 年 9 月 1 日、第 2 回地域におけるリスクアセスメント研修を実施し、「リスクアセスメントの歴史と、基本的な考え方について学習する。地域支援を実施するにあたって簡便に使用でき、支援計画作成時にも役立つリスクアセスメントツールの実際の評価方法について演習を通して学び、臨床現場で活用できるようにする」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、地域援助事業者等に勤務する 28 名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 菊池 安希子

9 月 1 日 (土)

リスクアセスメントの歴史	菊池 安希子
リスクアセスメントの進め方	菊池 安希子
リスクアセスメント演習	菊池 安希子

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

平成30年9月4日から9月7日まで、第32回薬物依存臨床医師研修ならびに第20回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師16名、看護師等35名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・舩田 正彦・近藤 あゆみ

9月4日(火)

薬物依存臨床総論～乱用・依存・中毒	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存(精神依存、身体依存)	舩田 正彦
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

9月5日(水)

薬物関連精神障害患者の臨床	松本 俊彦
女性と薬物乱用・依存	森田 展彰
青少年と薬物乱用・依存	嶋根 卓也
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一

9月6日(木)

全国の民間リハビリ施設の活動状況とその課題・栃木ダルクの活動	嶋根 卓也・栗坪 千明
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学	
病棟見学と医療施設における薬物依存症の治療(医師)	成瀬 暢也・合川 勇三
病棟見学と医療施設における薬物依存症の治療(看護等)	青柳 歌織

9月7日(金)

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	源田 圭子
薬物依存症者家族の支援について	近藤 あゆみ
回復と自助活動	上岡 陽江
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
舩田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
和田 清	埼玉県立精神医療センター依存症治療研究部部長
曾良 一郎	神戸大学大学院医学研究科精神医学分野教授
森田 展彰	筑波大学医学医療系社会精神保健学分野准教授

三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
栗坪 千明	栃木ダルク代表
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
合川 勇三	埼玉県立精神医療センター第2精神科医長
青柳 歌織	埼玉県立精神医療センター外来主任
源田 圭子	東京都福祉保健局都立精神保健福祉センター地域援助医長
上岡 陽江	ダルク女性ハウス施設長
稲田 健	東京女子医科大学医学部精神医学神経精神科講師

《精神保健指導課程研修》

平成 30 年 9 月 7 日、第 55 回精神保健指導課程研修《後期》を実施し、「地域における課題と施策のモニタリングを通して、計画見直しおよび次期策定のために必要なことについて習得する」を主題に、都道府県で精神疾患の医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画を企画立案する担当部署職員、政令市、中核市、精神保健福祉センター、保健所等で、同様の職務を行う職員 27 名に対して研修を行った。

課程主任 山之内 芳雄

7月2日(月)

今夏公表の 630 調査追加項目の見方について

臼田謙太郎・古野 考志・萱間 真美

グループワーク 1 : 「地域における課題設定」

・医療提供が不足している領域・医療圏の抽出

臼杵 理人・馬場 俊明

課題を解決する施策立案

山之内 芳雄

グループワーク 2 : 「地域における施策立案」

・施策立案演習・フィードバック

山之内 芳雄

臼杵 理人・臼田謙太郎・古野 考志

講師名簿

山之内 芳雄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部部長
臼杵 理人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部室長
馬場 俊明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部室長
臼田 謙太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部科研費研究員
古野 考志	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部外来研究員
萱間 真美	聖路加国際大学大学院看護学研究科教授

《発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療》

平成30年10月4日から10月5日まで、第11回発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療を実施し、「発達障害児・者が合併する精神疾患の早期対応と適切な治療のためのシステムのあり方について講義やワークショップを通して、派遣元の地域で実際にスムーズに運用するための課題とその克服のための方法を見つけていただき、研修後の体制整備に活用していただくこと」を主題に、各自治体において該当地域の発達障害者支援に携わる関係者のうち行政的立場で研修の企画や実施に携わる者もしくは医療、保健、福祉、教育等の分野で支援に携わっており、研修講師となりうる者46名に対して研修を行った。

課程主任 住吉 太幹 課程副主任 高橋 秀俊

10月4日(木)

発達障害者の支援について	加藤 永歳
発達障害児・者の発達の道筋：子どもからおとなへ	住吉 太幹
自治体取組事例①	
鹿児島県の地域支援体制づくり～紹介票による診断前療育の整備と 自立支援協議会を活用した地域作り～	外岡 資朗
ワークショップ	加藤 永歳・田中 尚樹

10月5日(金)

ADHDにおける診断の実際	齋藤 卓弥
自治体取組事例②～札幌市での取り組み～	齋藤 卓弥
自閉スペクトラム症の併存症の評価と治療	石飛 信
当事者の体験から～精神医療がASD者の人生におよぼす影響について～	片岡 聡

講師名簿

住吉 太幹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防医学研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防医学研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
田中 尚樹	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害施策調整官
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
石飛 信	医療法人社団東京愛成会高月病院医師
齋藤 卓弥	北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野特任教授
片岡 聡	NPO法人リトルプロフェッサーズ札幌事務局理事長

《摂食障害看護研修》

平成30年10月31日から11月2日まで、第15回摂食障害看護研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、精神科、心療内科、小児科、精神保健福祉センター等に勤務する看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士、栄養士等等50名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 関口 敦

10月31日(水)

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
摂食障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	林 公輔
心理教育的アプローチ / 当事者の話を聞く	武田 綾
小児科病棟における治療と看護	作田 亮一

11月1日(木)

ケアとコミュニケーションのスキル	小原 千郷
摂食障害治療の基本	高倉 修
精神科病棟における治療と看護	服部 洋美・大場 香里
摂食障害の身体的合併症の管理	河合 啓介

11月2日(金)

栄養リハビリテーション	阿部 裕二
精神保健福祉センターでの相談支援	佐野 祥子
心療内科病棟における看護	山崎 美穂
総合討論	

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
小原 千郷	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部臨床心理士
林 公輔	学習院大学文学部心理学科准教授
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター教授
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
服部 洋美	浜松医科大学医学部附属病院8階西病棟看護師長
大場 香里	浜松医科大学医学部附属病院8階西病棟副看護師長
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長
阿部 裕二	国立国際医療研究センター国府台病院栄養管理室副栄養管理室長
佐野 祥子	浜松市精神保健福祉センター臨床心理士
山崎 美穂	国立国際医療研究センター国府台病院看護部3階北病棟副看護師長

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

平成 30 年 11 月 19 日から 11 月 21 日まで、第 10 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 127 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 船田 正彦・嶋根 卓也・近藤 あゆみ

11月19日(月)

薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也
SMARPP の理念と意義	松本 俊彦
SMARPP の実際	近藤 あゆみ
SMARPP ビデオ学習	近藤 あゆみ
デモセッション	今村 扶美・川地 拓・加藤 隆

11月20日(火)

薬物中毒・乱用・依存の概念と最近の薬物関連障害患者の動向	嶋根 卓也
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦
社会資源（１）～精神保健福祉センターにおける支援～	石田 恵美
社会資源（２）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
グループワーク（１）	引土 絵未・今村 扶美・上野 昭子・加藤 隆・川地 拓 ・山田 美紗子・山本 泰輔 他
グループワーク（２）	引土 絵未・今村 扶美・上野 昭子・加藤 隆・川地 拓 ・山田 美紗子・山本 泰輔 他
まとめとディスカッション	松本 俊彦

11月21日(水)

薬物依存症と性的マイノリティおよび HIV 感染	嶋根 卓也
動機づけ面接の基礎	澤山 透
CRAFT の基礎	吉田 精次

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部臨床心理室長
川地 拓	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部心理療法士

- 引土 絵未 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部
上野 昭子 国立精神・神経医療研究センター病院看護部 8 病棟看護師
山田 美紗子 国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部心理療法士
山本 泰輔 国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部心理療法士
加藤 隆 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部科研費研究員／
NPO 法人八王子ダルク代表理事
- 澤山 透 北里大学精神科講師
吉田 精次 藍里病院副院長

《災害時 PFA と心理対応研修》

平成 30 年 11 月 28 日から 11 月 29 日まで、第 2 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等 56 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴

11月28日(水)

PFA の定義と枠組み

PFA の活動原則(1)

PFA の活動原則(2)

PFA ロールプレイ

セルフケアとチームのケア

大沼 麻実・山崎 千鶴子・鈴江 毅

佐野 弘枝・鈴木 吏良

11月29日(木)

子どものトラウマ

災害時のこころのケア-総論

海外での経験 被災者への心理的対応で重要なこと

リラクゼーション実習

災害時のこころのケア-心理的リカバリーについて

笠原 麻里

金 吉晴

篠崎 康子

大沼 麻実

金 吉晴

講師名簿

金 吉晴 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
 篠崎 康子 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
 大沼 麻実 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員

山崎 千鶴子 東京武蔵野病院看護部副看護部長
 鈴江 毅 静岡大学教育学部教授
 佐野 弘枝 特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパンサポートサービス部部长
 鈴木 吏良 防衛医科大学校精神科心理士
 笠原 麻里 駒木野病院児童精神科診療部長

《発達障害支援医学研修》

平成31年1月30日から1月31日まで、第26回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と心理社会的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者47名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

1月30日(水)

発達障害支援施策について	加藤 永歳
地域における発達障害支援：岐阜県発達障害者支援センターの目指すもの	富田 智子
顕在化しにくい発達障害：不器用児の診断と介入	柏木 充
顕在化しにくい発達障害：チック症と Tourette syndrome の診断と治療	金生 由紀子

1月31日(木)

発達障害情報・支援センターのミッションとかかりつけ医に心がけて欲しいこと	西牧 謙吾
発達障害児の移行期医療：かかりつけ医に期待すること	田中 究
かかりつけ医に知って欲しいインクルーシブ教育が目指すもの	笹森 洋樹
発達障害支援の考え方	齊藤 万比古

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
富田 智子	岐阜県発達障害者支援センター発達障害支援課長
柏木 充	市立ひらかた病院小児科小児科部長
金生 由紀子	東京大学附属病院こころの発達診療部部長
西牧 謙吾	国立障害者リハビリテーションセンター病院院長／ 発達障害情報・支援センターセンター長
田中 究	兵庫県立ひょうごこころの医療センター院長
笹森 洋樹	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センターセンター長
齊藤 万比古	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会愛育研究所児童福祉・精神保健研究部長、 愛育相談所長

研修の推移

国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～ 61年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所						
	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	22年度	23年度	24年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
研 修 課 程	25年度	26年度	27年度
		<ul style="list-style-type: none"> 精神科医療評価・均てん化研修 発達障害早期総合支援研修 心理職自殺予防研修 発達障害支援医学研修 精神保健指導課程研修 自殺総合対策企画研修 摂食障害治療研修 精神科医療従事者自殺予防研修 薬物依存臨床医師研修 薬物依存臨床看護等研修 発達障害精神医療研修 司法精神医学研修 アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ACT研修 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 摂食障害看護研修 薬物依存症に対する認知行動療法研修 犯罪被害者メンタルケア研修 精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修 	<ul style="list-style-type: none"> 精神科医療評価・均てん化研修 発達障害早期総合支援研修 心理職自殺予防研修 発達障害支援医学研修 精神保健指導課程研修 自殺総合対策企画研修 摂食障害治療研修 精神科医療従事者自殺予防研修 薬物依存臨床医師研修 薬物依存臨床看護等研修 発達障害精神医療研修 司法精神医学研修 アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ACT・多職種アウトリーチ研修 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 摂食障害看護研修 薬物依存症に対する認知行動療法研修 犯罪被害者メンタルケア研修 医療における個別就労支援研修 司法精神医学ワンデイセミナー

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研 修 課 程	28年度	29年度	30年度
		<ul style="list-style-type: none"> 発達障害早期総合支援研修 発達障害支援医学研修 地域自殺対策推進企画研修 摂食障害治療研修 多職種による包括型アウトリーチ研修 医療における個別就労支援研修 薬物依存臨床医師研修 薬物依存臨床看護等研修 発達障害精神医療研修 自殺対策・相談支援研修 精神保健指導課程研修 司法精神医学研修 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 摂食障害看護研修 	<ul style="list-style-type: none"> 発達障害地域包括支援研修: 早期支援 発達障害支援医学研修 摂食障害治療研修 地域精神科モデル医療研修プレセミナー 多職種による包括型アウトリーチ研修 医療における個別就労支援研修 薬物依存臨床医師研修 薬物依存臨床看護等研修 自殺対策・相談支援研修 発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 精神保健指導課程研修 司法精神医学研修 摂食障害看護研修 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修

Ⅲ 研 修 実 績

平成30年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申 込 み 方 法		申 込 み 期 間 (センター書類必着日)	受 講 料	定 員	主 任	
		WEB	自治体 推薦				副 主 任	
5月23日(水)～24日(木)	(第1回) 災害時PFAと心理対応研修	○*		3月15日(木)～4月4日(水)	¥12,000	50	金 吉晴	
7月2日(月)	(第55回) 精神保健指導課程研修《前期》	○		4月26日(木)～5月30日(水)	無料	100	山之内芳雄	
7月4日(水)～5日(木)	(第25回) 発達障害支援医学研修		○	4月12日(木)～5月2日(水) (5月16日(水))	無料	60	稲垣 真澄 加賀 佳美 北 洋輔	
7月25日(水)～28日(木)	(第13回) 発達障害地域包括支援研修: 早期支援		○	5月2日(水)～5月22日(火) (6月5日(火))	無料	67 組	住吉 太幹 高橋 秀俊	
8月28日(火)～31日(金)	(第16回) 摂食障害治療研修	○*		6月20日(水)～7月10日(火)	¥24,000	50	安藤 哲也 関口 教	
《地域精神科モデル医療研修シリーズ》 8月27日(月)～28日(火)	(第1回) 精神障害者地域包括支援研修	○		6月21日(木)～7月11日(水)	¥12,000	60	藤井 千代 佐藤さやか 山口 創生	
8月29日(水)～31日(金)	(第16回) 多職種による包括型アウトリーチ研修	○		6月21日(木)～7月11日(水)	¥18,000	40	藤井 千代 佐藤さやか 山口 創生	20
	(第6回) 医療における個別就労支援研修							
9月1日(土)	(第2回) 地域におけるリスクアセスメント研修	○		6月21日(木)～7月11日(水)	¥6,000	40	藤井 千代 菊池安希子	
9月4日(火)～7日(金)	(第32回) 薬物依存臨床医師研修	○		6月28日(木)～7月18日(水)	¥24,000	20	松本 俊彦 嶋根 卓也 船田 正彦 近藤あゆみ	30
	(第20回) 薬物依存臨床看護等研修							
9月7日(金)	(第55回) 精神保健指導課程研修《後期》	○		6月29日(金)～7月19日(木)	無料	100	山之内芳雄	
10月4日(木)～5日(金)	(第11回) 発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療		○	7月12日(木)～8月1日(水) (8月15日(水))	無料	67 組	住吉 太幹 高橋 秀俊	
10月31日(水)～11月2日(金)	(第15回) 摂食障害看護研修	○*		8月23日(木)～9月12日(水)	¥18,000	50	安藤 哲也 関口 教	
11月19日(月)～21日(水)	(第10回) 認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する 集団療法研修	○		9月11日(火)～10月1日(月)	¥18,000	100	松本 俊彦 船田 正彦 嶋根 卓也 近藤あゆみ	
11月28日(水)～29日(木)	(第2回) 災害時PFAと心理対応研修	○*		9月20日(木)～10月10日(水)	¥12,000	50	金 吉晴	
平成31年 1月30日(水)～31日(木)	(第26回) 発達障害支援医学研修		○	11月1日(木)～11月21日(水) (12月5日(水))	無料	60	稲垣 真澄 加賀 佳美 北 洋輔	

※推薦状
が必要な
研修

IV. 平成30年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精 研 所 長 室	中込和幸	研究代表者	精神疾患のNVS (negative valence system) に対する治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	中込和幸	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした新規抗うつ薬の長期投与試験	多施設共同研究	田辺三菱製薬株式会社/持田製薬株式会社
	中込和幸	研究代表者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	多施設共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	中込和幸	研究分担者	認知リハビリテーションによる統合失調症ワーキングメモリ障害の改善メカニズムの解明	学術研究助成基金助成金基盤研究 (C)	日本学術振興会
	中込和幸	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone 併用療法 (ELICE-BD) の有効性評価のための6週間のランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	国際共同研究	住友製薬/ブリティッシュコロンビア大学
	中込和幸	研究開発代表者	精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	中込和幸	共同研究者	不眠とうつ病等の重症化との関連についてのケース・コントロール研究	共同研究	独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所
	中込和幸	研究代表者	前治療抗精神病薬からプレクスピプラゾールへの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	多施設共同研究	大塚製薬株式会社
	金 吉晴	研究代表者	こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-Being & Resilience after Disasters	日本医療研究開発機構 地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
金 吉晴	研究分担者	災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省	
金 吉晴	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会	
精 神 医 療 政 策 研 究 部	山之内芳雄	研究代表者	「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」内「研究統括・データベース・データツールの作成、需給予測」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「評価ツール開発、モデル地域連携」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」内「抗精神病薬の多剤は正方策・向精神薬の全国的処方動向集計の考察」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山之内芳雄	研究分担者	「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」内「国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討」	国立がん研究センター研究開発費	国立がん研究センター
	山之内芳雄	研究分担者	「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」内「クリニカルパスの開発・検証、データ分析」	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (C)))	日本学術振興会

IV 平成30年度委託および受託研究課題

	山之内芳雄	主任研究者	Research on Reducing the Burden of Mental Disease and Non-communicable Diseases(NCDs) and Improving Quality of Life(QOL) in Older People international comparison on allocation of resource to out-patient and community mental health care in Asia-pacific region	受託研究	国立長寿医療研究センター
	白杵理人	研究代表者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムのモニタリングに関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	堀口寿広	研究分担者	障害児支援のサービスの質を向上させるための第三者評価方法の開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	堀口寿広	研究協力者	発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構(AMED)
	馬場 俊明	研究代表者	産後うつ病スクリーニング後のインターネット認知行動療法:無作為化比較試験	若手研究(B)	日本学術振興会
	馬場 俊明	研究分担者	「産婦死亡に関する情報の管理体制の構築及び予防介入の展開に向けた研究」内「産後の自殺予防に関する連携体制の構築に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(健やか次世代育成総合研究事業)	厚生労働省
	馬場俊明	研究分担者	「胎児期から高齢期まで生涯の健康を考慮した母子保健領域疾患の疾病負荷と効果的介入方法についての俯瞰研究」内「母子保健領域の疾病費用負担および予防介入の費用効果分析研究の系統的レビュー」	成育疾患克服等総合研究事業	日本医療研究開発機構(AMED)
精神医療政策研究部	羽澄 恵	研究代表者	ナルコレプシー患者における精神健康の不良に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明	科学研究費助成事業(学術研究補助金(研究活動スタート支援))	日本学術振興会
	深澤舞子	研究分担者	精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))	日本学術振興会
	竹島 正	研究分担者	「都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」内「メンタルヘルス部門・啓発担当」	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))	日本学術振興会
	西 大輔	研究分担者	「当事者を含めた他職種によるリカバリーカレッジの運用のためのガイドラインの開発」内「マインドフルネスおよびレジリエンス向上とリカバリー」	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構(AMED)
	西 大輔	研究分担者	「労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究」内「労働生産性の心理社会的指標の検討」	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	西 大輔	研究分担者	うつ病・不安障害を予防する革新的認知行動療法ストレスマネジメントの開発と効果評価	科学研究費助成事業(基盤研究A)	日本学術振興会
	三宅美智	研究代表者	精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))	日本学術振興会
	後藤基行	研究代表者	日本の精神病床入院システムの実証研究と政策科学研究—歴史的アーカイブ構築と共に	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	後藤基行	研究代表者	日本における精神病床入院メカニズムの実証研究—3類型化の視点から—	特別研究員奨励費(PD)	日本学術振興会
	後藤基行	研究分担者	20世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(A)))	日本学術振興会
後藤基行	研究分担者	日本の学術体制史研究—研究基盤となる日本学術会議資料整備と研究環境構築の検討—	科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)	日本学術振興会	
薬物依存研究部	松本俊彦	研究開発代表者	薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究開発分担者	依存症患者における薬物療法の効果検討とfMRIを基としたバイオマーカーの開発	日本医療研究開発機構研究助成	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究代表者	刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省

薬物依存研究部	松本俊彦	研究分担者	向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	精神科救急および急性期医療の質向上に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	治験	S-877489の小児注意欠如・多動症患者を対象とした長期投与試験（治験番号：1412A3231）	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-260)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	慢性疼痛患者を対象としたオキシコドン塩酸塩徐放錠からS-8117（OTR）への切替え時の有効性、安全性、薬物動態を評価するオープンラベル試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-318)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	S-812217の第1相単回及び反復投与並びに食事の影響試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-320)	塩野義製薬
	松本俊彦	拠点病院	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	船田正彦	主任研究者	危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	分担研究者	「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」内「危険ドラッグの検出技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「フェンタニル類縁化合物の中樞作用解析法に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究	日本医療研究開発機構（AMED）（医薬品等規制調和・評価研究事業）	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグ等の濫用防止の効果的な普及啓発に関する研究」内「米国における大麻規制の現状」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究」内「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2018年）」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」内「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業 精神障害分野)	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」内「HIV陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	嶋根卓也	分担研究者	わが国の青少年における薬物乱用・依存に関する実態調査およびデータ・アーカイブに関する研究	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態調査	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省

IV 平成30年度委託および受託研究課題

薬物依存研究部	近藤あゆみ	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究」内「精神保健福祉センターにおける 家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	研究分担者	「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」内「多機関連携による 薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」内「薬物使用障害患者の外来治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	近藤あゆみ	分担研究者	女性薬物依存症者の回復支援に関する研究	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	菊池美名子	研究代表者	自殺・自傷とジェンダー：予防と回復に向けた学際的理論の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究B	日本学術振興会
	引土 絵未	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等のモニタリング調査と薬物依存症者・家族に対する回復支援に関する研究」内「民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	引土 絵未	研究分担者	薬物依存症者の就労支援に関する研究：民間回復支援施設における就労支援について	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
引土 絵未	研究代表者	薬物依存症者に対する治療共同体モデルの普及と評価に関する研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）特別研究員奨励費	日本学術振興会	
行動医学研究部	金 吉晴	研究代表者	こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-Being & Resilience after Disasters	日本医療研究開発機構 地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金 吉晴	研究分担者	災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	安藤哲也	研究代表者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証：摂食障害と過敏性腸症候群の治療プログラムの検証とプログラム実施者養成方法の検討	精神神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の効果的な治療法の普及に関する研究	三菱財団社会福祉事業・研究助成金	三菱財団
	安藤哲也	研究代表者	エクソーム解析による摂食障害原因変異の網羅的探索	文部科学省科学研究費学術研究助成基金基盤研究（C）	日本学術振興会
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発	日本医療研究開発機構障害者対策総合研究開発事業精神障害分野	日本医療研究開発機構
	堀 弘明	研究代表者	パーソナリティに基づく健康-疾患連続性の検討：遺伝子発現プロファイルとの関連	文部科学省科学研究費学術研究助成基金基盤研究（C）	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	PTSDに対するメマンチンの臨床試験	臨床薬理研究振興財団研究奨励金	臨床薬理研究振興財団
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイリングによるストレス対処方略の個別最適化	武田科学振興財団医学系研究奨励（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	堀 弘明	研究代表者	認知機能・活動量・血液マーカーを用いた客観的なストレス症状測定法の開発	大和証券ヘルス財団調査研究助成金	大和証券ヘルス財団
堀 弘明	研究代表者	ストレスホルモン・炎症マーカーと認知機能の測定による「ストレス」の客観的定量化	総合健康推進財団一般研究奨励助成	総合健康推進財団	
関口 敦	研究代表者	中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と、エビデンスに基づく患者ケア法の開発	厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）	厚生労働省	

行動医学 研究部	関口 敦	研究代表者	脳画像疫学データにより解明する「意志の力」の棄損と、内臓知覚訓練による改善の試み	文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省科学研究費学術研究助成基金基盤研究(C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究奨励(精神・神経・脳領域)	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証:心身症・摂食障害の脳画像の検討	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤真利子	研究代表者	心的外傷後ストレス障害の評価指標としての認知バイアスの検討	メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	伊藤真利子	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	WHO版心理的応急処置の研修受講者の支援状況と知識および自己評価に対する追跡調査	文部科学省科学研究費学術研究助成基金若手研究(B)	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究代表者	自己臭症患者に対する認知行動プログラムの実現可能性の検討—消化器症状に関連するにおいを主訴とする患者を対象として—	メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	伊藤まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	袴田優子	研究代表者	ストレス関連精神症状に対する包括的認知介入アプローチの効果評価研究	文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励費	日本学術振興会
	袴田優子	研究代表者	情動記憶の記録過程を標的とした認知介入プログラムの開発および神経作用機序の解明	文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)	日本学術振興会
	林 明明	研究代表者	ストレス状況下における記憶処理メカニズムの解明:臨床的応用可能性へ向けて	文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励費	日本学術振興会
	林 明明	研究代表者	オンライン調査・実験の信頼性に関する研究:同一回答者のデータ比較を通して	文部科学省科学研究費学術研究助成基金若手研究	日本学術振興会
加茂登志子	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会	
児童・ 予防精神医学 研究部	住吉太幹	研究代表者	経頭蓋直流刺激による統合失調症患者の社会機能的能力の改善に関する無作為化統制試験	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	精神疾患のNVS(negative valence system)に対する治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	社会機能/QOL改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	NCNPブレインバンクの運営および生前登録システムの推進	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症と精神病発症リスク状態に対するω3不飽和脂肪酸の効果と予後に及ぼす影響	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社/大日本住友製薬
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	大日本住友製薬/British Columbia大学
	住吉太幹	研究分担者	アルツハイマー病(AD)患者におけるガランタミン投与の脳ネットワークトポロジーに及ぼす影響:ADの薬物療法に対する新しいバイオマーカーとしての可能性	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社

IV 平成30年度委託および受託研究課題

児童・予 防精神医学 研究部	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果に対するパイロット研究	共同研究	Soterix Medical社
	住吉太幹	研究分担者	前治療抗精神病薬からプレクスピプラゾールの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	共同研究	大塚製薬株式会社
	住吉太幹	研究分担者	日本での大うつ病性障害関連の機能的アウトカムに関する前向き観察研究(PERFORM-J)	共同研究	武田薬品工業株式会社 /ルンドベック・ジャパン株式会社
	神尾陽子	研究代表者	発達障害児に対するグループベースの包括的なメンタルヘルスプログラムの有用性に関する研究	財団助成金	日本生命財団
	神尾陽子	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「発達障害モジュール開発」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「サルと自閉症児を対象とした援助行動の生物的・進化的要因解明に関する実験的研究」内「自閉症児の実験の実施」	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会
	神尾陽子	研究分担者	児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	日本医療研究開発機構
	神尾陽子	研究分担者	発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	高橋秀俊	研究代表者	教室内音環境と聴覚情報処理特性が子どものメンタルヘルスに及ぼす影響	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
高橋秀俊	研究分担者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「発達障害の聴覚情報処理特性に応じた治療法の確立をめざす臨床的基盤研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター	
精神薬理 研究部	山田光彦	分担研究者	「精神疾患のNVS(negative valence systems)に対する治療法の開発」内「Negative Valence Systemsにかかる神経回路特性に基づく新規向精神薬の研究開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	分担研究者	「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経筋疾患の病態解明」内「ゲノム編集技術を用いたモデル動物の新規医薬品・医療機器開発のための非臨床試験への応用可能性の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究」内「発現定量」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	スピンドル波発生とその生理的意義	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	ドパミン神経回路の幻覚・妄想への影響の実体とは?	内藤記念科学奨励金・研究助成	公益財団法人内藤記念科学振興財団
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	古家宏樹	研究代表者	統合失調症の発症因子形成におけるNMDA受容体の時期特異的関与	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究代表者	精神的ストレスを利用した慢性ストレスモデルによる向精神薬の評価	調査研究助成金	精神・神経科学振興財団
	古家宏樹	研究分担者	「恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発」内「情動行動評価」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究」内「情動行動評価、モデル動物の作成と評価」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
國石 洋	研究代表者	情動を制御する眼窩前頭皮質―扁桃回路の発達様式とストレスが与える影響の解明	科学研究費助成事業(若手研究)	日本学術振興会	

精神薬理研究部	國石 洋	研究代表者	幼少期ストレスが眼窩前頭皮質-扁桃体回路の発達に与える影響と神経可塑性を利用した治療法の検討	川野小児医学奨学財団 (若手研究助成)	川野小児医学奨学財団
	山田美佐	研究代表者	リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発」内「タンパク発現解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「回復しないうつ病への新治療戦略：末梢-中枢双方からの神経新生促進と神経回路調整」内「難治性うつ病モデル動物に対する再生医療的アプローチの治療効果に関連する神経新生促進/抑制因子解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	川島義高	研究代表者	救急医療機関においてエビデンスに基づいた自殺対策を行うための社会福祉システム構築	特別研究員奨励費	日本学術振興会
	川島義高	研究代表者	心理職養成課程の学生を対象にした専門職連携教育プログラムの開発	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	川島義高	研究代表者	不安障害に対するRiluzoleの有効性と安全性についての検討	精神・神経疾患研究開発費 若手臨床研究グループ活動奨励研究費	国立精神・神経医療研究センター
米本直裕	研究代表者	自殺予防介入の普及と適応に関する研究ガイドランスの開発	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究代表者	統合失調症の脳構造脆弱性のメカニリズム	科学研究費助成事業 基盤研究 (B)	日本学術振興会
	橋本亮太	研究代表者	大規模患者リソース及びiPS技術を用いた統合失調症の病態予測のバイオマーカー開発	科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 特設分野研究	日本学術振興会
	橋本亮太	研究分担者	向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)	厚生労働省
	橋本亮太	研究分担者	「大規模脳画像解析とヒト-霊長類トランスレータブル脳・行動指標開発にもとづく精神・神経疾患の病態神経回路解明」内「統合失調症の脳画像・生理・認知行動解析による病態神経回路解明」	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	縦断的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明	戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	血液メタボローム解析による精神疾患の層別化可能な客観的評価法の確立と治療最適化への応用	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	うつ病性障害における包括的治療ガイドラインの標準化および普及に関する研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
橋本亮太	研究分担者	主体的人生のための統合失調症リカバリー支援—当事者との共同創造co-productionによる実践ガイドライン策定	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構	
睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一 (2019年1月～) 三島和夫 → 住吉太幹 (2018年4月～12月)	主任研究者	社会機能/QOL改善と出口戦略を見据えた睡眠障害の臨床的バスの開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三島和夫	代表研究者	向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「睡眠障害モジュール開発」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	高齢者の睡眠障害に関わる環境及び遺伝の相互作用の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	肥田昌子	研究代表者	概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会

IV 平成30年度委託および受託研究課題

睡眠・覚醒障害研究部	北村真吾	研究代表者	子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究」内「睡眠実験とデータ解析」	科学研究費助成事業(基盤研究A)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「クロノタイプ別睡眠負債解消の機能解明」内「生体リズムの測定」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「子どものメラトニン分泌パタン改善に直結するシンプル・ストラテジーの提案と実践検証」内「睡眠脳波分析、質問紙作成」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「地域の自律的發展を目指した睡眠教育プログラムの開発」内「調査、教材・開発プログラム開発」	科学研究費助成事業(挑戦的研究(萌芽))	日本学術振興会
	綾部直子	研究代表者	不眠や気分障害予防における過覚醒状態の評価方法の確立及び臨床的有用性の検討	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
知的・発達障害研究部	稲垣真澄	研究代表者	「発達障害(読み書き障害、チック、吃音、不器用)の特性に気づくチェックリスト活用マニュアルの作成に関する調査」	障害者総合福祉推進事業	厚生労働省
	稲垣真澄	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「衝動性・多動性の診断と治療メニュー作成」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	分担研究者	「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」内「てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究代表者	漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	稲垣真澄	研究分担者	適応的歩行障害における神経制御メカニズムの解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	稲垣真澄	研究分担者	共同注意の発達の意義に基づく社会性認知機能の解明：ウィリアムズ症候群との比較研究	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	加賀佳美	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「実行機能、社会性機能障害の診断と治療メニュー作成」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	加賀佳美	分担研究者	漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北洋輔	分担研究者	「発達障害(読み書き障害、チック、吃音、不器用)の特性に気づくチェックリスト活用マニュアルの作成に関する調査」	障害者総合福祉推進事業	厚生労働省
	北洋輔	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「不器用の診断と治療メニュー作成」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	北洋輔	分担研究者	認知神経学に基づく英語読字障害学習リハビリテーション開発	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	北洋輔	分担研究者	適応的歩行障害における神経制御メカニズムの解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	上田理誉	研究代表者	小児注意欠如多動症における情動調節不全の発症機構の解明	財団助成金	川野小児医学奨学財団
	江頭優佳	研究代表者	日本人の集団維持戦略と向社会的行動に関連する遺伝子多型の関係の解明	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	江頭優佳	研究分担者	漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
軍司敦子	研究分担者	漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会	
奥村安寿子	研究代表者	未就学児の潜在的な文字学習評価に基づく発達性ディスレクシアの早期発見と介入法の確立	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会	
崎原ことえ	研究代表者	適応的歩行障害における神経制御メカニズムの解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会	

地域・司法精神医療研究部	藤井千代	研究代表者	精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」内「精神保健医療に関する制度の国際比較」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」内「ピアサポーター基礎研修のプログラムの構築と記述」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究：コホート研究」内「好事例の収集と分析」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「障害者の地域移行及び地域生活支援のサービスの実態調査及び活用推進のためのガイドライン開発に資する研究」内「調査の企画」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「研究全体のモニタリングおよび助言」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	藤井千代	研究分担者	急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	主任研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「アウトリーチ支援における家族心理教育を中心とした家族支援の効果に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	菊池安希子	研究分担者	「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究：コホート研究」内「地域ケアにおけるリスクアセスメントの評価」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	菊池安希子	分担研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	佐藤さやか	研究代表者	オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	「精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究」内「医療機関における就労支援に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究：コホート研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」内「研修プログラムの評価と記述」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
山口創生	研究代表者	日本版 I P S /援助付き雇用フィデリティ尺度の検証とフィデリティ評価システムの構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）	日本学術振興会	
山口創生	研究分担者	ピアサポートの意義および効果に関する包括的研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会	
山口創生	研究分担者	「主体的人生のための統合失調症リハビリ支援—当事者との共同創造co-productionによる実践ガイドライン策定」内「当事者の主体のサービス提供のあり方とアウトカムとの関連に関する研究」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構	

IV 平成30年度委託および受託研究課題

地域・司法精神医療研究部	山口創生	研究分担者	「当事者を含めた多職種によるリハビリ・カレッジ運用のためのガイドラインの開発」内「就労支援とリハビリ」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	山口創生	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「援助付き雇用支援のフィデリティモニタリング」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	大隅尚広	研究代表者	サイコパシーの表情認識における自己中心性バイアスの検討	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）	日本学術振興会
	大隅尚広	研究代表者	行動の結果を予測する順モデルの社会的拡張性の検討：責任能力の指標の開発に向けて	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	松長麻美	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「RCTデザインによる“Jcores”を用いたCRとSEの組み合わせによる支援の効果検討（医療経済的評価）」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	小塩靖崇	研究代表者	思春期における睡眠習慣（時間・時間帯・質・環境）が精神機能に与える影響の理解	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	精神障害者による他害行為の予防に対する精神保健医療福祉体制の整備に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	出所後に子育てが必要な女子受刑者への刑務所内支援モデルの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	鈴木浩太	研究代表者	発達障害児に対するレジリエントな支援体制の構築—本人と家族を中心として	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）	日本学術振興会
	鈴木浩太	研究代表者	発達障害児・者をもつ家族に対する支援法の提案—家族レジリエンスに着目して	社会福祉事業・研究助成	公益財団法人三菱財団
	杉山直也	研究代表者	精神科救急および急性期医療の質向上に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	重症精神障害者へのアサーティブコミュニケーションリトメントの全国多施設効果評価研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
橋本理恵子	研究代表者	統合失調症患者の再燃・再発予防に関する精神症状アセスメントツールの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）	日本学術振興会	
自殺総合対策推進センター	本橋 豊	研究代表者	自殺総合対策の政策輸出によるアジアの自殺問題解決へに向けた支援に関する実証的研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	金子善博	研究代表者	地域の自殺予防に資するレジリエンス社会の構成要因の探索	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	藤田幸司	研究分担者	高齢期におけるライフイベントのメンタルヘルスおよび外出頻度への影響に関する研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	藤田幸司（山崎班）	研究分担者	閉じこもりの心理的バリア解消に向けた家族と共に取り組む包括的支援プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	越智真奈美	研究代表者	未就学児への食習慣指導による野菜摂取習慣の定着と肥満予防効果に関する縦断的研究	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	本橋 豊	研究代表者	地域の実情に応じた自殺対策推進のための包括的支援モデルの構築と展開方策に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））	厚生労働省
こころのストレス支・災害センター	金 吉晴	研究代表者	こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-Being & Resilience after Disasters	日本医療研究開発機構 地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金 吉晴	研究分担者	災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省科学研究費学術研究助成基金挑戦的萌芽研究	日本学術振興会

ストレス・災害時こころの情報支援センター	金 吉晴	実務担当者	平成30年度こころの健康づくり対策事業 PTSD対策専門研修事業	補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と、エビデンスに基づく患者ケア法の開発	厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	脳画像疫学データにより解明する「意志の力」の棄損と、内臓知覚訓練による改善の試み	文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省科学研究費学術研究助成基金基盤研究(C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究奨励（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証：心身症・摂食障害の脳画像の検討	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所年報No.32 (通号No.65) 2019

令和元年10月31日発行

編集責任者 金 吉晴

編集委員 本橋 豊

加賀 佳美

大隅 尚広

発行所 国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町4-1-1

(非売品) 電話 042 (341) 2711

印刷：(株)タマタイプ

©2019, All rights reserved, Printed in Japan